

Fate/Grand Order 朱槍と弟子

ラグ0109

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

師に鍛えられ、師に恋い焦がれ、少年は呪いの朱槍をその手に持つ。

これは長い長い人理を巡る旅路。

少年はひた走る。

いつしかこの手の朱槍で――

本作はF a t e / G r a n d O r d e rの二次創作SSとなります。

設定の改変

キャラの性格改変

が、平然と行われます。

苦手な人は即刻ブラウザを閉じなさい：何も自ら苦しむ必要もなからうよ…。

また、原作で明かされていない設定がある為、時々本文がこつそりと編集されていたりします。

それでも良いと言う方は、どうぞこの物語をお楽しみください。

目次

ぷろろーぐ

1

1

2

10

特異点F

炎上汚染都市 冬木

3

19

4

27

5

35

6

44

7

53

8

61

9

70

10

80

11

89

12

97

13

106

幕間の物語〜カルデア立志編〜

14

115

15

126

16

138

第一特異点 邪竜百年戦争オルレアン〜救国の聖処女〜

17

147

18

156

19

166

20

174

4 2

幕間の物語〜カルデア夢想編〜

4 1

4 0

3 9

3 8

3 7

3 6

3 5

3 4

3 3

3 2

3 1

3 0

2 9

第二特異点 永続狂気帝国セプテム〜薔薇の皇帝〜

2 8

2 7

幕間の物語〜カルデア熱闘編〜

2 6

2 5

2 4

2 3

2 2

2 1

401

392

382

367

356

346

335

325

317

309

300

292

276

265

250

239

229

220

210

201

192

182

4
7

4
6

4
5

境界特異点 空の境界 / the Garden of Order

4
4

4
3

450

442

433

422

412

ぷろろーぐ

#1

僕は幼いころから、暗い国の夢を見る。

暗いと言つても雰囲気的なものではなく、常に常闇に覆われていて静かで冷たい：そう、どこか寂しさを覚える国だ。

その国の入り口には闇を思わせる様に大きな門が聳え立ち、常にその門は固く閉ざされている。

その門は外からの侵入よりも、中から何も出さないように閉まっっているようにも見受けられた。

その門に座す、彼女は：いつも門の中を見張っていたから。

視線だけは門の中でも、意識は全てに向けられていたのかもしれない。

その門の下に立つと、決まって彼女は僕に声をかけてきたからだ。

「お主：飽きもせずにもまた来たのか？」

「部屋で寝ている筈なんですけど：たはは」

「ただの人間が、この国の門までフラフラと来れるわけがなからうに：。魂魄のみでこの場に居る事は非常に危険だと言うのに」

彼女は軽やかに門から僕の元まで飛び降りると、どこか呆れた顔で、どこか嬉しそうな顔で僕の顔を見つめてくる。

薄く紫がかった長い髪、淡雪の様に白くきめ細かな肌、全てを見通していきそうな深い赤の瞳、女性らしいしなやかなボディラインは一切の露出なくぴっちりとしたボディースーツに包まれ、革製の鎧が急所のみを覆っている。

身に纏う雰囲気は絶対王者：王としてあるべく生まれ、王として生き続ける：そのような星の下に生まれたのだと自嘲気味に笑っていたのを未だに覚えている。

「毎日毎日飽きぬものよな…」

「いえ、体質的なものだから：でもお師匠に会えるんで僕としては嬉しいんですけど」

「ほう…随分と軽口を叩く様になったものだな？今日の特訓は少々厳しめにしても良いようだ」

「ビエツ」

彼女との付き合いは、かれこれ十年程になる。

始まりは突然で、僕にも原因自体は分かかっていない。

毎晩眠ると必ずこの常闇の国の門の前に立っているのだ。

彼女…お師匠にも僕の存在と言うのは非常に興味深いらしく、門番をする片手間に自衛をするだけの知識…簡単なルーン魔術や槍術の手解きをしてもらっている。

もちろん、目覚めたときにこれらは決して人前に明かさないようにと厳命されている。

なんでも、人前で魔術を披露すると言うのは非常に危険な事だそうで、最悪標本にされるとかって脅されたりした。

勿論今まで人前でルーン魔術を使ったことは無い…けどおまじない程度ならと思ってコソコソと隠れて使ったりはしている。

友達が病気になったときだけけど…。

「そろそろ海獣と一騎打ちしても良い線行けるはずだ」

「はずじゃ困ると思いますお師匠！」

「ええい！つべこべ言わずにやるぞ莫迦弟子！」

お師匠は何もない空間から血の様に朱く鋭い槍を一本呼び出して手に持ち、石突で地面をノックするように軽く突く。

すると、まるで地震が起きたかのような揺れと共に重々しい足音が門前の広場に響き渡る。

振り返りたくないな、早く目覚めないかななんてー思いながらも意を決してゆっくりと後ろへと振り向く。

『!!!』

海獣、と言うよりも怪獣と言った方が正しい巨大な化け物が目の前に立っている。

体中を鋼鉄を思わせる外骨格が覆い、並の剣や魔術ではとてもダメージを与えられそうにもない。

目測の全高十メートルはある巨軀は、餌を見つけたと言わんばかり

にズラリと並んだ鋭い牙が並んでいる口を開け、涎をだらだらと垂らし続ける。

「そやつの名は海獣クリード。そうさな…そやつを仮に狩ることが出来るのであれば、何か一つ褒美をくれてやるとしよう」

「加減！加減と言うものをですぬ!？」

「はっはっは、そら、頑張れよ?」

お師匠は楽しそうに笑いながら軽やかな跳躍で門の上まで飛び上がり、僕とクリードを見下ろしている。

よく見ると、手に酒を持つているので酒の肴代わりに観戦するつもりのようなのだ。

つまり、危なくなっても助けるつもりは無い、と言う事らしい。

『!!!』

「や…や…やってやらあつ!!!」

「かつてないほどの戦いだった…かつてないほどの戦いだった…!!」

ベッドから飛び起きた僕は、思わずベッドの上に立ち上がり自分の命が未だにある事への感謝と、勝利したことの喜びを強く噛み締めていた。

おおよそ人が太刀打ちできるような相手ではない海獣を相手に生き残り、勝利した事実は確実に僕の人間離れを推し進めている証左になっっている訳なのだけれど、僕としては別にそんなことはどうだつていいのだ。

そういえば…ご褒美貰っていない気がするんだけど…まあ、今夜にでもご褒美貰えば良いわけだし、そこは深く考えなくても良いだろう。

僕はベッドから降りて深いため息を吐き出し、寝室から出てリビングに置いてある仏壇の前に座っていつもの様に挨拶を済ませる。

「おはよう、父さん母さん。今日も無事に目覚めることが出来ました

…お師匠はブレる事もなく厳しかったです、何とか生き残る事ができました…」

僕の両親は五年前に交通事故で他界した。

それ以来、僕は一人でアパート暮らしをさせてもらっている。

もちろん引き取ってくれると言う親戚が居たことは居ただけけれど、眠る度にあんな修行をしてるなんて知れたらそれこそ大変な事になる気がした。

もしかしたら、お師匠に会えなくなるかもしれない…等と考えたら余計に嫌になってしまった僕は、親の残してくれたお金と親戚の援助、奨学金を元手にアパートでの一人暮らしをしているのだ。

空気を入れ替える為に部屋の窓を開けると、勢いよく風が部屋の中に吹き込み桜の花びらが入り込んでくる。

今日は日曜日だしどこかへ出かけるかな…いい天気だ。

2015年3月…東雲しのめりょうた 良太17歳の日常は、こうして続いていく

…はずだった。

「未来が無くなる…ですか？」

「そう、そしてその未来が無いと言うのはね、人類が絶滅したと言う事なの」

アーネンエルベと呼ばれるお気に入りのお喫茶店で優雅なコーヒータイムを楽しんでいると、一人の女性が僕の前に現れて合席を申し出てきた。

銀髪に赤い瞳を持ったプライドの高そうな…なんというかお堅いお嬢様然とした印象を強く受けた。

店内を見渡すと席が空いているにも関わらず、僕に合席を申し出てきたのはどういった見なのかと問い質したくもなかったのだけれど、今の僕は暖かな日差しの中で散歩して来たこともあって非常に心が広くなっていたので、二つ返事で了承してしまった。

してしまつたらこれである。

自分は『カルデア』と言う組織の人間で、君をスカウトしに来た。

始まりからして胡散臭いと思わないこともないけれど、カルデアと言えば国連に承認されている国際機関であり、各国が進んで支援する程の大規模組織だ。

カルデアがあると言う事の大切さやその活動内容を長々と解説された訳なのだけれど、要約すると2017年以降の未来が観測できず、人類絶滅待ったなし。

過去に原因となる存在を見つけたので、その存在を排除或いは回収する人間を集めている。

と、目の前の女性：オルガマリー・アムスフィアさんは説明してくれた訳だ。

「そう、そして君にはその原因の排除なり回収をするために必要な素質があることも判明している。：去年だけでも両手では数えきれないほど魔術を使用したわね？」

「いや、言ってる意味がわからないっす…」

「誤魔化せるわけじゃないでしょう。ズブの素人が強力な魔術を行使していたのは既に分かっています。本当なら今すぐ捕縛して脳みそ摘出しなくちゃいけないってこと…理解しているのかしら？」

：強力って言うほど強力なものは使用した覚えがない。

僕が普段魔術を使っていると行って、それは女子高生の間で流行る様なスピリチュアルなおまじない程度のものであつて劇的な効果を見せるものではない。

もちろん、魔力自体は通してしまっているけど…お師匠みたいに加減が出来ないなんてこともないはず…。

出来る限りのポーカーフェイスを気取って、オルガマリーさんに相対しているとテーブルの上に手作りのお守りが数個放り出される。

「これ、どこの？」

「シラを切るのはよしなさい…東雲君。ホルマリン漬けになるか、私と共に来るか二つに一つなのはもう理解しているでしょう？」

そのお守りは、友人が風邪をひいたときに渡したお守りだ。

どうやら、僕が思っている以上にこのカルデアと言う組織は大きく、そして影の様に日常に潜んでいるようだ。

言い逃れはできないだろうし、仮に本気で逃げたにしても逃げ場が無い。

所詮は高校生の身の上で、何かできるほど世の中は甘くないのだ。

「…そんな力があるなんて僕には思えませんけど」

「ズブの素人で、しかも代を重ねていない突然変異でここまで魔力を練る事ができれば上等でしょう。魔術師としての心構えや知識はこの際必要ありません。私の手足として馬車馬のように働けばいいのです。それが出来なければホルマリン漬けになると言う事を肝に銘じておきなさい」

「…うわあ、ブラック企業も真っ青だあ…」

つまるところ、衣食住完備の無報酬労働を目の前の女性に強いられると言う事になるのだろう。

きちんと働かなければ、人として生きてはいられない…お父さん、お母さん、貴方たちの息子は此処で人生詰んでしまったようです。

「貴方の通う高校には、すでに手続きを済ませてあります」

「…あの、それは」

「自主退学よ。人理修復を終えたら、貴方は魔術協会に属してもらおうわ」

「拒否権は…」

「ホルマリン漬け」

「アッハイ」

本当に死ぬまで馬車馬の如く働かせる気なのか、オルガマリーさんは僕の質問を最後まで聞くことなく食い気味に言い返して心を折っていく。

「では、明日迎いの車を寄越すので荷物を纏めておきなさい。いいわね?」

「わかりました。地獄に落ちろ」

「今すぐホルマリン漬けにしてやろうかしら…!」

一矢報いるつもりで悪態をつき、手の中にある目の前にいる女性の名刺を見る。

そこにはしっかりと所長と役職が書かれている。

どうやら僕みたいな人間に声がかかる程度には事態が逼迫しているらしい…。

オルガマリーが退席したのを見計らって、僕は盛大にため息を吐いた。

良かれと思つてやった事がこうして自分の身に返つて来ることになるとは…こう言ったことを見越してお師匠は魔術禁止令を出していたのかなあ…？

人理継続保障機関『カルデア』

魔術では観測できない世界、科学だけでは観測できない世界を観測するため、世界中から科学者や魔術師が集められた特殊な組織。

レフ・ライノールと言う魔術師が開発した近未来観測レンズ『シバ』を用いて地球環境モデル『カルデアス』を観測することで未来を観測することが出来る。

そして未来が観測できると言う事は人類が存続していると言う事なので、安心して毎日を生きることが出来る…とぎつくばらんにパンフレットに書いてある中身を読み取って内容を咀嚼する。

どうやら、このカルデアスで未来を観測できなくなったので、こうして僕みたいな素質のある人間が標高6000メートルの雪山に建設された、まるで特撮の秘密基地のような外観をしたこのカルデアへと集められているわけだ。

人理修復を担う人間かどうかの適性を図るシミュレーションを終えた僕は、がっくりと肩を落しながら更衣室へと向かう。

このカルデアに来てからの四か月間…訓練訓練また訓練、胡散臭い魔術師に科学者に変な目で見られ、プライドの高い候補生に白い目で見られと本当に碌な事が無い。

更に夜は夜で寝ているとはいえ、毎日の様にお師匠に今まで以上に扱われている。

そんな毎日が続けば、癒しなくしてすり減るのみ…必然的にほかの人間との会話は少なくなり、孤立感は強くなる一方だ。

いや、一人だけ僕に構ってくれる少女がいるけども…。
手早く制服に着替えた僕は、自室に戻ってベッドに横たわる。
勿論、侵入者避けのルーンは確りと刻んで自身の身を守っている。
エリートだねー、皆さまのねー、嫌がらせがですねー…洒落になん
ないんですわ。

どうも、僕自身魔術師としての素養はかなり高かったらしく、こと
ルーン魔術に関しては天才的だったらしい。

ルーン魔術に関していえば、お師匠の教えの賜物なので天才と言う
よりも日々の努力の結晶と言った方が正しい気がする。

まあ、そんなわけでエリートの方々は一般枠の僕の存在と言うも
のが非常に目障りなようで、毎日の様に嫌がらせをしてきている。
命に関わるレベルで。

今日も訓練の内容を思い出して深くため息を吐き、ゆっくりと目を
閉じる。

フレンドリーファイアを矢避けの加護で迎撃しながら目標まで
突っ走った僕を、だれか褒めて…。

しくしくと泣いている内に身体がフワツとする感覚がし始める。

そろそろ眠れるなー、なんて思っていると突然耳元に怒鳴り声が響
く。

『お主、とつとと起きんか！寝ている場合では無いぞ！』

「お師匠!？」

耳元でお師匠の声が響いたと思った瞬間、まるで地震でも起きたか
のように施設が大きく揺れた。

一瞬部屋の明かりが消えたものの、すぐに点灯したところを見ると
非常電源に変わったらしい。

避難を促すためか部屋の扉が自動で開く。

扉が開くと同時に見覚えのない赤毛の小柄な少女とカルデアでも
トップクラスの良識人が慌てた様子で管制室のある方角へと走って
いく。

ロマニ・アーキマン…カルデアの医療スタッフの一人で、とにかく
マイペース且つドルヲタ。

底なしの善人なんて某芸術家に評されるほどの人間だ。

そんな善人が走っているのを見て、現実から目を逸らすほど僕は莫迦でもない訳で…。

「終わったな…うん…精一杯やれることをやろう」

手早く意識を切り替え、僕はベッドから飛び降りて部屋を出れば2人が走っていった方角へと走り始めた。

#2

「ドクター！一体何があつたんです!？」

「しつ東雲君!?君今日ファーストミッションだったろう!？」

「…え、明日って聞いてたんですけど?」

ロマニ・アーキマン：通称Dr. ロマンと少女の2人に追いついた僕は、慌てて声をかける。

通路では引つ切り無しに警報が鳴り響き、緊急事態を告げるアナウンスが告げられる。

曰く——中央ブロック管制室及び、カルデアの大部分の電力を賄っている発電所で火災が発生。

魔術と科学が複雑に絡み合い、そして細心の注意を払っている筈のカルデアで、こんな大規模な事故が起こるなんてことは考え難い気がする。

可能性としては、この事故は人為的に仕組まれたもの…つまり、このカルデア内部にテロリストが潜んでいる可能性だ。

もともと、ここは標高6000メートルの天然の要塞…脱出するのも一苦勞な筈。

犯人捜しはゆつくりできるものとして…。

どうやら、僕はまた意地悪をされていたらしい。

コッライン
霊子筐体を用いて行う疑似霊子転移レイシフトによる特異点調査…そのファーストミッションは明日に延期されたとB班のメンバーから聞かされていたのだ。

なに、魔術師ってこんな陰険なやつらの集まりなの…?

「と、とにかく君が無事でよかった…!管制室が爆弾でも爆発したみたいになつてて…」

「ドクター、急ぎましょう!マシユが心配なの!」

「ああもう!君はまだ訓練だつて受けてないのに!」

「僕が彼女の面倒を見ますから、急ぎましょう!!」

ロマンに食つて掛かる少女は、テコでも動かないと言わんばかりの芯の太さを見せる。

おそらく、一般公募で選ばれた適正者最後の1人だろう…肝が据わっているのかそれとも浮世離れしているのかは分からない。

分からないけども、非常事態において人手が必要なのはハッキリしている。

で、あれば彼女にも働いてもらう必要があるだろう。

「東雲君…頼んだよ?」

「任せてください。これでも訓練じゃまともな成績残してるんですから」

「急ぎましょう!」

少女に促され、ロマンと顔を見合わせて頷けば、中央ブロックにある管制室へと向かう。

今日ファーストミッションが行われると言う事は、ファーストミッション及びセカンドミッションを担当するA班とB班のメンバーが事故に巻き込まれていると言う事になる。

普段の行いが行いなので因果応報と思わなくはないが、それはそれ…命は大事にすべきだし、仮に死んでしまっても笑う事は無い。

悲しみもしいけれど。

中央ブロック管制室へとやって来ると、内部で凄まじい爆発が起きたのか内側から扉がひしゃげて開ける事が出来なくなってしまうている。

「そんな…!?!」

「これじゃ、中に入ることができない!」

ロマンと少女が呆然と立ち尽くして扉を睨み付けているのを横目に、僕は2人の前に立って手をかざす。

お師匠には人前で使うなど言われたけれど、場合が場合…非常時だし大目に見てくれるはず。

「破壊するから2人とも下がって!」

「東雲君!その扉は対魔術用の結界術式が施されているんだよ!」

「ドクター、手が無いんだから言うとおりにしよ!」

少女がロマンの体を後ろへと押しやったタイミングで、僕は体内に走る魔術回路を全て開放する。

右手の人差し指と中指をそろえて立て、左から右へと素早く払うように腕を振るう。

すると空中に魔力で描かれた三つのルーン文字が光り輝き、ふよふよと浮かび上がる。

「13番、9番、2番起動！行け！」

13番のルーン文字『ユル』は根本的な変化：そして腐れ縁を断つと言う意味合いを持つ。

9番のルーン文字『ハガル』は破壊を伴う変革を示し、最後に起動した2番のルーン文字『ウル』は猪突猛進、勇猛果敢と言った力を意味する。

それら三つを順繰りに起動し扉に思い切り叩き込むことで、ユルは綻びが生じた結界を容易く断ち切り、無防備になった扉に向かってハガルより生じた巨大な電がウルによって強化され扉に叩き込まれる。

それらは僕が目論見通りに互いに作用し、インパクトの瞬間にユルとハガルの引き起こす変化によって扉だけを破壊して爆風を起こすことなく掻き消えていく。

根本的な変化と破壊を伴う変革：それらを利用して扉のみを破壊するように仕向けたのだ。

瓦礫すら吹き飛ぶ事無く地面にそのまま落ちていく様は、まるでC Gの様で摩訶不思議な光景に見受けられる。

どっと体に掛かる負荷に深くため息を吐いて構えを解き、管制室へと入っていく。

純粹に破壊するだけならまだしも、管制室内の生存者や背後のロマン達を考慮しての高レベルの魔術行使は、生身では今までやったことが無かった為に無駄に魔力を消費してしまったようだ。

「し、東雲君：君本当に一般人なの!？」

「魔術使える人が一般人なわけないでしょ！」

「御尤も過ぎる!!」

ルーン魔術による破壊力の凄まじさに舌を巻くロマンを他所に、僕は未だ炎が燻る管制室を見渡す。

管制室に整然と並んでいる筈のコフィンの大多数は爆発で破壊さ

れ、赤い液体が付着している物もある。

オペレーターの詰め所もご丁寧に破壊してあり、恐らく――

「マッシュー！誰かー!!返事をして!!」

少女は声を張り上げて、瓦礫を掘り起こして生存者を探し続ける。

ロマンは僕の肩に手を置いて、耳元に口を寄せる。

「恐らく……この状況では絶望的だ……僕はこれから地下の発電所に行つて非常電源に切り替える。カルデアの火を絶やす訳にはいかないんだ……」

「無駄かもしれませんが、此処で彼女と一緒に生存者を探してみます」

「後少しで隔壁が降りてしまう。そうになると脱出は不可能になるからね?」

僕は静かに頷き、ロマンと別れて横倒しになっているコフィンを起こそうとしている少女へと駆け寄る。

けたたましいアラームと焦げ臭さと血の匂いは、正しく地獄と言うに相応しい。

アラームに交じってコフィン内に設置されているスピーカーから一斉にアナウンスが発せられる。

『システム レイシフト最終段階へ移行します。座標――西暦2004年1月30日――日本――冬木。ラプラスによる転移保護……成立。特異点への因子追加枠……確保。アンサモンプログラム――セット。カルデア所属のマスターは、最終調整に入ってください。繰り返します――』

どうやら、レイシフトのシステム自体は生きているらしく、レイシフト最終段階と言うタイミングで爆破されたようだ。

……魔術師の中には科学を毛嫌いしている人がいるって聞いたことがある。

もしかしたら……でもそんな人間が爆弾なんて科学技術使うの难道か?

考えても仕方がないと踏んで、僕は意識を切り替えて少女に手を貸し、コフィンをずらす様にして退かす。

「――あ…せん、ぱ…」

「マシユ!!」

退かしたコフィンの下からか細い声が聞こえてくる。

少女は安心したようにマシユの手を握り締め、安堵の涙を流す。

「…」

「せん、ぱい…それに、しののめ、さん…わたしのことは…」

「駄目だよ！マシユ！今、助けるから！東雲さんも」

「今、手を貸すよ！」

情けない話だなあ…僕はここにきて生存者を見捨てようとしてしまった。

どうせ助からないならば、見捨ててしまおうと…これでは他の魔術師と一緒にやないか。

少女に鼓舞されるように気合を入れ直し、慎重に瓦礫を押しつけていく。

ルーン魔術による破壊も考えたけれど、マシユの身体がどうなっているか分からない以上下手に放つわけにもいかない。

「あ…」

マシユが気の抜けた声を上げると、管制室の中央に鎮座している地球環境モデル『カルデアス』がまるで業火に包まれたかのように赤く発光し始める。

カルデアスは地球を横して作られた写身…この地球が赤くなると言う事は、これから先の未来、地球がこのカルデアスと同じになることを証明している。

『観測スタッフに警告。観測スタッフに警告。カルデアスの状態が変化しました。シバによる近未来観測データを書き換えます。近未来百年までの地球において、人類の痕跡は発見できません。人類の生存は確認できません。人類の未来は保証できません』

「…カルデアスが赤くなっちゃいました…」

「マシユ、喋らない方が良いよ！」

「いいんです、助かり、ませんから…でも…」

マシユはガツカリするように、諦めてしまうように口元に笑みを浮かべ、じわりと涙を貯める。

僕は瓦礫撤去の手を止めて、少女の手を取りマシユの手を握らせる。

『中央ブロック隔壁封鎖。館内洗浄開始まで後180秒です』

「もう、外に：でれ、ません：ごめんなさい：ごめん、なさい：」

「僕はね、お師匠からいつも教わっていた事があるんだ」

そう、いつだって厳しい：けれども優しい僕の憧れ。

両親が居なくなつた後だって、変わらずに接してくれた美しい人。

その人の姿を業火に包まれるカルデアスの中に幻視しながら、マシユを：少女を鼓舞するように言葉を続ける。

「どんな逆境でも、跳ね除けられないものはないって事。きつとなんとかなるし：なんとかするよ」

「そう、そうだよ：諦めるのは死んでからだって：できるんだからー」
僕はありつたけの魔術回路を総動員し、再び腕を払ってルーン文字を起動していく。

そう諦めたくない：未来が無くなるなんて訳が分からない事言われて、流されるままに此処に来て、そのまま死ぬなんて許せない。

簡単に死んでしまったら、お師匠をがっかりさせてしまう：だから！

『コフィン内マスターのバイタル、基準値に達していません。レイシフト定員に達していません。該当マスターを検索中・・・発見しました。適応番号38番東雲 良太、適応番号48番藤丸 立香をマスターとして再設定します』

通常、レイシフトはコフィン内に入ることでの可能になる非常にデリケートな技術だ：と言う話を講習会で耳にタコができる程言い聞かされた。

これから行われるはずだったミッションは難しいものだと言う認識はそれだけで否応にも高まつたし、死にたくなかった僕は必死に訓練に励んできた。

そして、そのレイシフトがコフィン内に収まっていないにも関わら

ず、行われようとしている。

十中八九、システムの暴走です勘弁してください。

僕は急いで形成した1番と3番のルーン文字を展開しようとする。

『アンサモンプログラムスタート。霊子変換を開始します。レイシフト開始まで——』

ついにレイシフトが始まり、僕の練り上げた魔力は霧散していき指先から徐々に光へと変化していく。

嫌な予感がする。

彼女達に触れていないと、いけない気が…。

『全工程完了。ファーストオーダー実証を開始します』

「まったく、お主と言う男はワシの言う事が聞けんのか？ん？」

「いや、本当に滅相もないですお師匠…」

どうやらレイシフト自体は現在進行形で進んでいるらしい…どう見ても今いる場所はお師匠の居る門の前なので、レイシフト中に気絶してしまつたようだ。

恐らく、きちんとした手順を踏まなかったが故の事故のようなものだろう…レイシフト先がどうなっているか分からないので、目覚めたら詰んでました…なんてなりそうだけど。

僕は門の前で正座してお師匠にくどくどと説教を受けていた。

理由は言うまでもなく、ルーン魔術を使用したことに関してだ。

「とはいえ、お主に降りかかる試練はこれから…この影の国も消滅を免れんからな」

「人理が焼却されるからでしょうか？」

「然り。この影の国はお主の生きる世界と表裏一体。光なき所に影は生まれん道理と同じだ」

「そ、それは嫌な話ですよ、お師匠…」

影の国の消滅…それは、心許している存在が居なくなってしまう事

と同義だ。

どんなに厳しくとも、僕にとってお師匠の存在は非常に大きい。

「はっはっは、私とて肩の荷が下りる…と言いたいところだが、死ぬのであれば戦の中で死にたいのでな。少しばかり反抗してやろうと思っている」

「それは…どういう…」

「何、リョータ…貴様に褒美をやると言って渡さなかったからな。それを手に持ち龍脈に赴け」

お師匠はそう言うと、僕の目の前に1本の槍を突き立てる。

その槍はお師匠が持つ槍に酷似し、しかしどうみても出来立てと言わんばかりに新品のような光沢を放っている。

「これをお主の魂に格納し、概念礼装として定着させる。私が手ずから作ったゲイ・ボルク…クリードを討ち破ったお主ならば持つに相応しかろう」

「…お師匠、ガチ聖遺物じゃないっすかね？」

「うむ、ガチだな」

「…まあ、もらえるなら有り難くいただきますけど…」

僕は正座したまま突き立てられたゲイ・ボルクを手を持つ。

ゲイ・ボルク…一刺一殺の呪いの朱槍…海獣クリードの骨格より作られたこの槍は冷たく、軽く、なによりも熱かった。

クリードの怒りか、それともお師匠から下賜されたからなのかは分からない。

「よいか、龍脈だ。場所はその槍が必ず示すであろう…必ず向かうのだぞ？」

「分かりました…それでは暫しのお別れです」

ゆっくりと立ち上がり、ゲイボルクを概念礼装として僕の魂へと格納する。

こうすることでレイシフト先でも、僕自身の魔術礼装として取り出すことが出来るはずだ。

…近接戦闘しかける魔術師ってどうなんだろうって思わないでもないけど…。

ともかく自衛手段が増える事は大変喜ばしい。

魔術ばかりでは、いずれ底が尽きてしまうかもしれないからだ。

「うむ。お主の声を待っておるぞ」

お師匠はフツと笑い、一足飛びで門の上へと飛び上がる。

きつと、消滅するその時までそうして門番として在り続けるのだらう。

僕は両頬を叩いて気合を入れ直し、ゆっくりと目を閉じた。

特異点F 炎上汚染都市 冬木

#3

轟々と何かが燃え続ける音がする。

轟々と何かが崩れ落ちる音がする。

それは破滅を終えたばかりの音に確かに似ていて、酷く気持ちが悪くなる。

これだけ煩い音を発していると言うにも関わらず、僕の周囲には人の気配と呼べるものが何もなかったからだ。

痛む体を漸く起こして、僕は目元を手で擦る。

どうやら、無事にレイシフトは完了したらしく、五体満足で今まで居たカルデアとは別の場所に存在していることが確認できる。

素早く意識を覚醒させた僕は、カルデアのマスターに支給される魔術礼装の一つである制服の襟元に備えてあるインカムを取り出し、耳につけながら辺りを確認する。

どうやら、僕が今いる場所はどこかのお屋敷の土蔵の中らしく、火が燃え盛る音がしているにも関わらず空気がひんやりとしている。

まずは安全確認：土蔵の中を調べていると、床に魔術師が描いたとしか思えない魔法陣の痕跡を見つける。

どうやら、魔術師の工房に放り込まれてしまっているようだ…。

魔術師と言う存在は、兎に角外敵に対する警戒と言うものを怠らない。

人道的か非人道的かに関わらず魔術とは秘匿されるものであり、たとえ同業者であっても外部に自身の魔術が持ち出されることを嫌う。

故に工房には、対侵入者用の攻勢防壁結界が仕掛けられているものらしい。

らしい、と言うのも講習で聞いた限りでしか知らないからだ。

僕自身工房を持っていないし、お師匠は影の国の女王…そもそも必要が無い。

僕は慎重に魔法陣から離れながら、土蔵の出入り口へと向かう。

幸いなことに、土蔵の扉が頑丈だったお陰で壊れていない。難なくして外に出た僕は、目の前に広がる光景に思わず絶句する。

「な……これが……特異点……!？」

燃え盛る音が聞こえてきたとき、ある程度周囲の惨状は理解していた。

なんせ、火事だ……家の1つや2つ、倒壊していて当たり前だろう。だけど僕が見た光景は、そんなレベルでは済まされない。

まるで炎を伴う竜巻でも起きたのかと言わんばかりに屋敷が、住宅街が、冬木と言う1つの街が滅茶苦茶に破壊されていたからだ。

カルデアの管制室内の爆弾テロなんて目じゃないレベルの破壊の痕跡に目を奪われていると、屋敷の残骸の方から爆発音が響き渡る。

思わず腕で顔を庇い身を竦ませていると、ガシヤツガシヤツと言う骨と骨が擦れ合うような音が響き渡る。

「……お化け屋敷だったって、訳じゃなさそうだ」

視界を覆っていた腕を退かして音の方へと目を向けると、骨だけで構成された人型の魔物であるスケルトンが三体程屋敷からこちらに向かってゆつくりと歩いてきている。

スケルトン……これらに属するアンデッドの類は生命反応に反応して襲い掛かってくるって話だったかな……。

周辺に居る生命反応と言うと、僕くらいなものだろう。

スケルトン達は手に持った鉈を構えて上顎と下顎を打ち合わせ、威嚇するように僕を三方から囲い始める。

「大丈夫……訓練でも修行でも何度も相手したんだから……」

僕は大きく深呼吸し、魔術回路を起動する。

同時に僕の魂魄に格納されている概念礼装を実体化させる。

それは血よりも朱く、死よりも黒い呪いの朱槍……影の国の女王がクリードの死骸より作り出したただ一本の死棘ゲイ・ボルクの槍。

その槍を手に持ちゆつくりとした動作で構える。

とても今初めて持ったとは思えないほどに、僕の手に馴染む……飾り気のない無骨な槍は、僕の魔力に反応して穂先から紅蓮の魔力を僅かに放出させる。

「2番起動…シイツ!!」

2番のルーン『ウル』による野生の力…猪突猛進たる力を足に与え、正面に立っていたスケルトンへと一気に接近。

えぐり込む様にゲイ・ボルクを頭部目掛けて突き出し粉碎させれば、そのままの勢いで槍を大回転させてスケルトンの胴体をバラバラに解体する。

「6番…『カノ』!!燃えろ!!」

6番のルーン『カノ』は火を象徴としたルーン文字。

純粹に魔力を炎へと変換して槍の穂先に纏わせて背後に向かって一閃。

穂先から伸びた炎が背後のスケルトン2体を纏めて薙ぎ払い焼き尽くしていく。

さすがに動きの遅いスケルトン相手に後れを取るほど、僕も間抜けではない。

と言うか後れをとったら、お師匠に地獄の1丁目から3丁目までの特訓フルコースを味わう羽目になってしまう。

戦いと呼べるほどでもない一方的な蹂躪戦に一息つき、手の中のゲイ・ボルクを見つめる。

どうやら、この槍は杖として魔術の触媒に使うのが一番良い様だ。いつもよりルーン魔術を使った時の身体に対する負担が、いくらか

軽くなっている。

もちろん、過信は禁物…慎重に、かといって出し惜しみなくいかなければ…。

「ひと先ず、龍脈が流れる場所を探そう…。カルデア、通信聞こえていますか?」

槍を肩に担ぐ様にして持ち、インカムのスイッチを入れてカルデアの管制室へと通信をいれてみる。

勿論、無駄な事は分かっているが、それでもやらないよりはマシだと思っただからだ。

連絡が取れば、カルデア側からのサポートで苦勞することなく龍脈を探し出すことが出来る。

しかし、返ってくるのは予想通りの砂嵐：地道にゲイ・ボルクを頼りに龍脈を探し出す方が良い様だ。

「スケルトンがさっきの3体だけとは考えにくいよなあ。最悪、街1つアンデッドの巣窟なんてこともありうるかも：？」

嫌な考えが脳裏を過った瞬間、背筋に寒気を感じる。

意識を研ぎ澄ませて、前のめりに倒れ込むと僕の体のあつた場所を無数のナイフが通り過ぎていく。

素早くルーンの3、5、15番を起動して遠投系の攻撃に対して絶大な効果を発揮する結界を展開する。

「アンデッド以外が居る：！」

「ほう、我が業を避けるか：どうやらただの魔術師ではないようだな？」

「生憎と僕はただの魔術師だよ。話ができるんなら此処は平和的に話し合いでサヨナラばいばいしません？」

「悪いが、人間は1人残さず根絶やしにしろ：と言うオーダーが下っている。諦めよ魔術師よ」

1人残さず根絶やしにしろ：恐らく冬木にこの惨状を強いた張本人は、余程人間が嫌いなのか、人間に対して何も感じていないのかもしれない。

で、なければこれ程の惨状を起こす存在が、まともな正気を持つている筈がない。

「悪いけど、僕は意外と諦めが悪くてね：果たさなければならぬ約束があるんだ！」

『ならばその約束、あの世で果たすが良いだろう』

言葉が先か、手が先か：謎の襲撃者は姿を見せる事無く僕の背後からナイフを投擲してくるが、結界に触れた瞬間にそれらは僕に触れる事無く捻じ曲げられて通過していく。

3番『ソーン』による危機回避、5番『ラド』による遠方から来るものに対する察知能力、そして15番『エオロー』による霊的防御による対投擲結界は、それこそ対魔力を纏った武器でもなければ僕に届かせることはできない。

「僕には君が見えないけれど、君の攻撃が当たるとは決してないよ」
『小癩な…仕方あるまい、直接その命を摘み取るとしよう』

「…魔物じゃないとは思っていたけど…まさか…!!」

闇夜より現れたそれは人型…しかし、人型にしては腕と足がひよろ長くどこか奇形児を思わせる。

特筆すべきはその右腕…何かを隠すかのように筒状に包帯で覆われている。

のっぺりとした顔には白いしやれこうべの仮面が縫い付けられ、全身からは黒い霧が溢れ続けている。

「英^{サーヴァント}霊…見てくれからしてアサシンの英霊…?」

『如何にも。もつとも出来損ないに等しいが、魔術師1人殺すのにそこまで手古摺ることは無かろうよ』

サーヴァント…それは英雄や偉人と言った人々が死後祀り上げられることにより英霊と化したもの…特異点探索においてカルデアでも英霊を呼ぶことになっていただけ…敵対者側には英霊を呼ぶ手段があると云う事になる。

そして、往々にして英霊に人が敵う事は無いとされている。

何故ならば、英霊となるほどまでに祀り上げられると云う事は、相應の偉業を成した人外とも言える存在だからだ。

僕はゴクリと生唾を飲み込み大きく深呼吸をする。

「だけど、貴方を倒して先に行かせてもらうよ…アサシンの英霊!」
『貴様の様な鈍間に捉えられると思うてか?』

無駄のない最速の動きで槍を構え、2番のルーンを起動。

打倒せねばならぬなら、打倒せしめてみせなくては。

お師匠ならば、一瞬でケリをつけるのだろう。

お師匠の様にいなくても、あの人の弟子なんだと誇れるように闘わなくては、お師匠の顔に泥を塗ってしまう。

「ハアッ!!」

『ヌツ…!』

一瞬の踏み込みから、獣の様に鋭い連撃を絶え間なく叩き込み続ける。

アサシンの英霊は気配遮断に優れ、そして足も速い。

追いかけてついで疲弊したところを突かれるよりは、こうして肉薄して逃げられないように必殺の突きを連続で叩き込んでいく。

同じ土台に持ち込まなければ、恐らくまともな勝負になりはしないと思う。

違和感があるとすれば、アサシンの動きが精彩に欠いている気がする事か。

まるで、本調子の様には見えない。

だが、それならばそれで僕にとっては好都合：押し切れるうちに一気に押し切る。

「はあああつ!!」

『舐めるな!』

下から搦みあげる様に槍を振り上げ、アサシンが左手に持つナイフを思い切り跳ね上げて胴体をがら空きにさせる。

できた会心の隙を逃すことなく振り上げた反動を使い、体を回転させることで流れる様に心臓目掛けて突きを叩き込むが、包帯で覆われた右腕に阻まれて体に突き刺さる直前で止められてしまう。

『柘榴と散れ!』

『カノ!!』

しやれこうべの目が笑みに歪み、跳ね上げられた左腕がそのまま僕の頭部目掛けて振り下ろされる。

しかし、僕は避ける事はせずこの好機をものにする為に6番のルーンを起動。

槍の穂先から爆炎が巻き起こり、アサシンの右腕を砕いて霧散させ体中を炎が嘗め回る。

『ぐううううつ!!』

「はあつ…はあつ…これで…トドメだ!!」

『チイツ…人間如きに後れを取るか…!!』

再び2番のルーンによる神速の踏み込みからの鋭い突きを叩き込み、ゲイ・ボルクの名に恥じぬよう心臓のある部分を一突きで刺し貫く。

5分にも満たない対英霊戦は、アサシンの不調と言う事もあつて僕の勝利のようだ。

心臓を一突きにされたアサシンは黒い霧となつて掻き消え、死体すら残らない。

あくまで英霊は霊子の塊に過ぎず、肉体と言うものを持っていない。

だから、死して消えるときは霞の様に掻き消えていく。

「ぐうっ…出し惜しみしないにしても…キツすぎる…!」

僕はゲイ・ボルクを支えに立て膝をつき、全身から発せられる筋肉の悲鳴にうめき声をあげる。

そもそも、英霊と人とは規格が違いすぎる…もし本調子だったら、僕はあつという間に地面を血で濡らしていたはずだ。

勝てたのは、ひとえに運が良かったからに他ならない。

2番のルーンによる身体強化は、思っているよりも肉体にダメージを与えている。

あくまでも今の僕はただの人間…影の国に居る時とは色々と勝手が違うのだ。

「おう、坊主。その槍どこで手に入れたか分からねえが、中々やるじゃねえか」

「少しくらい休憩させてくれませんかねえ…?」

突如として、僕の目の前にフードを被った男が現れる。

その佇まいは清廉さを感じ、こんな廃墟の中であつてもどこか清らかさを感じる。

その男は敵意を一切出していないが、現れ方からして間違いなく英霊だと思う。

「はっはっは、安心しな坊主。俺はスカサハ程鬼じゃないし、それにお前と敵対するつもりもねえよ。手助けしないで見ていたのは悪かつたけどな!」

「…お師匠の名前…なんで知ってるんです?」

「お師匠…?おいおい、マジか?お前マジで言ってるのか!」

目の前の男はどうやらお師匠と知り合いらしく、僕の言葉を聞いて

驚いたような声を上げる。

お師匠である影の国の女王、スカサハは数多い勇士を多く育て上げた戦士たちの師だ。

だから、過去の英雄にお師匠の直弟子：つまり僕の兄弟子が居ても可笑しくない訳で…。

何が面白いのか、目の前の男は腹を抱えて笑い始め、ひとしきり笑った後肩で息をして徐々に呼吸を整え始める。

「ひーっ、ひーっ…まさかあの女、まだ弟子をとってたとはなあ。死なねえから聖杯戦争に参加することもないんで、接点を持つ事は無いと思っていたが…と、自己紹介くらいはしとこうか」

そういうと目の前の男は頭に被っていたフードを取り払い、素顔を晒す。

青い髪に赤く、猟犬を思わせる鋭い眼差し。

獰猛なその瞳の輝きは理知的でもあり、精悍な顔つきをした男は人の良さそうな笑みを浮かべる。

「サーヴァント・キャスター。アルスターのクー・フリーンだ。まつ仲良くやろうぜ兄弟」

星1つない曇天の夜の下、赤く煌々と燃え盛る街の中を2つの影が疾駆する。

言うまでもなく、僕とキャスターのクー・フリーンだ。

「しっかしまあ、神秘が薄いつて言うのによく影の国まで辿り着けたもんだな」

「あゝ、なんと言いますか…少し特殊な事情がありました…」

アルスターのクー・フリーン…言わずと知れたケルト、アルスター神話における大英雄。

お師匠が特に力を注いで鍛え上げた僕の兄弟子にあたる人物は、快活に笑いながら僕の走力に合わせて並走している。

僕は足に5番のルーン『ラド』をかける事で、通常よりも早く地を駆け、或いは廃墟を飛び越えて新都と呼ばれる冬木の東側のエリアへと向かっている。

自己紹介を手早く済ませた後、僕はクー・フリーンに掻い摘んで自らが置かれている事態を説明した。

兄弟子、それも正気を保っている英霊ともあれば、絶対に力を借りなければならぬ。

それに、今の彼はルーン魔術師としての側面を前面に押し出したキャスタークラス。

僕の探知能力では龍脈の位置を正確に探り当てる事は出来ないかもしれないが、クー・フリーンの力添えがあればお師匠を呼ぶに適切な場所まで案内してもらえるはずだ。

そう言った事情を説明すると、クー・フリーンは新都方面へ生きた人間が向かっているのを見かけたと言うのだ。

しかも2人…1人はバカデカい盾を持った少女だと言う。

英霊かとも思ったが、どうにも様子がおかしいので野放しにしたとのことだけ…。

もし、もしその2人組が立香さんとマシユなのだとしたら…早急に合流する必要がある。

その上で協力を願い出たら、クー・フリーンは考える素振りを見せる事無く頷いてくれた。

「こうまでさっぱりしているのかな…英雄って？」

「その、僕自身は影の国行ってないんですよ」

「はあ？ だったら、それこそ何で師匠からその槍貰ってんだよ」

「その…寝ると居るんですよ…影の国に」

不思議な事に、ただ眠るだけでは影の国に赴くことは出来ない。

夜、一日の疲れを取るための就寝時においてのみ、僕は影の国の門の前に魂魄のみで立っている。

一種の幽体離脱めいたこの状態は、本来であれば肉体に守られている人間の本質的な部分である魂が露出し、非常に危険な状態なのだとお師匠は言っていた。

にも拘わらず、影の国へと無傷で辿り着いているのが不思議でならない…とも言っていたなあ。

お師匠は長生きしているらしいけど、分からないことは分からないみたいだ。

「魂魄って魂だけの状態で、影の国のあの大きな門の前に立っているんです」

「…って言う事は、なんだ…スカサハがお前を召喚でもしたんかねえ？」

「いや、初めて影の国に赴いた時より前に接点なものもないですよ？」

お師匠が僕を召喚する理由が見当たらない以上、クー・フリーンの言う事はあり得ないだろう。

僕は今でこそルーン魔術を使う事ができるけども、お師匠と出会うより以前は存在そのものすら知らなかったのだ。

こんな御伽噺のような世界があることさえも…。

道中で出会うスケルトンの群れをクー・フリーンと共に撃破し、冬木商店街と呼ばれていたエリアを駆け抜けると前方に巨大なクレイターが現れ、思わず無事だった民家の屋根に飛び上がって足を止める。

これが今の冬木の惨状を生んだものの爪痕なのだろうか…？

「…これはっ！」

「見たまんまだ、あまり中に近寄るなよ？あの中にはえげつないレベルの呪いの残滓が残ってやがるからな」

民家の屋根から見下ろすクレーターの内部には無数のスケルトンや半透明なエーテル体…いわゆるゴーストがクレーターの中心部に向かって押し競饅頭でもするように集り続ける。

まるで、そこにあるものを必死に求め続けるかのよう。

「どうやら、この冬木に根付いていた魔術師が聖杯の模造品作ってたみたいでな。あるサーヴァントが大聖杯を確保した瞬間…ドカン、だ」

「そして、この街はアンデッドが跋扈する死の街になった…と言う事？」

「概ねな。俺は何とか逃げおおせる事が出来たんだが、セイバーの奴が大聖杯に細工したのか次々と争っていた英霊達を従えていつてな…どうしたもんかと頭を悩ませていたら…」

聖杯…あらゆる願いを叶える願望器とされる神秘の結晶。

冬木と言う土地はその聖杯を求めて7人の魔術師が争う、通称聖杯戦争なるものが行われていたって話だったわけ。

大聖杯なるものが何なのかは分からないけども、どうやらそれが聖杯戦争におけるキーなのかもしれない。

もともと、今では元凶である英霊、セイバーが居るらしいのでその場所に赴く必要がある。

「僕が切った貼ったの死闘をやっていたのを見かけた訳ですか…」

「ハッあんなのは切った貼ったに入りやしねえよ。あの女もヌルイ修行つけてたのかねえ…？」

「いえ、クリードけしかけられたりしました」

「うわあ…ご愁傷さん…」

クー・フリーンは同情するように僕の背中を叩き、元気づけようとする。

クー・フリーンの物言いからして、どうやら昔からお師匠の過激な修行スタイルは変わってなかったみたいだ。

…僕、なんで生きてるんだらう？

「とにかく新都の方に向かわねえことにはな。盾持った嬢ちゃん達と合流するんだろ？」

「彼女たちがもし僕の知る人間なのであれば、合流する必要がありません。上手くいけば支援物資も手に入れられると思うので」

「そいつあ結構。なら、ちよいと急がないとな」

僕はクー・フリーンの言葉に頷き、再び走り始める。

この状況下…1人でいるよりもマッシュと立香さんに合流して対策を練る必要がある。

1人よりも2人、2人よりも3人、さらには大英雄の知恵も借りなくちゃ難題をクリアできない。

ただの人間が挑むには、あまりにもスケールが大きすぎる。

…なんとか、安定した龍脈の位置も探らなくちゃいけないしね。

「待て、坊主…どうやら敵さんがお待ちかねみたいだぜ」

冬木大橋と呼ばれる大きな鉄橋を渡ろうと進むと、橋の中ほどに身長2メートルほどの巨漢の黒い英霊が立っているのが見える。

手に持つは巨大な薙刀…黒い靄に覆われて実体が見えないけど、恐らく日本に由来する英霊だと思う。

『此処は通さぬ。通ってはならぬ…通りたくば、拙僧にその手の槍を置いていくがよい』

「そんなのできるわけ…ないでしょ!？」

橋、拙僧と言う一人称からお坊さん…ええと、僧兵つて言うのかな？

で、武器を寄越せつて言う…武蔵坊弁慶…なのかなあ？

僕は槍を両手で構えて姿勢を低くし、いつでも突撃できる体勢を整える。

『であるならば、引き返すがよい』

「それもできない。僕は貴方を打倒して先へ進む」

「言うねえ…男つてのはそう言う気概が無けりや生きてる意味が無
い」

クー・フリーンは、僕の背後で感心したように言い、手に櫂の木で

作られたドルイドの杖を手を持つ。

クー・フリーンの代名詞であるゲイ・ボルク：それはキャスタークラスとなった今では所持していないそうで、自己紹介が終わった瞬間に譲ってくれと頼まれたりした。

勿論、僕にとつて大事な槍なので丁重^土にお断り^座した。

兄弟子の圧力って怖いよね：体育会系だと特に。

『ならば死ね。拙僧が殺そう』

「ああ、そうかい：：なら燃えちまいな!!」

クー・フリーンは先手必勝と言わんばかりにルーン魔術による火炎弾を練り上げ、弾丸もかくやと言わんばかりの速度で射出する。その数10：僕では精々その半数出せるか否かと言う高密度の火炎弾を一瞬で放つて見せたのだ。

これが大英雄の扱う魔術：僕とてお師匠の弟子ならば、その高みに行かなくては！

高速で射出された火炎弾は得物を求める猟犬の様に黒い靄で覆われた英霊——黒化英霊と仮称する——へと食らいついていく。

だが、目の前の黒化英霊はそれらを薙刀を素早く振るう事で撃ち落とし、断ち切り弾き飛ばしていく。

その技量は確かに英雄と呼ぶに相応しいもの：：だけれど、どこか精彩を欠いているように見えるのはアサシンの黒化英霊と同様だ。

薙刀を振るうタイミングを見て、僕もクー・フリーンの魔術に合わせ突撃。

がら空きになっている右脇腹を素早く突き刺し、素早く左へと飛ぶ。

『グヌウツ：：!』

「多少は無茶でもやってみせる!」

ミシミシと体が悲鳴を上げるが、前衛をやれる存在が僕だけな以上何とかクー・フリーンの為の囿になる必要がある。

どのみちこの任務に失敗してしまえば死ぬしかない：：で、あるならば死に物狂いで生き残る気概で目の前の敵を打倒する。

僕が左へと跳躍した瞬間に、クー・フリーンの火炎弾が次々に黒化

英霊へと叩き込まれていく。

左へと跳躍した僕は、全身を動かして重心移動を行い、鉄橋の柱に着地するように足を着ける。

「これで、終わりにさせてもらおうよ！」

鉄橋の柱に着地する…と言えは聞こえはいいけども、実態は衝突しているのとなんら変わらない。

足にかかる衝撃と痛みに眩暈がするけど、そんなものはお構いなしに鉄橋の柱が歪むほどの力で柱を蹴り飛ばし、槍を上段に構えながら黒化英霊へと突撃する。

黒化英霊の間合いに届いた瞬間、勢いそのままに槍を叩きつける様に振り下ろすと、黒化英霊は手持ちの薙刀で僕の攻撃を受け止める。

「ぐうっ!!」

『拙僧が、殺す…!!』

凄まじい衝撃が両手に伝わり、びりびりと痺れが走るけどもそれでも僕はこの槍を手放すことはしない。

人理焼却が成されている今…お師匠と僕を繋ぐ唯一の存在だから…だから、手放すわけにはいかない！

奥歯が砕けそうになるほど思い切り歯を食い縛り、両腕に力を込める。

だが、所詮僕は人間…黒化英霊は薙刀の一振りですべて僕の身体を弾き飛ばされてしまう。

コンクリートの地面に身体を叩きつけられるものの、素早く槍を突き立てて体勢を立て直そうとするが下半身に力が入らない。

どうやら、肉体的に一時的な限界が来てしまったようだ。

「遅えよ…いつちまいなあっ!!」

立たなければ、立ち向かわなくてはと歯噛みしていると、勝機と見たクー・フリーンが僕が弾き飛ばされた際にできた隙を見計らって、黒化英霊へと急接近。

よりにもよって手に持った檜の杖を野球のバットの様にフルスイングで黒化英霊の胴体目掛けて振り抜き、結果として黒化英霊の身体が浮いた。

その隙を間髪逃さず、追撃と言わんばかりに火炎弾を連続で叩き込んでいく。

黒化英霊の肉体を火炎弾が食い破り、まるで虫食いの様に穴だらけになっていく。

『ぬかった…!!』

「弟ばかり見てるから負けちまうのさ」

クー・フリーンは穴だらけになった黒化英霊に向かってニヒルな笑みを浮かべ、櫂の杖を肩に担ぐ様にして持つ。

魔術師のクラスなのに、戦い方が乱暴だなあ…。

『さも、ありなん…だが…通るが良い。あなたたちは力を示し——』

僕は黒化英霊が消える瞬間を、コンクリートの地面にへたり込んだまま見つめる。

その最後は幾分穏やかなように見え、些か今の状況が不本意な様にも思えた。

勿論、僕の個人的な感想なので、本当は何とも思っていないのかもしれないけど…。

一先ず、僕たちはこの冬木大橋での対英霊戦に勝利したみたいだ。

「まあまったく、俺も大概だがお前は無鉄砲だなあ。生き急いでる訳でもないだろ？」

「たはは…ほら、魂魄で鍛えられても肉体が鍛えられてる訳でもないですから…でも、お師匠の顔に泥は塗りたくないんで…」

「お前のは蛮勇って言うのさ。そういうのは、あの女は好かないぜ」

クー・フリーンは僕を窘める様に言いながら此方へと近づき、手を差し出してくる。

僕が差し出された手を掴むと、クー・フリーンは思い切り僕の身体を引き摺り上げて確りと立たせる。

「ただの戦士ではいけない、ただの蛮勇でもいけないってな。口酸っぱく言われたもんさ」

「でも、僕にはできることなんて…」

「そう思いつめるもんでもないだろ。お前は十分勇気を知ってるし、術もすぐに見出せる。急ぐ奴ほど失敗しちまうしな」

クー・フリーンは僕の額を指先で弾いて黙らせ、ニカッと笑みを浮かべる。

どこか面倒見のいいお兄さんと言った雰囲気すら感じる笑みは、少しばかり安堵を覚えてしまう。

：兄弟が居たらこんな感じなのだろうか？

「とりま、先を急ぐとしようか。お嬢ちゃん達と合流して一息つかなきやな：ルーンで誤魔化したって、生身の体にはガタが来ちゃう。こんな状況でも休めるときに体は休めろ」

呆けた顔でクー・フリーンの顔を見上げていると、頭を掴む様にワシワシと撫でられてしまう。

彼なりに僕の事を気遣ってくれるのが分かって、嬉しくなってしまう。

僕は両手で頬を叩いて気合を入れ直し、真っ直ぐに新都のある方向へと目を向ける。

彼の言うとおりで体中は擦り傷切り傷だらけで、連続した魔術行使に身体が悲鳴を上げている。

可能ならば、仮眠だつてとりたいくらいだ。

「うっし、じゃあ行くとしますかね？」

「応ッ!!」

「ははっ、良い返事じゃねえか」

気合が入り過ぎて腹から声を出してしまうけれど、空元気でもこうして力が入るのならばまだまだ何とかなるように思える。

僕は手の中にあるゲイ・ボルクを見つめ、決意を新たにす。

お師匠が誇れるような男になろう、と。

冬木大橋を渡り切り、新都エリアへと侵入する。

爆心地から遠く離れているにも関わらず新都エリアも炎に包まれ、開発が進んでいたのだろうオフィス街もビルが無残な姿で倒壊している。

どこまでも、どこまでも続く地獄の光景。

まるで、この世は既にご破算し、後戻りなどできないと大合唱で言われているかのようだ。

これ程の災厄をもたらしたと言う大聖杯とそれを手にしたセイバーの英霊：どれほどの恨みがあったのだろうか？

いや、もしかしたらセイバーにとって、不測の事態が起きていたのかもしれない。

何と言っても此処は人理焼却の一端を担う特異点：何が起きても不思議ではないように思える。

新都に落ちている小石に探査のルーンを書き込み走らせていると、遠く視界の端に一直線に何か突き抜けたかのような破壊痕を目にする。

その破壊痕はありとあらゆるものを巻き込んで破壊しつつし、草一本残っていない。

「ありやあ、セイバーの野郎の宝具の痕跡だ。今回の聖杯戦争のセイバーは音に聞こえるブリテンの騎士王サマだ」

「ブリテンの騎士：すると、僕でも聞いたことのあるアーサー王!?」
「おうよ。あの野郎、加減なしでぶっ放しやがったからな」

アーサー・ペンドラゴン：ブリテンを異民族の侵略から守り切った、円卓の騎士を束ねる騎士王。

その最期こそ悲劇であれ、彼の王が持つ宝具の数々はどれもこれが一級品とされ、中でも聖剣エクスカリバーの知名度はあらゆる英雄の持つ剣の中でも群を抜いている。

英霊の強さ：と言うものは、召喚された土地における知名度に左右されることがあるらしい。

アーサー王程の知名度であれば、どんな土地で召喚されたとしても十全に能力を發揮するはず。

…と言うか、僕たち太刀打ちできるんだらうか？

「あの地点で一度セイバーとやり合ってたな。宝具の撃ち合いで決着をつけようとしたんだが…逃げるので精一杯だったってわけだ。なはは！」

「いや、笑い事じゃないですって。あんな規模の破壊を起こせる奴を相手にしなきゃならないんですか!？」

「だーかーらー、手え組んで何とかするんじゃないやねえか。無理でもなんでも解決しなきゃ、俺もお前も共倒れだ。やらないで野垂れ死ぬよりは、やって死んだ方がまだ胸を張れるっつてもんだ」

クー・フリーンは僕の脳天に拳骨を落とし、軽く説教をする。

僕は頭を抑えながら唸り声をあげ、痛みに悶え苦しむ。

比較的強めに拳骨をもらったので、とても痛い…。

…まあ、クー・フリーンの言う事も尤もである。

僕たちに引き返す道なんて既に無い…あるのは生きるか死ぬかの瀬戸際が続く道だけだ。

勿論、僕は死にたくない…死ぬわけにはいかない。

だからこそ、あれだけの破壊力を持つ宝具に対するカウンターが欲しいところなんだけど…聞く限りではクー・フリーンの宝具でも防ぎきることは出来ないようだし…どうしたものだろうか？

「…兎に角、今はマッシュ達と合流することを目標に動きましょう。対策はそれから考えるのも良いでしょうし」

「んだな、三人寄らばなんとやら、だ。つと、見つけたみたいだな」

クー・フリーンが気付くのと同時に、僕が走らせていた小石の動きが止まる。

どうやら、マッシュ達の足跡を辿ることに成功したようだ。

ルーン文字5番、移動や遠方の情報を担う『ラド』から到達を示す22番『イング』へと自動的に書き換わったことを感じ取る。

動かないと言う事はイングが示すポイント…新都でも開発の進んでいない南側で休息をとっている可能性がある。

「うげ…」

「何かあったんですか？」

さて、移動しよう…と言ったタイミングで、クー・フリーンは苦虫を噛み潰したような顔をして、南側のエリアへ目を向ける。

こう、あまり近寄りたくないと言わんばかりの表情だ。

兄弟子がそう言うマイナスな感情を浮かべているのに興味を惹かれ、思わず聞いてしまおう。

「あの辺りには何があるんです？」

「墓地と教会だ。うさくせえ、死んだ魚の目えした神父がやってる教会」

「知り合い…ですか？」

クー・フリーンは盛大にため息を吐きながら肩を落とし、しかしすぐに気を取り直す。

どうも本人にとってあまり良い思い出…と言う訳ではない様だ。

「以前参加した聖杯戦争で少しな。英霊ってのは座に登録された本体のコピーみたいなもんでな、コピーが経験した事ってのは本体に蓄積されていく。で、こうして現界するとき記憶が引き継がれるんだが、強烈な記憶以外は大体忘れちゃうんだわ。なんせ、今も昔も未来の記憶も一気に入ってるからな…余程記憶力に特化でもしてないと忘れちゃう」

「…そんなにその神父強烈だったんですか…？」

「麻婆豆腐がな…」

「??？」

…麻婆豆腐ってあの麻婆豆腐だよ、ね？

ケルトの大英雄と中華料理に一体どんな接点があったんだろうか？

神父よりもむしろその麻婆豆腐の存在の方が気になってくるなあ…。

「まあ、良いじゃねえか昔の事なんかはよ。それよか早く合流するんだろ？」

「ああ、そうでした。摩訶不思議な物言いに気を取られて…」

「お前な…」

クー・フリーンは呆れた様な顔で僕の事を見つめるが、僕は素知らぬ態度で足にルーン魔術を用いた強化を行って走り始める。

もうすぐマシユ達と合流できる…そう思うと足に溜まっていた疲れを忘れ、幾分か足取りが軽やかになる。

生きた人と会えると言うのは、この状況下で一筋の希望の様にも思えた。

瓦礫と化した住宅街を抜け、未だ炎が燻る墓地へと足を踏み入れる。

死者が眠り続けているであろう墓地には、冬木の災害によって呼び起こされたのかゴースト達の姿がちらほらと視界に入る。

「あの神父じゃ、幽霊だって化けて出てくるわな」

「さつきから神父デイス凄いですね…」

「そらまあ、気に食わないマスターだったから余計だろ…」

「神父が殺し合いに参加するってどうなんでしょうか…?」

神に仕える人間であるならば、寧ろ争いを調停する側に居なければいけない気がする…。

もつとも、本人がナマグサの類なのであれば、聖杯戦争なんて胡散臭い儀式に嬉々として参加するとは思うけど。

墓地へ足を踏み入れた瞬間、ゴースト達は一斉に僕とクー・フリーンへと目を向けるものの、此方へは近寄らずに一定の距離を保って睨み続けている。

これはひとえにクー・フリーンの存在に依るところが大きい。

クー・フリーンは高位の英霊…そもそも格が違うため、生半可なゴーストでは近付くだけで消滅しかねない。

まるで虎の威を借る狐だなあ…。

小さくため息を零すと、クー・フリーンが背中を少し強めに叩いてくる。

「ほれ、シャンとしな。戦士ってのはいつだって威風堂々としてな」

「クー・フリーンなんて大先輩に戦士って言ってもらえると、なんだかむず痒いですよ…」

「戦士つつつてもまだまだヒョッコみたいなもんだけどな」

クー・フリーンはそう言っただけで、僕をバンバンと叩き続ける。

キヤスタークラスと言えど一級品の戦士から放たれる衝撃は、地味になんて言わない…カーナーリ、痛い。

涙目になりながら墓地を暫らく歩いていると、崩れかかった教会の裏手が見えてくる。

どうやら瓦礫と化した廃墟を避けて通ったせいで、遠回りをしてしまったみたいだ。

足場が悪かったから飛び越えないで回り道してきたのだけれど…少しだけ失敗だったかもしれない。

教会の裏口までたどり着くと、突如クー・フリーンが後ろに下がる。

何か嫌な予感がして、僕も続いて後ろへ下がると上空から巨大な盾が猛烈な勢いで落ちてくる。

「やああああっ!!」

「っ!?!」

盾が地面に直撃すると土塊を巻き上げ、それだけで大質量の物体であることが分かる。

英霊ならまだしも、こんな人間が受けたら骨が折れてしまう…!

盾の影から鎧を着た少女が此方の様子を伺い、全身から魔力を放出させる。

「英霊?」

その規模、濃度から言っただけで英霊と判断した僕はなげなしの魔力をつかって全身の肉体を強化する。

目の前の英霊の宝具は間違いなくあの盾…猛牛さながらの突撃戦法が得手のはず。

マタドールの様に避けながらチクチクとダメージを蓄積させ…なんて考えていると、さっきの叫び声…どっかで聞いたことがある様な…?

「マシユ・キリエライト、唸か…って、東雲さん!？」

訝しがりながらも注意深く盾を持った英霊を睨み続けていると、突如警戒を解かれ鎧を着込んだ少女…管制室で爆発に巻き込まれ瀕死の重傷を負っていたはずだったマシユが驚いた顔で此方を見つめてくる。

「東雲さん!無事だったんですね!？」

「お陰様で…死にかける事2回程あったけど…」

「兎に角無事でよかったです…目覚めたら東雲さんだけ居なかったの
で、てっきりレイシフトに失敗してしまったものと…」

マシユはひどく安心したように胸を撫で下ろし、優し気な笑みを浮かべる。

何を隠そうこの少女こそがファーストミッションにおけるメンバーの中の唯一の良心、僕に嫌がらせをしなかった人間なのだ。

僕とて、マシユの無事が知れて安心してしまい、尻餅をついてしま
う。

「あー、よかった…生きてる人間に会えた。藤丸 立香さんも無事かな?」

「はい、今は教会の中で休んでもらっています。ところで…後ろの方は?」

マシユは僕の背後で忍び笑いを漏らしているクー・フリーンを訝し
気に見つめ、盾を持つ手に力を込める。

その様子を見て僕は手で制し、ゲイ・ボルクを杖代わりにして立ち
上がりクー・フリーンへと顔を向ける。

「彼はこの冬木で戦っていたキャスターの英霊、クー・フリーンだ。今
回の事件解決にあたって、協力してもらってる」

「ったく、弟もスミにおけないねえ。こんな別嬪なお嬢ちゃんに熱い
ラブ・コール貰ってよ」

「いや、一歩間違えてたら脳みそグシャヤですからね!？」

頭上から盾ごと落ちてきて、叩き潰そうとするラブ・コールなんて
ありません。

マシユ達が陣取っている以上、此処に外敵が居るとは考えにくいの

で僕は手に持っていたゲイ・ボルクを概念礼装として体内に格納する。

緊張の連続だったので、流石にドツと疲れてしまった。

「クー・フリーン！アルスター神話の光の御子ですね!!」

「お、お嬢ちゃんも俺の事知ってる口か。いや、有名人つてのも悪かねえなあ!」

「…その顔、お師匠が見たら多分張り倒されますよ?」

「…?兎も角一先ず教会の中へ。会わせたい人も居ますので」

さっきの仕返しと言わんばかりに鼻の下を伸ばすクー・フリーンにツツコミを入れ、ため息を吐く。

兎に角、ケルトの戦士は豪快なエピソードが多い。

こう、鬨の声を上げただけで人が死んだー、とか。

風呂入ったら風呂桶2杯分の水が蒸発したー、とか。

目の前の人のエピソードなんですけどね?

「僕は30分で良いから仮眠がとりたいよ…」

「駆けつぱなしにやりつぱなしだったからな。で、お嬢ちゃん…アンタ混ざりもんだな?」

マシユに案内されるままに裏口から入り、中庭を歩いているとクー・フリーンは確信をもってマシユに問う。

混ざりもの…とはどういう事だろうか?

先ほどの訓練中のマシユとは、比べ物にならない魔力放出と関係があるのだろうか…。

「はい、私はシールドアのデミ・サーヴァント。ある英霊が私を生かすために、人理修復を行うために私に力を授けてくれたんです」

「その英霊の名前は…?」

デミ…亜種英霊…普通の英霊と違う事は分かる。

まず、マシユは英雄として座に登録された人物ではないし、今もキチンと生きている人間だ。

と、なると人間でありながら英霊の力を使うもの…と言う事になるのだろうか?

そんな英霊の名前を知りたくなった僕はマシユに聞いてみるもの

の、マシユは小さく首を横に振る。

「いえ、彼は名前すら告げずに消えてしまいました。私も名前を知りたいのですが、カルデアにもその記録は残っていないと言う事なので……」

「デミ・サーヴァントねえ……まあ、人為的でもないようだし、突っ込むのは野暮だな」

クー・フリーンは呟く様にそう言い、マシユの身体を頭の前からつま先まで見つめる。

どこか値踏みするようなその視線は、マシユの英霊としての力を測っているようにも見える。

「あの、何か……?」

「あーいやいや、なんでもねえよ。マシユのお嬢ちゃんに力を貸した英霊つてのは気前が良いもんだと思つてな?」

クー・フリーンはそれだけ言うとハツハツハと笑いながら、教会の正面……礼拝堂に通じる通路を歩いていく。

僕とマシユは顔を見合わせて首を傾げ、クー・フリーンの後をついていく。

礼拝堂の扉の前に立ち、クー・フリーンが扉を開けると2人の人間の視線が出入り口に注がれる。

「ま、マシユは!?!」

「先輩、私は大丈夫です。東雲さんが此方に来てくれましたよ!」

「よかったあ……私だけじゃどうなる事かと……」

1人目はあの赤毛の少女、カルデアが集めた最後のマスター、藤丸立香。

彼女は礼拝堂に置いてある長椅子から跳ねる様に立ちあがり、クー・フリーンの事を怯えながらも強く睨み付けるが、慌てて間に入ったマシユが執り成してくれたおかげで、余計な衝突が起きずに済んだ。

僕もマシユに続いて礼拝堂に入り、立香さんの無事を確認して胸を撫で下ろす。

「立香さんにケガが無いようで良かったよ。この分だとあの黒い英霊

とは遭遇しなかったみたいだね」

「東雲さんは全身ボロボロですね…でも無事で良かったです！…あれ、自己紹介しましたっけ？」

「ほら、レイシフト直前のマスター登録の時に名前だけは聞いてたからさ。改めて、東雲 良太です。僕のこととは気軽に呼んでもらえればそれで良いからね」

終始和やかな雰囲気です立香さんと自己紹介を済ませると、クー・フリーンが俺の肩を叩いて声をかけてくる。

「おい、坊主…なんかあの姉ちゃんから睨まれてるが何かやらかしたか？」

「姉ちゃん…？」

クー・フリーンが指で指し示す方向にある礼拝堂の祭壇。

その場所にはここにいる筈のない人物…オルガマリー・アニムス
ファイア所長が非常に不機嫌な表情で仁王立ちしていた。

「さて…どうして貴方が此処に居るのか聞かせてもらいましょうか、東雲 良太君？」

「めっちゃくちや機嫌悪いっすね…なんかあつたんすか？」

「…口の利き方に気を付けなさい」

礼拝堂の祭壇で仁王立ちをしているオルガマリー所長は、こめかみに青筋を浮かべながら僕の事を睨み付けてくる。

僕は、少しばかり苛ついてしまって、少々言葉遣いが乱暴になってしまう。

此処に至るまでに起きた事件や戦いの数々を思えば、僕には今ここで所長に睨み付けられる理由が無い。

怒られるにしても、ファーストミッションを不本意ながらサボタージュしてしまった程度で、この緊急時に問い質す内容でも無いと思う。

「分かりました、所長。基本的にはマシユ・キリエライト、藤丸 立香 同様の理由で僕はこの特異点にレイシフトしました。しかし、イレギュラーなレイシフトだった為か、僕だけは彼女たちとは別のエリアに転送されました」

「貴方も同様に生身でのレイシフトを行ったのね…では其処のキャスターの英霊との経緯を…」

「おい、姉ちゃん…そんな事を悠長に話している場合じゃねえだろう？」

「所長との質疑応答を続けようとする、少しばかり不機嫌な声色のクー・フリーンが横槍を入れてくる。

「どうも、所長の僕に対する扱いが気に食わない様だ。

「俺との経緯なんざどうだって良いだろ？問題なのは、この状況をどうやって切り抜けて解決に導くかだ。あちらさんの手駒にはまだライダーとアーチャー…それにバーサーカーが残っている。向こうがこつちを潰そうと思えば、簡単につぶせるんだぞ？」

「…分かりました。これ以上は不問としましょう」

「話が早い女は好みだぜ。さつてと…まずは、弟分の身体を癒してや

らなきやな」

所長は逡巡するものの、クー・フリーンの言葉を飲み小さく首を振る。

不毛な言い争いをして、追加戦力であるクー・フリーンと不仲になることを避けたのだろう。

僕としても兄弟子と不仲になられるのは非常にやりにくいので、身を引いてくれて少しばかり助かる。

所長の返答に満足げに頷いたクー・フリーンは、僕の制服の上着を脱がして背中に掌を添える。

後ろの方に居るマッシュと立香さんは、僕の裸を見てキヤーキヤーと小さく黄色い声を上げている。

まともに肉体を鍛え始めたのはカルデアに入ってからなので、言うほど筋肉はついていないと思うんだけど…。

「そこそこ鍛えちやいるみたいだが…少しばかり無茶したな、良太。魔術回路が少しばかりイッチまってる」

「あー、だからすぐに力が入らなくなったのか…訓練じゃ手を抜いてたしなあ…」

「ばーか、訓練こそ全力でやれってんだよ」

どうやら、フル稼働させていなかった魔術回路が、いきなり魔力を全開で通してしまったために焼き切れかかっているようだ。

僕の魔術回路の本数は20。

これはカルデアで検査を受けた時に判明したもので、一代目の魔術師としてはそこそこ多い量になるそうだ。

それでも、魔術回路の本数が減ればそれだけ魔術を行使するときの負担が増えるし、効果は目減りしていく。

僕は、この魔術回路たちを後生大事に使っていかなくてはならないのだ。

「ちよつと、なんでそんな無茶してるのよー！」

「いえ、ちよつと生身で英霊と戦ってまして…」

「あの、東雲さん…生身で戦える様な相手ではないのですが…」

僕の答えにいくらなんでも嘘だろうとマッシュは言うものの、クー・

フリーンがマシユの方へ向いて首を横に振る。

事実として、弱っていたとはいえアサシンの英霊を打倒することに成功している。

勿論アサシン自体のスペックがそこまで高くない、と言う事も勝利した理由の1つにはなるのだろうけど、それでも本来ならば人間が勝てる相手ではない。

「いんや？良太の言ってる事は事実だぜ、マシユのお嬢ちゃん。此奴はアサシンの英霊を単独で撃破している。だから、俺がこうして協力者として一緒に居る訳だ」

「東雲 良太：あなた、何か隠していることがあるわね？」

「あー、特には無いと思います、はい」

所長は僕の戦闘能力は、其処まで高くないと思っている。

と、言うのもカルデアでの戦闘訓練は基本的に魔術を使用しての遠距離戦が主体となっていた。

僕は確かにお師匠から授けられたルーン魔術を得意としているけども、魔術よりも槍術の方を得手としていたために魔術戦では平凡な戦績で終わっていたのだ。

もつとも、ルーン魔術をマトモに使おうとしようものならば、即ホルマリン漬けと所長に念押しされていたのだけど…。

まあ、まさかお師匠が影の国の女王でその人からルーン魔術と槍術教わってました、なんて言えるわけないんだよなあ…。

「いえ、東雲さんは何か隠している筈です。概念礼装なんて持っていなかった筈ですよね？」

「マシユウウウツ!!」

「まあまあ、そんなに目くじら立てることはねえだろ。非常時だし、あの女召喚したらどっちみちバレちまうんだからゲロつとけゲロつとけ」

僕はね、マシユが察して適当にお茶を濁してくれると思っていたんだ…それがこの様だよ…。

マシユは僕が持っていたゲイ・ボルクが気にはなっていたようで、僕が概念礼装を持っていた経緯に興味があるようだ。

ちなみに、立香さんは大して興味がないのか白いリス状——と言ってもサイズは小型犬より少し小さいくらい——の生き物：『フォウ』に構っている。

あれもレイシフトしてたのか：なんでだか分からないけど、僕に懐かないんだよね…。

フォウは神出鬼没ではあるけども、基本的にはマシユの近くに居る。

マシユが名付け親だし、恐らく一番懐いている為だろうな。

僕は深く溜息を深く吐き出し、腹を括る。

：帰ったら、ホルマリン漬けになるのかなあ…？

「…僕の魔術のお師匠は影の国の女王で、概念礼装もお師匠からご褒美と言う事で譲ってもらったものです」

「はあ…？影の国の女王と言うと、あのスカサハよね？」

「はい、所長。異境魔境の主、ケルト・アルスター神話において伝説の戦士。彼女は常に生き続け、影の国の門を守っていると言う事ですが…」

所長とマシユは案の定と言うか、信じられないと言わんばかりの顔をする。

そもそも、現代の人間は神秘を扱う事が難しくなっていて、影の国へと辿り着くことすらできないと言われてている。

そんな現代の人間である僕が、日本に居ながらにして影の国に行ける訳がないのだ。

つい最近まで学生だったし、生活はギリギリのところまで回すようにしていたし…。

喫茶店のアーネンエルベは駄目です、心のオアシスなんです。

「まあ、言ってみれば俺の弟弟子ってやつでな。肉体は見ての通りひよろつちいが、中身は戦車の様にタフだ。馬鹿みたいに無鉄砲だしな」

「…俄かには信じがたいわね。かの女王と何の接点もない筈でしょう？」

「それは…まあ、その通りなんですけど…」

確かに僕とお師匠には何の接点もない。

僕は生粋の日本人だし、海外旅行に行ったことも無い。

ケルト神話に関してだって、ハロウィンに関して調べた時についてに知ったと言う程度だ。

でも、それでも僕は毎晩影の国に赴いていたし、お師匠に厳しい修行をつけてもらっていた。

これは人理が焼却されようとも覆しようのない事実だ。

「なら、貴方の持っている概念礼装を出しなさい」

「…没収と言うのなら全力で抵抗しますよ？」

「違うわよ！概念礼装を解析するの！女王から授かった物ならばそれ相応の神秘を宿している筈なの！」

僕はあからさまに嫌そうな顔をして拒否の意思を示すものの、所長は目を吊り上げて手を振り上げる。

しかし、クー・フリーンが僕の背後から手を出してそれを制し、押しとどめる。

「まあ、待ちなつて。まずは良太の魔術回路と疲れを癒してからだ。お前たちと合流するまでの約2時間、闘って戦つての連続だったんだからな。これから大戦があるって時にへばられちゃったら困る」

「随分とそいつの肩を持つわね？」

「そりゃ、あの女の愛弟子だからな。それなりに可愛がるってもんだろう？」

クー・フリーンは快活に笑いながら僕の背中から魔力を流し込み、僕の魔術回路に浸透させていく。

ビリッとした電流が流れるような感覚と共に、多少の息苦しさが消えて少しだけ楽になる。

「これでもうちつと魔術を使うのが楽になるはずだ。あとは日々の鍛錬で慣らしていくしかねえ。精進しろよ」

「はい」

この特異点を突破すれば、次の戦場へとレイシフトすることになると思う。

で、あるならば魔術の研鑽に肉体強化は必須になっていく。

僕は足を引つ張る訳にはいかないからね…立香さんばかりに負担をかけさせるわけにはいかない。

「フオウ…?」

「なんだ、フオウは僕の心配してくれてるのか?」

「フオウ!」

ぐつと両手に力を込めて俯いていると、足元にフオウが近づいてきてすり寄ってくる。

カルデアに来てからこんな反応を示されたことは無かったので、少しばかり嬉しくなってしまう。

フオウに手を伸ばすと額を掌に擦り付けてきたので、両手で優しく抱きかかえて膝にのせてモフモフの毛並みをじっくりと堪能する。

「ああ、そうだ姉ちゃん。マスター適正ないけど魔術師だよな?」

「マスター適正が無いのは余計よ!それで、何の用よ?」

「いや、ちよつと手伝ってもらいたくてね」

クー・フリーンは僕の肩にカルデアの制服の上着を肩にかけると所長を呼びつけて中庭へと向かってしまう。

暫らくぶりの静寂が礼拝堂を満たし始める。

…常に気を張り続けると言うのは精神的な負担が大きい様で、とてもない倦怠感が僕を襲ってくる。

「あ、あの…!」

「あつはい!なんででしょう!」

「フオツ!」

うつらうつらしていると、いつの間にか僕の隣に立香さんとマシユが隣に座って僕の顔を真剣に見つめてくる。

少しばかり気が緩んでいたところにいきなり声をかけられたので、思わず体をびくつかせてしまい、膝の上で丸まっていたフオウが驚いて飛び降りてしまう。

「あつ、な、なんか、ごめんなさい」

「あ、いや…ちよつと寝かけてたからね。ところで何か用かな?」

僕は制服の上着を着込みながら、立香さんに向き直る。

立香さんはペコペコと頭を下げた後、意を決したかのように小さく

頷く。

「あの…怖くなかったんですか？」

「それは、戦うのが、と言う事だよな？」

「はい」

「それは私も気になります。この特異点に来てからアンデッドなどの魔物との小規模な戦闘は経験しましたが、英霊とはまだ…」

僕も含めてだけど、今この場に居る人間は皆戦闘経験が浅い。

命の取り合いをすると言う事に、恐れを感じてしまっているんだろう。

日常から非日常に心構えなく叩き込まれば、誰だってそうなるってしまうと思う。

「怖いか怖くないかで言えば怖いよ？怖いけど…僕にはもつと怖い事がある」

「もつと、怖い事…？」

「何も成せずに死んでしまう事。折角お師匠が鍛えてくれたのに、あつけなく死んでしまったらお師匠に言い訳ができないからね…。だから、僕は目の前の事は力の限りを尽くすし、理不尽に対しても立ち向かう」

お師匠が誇れるような自分になること…何よりも自分が誇れる自分になる事がとても大事だと思う。

心を折られてしまわないように。

心が一度折れてしまったら、きつと一人で立つのは難しくなってしまう。

だから、僕は無鉄砲でも何でも力の限りを尽くす。

その上で死んでしまったとしても、僕自身は納得をして死ぬことが出来ると思っている。

まあ、死ぬ気なんて毛頭ないのだけれどね。

「良太くんにとって、お師匠って大事な人なんだね」

「はい、東雲さんにとっての大切な存在の様に感じられます。お師匠さんのお話をしている時、とても穏やかな顔をしていますから」

「10年、面倒を見てもらっていたからね…死ぬような目にも10年

遭い続けたけど。アンデッドの集合体とか、ドラゴンとか、巨人とか、クリードとかクリードとか…」

「し、東雲さんの目が虚ろに!?!」

いや、本当にあのクリード喉けられた時は、生きて起きれる自信が無かったなあ…外骨格の一部を必死に削って生身を削って…。

図体がでかいから、少し動いただけで踏み潰されそうになるし…。

本当に、何で勝てたんだろうな…?!

がつくりと肩を落とすし、お師匠を召喚してしまつたら生身で酷い目に合うようになるんだなと思いついてしまい、少しばかり憂鬱になつてしまう。

あの人は…言つてしまえばブレーキが壊れている人なのだ。

暫らく3人で談笑をしていると、中庭に通じる扉が開いてクー・フリーンが手招きをする。

「おう、準備ができたから来てくれや」

「…ついにですか」

「いい感じに此処に龍脈が流れ込んでな。多分異変でずれ込んだんだろ…だが、こいつを利用しない手はないからな」

僕が椅子から立ち上がつて中庭へと向かうと、中庭に敷き詰められていた石畳みの上に赤い魔法陣が描かれているのが見える。

どうやら、所長と2人で召喚のための準備をしていてくれたようだ。

「まったく、この私を小間使いの様に使うなんて…」

「それで人理が救われるんなら安いもんだろうが、プライドばかり先に立ってちや世話ねえぞ?」

「うるさいわよ…」

所長は不満げに口を尖らせているものの、クー・フリーンの言っていることは尤もなのであまり強くは出ない。

僕は右手に格納していたゲイ・ボルクを呼び出して持ち、魔法陣へと近づいていく。

「嘘…なんで、そんな宝具を…」

「これから召喚する人に聞けば、良いんじゃないんですかね…?」

「はいはい、お喋りは終わりだ。お嬢ちゃん達、召喚中は良太が無防備になる。だから、常に周囲を警戒しておいてくれ」

「はいっ！」

魔法陣の前に立った僕は、クー・フリーンに指示されて魔法陣の中央にゲイ・ボルクを置き、一步下がる。

これからお師匠を…影の国の女王スカサハの召喚を行うと思うと、胸が熱くなってくる。

「高揚してるな？まあ、少しばかり冷静になってくれや」

「はい」

「いい？私が召喚の為の詠唱を行うので、それを復唱しつつ魔法陣にありつただけの魔力を送り込みなさい」

「分かりました…お願いします」

ゆっくりと深呼吸をし、魔法陣に向かって右手をかざす。

大丈夫…お師匠は僕の声を待つと言ってくれたのだ…だからきつと、応えてくれる！

準備ができたのを見て、所長が小さく頷く。

「はじめる…!？」

その時、激昂する獣の叫びが響き渡った。

「！！！！」
爆音——中庭の石畳を粉碎し、その鋼鉄の戦車を思わせる威容が空より舞い降りた。

浅黒く、これ以上無いほどに鍛え上げられた筋肉。

荒々しく、鋼のような長い黒髪は猛り狂う様にうねっている。

圧倒的な威圧感、どうにかなると思っていた僕の心を急速に冷えさせ、じわりじわりと僕の心を冷たい奈落の底に引きずり込む。

——あれは、相対すること自体が間違っている…!!

「セイバーの野郎、一網打尽にする気だな!!」

「ヒツ、な、なんなのよ!なんなのよ!!なんで私ばかりが!?!」

「せ、先輩!先輩は下がって!!」

「こ、こんなの…勝てる訳がない…!!」

獣の唸り声をあげたソレは煌々と赤く輝く瞳で僕たちを睨み付け、猛り狂うままに咆哮を上げて岩盤を削りだしたかのような荒々しい斧剣を片手で振り上げてそのまま地面に叩きつける。

ただ叩きつけただけで発生したその一撃は衝撃波を伴った破壊エネルギーとなつて僕に目掛けて飛ばされるが、すんでのところでマシユが間に入って盾を構える事で衝撃波を押し留めることに成功する。

「ぐううう!!やらせ、ません!!」

ただの衝撃波であるにも関わらず、マシユの盾がビリビリと軋みを訴える。

恐らく、バーサーカーの英霊…狂い猛らせることでステータスを跳ね上げている為にその攻撃力は、一撃一撃がミサイルの様に強力なのだろう。

クー・フリーンは櫂の杖を手に持ち、ルーン魔術の展開を始め大声を上げる。

「良太!召喚を早く進めろ!こっちはこっちで何とか押し留めてやる!」

「わ、分かりました!!所長!!」

「無理よ、無理…勝てる訳がない…助けて、助けてよ…レフ…!!」

所長はバーサーカーの威容、暴威に足を竦ませてへたり込み、自分の身体を抱きしめる様にして必死に震えを抑えている。

所長はあくまでも魔術師…言ってしまうえば学者なのだ。

そんな人間が目の前に現れた猛獣と言う名の災害を前にして、怯えない方がおかしい。

それでも、今はその恐怖が僕たちを死へと近づけていく。

「マシユ！全力でサポートするから、あの英霊を押しつけて!!所長、しつかりしてください!!」

そんな恐怖の最中いち早く動き出す人間…立香さんが素早くマシユに指示を送り込み、所長の肩を抱き寄せ揺さぶる。

この娘は…怖くないのか…!?

「所長、いない人間に助けを求めたって仕方ないでしょう!?!このまま成すべきことを成さないと死ぬわけにはいかないんです!」

「あ…」

立香は所長の胸倉を掴むと声を張り上げて奮い立たせようとする。

そう、成すべきことを成さずに死ぬことなんて許されるわけがない。

そんなことをしてしまえば、今まで積み重ねてきたことが全て無駄になってしまうのだから。

「チィッ！こいつカテェ!!」

クー・フリーンはルーン魔術による火炎弾を次々と放ちバーサーカーへと攻撃を加えていくが、バーサーカーは視界を塞いでしまうような攻撃のみを斧剣で斬り払い、その巨軀に見合わない速度でクー・フリーンへと肉薄していく。

「筋肉ダルマが!!」

「クー・フリーンさん、下がって!!」

「マシユ！その一撃は受けるな！ラウンドシールドの曲面を活かして逸らすんだ!!」

マシユがクー・フリーンの前に立ち、振り上げられた斧剣を受け止めようとする。

あんな一撃、毎度毎度受け続ける事なんてできる筈がない。

僕はマシユにアドバイスを送り、果たしてマシユはアドバイス通りにバーサーカーの一撃を正面から受けずに逸らし、地面へと落とす。「つうっ!!」

「お嬢ちゃん、少し時間稼いでくれ！宝具を展開する!!」

クー・フリーンはマシユから離れ、櫂の杖を地面に突き立て魔力を高速で練り上げていく。

お師匠の：スカサハから授けられし原初のルーンを発現させる。

マシユは食い下がる様にヘラクレスの前に立ち続け、ビリビリと痺れるであろう腕に必死に力を込め、時に魔力放出を行いながら防御に専念し続ける。

「——!!!」

逸らし続けるならば逸らせなくなるまで攻撃するまで：そう言わんばかりにバーサーカーは全身の筋肉を撓ませて暴風の様な連続攻撃を浴びせようとする。

しかし、その直前に立香さんは令呪の刻まれた右手を天高く掲げ、高らかに宣言する。

「令呪を以て告げる!!バーサーカーの攻撃を避けて、マシユ!!!」

「はあああっ!!!」

令呪：英霊と契約することができるマスターに3画だけ配布される絶対命令権。

令呪による命令は英霊を精神的、肉体的に拘束し確実にその命令を遂行させる。

しかし、令呪には別側面の使い方が存在している。

それが立香さんが使用したスキルとしての使用：令呪が内包する莫大な魔力を英霊に付与し、ブーストスキルとして使用する。

バーサーカーは目にも止まらぬ神速の連撃を叩き込むが、令呪によるブーストがかかったマシユはそれらを軽業師の様に紙一重で回避していく。

「下がりな嬢ちゃん!!『焼き尽くせ木々の巨人——焼き尽くす炎の檻!!!』」

クー・フリーリンの声に合わせてマシユは大きく跳躍してヘラクレスから離れると、礼拝堂から突然爆炎が巻き起こる。

その爆炎から現れたものは、無数の細木で構成された木々の巨人：神々への生贄を奉げる為に存在する巨人ウィツカーマンだ。

ウィツカーマンは神々の生贄と見定めたバーサーカーを見下ろし、全身を業火に包み家屋を粉碎しながら歩き、腕を伸ばす。

バーサーカーは掴まれまいと素早く後退し斧剣を構え、ウィツカーマンの拳へと叩き込み力比べを始める。

「やりやがるな、ギリシヤの大英雄！だが、これならどうだあつ！！」

クー・フリーリンはありつただけの魔力を総動員して、ウィツカーマンに力を送り込みその膂力、火力を爆発的に増大させる。

すると、バーサーカーの身体が徐々に押され始め、ジリジリと後退を始める。

「所長、みんな戦ってます。必死にこの特異点を正そうと戦っているんです。だから、所長も立ち上がりましょう。未来を掴むために」

「わ、わかつてるわ：わかつてるわよ！けれども、怖いのよ！！」

「戦うのは僕たちなんです。だから、所長は僕たちが戦えるように助けてください」

立香さんに支えられながら立ち上がった所長は、足を小鹿の様に震わせ、目じりに涙を貯める。

こんなはずじゃなかった、こんな事になるとは思わなかった。そういう思いが胸を渦巻いているのだと思う。

けれども、だからこそ立ち向かわなくてはならない時がある。逃げる事は、最早許されないのだから。

バーサーカーとの力比べはウィツカーマンが制し、ウィツカーマンは両腕でバーサーカーの：ギリシヤ最大の英雄ヘラクレスを掴みあげてその胴体へと格納。

全身を一気に燃え上がらせて崩れ落ちていく。

「はあ…いいいっ！これから、詠唱を行うのできちんと復唱するように」
意を決した所長は目元の涙を拭って目つきを鋭くさせる。

僕は小さく頷き、再び召喚陣に向き直り手を翳す。

し尽し——しかし、足りない。

宝具効果範囲外へと無理矢理突撃したヘラクレスは、進行方向に居るクー・フリーンへ赫怒の咆哮をあげ、ボロボロになった左腕で薙ぎ払う。

『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者』

「マシユ!!」

「負けない…負けてなるもんか!!!」

クー・フリーンは礼拝堂の残った瓦礫まで弾き飛ばされ、内臓にダメージを受けたのか口元から血を吐き出す。

それでも手に持った櫂の杖から火炎弾を放ち続け、ヘラクレスの行動を阻害しようとする。

だが、ヘラクレスの突撃は最早その程度では収まらず、遂に僕の元へと迫り着く。

立香さんの叫びに反応するように、マシユは最後の砦となる様に僕の前に立ってヘラクレスへと立ち向かう。

「!!!」

「うわああああ!!!」

僕を殺し尽すのに十分すぎるほどに引き絞られた死の一撃…しかし、それは僕の元へと届かなかった。

マシユが、手に持った盾を地面に突き立て宝具として展開。

強大な守護結界が発生し、ヘラクレスの一撃と拮抗する。

『汝三大の言霊を纏う七天。抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——!!!』

ヘラクレスの剛撃による猛攻により、マシユの防御結界がまるでガラスの様に碎け散りマシユは斧剣の一撃を盾ごと受けて弾き飛ばされ——光の爆発が巻き起こる。

「まったく、遅かったな馬鹿弟子」

眩いばかりの光の中、10年…共にあった声が耳元に響いた瞬間、ヘラクレスの身体が5本の朱槍で貫かれる。

眉間、喉仏、肺、心臓、股間…いずれも見紛うことなくゲイ・ボル

クが突き刺さっている。

その衝撃は凄まじく、ヘラクレスの身体を容易く弾き飛ばして僕との距離を開けさせる。

「サーヴァント・ランサー、影の国より罷り越した。マスター…と呼べば良いのかな、お主の事を…」

僕はその背を見上げていた、僕はその声を聞いてきた、僕は彼女と共にあった。

いつしか憧れ、いつしか恋い焦がれ、いつしか到達すべきと思っていたその背を魅せ、お師匠…スカサハは夢で出会った時とは異なる姿を見せていた。

ボディースーツに革鎧は変わらないものの、肩の鎧は銀ではなく鈍い金となり、薄いヴェールを被った姿は正に女王と呼ぶに相応しい。

僕が呆けていると、お師匠は呆れたように肩を竦める。

「ほれ、しゃきつとせんか。闘いはまだ終わってないのだぞ？」

「お、応ツ!!」

「よろしい。では、大英雄ヘラクレスよ…お主を影の国へと連れて行こう。お主ほどの勇士であれば、他の弟子たちも奮起するに違いない」

ヘラクレスが蘇生を果たし、ゲイ・ボルクを引き抜くと前傾姿勢で地面に片手を置き、両足に力を込める。

それはまさしく一撃必殺を狙っていると言わんばかりだ。

対してお師匠は薄く笑みを浮かべて、両手にゲイ・ボルクを持つ。

左手に持っているものは僕のものと同じ形状だが、右手のものはより暗い赤で使い込まれているように見える。

燃え盛る礼拝堂の残骸が崩れた瞬間、両者が飛び出す。

先手を打つのはヘラクレス…速度の乗った斬撃を真っ向唐竹割でお師匠に向かって叩き込むも、その場所にはすでにお師匠の姿はない。

爆音と共に中庭に残っていた石畳が粉碎され、その上空に莫大な魔力反応が発せられる。

「刺し穿ち、突き穿つ——」

上空に跳躍していたお師匠は、まず左手に持ったゲイ・ボルクを地上にいたるヘラクレスへと投擲。

紅蓮の流星は無数の光となって降り注ぎ、ヘラクレスの四肢を地面へ…空間に縫い付ける。

それを見たお師匠はすかさず右手に持ったゲイ・ボルクへと魔力を一極集中させる。

『ゲイ・ボルク・オルタナティブ貫き穿つ死翔の槍』!!!』

魔力が収束されたゲイ・ボルクの真名を開放し、全力投擲。

紅蓮の彗星と化したゲイ・ボルクは、一直線にヘラクレスの心臓へと突き進み直撃、縫い付けた空間をも粉碎し、地面に小規模のクレターを発生させながらヘラクレスを霞の様に消滅させた。

地上に降り立ったお師匠は、手元に戻って来た二本のゲイ・ボルクを弄ぶように回転させてから掴み、薄く笑みを浮かべる。

「私を殺せる者はどこだ?…フツ、いる筈もないか」

「ふうむ、本体ではない分些か鈍いか。まあ、良い…直に慣れるであろうな」

「いえ、やり過ぎですお師匠」

手に持っていた2本の槍を消したお師匠——スカサハ——は腰に手を添えてモデルの様な立ち姿で考え込むような仕草をした後に、静かに頷いて何事かを納得した。

些か鈍い…と言う言葉が本当なのであれば、ついさつきまで僕たちを死に至らしめようとしていた災害、バーサーカー・ヘラクレスへの一撃は本気ではなかったと言う事になる。

僕はヘラクレスが存在していた小規模のクレーターを覗き込みながら首を横に振り、思わずお師匠に対してツツコミを入れる。

「む、言うではないか我が弟子よ」

「言いたくもなりませんよ…僕たちを巻き込まないようにしてくれましたでしょうけど、過剰威力です。…僕からごっそり魔力を持って行ってるんですが」

ゲイ・ボルク…真名開放と共に因果逆転の呪いを発生させ、すでに当たっていると言う事象を決定してから放つ魔技。

僕の予想では、普通に突き刺す程度であるならば然程多い量の魔力を消耗しないのだろう。

しかし、お師匠の場合は…恐らく、元気が良すぎて過剰威力になる方を選択。

結果としてはヘラクレスを消滅させることが出来たので、良かったのだけけれど…。

「アレが…ランサーの英霊…影の国の女王」

「ハハッ、良太の奴早速引き当てやがった」

所長は呆然とするようにへたり込んだまま僕とお師匠の言い合いを見つめ、クー・フリーンは口元の血を拭い笑みを浮かべる。

一先ずの勝利…しかし、まだアーチャーとライダー…そして元凶であるセイバー・アーサー王が控えている。

お師匠と言う頼もしすぎる味方を得たにしても英霊の数は同数：そして、大聖杯と呼ばれるものの力を使う事を考えれば安心できる状態でもない。

ヘラクレスに弾き飛ばされたマシユは、立香さんが制服に宿る魔術スキルによる回復魔術で傷を癒している。

「大丈夫、マシユ？」

「はい……」迷惑をおかけしました……」

「そんなこと言わないで。マシユが土壇場で宝具を開帳できたからこうして皆生きてるんだよ？」

マシユは立香さんに力強く抱きしめ頭を撫でられると、顔を真っ赤にしてわたわたと両手を振る。

少しばかり和やかなムードが教会跡地に漂い始める。

「見ない間に、少しばかり戦士らしい顔つきになったようだな」

「そう、ですかね？僕には分かりませんが」

お師匠は柔らかい笑みを浮かべながら、僕の頭を撫でてくれる。

すこしばかり気恥ずかしくなって視線を彷徨わせるものの、一番近くに居るお師匠にばかり視線が行ってしまつて顔が赤くなつてしまふ。

夢の中ではなく、こうして同じ時、同じ場所に居られるだけでも僕は嬉しくて仕方がないのだ。

「おいおい良太、この女脳みそまで筋肉で出来てんだから、幻滅しねえ内にあっちのお嬢ちゃんに乗り換えておけって」

「ほう、言うではないかセタンタ？ワシの脳みそが筋肉でできていると言うのであれば、お主のそのキャスターとしての側面は誰が植え付けたものだったのかのう？」

いつの間にか僕たちの傍までやってきたクー・フリーンが、僕を揶揄う様に立香さんを指さして笑ってくる。

その瞬間、背筋に悪寒が走ると同時にお師匠が酷薄な笑みを浮かべてクー・フリーンの事を睨み付ける。

「兄さん、早く・早く謝ってください!!」

お師匠は大雑把でいて、繊細なところがある。

あれは忘れもしない出会いの時：うつかり『おばさん、誰？』等と言ってしまった、僕は鬼の形相で迫ってくるお師匠と鬼ごっこをする羽目になったのである。

勿論、本気で追いかけてこなかったのは明白で、躰の一環で濃密な殺気を飛ばしながら追いかけてきたみたいだけど…。

クー・フリーンはお師匠の殺気を真正面から受けながらも快活に笑って受け流し、僕にウィンクしてくる。

「どうやらわざとお師匠をからかったようだ。」

「おおっと、藪蛇藪蛇。久しぶりだな、我が師スカサハ」

「フン、堅苦しい挨拶をするでない。それにしてもだ：お主、くれてやった槍はどうした？」

クー・フリーンは恭しくお師匠に傳き、ニツと笑みを浮かべる。

お師匠はそんなクー・フリーンの笑みに毒気を抜かれ、小さくため息をついて気を紛らわせる。

「キャスタークラスが槍振り回す訳にもいかねえってもんでな。偶には知的に行かなきゃな」

「調子の良いやつめ：ランサーで顕現すればルーン魔術を使う気もないのだろう？」

「そいつは言わねえお約束ってやつさ」

お師匠とクー・フリーンは、まるで旧来の友人の様に振舞いどこか楽し気に会話をしている。

そも、クー・フリーンはお師匠が見出した逸材中の逸材：ほぼ一年で教える事が無くなってしまっただけの天賦の才を持っていた。

「愛着もあるのだろうなあ…。」

「あ、あの…会話の最中で大変恐縮なのですが！」

「うむ、マシユと言う名であったな？よいよい、何やら興奮しているようだ、お主は…：そうさな、もう少し気を落ち着けて喋るのが良く似合いそうだ」

マシユは、やや興奮気味に此方へと腰に抱き着いたままの立香さんを引き摺りながらやってきて、お師匠へと声をかける。

「へっ!? あ、はい：コホン：失礼しました。アルスター・サイクルにお

いて無双の伝説を残している女王である貴女は、本来であれば英霊の座に登録されていない筈なのですが…一体どうして、英霊として召喚されたのですか？」

「ふむ、私の事をよく知っている様だ。勉強熱心で結構な事じゃな」
お師匠はそう言うどマシユの頭を優しく撫でる。

お師匠の語尾が老人言葉になっている場合、比較的素に近い状態になっっている。

しかもご機嫌な時限定…お師匠、チヨロいのかなあ…？

お師匠は死なない、老いない。

常に世界の外側にある影の国で…あの暗く冷たい国で門を守り続け、女王として君臨し続ける。

英霊とは死した偉人や英雄が世界によって祀り上げられて初めて確立される。

つまり、死なないお師匠は英霊とはなりえない。

「結論から言ってしまうえば、人理焼却は成された。故に人類史は無くなり、世界は無くなり、そして表裏一体であった影の国も焼却された。私がこうして英霊として存在するのは、単に肉体が消滅し死を迎えたからに過ぎん」

「そんな!!そんな馬鹿な事ある訳が!!」

人理焼却が成された…この一言に皆騒然となり、その事実を認めたくはない所長はワナワナと震えながら立ち上がってお師匠を真っ向から睨み付ける。

人理焼却を阻止するために只管に人生をかけてきたのに、失敗してしまったなんて認められるわけがない。

「そんな魔術師、そう金切り声をあげるものではない。対処法はあるし、その為にこうして良太による縁、触媒召喚で私が来たのだからな」

「…お師匠、この展開は最初から見越していましたか？」

「うむ。無論、それだけでお主を鍛えた訳ではないがな」

…少しだけ安堵してしまうのは何故だろうか？

いまいち自分の感情の整理が上手くいかずに首を傾げ、しかしすぐに目を逸らす。

こんな中途半端な気持ちでは、戦場にあつて殺してくれと言っているようなものだから。

人理焼却が成されてしまった以上、最早どうにもできないような気がする。

「よいか、魔術師にカルデアのマスター達よ。この土地を含めた特異点が各時代に存在している。それらが時の流れをせき止め、時代を濁らせ、あつたはずの事をなかつた事にしてしまっている。楔として打ち込まれた特異点を巡って聖杯を回収するのだ」

「あの一、その聖杯はこの時代にもあるのでしょうか？」

立香さんはマシユの背中から顔を覗かせ、小さく拳手をしながらお師匠に質問をぶつける。

お師匠は小さく頷いて、クー・フリーンへと目を向ける。

「この特異点に関しては、当事者であるクー・フリーンが良く知っているだろう？」

「まあ、聖杯戦争で呼ばれた英霊だからな。結論から言えばある筈だ。存在しているであろう場所も把握している」

クー・フリーンは小さく頷いて、スカサハから引き継いで質問に答える。

聖杯：あらゆる願いを叶えるとされるもの…その機能が発揮されてこの惨状が出来上がっているのだとすれば、やはり狂っていると思えない。

「お師匠の口ぶりだと犯人まで理解しているように思えるんですけど…？」

「その件に関しては…言えぬ。星見共が揃って口を噤み、世界が存続するためのカウンター存在が召喚されていない事を考えると、お主達生きている人間が中心となってこの試練に打ち勝ち、答えに至る必要があるからな」

星見共やカウンターと言うものが分からないけども、お師匠の言うとおりであるならばどうやら今こそが正念場…と言う事らしい。

それこそ、一世代の大勝負になってしまうような…。

「これも修行の一環ですか…？」

「そう言う訳ではない…が、心身共に鍛えてゆかねば、いずれ壁に当たってしまう事だろうな。精進せよ、マシユ、立香…そして我が弟子良太よ」

「はい」

所長はお師匠の言葉を聞いて親指の爪を噛みながら考え込み、ぶつぶつと何か呟いている。

必死に考えているのだろうか…なにが最善なのかを。

しかし、それは今すべきことではないし、後でも考えられること。僕たちが居るのは正しくその特異点なのだから。

「…提案なんですけど、僕としては今すぐ本丸を討ち取りに行くべきではないかなーっと」

「なんですって?」

「いえ、ですから…大聖杯に引き籠っているセイバーをぶつ殺しに…失礼、倒しに行くべきかと」

お師匠の言葉を聞き、僕なりに考えた結論を提案する。

マシユと立香さんは口をポカンと開け、お師匠とクー・フリーンはニイツと笑みを浮かべ、所長はあり得ないと言わんばかりに首を横に振る。

「もつと戦力を整えてからの方が良いに決まってるでしょ!?確かに貴方が呼び出したスカサハは最高の戦力かもしれない。それでもリスクが高いと言う事を理解しているの?」

「戦力を整える時間が勿体無いですし、遅かれ早かれセイバーとは一戦交えねばなりません。それにヘラクレスを撃破したにも関わらず再度の襲撃が無い事を考えると、守りに徹するつもりかもしれない。で、あるならば僕は正面から食い破り、捻じ伏せる他無いと思います」

所長は怒声を上げて僕の案を却下し、首を横に振る。

しかし、戦力を整えるにしてもカルデアの召喚システムは恐らくあの爆発事故で一時的に使用できず、今からカルデアに一時帰還することも些か難しいだろう。

ならば、今ある手持ちの駒を最大限に有効活用し、僕たちは敵を打

倒しなければならぬ。

一刻も早く、人類を存続させる必要があるのならば。

「場所も守りに適しているからな…ライダーが動いていねえのが気になるが、弓兵はきつと守りに徹して自分からは動かねえはずだ。あの野郎、嫌がらせだけは一丁前だからな」

「…兄さん、知り合いですか?」

「まあな。どの聖杯戦争に呼ばれてもあの弓兵が居てよ、いい加減運命感じちまうぜ…お、やだやだ」

クー・フリーンは心底嫌そうな顔をして肩を竦める。

この分だと相当辛酸を嘗めさせられてきたのだろうなあ…。

クー・フリーンをして一歩も引かない英霊ともなれば、相当な難敵であるだろう。

「なに勝手に話を進めているのよ! 所長は私であって貴方たちは手足でしよう!」

「いずれ成さねばならぬことを、後回しにし続けても良い事は無いぞ? 特に今はな」

お師匠は穏やかな声色で所長の声を遮る。

まるで可哀想なものを見るかのような目に見えてしまったのは、僕の気のせいだろうか?

所長は固く拳を握り込み、歯を食い縛る。

きつとプライドがこの状況を許さないのだろうか…。

「まあ、安心しなつて。姉ちゃんには怪我一つ負わせねえからよ」

「はい。所長は私と先輩がしつかりきつちり守りますので、そこは安心していただければ、と!」

「わかったわよ! 好きにすれば!?! でも、帰ったら相応の罰は受けてもらおうよ!」

「出世払いでお願いします!」

人理救うって言うときに罰も何も無いと思う…: そう言うのは全て終わってからで良い筈。

ついでに功績と帳消しの方向になれば、僕としてはニッコリです。話がまとまったのを見て、クー・フリーンは少し考える様に顎を擦

りお師匠へと目を向ける。

「さて、話がまとまったところでだ…我が師、スカサハよ。一つ愛弟子のお願いを聞いてはくれんかね？」

「お主はいつも自分勝手に行動するな…聞くだけは聞いてやる」

お師匠は呆れた様な眼差しをクー・フリーンへと向け、小さく頷く。「そうこなくっちゃな！何、簡単な話さ。アンタなら英霊の霊基を弄ることが出来るだろ？そこでだ、俺の霊基を弄ってくれねえか？」

「ほう…その弓兵、お主が本気になるほどの相手なのか？」

お師匠は僅かに眉根を上げ、クー・フリーンは軽く肩を竦める。

霊基を弄る…と言う事は、英霊のシステムに干渉してクラスを変更する…と言う事になる。

人の手では行う事の出来ない超常の大魔術の筈…それすらもお師匠の手ならば簡単に熟してみせそうだと。

…10年で変な信頼感が出来てしまったなあ。

「どうだかね…でもま、王道ってやつを教えてやるのも悪かないと思ってるな」

「まあ、良いだろう。くれてやった槍を持っていないお主を見るのは、少々寂しいからな」

そう言うなり、お師匠は指で空間を薙いで原初のルーン18文字を展開し、クー・フリーンの身体に浸透させていく。

僕たちには聞こえない程度の声での呪文詠唱…それと同時にクー・フリーンの肉体が淡く輝き一度光の粒子にまで分解される。

「まったく、クランの猛犬とまで言われた男が…随分と大人しくなったものだな？」

「お師匠、それにしても口元が笑っていますか…」

「笑いたくもなるだろう？やたらと面倒見が良いのだからな」

お師匠は何処か嬉しそうに笑みを浮かべたままにルーン魔術を行う使し、クー・フリーンの肉体を再構成する。

眩い光の中から現れたのは、機動性を第一に考えた軽装鎧。

ボディスーツは深く暗い蒼を基調とし、その上から青の外套を羽織っている。

手に持つ槍は、光の御子を象徴とする深紅のゲイ・ボルク。

「やっぱ、俺はこうでなくっちゃな。ランサーが一番性に合うわな」

「これが…僕の兄弟子…」

キヤスタークラスとしていた時の清廉さや落ち着きは鳴りを潜め、荒々しい戦士としての風格が前面に押し出されている。

僕は、その姿に圧倒されてしまい、そして憧れる。

僕もあのようになれるのだろうか、と…。

「おう、良太。悪いが少しばかり世話んなるぜ？」

「へ…？」

「魔術師としてマトモなのは良太ぐらいだったので、勝手だが私を経由してパスを繋げさせてもらった。許せ」

呆けていると、クー・フリーンから思いもよらぬ声がかけられ、お師匠は特に悪びれる様子もなく瞳を閉じてしたり顔で現状を説明する。

…つまり、つまりである…僕はこれからお師匠と兄弟子の魔力供給を必死に行いつつ、自前で戦闘しなくてはいけないと言う事だ。

「無理ですお師匠死んでしまいます」

「…その点に関しては心配しなくてもいいのは知っていますでしょう？。貴方たちマスターはカルデアから電力による魔力供給が行われていると言ったでしょうが。もちろん、令呪も一日につき1画再配布されるのだから、有効に扱いなさい」

どんよりとした顔になっていた僕を憐れんでの事なのか、所長は僕を安心させる様に説明をする。

言われてみれば確かにそうなのだけれど…だとしたらお師匠が宝具を使った時のあの魔力消費量はなんだったのだろうか？

僕は少しだけ先行きに不安を覚え、マシユと立香さんからは同情の眼差しを向けられるのだった。

ロード・カルデアス
人理の礎。

ヘラクレスとの激闘で土壇場になって発動した守護結界は、所長によつて名付けられた。

名付けられた、と言うのも宝具を展開したにもかかわらず、マシユ自身が宝具の真名、そして英霊の真名に至るまで力を発揮できなかった為だ。

名前なしでも宝具を展開することはできるものの、名前があるのと無いのでは気合の入り方が違う…とクー・フリーンが提案した。

名前と言うものは物事を縛る言霊的な役割があるそうで、英霊もまたその例外ではないらしい。

契約を行う際に自身の真名と契約相手の真名を伝え合うのは、一つの魔術的儀式として機能している、との事だ。

なるほど、お師匠が僕に対して『マスターと呼ばば良いのか?』と聞いたのは、この辺りの儀式を端折ったからのようだ。

僕とお師匠は互いの真名を既に知っているのだから。

ともあれ、こうしてアーサー王の聖剣、エクスカリバーに対する守りを得る事ができた僕達は、僕の提案通り敵の本丸である大聖杯が置かれているポイント『変動座標点0号』へと急行する。

この場所には柳洞寺と呼ばれる寺がある。

冬木の名所の一つだったらしいのだが、魔術師からの視点で見ると霊脈の集合地点になっているそうで、この地下に巨大な空洞が存在しているようだ。

恐らく大聖杯はその大空洞に隠されていると見て間違いない。

僕が所長を抱えて走り、マシユが立香さん、お師匠とクー・フリーンは先行する形で先を走る。

お師匠が霊基を弄ったおかげか、クー・フリーンはキャスターだった時よりも力強く、そして頼もしい。

これが、アイルランドの光の御子…。

「へっへ、俺に惚れちまうか?」

「兄弟子のかっこいい姿は憧れますよ。ですから、必ず勝ってください」

「おうよ、俺の槍捌きの冴えってやつを見せてやらあな」

クー・フリーンはどうしても弓兵との決着をつけておきたいそう
だ。

今の聖杯戦争とは関係が無い、別の聖杯戦争において不完全燃焼の
ままになっている戦いがあったそうだ。

今回はそのリベンジマッチ、と言う事になるようだ。

「調子に乗るのは良いがな…ヘマをしたら竜の巢に叩き込むぞ」

「はっは、お師匠と弟子の手前、ヘマなんざできる訳がねえだろう
が」

「東雲さんは、本当にスカサハさんのお弟子さんだったのですね…」

住宅街に入り、倒壊した家屋を飛び越えながらマシユは改めて驚い
たかのように呟きを漏らす。

本来であれば弟子入りはおろか、出会う事さえ困難な存在だ。

他人が聞いたら10人中10人は信じないだろうな。

前方に柳洞寺が鎮座する山が見えてくる。

傍目から見て、禍々しい魔力が山から溢れ出ていて鳥肌が立つほど
の悪寒が走る。

「あそこが柳洞寺ね…なんていう魔力量…まるで噴火寸前の火山みた
いじゃない！」

「さ、寒い…暑いはずなのに…！」

所長は柳洞寺のある山全体からあふれ出している魔力に慄き、立香
さんは異変に身体を震わせる。

特異点と言うだけあって、その内包する魔力量も相当な様だ。

「山全体に結界が張ってあるな…なるほど、この住職共はナマグサ
では無かったようだな。英霊の身では結界に入ってしまうとダメー
ジを受けてしまう。大人しく階段を昇るとしよう」

「……」

「兄さん？」

麓の鳥居までやってきた僕たちは、所長と立香さんを降ろして長い

石段を見上げる。

そんな中、クー・フリーンだけは別の方角へと訝しがるような目を向ける。

「いや、大丈夫だ。来ねえなら来ねえで楽ができるからな」

「…行きましよう」

恐らくは何処かに潜んでいるであろう、ライダーの英霊の事だろう。

教会からここまでスケルトンやゴーストを蹂躪することはあっても、一度も英霊との遭遇戦に陥っていない。

無駄な消耗が省けるので、僕としては万々歳だけでも…不穩ではある。

余程守りに自信があるのか、それとも…?

少しばかりの疑念を今は捨ててしまい、目の前の事態解決に注力しよう。

石段を登り切り、半壊した大門を潜ると境内が見えてくる。

本堂はまるで台風にでもあつたかのように崩れて廃墟になっており、ところどころ炎が燻っている。

「またぞろやって来たか…貴様も懲りん男だな、キャスター?」

「おうよ、つまらねえゲームを終わらせに来てやったぜ、アーチャー」
アーチャーの英霊…その男の肌は浅黒く、髪は銀髪と言うにはあまりに白かった。

鷹の様に鋭い眼差しは遠目にみても分かるほどだ。

廃墟の上に腰掛けていたアーチャーは、ゆっくりとした動作で立ち上がって地面に降り立つ。

「大人しく大聖杯へと還れば良いものを…いまだに願望器が欲しいと見える」

「悪いが、そんな玩具を手に入れるよりも成さなきやならねえ事があるんでね」

「ほう…その物言いからして、知ったか」

アーチャーの着込む赤い外套が風に揺れ、アーチャーは酷薄な笑みを浮かべる。

この英霊は、今まで出会った英霊とは違う…彼の浅黒い肌はどころどころひび割れていて、まるで憎悪を煮詰めたかのような禍々しい魔力が、ひび割れた所から光となって漏れ出しているのが見える。

「だが、知ったところで何とする、光の御子よ。最早事態は收拾できず、滅びを待つのが我らにできる唯一の事ではないのかね？」

「さあてねえ…とりあえず、俺としちやいい加減お前と決着を着けるのも悪くないと思っただけな。そら、得物を出せよ。弓だろうと二刀だろうと好きなもんを持ちな…それくらいは待ってやる」

「所詮は血に飢えた狂犬か…」

アーチャーが嘲る様に嗤うと、両手に白と黒の二振りの剣を持つ。

その剣は形が同じで、一對の夫婦剣になっているようだ。

それを見たクー・フリーンは半身をずらして片手で槍をアーチャーに差し向け、肉体から魔力を溢れ出させる。

「マスター、手出しは無用だ」

「兄さん、ご武運を」

いつになく真剣な声色…光の御子、クランの猛犬と謳われた大英雄は、本気を出す腹積もりの様だ。

「行くぞ…いつかの時の続きだ、アーチャー。貴様に王道と言うものを見せてやる」

「何を言うかと思えばな…何時の事を言っているのやら…！」

アーチャーの肉体から禍々しい魔力があふれ出した瞬間、姿が消える。

「ぜええい!!」

裂帛の気合を入れたクー・フリーンは槍を構え、体を屈めながら柄を盾にするように持ち上げると、瞬間移動の様に姿を現したアーチャーが二刀を振り下ろし、拮抗する。

しかしその拮抗も一瞬。

素早く押し返したクー・フリーンが空中で体勢を崩したアーチャーに向かって必死の突きを繰り出す。

だが、アーチャーはその動きを読み切って、左手に持つ黒の剣をゲイ・ボルクに叩きつけて距離を開ける。

華麗にアーチャーが着地をした瞬間、クー・フリーンは獣の如き神速で踏み込み、食らいつく様に連続で突きを放ち、或いは槍を薙ぐ。しかし、それらの一撃はアーチャーの身体を掠ることなく夫婦剣によつて逸らされていく。

「キヤスターではなくランサーか…いずれにせよ最速のクラスの名が泣くな」

「はっ、まだ準備運動みてえなもんだ!!」

徐々に、徐々に繰り出される槍の速度、力強さが増していく。

準備運動と言う言葉も強ち間違いいではない…此処に来るまでに相手をしたのは有象無象のアンデッド。

準備運動にすらなりもしない相手ばかりだったのだから。

槍の冴えが変わつてきたことに気付いたアーチャーは、忌々し気に舌打ちをして下から掬いあげる様に繰り出される石突による一撃を両刀を交差させて受けるも無残に破壊される。

クー・フリーンはそのまま体を回転させて回し蹴りを叩き込んでアーチャーの身体を本堂の瓦礫に叩きつける。

身体が衝撃で跳ね上がった瞬間に、アーチャーの周囲に4本のクレイモアが出現してクー・フリーンに向かって銃弾もかくやと言わんばかりの速度で射出される。

クー・フリーンはいずれも槍を払う様に振るう事で破壊し、無傷でこれらを凌ぎきる。

「——しんぎむけつにしてばんじやく鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

アーチャーは受け身を取つて体を起こせば素早く両手に二刀を呼び出して投擲し、クー・フリーンに対して突撃する。

対してクー・フリーンは動かずに迎え討つ構えだ。

「——ちから心技、やまをぬき泰山ニ到リ」

アーチャーは再度同じ二刀を手に持ち二連続で投擲。

アーチャーのあの剣達は無尽蔵に存在でもしているのだろうか？

都合三組の夫婦剣があらゆる角度からクー・フリーンへと躍りかかるものの、クー・フリーンは槍を使うまでもなくそれらを体重移動のみで避けていく。

しかし、夫婦剣は互いに互いを引っ張り合うのか反転しては再度クー・フリーンへと躍りかかり攻撃の手を止めようとはしない。

「心技、黄河ヲ渡ル」

アーチャーの姿が消えた瞬間、上空へと再び姿を現してまるで宝具にしか見えない無数の剣を自身の周囲に配置して、まるで雨の様にクー・フリーンへと射出していく。

これにはクー・フリーンも槍を使わぬ訳にはいかず、直撃弾のみを槍で振り払い逸らし続ける。

「唯名、別天ニ納メ」

アーチャーは落下しながら後ろ手に腕を交差させ、白と黒の大曲刀を手に持つ。

それはまるで翼の様に刃がささくれ立ち、まるで無数の剣がその二振りに凝縮したかのように見える。

クー・フリーンは間近にまで迫って来たアーチャーに向かって、獯猛な獣の笑みを浮かべる。

「両雄、共ニ命ヲ別ツ!!」

「ぐううっ!!」

まるで空間が爆ぜるかの様な轟音!

巨大な二振りの剣による振り下ろしをゲイ・ボルクによって受け止めたクー・フリーンは、しかし全身を投擲された夫婦剣達によって僅かばかり斬り裂かれる。

僅か、と言うのも何れもルーン魔術による火炎弾での迎撃を敢行し、二組撃ち落とすことに成功したためだ。

クー・フリーンが押されている…その様に見えたマシユが盾に力を込めるのを見て、僕はそれを手で制し首を横に振る。

「このままでは…!!!」

「駄目だよ、兄さんの邪魔だけはしては駄目だ。それをするならば、僕は君を許さない。これは戦士の矜持が関わる問題だ」

「うむ、マシユよ…大人しく見守るが良い。あの男が克蘭の猛犬とまで謳われた伝説の大英雄であるその証左を」

アーチャーのその一撃はあまりにも重く、クー・フリーンの足元が

沈み込む。

しかし、それでもクー・フリーリンに刃は届かず、どこか余裕さえ見えてとれる。

「まあまったく、厄介な事になっちまったもんだよなあっ!?」

「何を言い出すかと思えば…!!」

クー・フリーリンは槍を斜めに傾けて、アーチャーの一撃を逸らして地面へと叩き込ませる。

空中に身体があつたアーチャーはその動きに逆らう事が出来ずに二振りの剣をそのまま地面へとめり込ませ、すぐに体を振ることで剣を下から上へと振り上げる。

そこには上から叩きつけられるようにゲイ・ボルクが振られ、奇しくも剣が盾の役割を果たす。

しかし、ここではクー・フリーリンは止まらない。

そのまま体を縦に大きく回転させることで何度も槍を叩きつけ、体勢が悪いアーチャーは体を大きく弾き飛ばされる。

アーチャーはその動きに逆らう事はせずに、手に持っていた剣を消してハンドスプリングの要領で跳躍し、クー・フリーリンと距離を空ける。

「ただの聖杯戦争が、人理修復なんつー大義名分抱えた大戦になっちまってるんだからな」

「だからどうしたと言うのだ、クー・フリーリン。すでに人理は焼却され、この特異点は騎士王の手に落ちた。君たちの手では敵わぬ相手なのだぞ?」

先程までの激しいぶつかり合いが嘘だったかのような静寂。

クー・フリーリンは旧知の人間に話しかける様に余裕をもって話しかけ、アーチャーはそんなクー・フリーリンの態度に苦虫を噛み潰したかのような顔になる。

「そいつは、やってみなくちゃ分からねえってもんでな。それに、特異点を片っ端から片付けちまえばそれすら無かった事になる。こんなアホ臭い事はとつとと終いにしちまうのさ」

「人など勝手な生き物だ。自らが何をしているか理解せず、いざ自分

が不利益を被ろうものならば泣き叫ぶ…不要なものだとは思わないか?」

「そんなことは知ったこっちゃねえな」

クー・フリーンは大きく後退し、クラウチングスタートの様な構えを取る。

お師匠はクー・フリーンのその構えを見て、マシユに僕たちの前に出ていつでも宝具を展開できるように指示を送る。

どうやら、次で決着を着ける気の様だ…。

「俺たち英雄はいつだって他人の都合に踊らされる。英雄だつて言つてもそこらの兵士と変わらねえからな。称賛されるか無視されるかの違いっただけだ。だから、人類が死のうが生きようが関係がねえ。俺は俺らしくあり続けるっただけだ」

「…貴様も似た様な事を言うのだな」

「あん?」

「こちらの話だ。…I am the bone of my sword」

アーチャーは確かに詠唱を行う。

無尽蔵の様にも感じる剣の射出…そこから察するに彼はアーチャーと言うよりもキャスターの側面が色濃い英霊なのかもしれない。

アーチャーの足元から黒い魔力が溢れ出し、肌のひび割れは加速していき崩壊を始める。

それと同時にアーチャーは左手に黒い弓を持ち、右手を前へと翳す。

「一つ、力比べと行こうか。この程度防げぬならば、騎士王に勝つ事など夢のまた夢と知れ」

「面白え…なら、俺も全力の一撃をお見舞いしてやる」

アーチャーの右手に現れるは眩いばかりの黄金の剣。

それはまさしく星の光の様に淡く、そして鮮烈…アーチャーはその剣を手に持つと弓に番え限界まで大きく引く。

「この一撃、手向けとして受け取るが良い…!!」

対してクー・フリーンは助走をつけて大きく跳躍、ルーン魔術を併用し全身の肉体を強化し、ゲイ・ボルクの全力投擲の構えをとる。

「永久に遥か黄金の剣……!!!」

「突き穿つ死翔の槍!!!」

地上より放たれるは黄金の星。

天空より放たれるは紅蓮の星。

その二つは2人の間でぶつかり合い、鬨ぎ合う様に魔力の大嵐を発生させる。

黄金と紅蓮の光は混ざることなく互いを食いつぶそうと光を更に強くする。

長く、そして短いその拮抗は突如として崩壊する。

黄金の光を突き抜ける様にして紅蓮の光が飛び出し、アーチャーの心臓に深く突き刺さる。

「所詮は贗作者か……」

「英雄に偽物も本物もあるか、戯け」

上空より着地したクー・フリーンは、空しく呟くアーチャーに対して呆れたように答える。

「今回は、俺の勝ちだ。王道つてのも悪くねえもんだろう」

「ふん、オレにはそういう道は似合わないだけだ、クー・フリーン」

アーチャーは肩を疎めると自分の手でゲイ・ボルクを引き抜き、クー・フリーンへと放り投げる。

クー・フリーンはそれを黙って受け取り肩に担ぐ。

「柳洞寺の裏手に洞窟がある。そこから大空洞へと向かうと良い」

「煽るだけ煽ってそれか。やっぱりテメエは気に食わねえ野郎だな
!」

「オレは、より勝ち筋があるやり方を取るだけなのでね」

どこかアーチャーは勝ち誇ったかのように笑みを浮かべ、その肉体を崩壊させた。

アーチャーのあの口ぶりからして、どうやら時間稼ぎをしていたようだ。

それは、僕たちに対してではなく、もっと別の何かに対して。

この分であれば、おそらくライダーをけしかけてくる可能性は無いかもしれない。

「行くぞ、良太…お主は人理を救うのであろう?」

「応ッ!」

お師匠は決着が着いたにも関わらず動かない僕を見て、叱る様に額を小突く。

僕はすぐさま腹から声を出し、いつの間にか先に進んでいるクー・フリーンや所長たちへと走っていく。

大聖杯まで、あと一歩…もうすぐ、この特異点が終わりを迎えようとしている。

走る。

ただひたすらに。

ただひたむきに。

特異点解決と言う偉業を成すために、僕たちは複雑に入り組んだ洞窟内を疾駆する。

複雑に入り組んだ、と言っても洞窟の奥から暴風のような魔力の奔流が吹き荒れていて、大空洞へと至る道を見つけるのにそう苦労はしない。

ただ、これらの魔力の奔流と霊脈の集合地点と言う性質故か、洞窟内には無数のアンデッドが巢食っている。

「やあつ!!」

マシユはその巨大な盾を閉所の中でも遺憾なく振り回し、スケルトンを体ごと粉々に粉碎する。

大質量の化け物と言っても差し支えないその大盾は、本質的には誰かを守る時に光り輝く。

今も背後に居る所長と立香さんを守るために、その大盾は敵に対して振るわれているのだ。

「つたく、キリがねえな!アンサズ!!」

「この程度で音を上げるのか?だらしない」

クー・フリーリンは槍を右手で振るいながら、左手を払って火炎弾をゴーストの群れに撃ち込み炸裂させていく。

その顔に疲労感はなく、機械的に敵を討ち取り続ける。

その戦い方は正に猟犬…その名の異名の如しだ。

僕のお師匠であるスカサハは、何もしていない…と言うと些か語弊がある。

お師匠はただその場にいるだけだと言うのに周囲を圧倒し、アンデッドがそもそも襲い掛かろうとしないのだ。

影の国の女王、その霊格に恐れ慄く様に…。

それら動きの止まっているアンデッドを、クー・フリーリンやマシユ

がついでのように撃破していく。

そして、僕はと言うと…。

「はあっ!!!」

クー・フリーンやマシユに混じって、兄弟子と同じ型のゲイ・ボルクを必死に振るっていた。

勿論肉体はルーン魔術による強化で、身体能力を跳ね上げている。筋力にかかるブーストは、容易く一撃でスケルトンの頭を突き穿ち、その勢いのまま僕に群がろうとするゴーストを槍を振り払う事で消滅させる。

それでも、手に馴染むと言ってもあまり振ってこなかった槍だ。掌にはマメがすでに出来上がり、じくじくとした痛みを僕に伝えてくる。

けれども、その痛みが何だと言うのだろうか？

世の中にはこれよりも痛い思いをして、それでも生き残る事を許されなかった人たちが居る。

この、冬木の街の住人たちのように。

だから、痛くなんて、ない！

「東雲さん！無理はしないでくださいー！」

「つたく、うちの弟は無鉄砲でせわしねえ！」

「でええい!!!」

まるで無数のスケルトンが集合したかのような、巨大なアンデッドの集合体の胴体の中心…人で言えば心臓のある辺りに深々と槍を突き刺す。

そこから一気に魔力を流し込み、『カノ』による火炎魔術で内側から一気に焼き尽くす様に炸裂させる。

「はあ、はあ…急ごう！」

「待ちなさい、東雲 良太。貴方、今酷い顔をしているわよ？」

炸裂させた壁の向こうに僅かな光を捉え、長く続いた洞窟の終着点を見出す。

ぐつと足に力を込めて駆け出そうとするが、所長が突如待ったをかける。

僕は首を傾げて、所長へと向き直る。

もうすぐ元凶を討ち取るところに指がかかるというタイミングで、
どうやら僕の体調を慮ってくれた様だ。

「大丈夫ですよ、所長。後ろから魔術放り投げられるよりマトモな環境ですし」

「あのね、カルデアのサポートがあるとは言え、即席の多重契約と長時間の戦闘は体と脳に負荷がかかって当然なの。いい加減止まりなさい」

「はい、私も賛成です。幸いこの辺りのアンデッドは先ほどの大型で最後ですので、一度休息を取るべきです」

お師匠へチラ、と視線を向けると静かに頷かれる。

「どうやら、お師匠が多少危惧する程度には顔色が悪い様で、僕はその場にへたり込む様にして腰を下ろす。」

少しばかり、張り切りすぎたのだろうか？

「良太：お前な、ちったあマスターとしての自覚を持ってっただよ」
「痛っ！いたたた!!止めてください!!」

クー・フリーンは、座り込んだ僕の頭を拳骨でグリグリと擦り付けてくる。

僕は、何処か至らないところがあっただろうか？

単純に、降りかかる火の粉を自分で振り払っていただけなのだけ
ど…。

「クー・フリーンの言うとおりにね。貴方は何処まで行っても人間なの。
限界ははずれやって来る。その限界を把握しなさい」

「こればかりは私の責任と言った所か：魂魄の状態ではスタミナも何も無いからな」

確かに影の国で鍛えていた時はいつまでも槍を振るえる気がしていたし、事実目覚めるギリギリまで槍を振り続ける事もあった。

「だけど、今は生身：いくらルーン魔術によって肉体強度を補佐した所で、疲労は溜まっていってしまう。」

思っていたよりも無茶をしていたようだ…。

いつの間にか隣に来ていた立香さんが、手にレモンのドライフルー

ツの入った小袋を差し出してくる。

「これ、良かったら食べて。所長からのおすそ分けだけど…何も食べないよりは良いと思う」

「…なんだか、僕すごく気遣われてませんか？」

「はい、気遣われています。ですので、速やかに好意に甘えるべきです」

無茶をしていた、と言う自覚を今になってできたものの、僕自身はそこまで疲れを感じてはいない。

本当であれば、休息が必要ないと思えるほどに元気が有り余っているのだ。

ひとまず立香さんから小袋を受け取り、レモンを手にとって口に放り込む。

酸味と爽やかなレモンの香りが鼻を突き抜け、思わず悶絶する。

「ぐう…お…すっぱ…す…すっぱ…」

「だ、大丈夫!？」

「お主、未だに酸味が強いものは苦手か…」

立香さんは突如悶絶する僕にわたわたと慌てたように両腕を振り、お師匠はそんな僕を見てため息混じりに呆れた視線を送り込む。

クー・フリーリンのゲツシユでは無いけど、差し出されたものは苦手な物でもキチンと食べなきゃいけないと僕は思うんだ…結果としてひどい目に合ったとしても。

「だ、大丈夫…酸味程度で人は死なない…うん、僕は死なない」

「当たり前だろうに…勇ましく戦っていたと思えば、レモン1つでこの悶絶具合よ」

「勇ましければ良いと言うものでもないわ。最終的に力尽きて貴女とクー・フリーリンに消えられたら私たちは詰みに近くなるのだから」

カルデアからの魔力供給があるとは言え、マスターと英霊が繋がっているからこそ、こうしてお師匠やクー・フリーリンと会話や触れ合う事ができる。

繋ぎとめているものの大部分がマスターに依存しているのであれば…なるほど、前線で張り合おうとするのは馬鹿げているのかもしれない

ない。

所長は僕を窘める様にスカサハに反論し、しかし何か言いにくそうに僕と立香さんを見る。

「所長、どうかしました?」

立香さんは不思議そうに所長へ声をかけると、意を決したかのように頷いて口を開く。

「東雲 良太、藤丸 立香…2人とも此処までよく働いてくれました。あなた方の働きを、私は高く評価します。ですが、まだ特異点の解決はしていません。気を引き締める様に」

「は、はい!!」

「所長が初めて褒めた…雨でも降るのでは?」

立香さんは嬉しそうに力強く頷き、僕は僕で初めてまともな薫陶を受けて少しばかり呆けてしまう。

隙あらばホルマリン漬けをチラつかされていたからなあ…。

「素直に言葉を受け取れないのかしら…東雲 良太…!!」

「いえ、出会いからして最悪だったじゃないですか…」

「そうカッコしなさんな、姉ちゃん。美人が台無しってもんだろぅが」
クー・フリーリンが揶揄う様に所長に茶々を入れると、所長は顔を赤くして顔を背ける。

「どうやら男性のこういつた軽口に対して、免疫が無いようだ…箱入り娘なのかな?」

「それよりも…気付いておるか、クー・フリーリン」

「おう、叩きつけるような殺気をビンビン感じるぜ。ありやあ気付いていやがるな」

お師匠とクー・フリーリンは僕達の盾になる様に前へ出て、深紅の槍を手に持つ。

「どうやら休憩時間は終わりを告げたようだ。」

「良いか?…これよりは死地となる。我がマスターたる東雲 良太は言うまでもないが、立香、そして魔術師よ…その死地に踏み出す覚悟はあるか?」

お師匠から厳かに、静かに言い放たれる死刑宣告に等しい言葉。

それは、この先に待つ相手がそれだけの難敵であることを指示している。

しかし、それでも立香さんは恐れる事無く力強く領き、所長も静かに領く。

「私にはマシユが居ますし、マシユが私を守ってくれるようにマシユを支えたいんです。一緒に行かせてください」

「先輩…」

「マシユが聖剣攻略の要なんだから、一緒に頑張ろうね！」

立香さんのこのポジティブさは、きつと皆の助けになる気がしてくる。

あのヘラクレス襲撃の時だって、いち早く動き出したのは僕でもなく彼女だ。

僕も、彼女に負けないように強くならなければ…。

へたり込んでいた僕は両足に力を入れて立ち上がり、肩に担ぐ様にゲイ・ボルクを持つ。

「良い返事だ…では、行くとするか」

「…恐らくの話なんだが、この異変を解決することが出来れば、この空間は無かったこととして消滅しちまう。良太とマシユ、立香はとつと自分の居るべき場所に帰る手筈を整えておけ」

「その件に関しては私から職員に手筈を整えさせているわ。弟弟子達の事は安心しなさい」

「それが聞けりや安心だわな」

クー・フリーンは1つの気がかりを口にするものの、所長がすぐにその疑念を払拭してくれる。

それを聞いたクー・フリーンは、所長を見る事無く頷いて笑う。

…1つの疑念が僕の脳裏を過るのだけれど、確信を持ってないし持ちたくない。

だから、今は考える事を放棄して目の前の事に注力しよう。

洞窟内を歩いていると前方から見える光が徐々に強くなり、やがて広大な空間へと出る。

その場所はむせ返る様な濃密な魔力に溢れた場所で、大空洞と言う

に相応しい広大な空間が広がっている。

その中央に黒く渦巻く魔力がなみなみと注がれた巨大な器が安置されているのが見える。

「あれが大聖杯…超抜級の魔術炉心じゃない!」

「驚くのは後だ、姉ちゃん」

クー・フリーンが静かに所長を黙らせると、大聖杯の前に居る一人の騎士を見つめる。

その騎士の装いは、およそ騎士王とは程遠い清廉さを持ち合わせない黒色の甲冑。

無造作に持つ剣は聖剣と呼ぶには禍々しい気配を発し続け、むしろ魔剣と呼ぶに相応しい。

薄い色素のブロンドの髪と、希望を見出させないその瞳は暴君の様に見える。

「あれがアーサー王…?」

「どうやら、呪いか何かで強制的に性質を反転させられたようだな。あれにアーサー王が持つ清廉さなど微塵もなからうよ」

立香さんが、セイバーを見つめて首を傾げると、お師匠がひどく詰まらぬものを見るかのような目で溜息をつく。

性質の反転…と聞こえは良いが、要は靈基を弄って好きなように改造されたと言うに相応しいのだろう。

「——貴様、如何様にしてクラス変更を成した?」

「だんまりばかり決め込まれたから、喉を潰されたのかと思っただけセイバー」

「何を語っていても見られている。で、あれば案山子になると言うものだろうか?」

セイバーは静かに、冷酷な声色でクー・フリーンに話しかける。

その顔は表情筋が無いのではと思うほどに無表情…の様に見える。

「あのアーチャー同様、テメエも腹に一物持ってやがるか」

「誰が好き好んで人理焼却に手を貸すものか。起きたことを無かった事にするなど業腹だ。成してきた人類に対する侮辱も甚だしい」

セイバーが感情を発露させると同時に、全身から禍々しい魔力放出

が発生する。

それは、きっとセイバーの今の感情を端的に表しているのだろう。それは憤怒：見てくれがそうであっても、このセイバーは義憤に震えるくらいには人が良いのだろう。

「そこまで言うのであれば、僕たちに協力することは出来ませんか？」
「貴公らに手を貸すことも、その手を取ることも私には許されない。私は貴公らを蹂躪する者である。人理を救いたければ——ほう？」

義憤に駆られる：それだけの理性を宿していると言うのであれば、味方に引き入れるべきだろうと思っただけけれど、その考えは拒絶と言う形で露と消える。

どうあってもこのセイバーは突破しなければならない障害の様だ。しかし、セイバーは手に持つ聖剣を構える事無く、マシユの事を見つめて目を見開く。

「その宝具は面白い：名も知れぬ娘よ。なぜ貴様がそれを持つ？」

「っ！貴女はこの宝具を知っているのですか!？」

セイバーは口元を笑みに歪め、マシユを見つめ続ける。・
どうやら、マシユの英霊はアーサー王に由来する英霊の様だ。

もしかしたら、円卓の騎士の1人なのかもしれない。

逸話と盾から調べていけば、答えに行き当たるかもしれない…。

マシユは真名を知りたいのかセイバーに詰め寄ろうとするも、それよりも早くセイバーは魔力放出と同時に聖剣を掲げる。

「知りたくば私を倒してからにするが良い。魔竜ヴォーデイガーンの息吹を此処に！」

聖剣はより禍々しさを湛え、まるで周囲の光を喰らいつくすかのよう妖しく光る。

その光景を見たお師匠は、優しい笑みを浮かべながら戸惑うマシユへと声をかける。

「マシユよ、どの道お主が防げなければ立香は死ぬ：防げるか？」

「…防ぎますーマシユ・キリエライト、出ます！」

セイバーが聖剣を振りかぶると同時に、マシユが前へと出て手に持つ大盾に力を込める。

いよいよ聖剣は闇に堕ち、魔剣としての暴威を發揮しようとする。
「卑王鉄槌——極光は反転する…光を呑め！」『約束された勝利の剣』
!!!

セイバーの宝具、真名開放…その瞬間、闇が牙を剥いた。

#11

漆黒に染まったセイバー、アーサー・ペンドラゴンの宝具の真名が解放される。

その色は聖剣とは名ばかりの闇より深き深淵の黒。

聖剣は魔剣へと変質し、魔王ヴオーディガーンの魔力をそのままに束ね、僕たちに向けて叩き下ろされる。

「卑王鉄槌——極光は反転する：光を呑め！『エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣』
!!!」

聖剣から発せられた高密度の汚染された魔力の奔流は、全てを叩き潰し消し飛ばそうと僕達へと襲い掛かる。

あの冬木の街を斬り裂いたものの正体を見て戦慄すると同時に、僕は同僚であるマシユ・キリエライトの背中を見つめる。

小さく、かよわく、どこか頼りなく…だけど、決して折れまいと言う確固たる意志を感じる。

それは、一線級の戦士に匹敵する覚悟を宿した若木。

まだここで成長は止まらず、これからも成長を続けていくことだろう。

だから、きつと彼女はあの深淵を止めてみせる。

「令呪^{セツ}を以て告げる！マシユ！令呪の魔力を以て宝具の真名を開放して私たちを守って!!!」

「了解！真名、偽装登録：宝具、展開します!!!」

マシユは全身から令呪によるブーストに端を発する魔力放出を行い、盾を大きく振りかぶって地に突き立てる。

すると、盾が聖剣とは対極の眩い光に覆われ、強大な守護結界を生させる。

深淵が届くよりも速く展開された守護結界は、容易くその一撃を受け止める。

炸裂音が響くも衝撃は僕達まで届かず、やがて聖剣による一撃は光に呑まれるようにして消え、守護結界もまた闇に呑まれるように消える。

マシユは確かに、聖剣を受け止め切ったのだ！

「フン、知らず知らずの内に力を抜いたか。だが、そう何度も受け止められるものでもあるまい!!」

「おっとーんこから先は俺たちと遊んでもらうぜ、セイバー!」

「2人がかりとなるが、これも戦：精々気張る事だ」

セイバーが自嘲気味に笑って再び聖剣に魔力を蓄えようと構えた瞬間、セイバーの両サイドを挟み込む様にして2名の槍兵が現れる。

1人はアイルランドの光の御子。

1人は影の国を統べる女王。

両者ともに持つのは、紅蓮に燃える様に魔力を湛えた呪いの朱槍。

先手はクー・フリーンが取り、獣の如き神速の四連突きが聖剣を構えていたセイバーへと食らいつこうと襲い掛かる。

セイバーは瞬時に判断して真名開放を断念し、全身から魔力放出を行い筋力を増加。

クー・フリーンの四連突きを剣の腹で逸らして避け、後方宙返りを行う。

セイバーが離脱した直後にお師匠がセイバーの居た空間を薙ぎ払うが、紙一重で避けられてしまう。

「そらっ!!」

お師匠は手に持った朱槍を軽く振るうと、自身の周囲に5本のゲイ・ボルクを召喚。

素早く魔力を込めて一斉に撃ち出していく。

真名開放を行っていないとはいえ、朱槍の持つ呪いは健在：いずれもセイバーに己の刃を突き立てようとミサイルの様に突き進んでいく。

セイバーは着地と同時に地を蹴り碎き前進。

手に持つ魔剣で襲い掛かるゲイ・ボルクを地に叩きつける様にしてすべて斬り払い、同時に大きく跳躍。

上空から槍を叩きつけようとしたクー・フリーンと鏢迫り合いになる。

「つたく、巻き込むなら他所にしろってんだ!」

「奴に区別などないだろう。そもそも、見えているかも分からん…だが!!」

「ちいつ!!」

やはり、セイバーが有利なのか剣を大きく振るう形でクー・フリーンを弾き飛ばし、まるで羽根が生えているかのように空中で方向転換、二槍を構えたお師匠と切り結んでいく。

「奴が成した業こそが現実だ。いかに私が腹を立てようと何も変わらん!」

「だからこそ、私は抗うのだ。この口を嚙まねばならぬとなつてもな!」

セイバーは空中でも剛剣を振るい続け、お師匠はその剣をいなすことで容易く逸らしていく。

まるで柳のそれだ。

セイバーが大きく振りかぶった瞬間にお師匠が無防備な腹を強かに蹴り抜き、セイバーを地面に叩きつける。

「ぐっ…やるな…!」

「やあああつ!!」

セイバーは地面に叩きつけられる瞬間に全身から魔力を放出して減速し、着地。

背後に迫ってきているクー・フリーンの対処を行おうと振り返ろうとすると、上空からマシユが大盾を叩きつけようとセイバーに迫る。

たまらず、セイバーは横に身体を投げ出し、手を地面について後方宙返りを行う。

マシユが盾を地面に激突させて土塊を上げると同時に、セイバーが居た場所にピンポイントにゲイ・ボルクが突き立てられていく。

お師匠の持つゲイ・ボルクは無尽蔵なのだろうか…?

「突き穿つ死翔の槍!!」

「約束された勝利の剣!!」

クー・フリーンは詰めと言わんばかりにゲイ・ボルクの真名を解放し、地上から全力投擲を行う。

その一撃は触れていない地面をガラス状に融解させ、まるで突如現

れた彗星の如くセイバーへと突き進んでいく。

セイバーはその一撃を目視した瞬間に、無尽蔵の魔力を一気に放出して聖剣へと束ね、真名解放。

斬撃ではなく突きによつて聖剣のエネルギーを発生させて、クー・フリーンの宝具と真正面からぶつかり合う。

一瞬の拮抗の後、暴走した魔力の塊が指向性を失つて大爆発を起こし、ゲイ・ボルクがクー・フリーンの手元へと戻っていく。

「これでえっ!!」

マシユはそんな大英雄同士の激突に臆することなく必死に食らいつき、大きな隙を見せたセイバーに向かって猛牛さながらの突進を行う。

「ぬるいぞ、小娘」

しかし、その一撃は素早く振るわれた聖剣によつて防がれて容易く拮抗する。

隙が無い…大英雄2人にマシユを合わせてもマトモな手傷を負わせられないなんて…。

僕は右手の甲に現れている令呪に目を落とし、しかし頭を振る。

勝ちを求めて令呪によるブーストを、お師匠とクー・フリーンにかけるべきだろう。

そうすれば恐らく一瞬で決着が着く…だけど、それを2人が望むかと言えば…。

結局、僕は見ている事しかできないのだろうか…？

「まだです。まだ!!」

「気迫は十分でも技術は拙い…興奮ぎめだ」

「マシユ、退け!」

マシユは拮抗を崩そうと力を込めるが、お師匠の言葉ですぐに力を抜いて後退。

入れ替わる様にお師匠が手に持つ朱槍を突き、或いは払ってセイバーを絶えず攻め立て。

セイバーやクー・フリーンが剛とするならば、お師匠は柔の動きだ。相手の力は逆らわずに受け流し、隙を突いては苛烈な攻撃を加えて

いく。

まさに暴風：影の国の女王と騎士王は互いに涼しい顔をしながら、他者の介入を許さない剣戟の結界を作り上げてしまう。

「つたく、久々に火い点いたかね：？」

「でも、あれでも本当の本気じゃないんですよね：」

巻き込まれまいと僕の傍まで後退したクー・フリーンの悪態を耳にし、僕はお師匠の姿から目を離さずに呟く。

クー・フリーンは肩を竦めるだけで答えはせず、騎士王との戦いを見守る。

痺れを切らしたかの様にセイバーは聖剣に魔力を纏わせて大きく薙ぎ払い、お師匠を後退させるも、再びセイバーと激突して距離を離さない。

「どうした騎士王：お主の腕はその程度か？」

「言ってくるな、槍兵：」

お師匠は終始涼しい顔でセイバーと渡り合い続け、そんなお師匠に騎士王は僅かばかりの苛立ちを見せる。

恐らく、クー・フリーンの持つ槍から、お師匠がどこの英霊なのかは看破している筈：。

一刺一殺の呪いの朱槍：真名を解放すれば決着が着くほどに強力なその槍を使わない事で、手を抜かれていると思われているのだろう。

剣戟の嵐は罅迫り合いによって唐突に終わりを告げ、宙を舞い続けていた小石がパラパラと二人に降り注ぐ。

「：影の国の女王よ、何故貴様は抗う？」

セイバーはゆっくりと呼吸を整えつつも力を抜くことなく、真っ直ぐにお師匠の事を見つめる。

セイバーは抗えなかった、抗う事すら許されなかった。

この特異点を作り出すための駒として奔走し、あらゆる犠牲を省みる事無く目的を達成した。

騎士の誇りすらも捨てて。

汚辱に耐え続ける：否、耐え続けねばならなかったセイバーは、何

を思つて今この戦いに身を投じているのだろうか？

「なに、変わらぬ毎日と言うものの有難みを感じていたところに横つ面を思い切り殴られれば、誰であろうと怒るものだろうか？理由としてはその程度だ。それに、向こう見ずな馬鹿弟子の世話を焼くのは良い暇つぶしになる」

お師匠はフツと笑つて少しだけ僕の事を見た後に、セイバーの頭上にゲイ・ボルクを呼び出し容赦なく撃ち込む。

セイバーはお師匠を魔力放出のブーストで弾き飛ばした後に返す刃でゲイ・ボルクの軌道を逸らして地へと突き立てさせる。

更に後方宙返りを行い、獣の如き神速で僕の隣からセイバーの背後へと奇襲をかけてきたクー・フリーンの鋭い一刺しを回避し、聖剣をクー・フリーンへと叩きつけるべく剣を振るう。

「ちつ、勘が良い奴だ！」

「ちよこまかと…!!」

クー・フリーンは傍に突き立てられていたお師匠のゲイ・ボルクを左手に持ち盾の様にし、セイバーの一撃を受け止める。

受け止めた瞬間にルーン魔術によって筋力を大幅に引き上げたクー・フリーンは思い切り左腕を振り抜いてセイバーの身体を空中へと放り出す。

放り込まれた先に存在するのは合計10本に及ぶゲイ・ボルク…それが逃げ場を塞ぐ様にセイバーの周囲に展開され、一斉に射出される。

『エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣』!!!』

咄嗟に真名解放を果たし、聖剣は魔剣へと再び墮ちる。

身体にひねりを加えて大回転をしながら放たれた宝具は周囲にあったゲイ・ボルクを悉く消滅させていき、大空洞内部の壁や天井を削り取っていく。

マシユは慌てて宝具を展開して、僕や立香さん、所長をセイバーの脅威から守り切る。

「セイバーは大聖杯から無尽蔵の魔力を得ているのね…」

「そんな…このままじゃジリ貧です！」

所長は大聖杯にセイバーの宝具が直撃した瞬間を目にし、ポツリと
呟く。

大空洞内部を削り取ってきたセイバーの宝具が大聖杯に直撃する
瞬間、無効化されていたのだ。

超抜級魔術炉心のため、それなりの守りが発揮されていることは想
像に難くないけど、セイバーは意図的に宝具の出力を落としている。
マッシュが宝具を受け止めても、守護結界が消えなかったのがその証
拠になるだろう。

あくまでも、クー・フリーンとお師匠は僕の魔力とカルデアからの
支援によって現界を保っている。

長期戦になった時、スタミナ切れを起こすのは間違いなく僕たちの
方だ…。

僕は、右手の令呪をゆつくりと掲げる。

「——令呪^{セツ}を以て告げ^トる」

怒られるかもしれない。

嫌われてしまうかもしれない。

だけど、僕たちは負ける訳にはいかない。

僕は僕自身の明日よりも、他の人の明日の方が大切に思える。

だから——

「クー・フリーンよ、宝具を開帳しセイバーを打倒せよ」

「呪いの朱槍を^ゴ所望かい？ いいぜ…やってやる！」

クー・フリーンは令呪によってブーストされた魔力を余すことなく
呪いの朱槍へと注ぎ込み、朱槍は胎動するかのように紅蓮の輝きを増
していく。

「重ねて告^トげる、スカサハよ、宝具を開帳しセイバーを打倒せよ」

「——フツ、行くぞ」

二画連続使用…お師匠にも令呪によるブーストをかけ、その手に持
つ朱槍に魔力を注ぎ込む。

お師匠とクー・フリーンの間に降り立ったセイバーは、大きく舌打
ちをする。

「貴様ら…!!」

「悪いなセイバー…マスターからの指示なんでね」

「我が槍の神髄…その目に焼き付けて逝くがよい」

呪いの朱槍は当たったと言う因果を決定してから放つ、因果逆転の呪いを持つ。

この一撃から逃れるためにはそもそも撃たせないか、高い幸運を以て避ける他ない。

だが、もし…その槍が2本同時に起動したのなら…運に身を任せる他ないだろう。

「その心臓——貫い受ける」

お師匠とクー・フリーンは同時に槍を構えて駆け出し、セイバーへと突き進んでいく。

セイバーは天運を悟ったのか、それとも自棄になったのか…宝具の起動準備に入る。

「貫き穿つ——」

「死棘の槍!!!」

しかし、聖剣がヴォーデイガンの魔力を纏う事は無く、2人のゲイ・ボルクがセイバーの身体を前後に貫く。

刃はお師匠とクー・フリーンの顔の真横をすり抜けて停止し、2人同時にゲイ・ボルクを引き抜く。

「見事だ、異界のマスターよ…だが、まだ始まりに過ぎん…」

「…どうか安心してほしい…僕たちは必ず、世界を救ってみせる」

セイバーは倒れる事無く、しかしその手に持つ聖剣を手から離し僕達へと目を向ける。

その目は冷酷、暴虐さが消え、不思議と温かい優しさのようなものを感じる。

セイバーは最期に穏やかな笑みを見せ、最後に言葉を遺してその姿を霧散させた。

「グラウンド・オーダー聖杯探索を完遂しろ…必ず——」

#12

セイバーの姿が霧散し、その場に透明な水晶体が浮かんでいる。それはどこまでも透き通り、どこまでも曇り続けている。

矛盾を孕んでいるようで、それは常に正しくその場に存在しているように思える。

僕は手にゲイ・ボルクを握りしめたまま、何か嫌な感じを背中に受けながら一息だけ吐く。

特異点の中心となっていたセイバー…その撃破に成功したためだ。グラランド・オーダーと言う言葉を遺して消えていったことが非常に気になる。

…セイバーは複数の特異点に関して、何かしらの知識があつたのだろうか？

「ふー、終わった終わった。こういう時は酒盛りでもするべきなんだろうが…」

「気を抜くには些か早い気がするぞ、クー・フリーン」

クー・フリーンは朱槍を両肩で担ぐ様にして持ちニイツと笑みを浮かべ、お師匠は対照的に槍を持った手をだらんと下げたまま呆れた顔でクー・フリーンの事を見つめる。

そんな光景を見守っていると、唐突にインカムに通信が入ってくる。

…今更？

『あー！あー！此方カルデア、聞こえますか？』

「…ドクター、無事だったんすね？」

『ああっ!?東雲君！漸く連絡が着いたよ！無事なのかい!?!』

インカムのスイッチを入れると、聞きなれた気弱そうな声が耳に響いてくる。

今まで何故か連絡を取ることができなかったロマニ・アーキマンことDr. ロマンは、僕が通信に答えたことに大層驚いた様子だ。

「五体満足、と言う意味では無事です。気が抜けて疲労困憊と言った感じですけど…それよりも…」

通信が今まで繋がらなかったのはこの際隣に置いておこう：インカムに細工されていないとは限らない訳だし。

僕は特異点の元凶の討伐に成功した旨を告げ、所長に通信をバトンタッチする。

「ロマニ、東雲 良太が言う様に特異点の元凶になっていた英霊の討伐に成功したわ。これより英霊が遺した物体を回収しレイシフトを終了します。そちらの準備は出来ているかしら？」

『ええ、その件に関しては大丈夫です。その特異点の揺らぎも確認できましたので早急に：』

特異点の解決：それはこの時空事態が消滅し無かったことになると言う事。

歴史に残らず、関わった者の記憶に残らず、なによりも：この特異点の原因で犠牲になった人たちが戻ってくる。

勿論明日死んでしまう命かもしれない、今日死んでしまう命かもしれない：けれども、それで良い。

誰かの都合ですべてをひっくり返されるような事で死んでいいものなんて無い筈だ。

僕は通信を続ける所長から離れて、水晶体へ近づいて手を伸ばす。

「さて、お前とは楽しかったがここらでいったんお別れだな。俺みたいなその時代その時代と呼ばれたサーヴァントは、他の時代に干渉することができねえ」

「大丈夫ですよ。お師匠がついていますし、何よりも：きつとすぐに会える気がします」

「ハッ、違いねえや。なに、弟弟子の為に馳せ参じるつても悪かねえ」

クー・フリーンは僕に手を伸ばして握手を求めてくる。

僕はそれに応えて手を伸ばし、がっちり握手をする。

硬く、大きく、温かい：およそ大英雄と言うにはとても身近に感じられ、少しばかり不思議な感覚に陥る。

「随分と気に入っている様だな？」

「なあに、アンタが興味を示したんだ：だったら、先人として叩き込め

ることは叩き込んでやらねえとなつてね」

お師匠はフン、と鼻で笑い何故か自慢げに僕の事を見た後、瞬時に険しい顔になる。

それはとても嫌なモノを見てしまったと言わんばかりで…それはとても僕を不安にさせるには充分だった。

クー・フリーンも即座にお師匠の表情の変化に気付き、軽く肩を竦める。

「随分とコロコロ表情が変わるもんだ。ゲイ・ボルク二槍流といい、随分と変わったもんだな」

「どうであろうな…なんにせよ、元凶の1人が現れたようだぞ?」

それは大聖杯の影から悠々と歩いてきた。

緑を基調としたスーツにシルクハットを被った、常に嫌な笑みを浮かべている人物。

所長が最も信頼を置き、僕はその不気味さから不信感すら覚えた人物。

「いや、まさか君たちがここまでやるとはね。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ」

大聖杯を背に悠然と此方に歩いてくる姿は大胆不敵。

自分に敗北はありえないと、負ける事は無いと言う絶対王者の様な自信。

故に何も臆していない…あるのは他者を侮蔑する笑みだけだ。

「48人目のマスター適正者。まったく見込みのない子供だからと、善意で見逃してあげた私の失態だ。だが、貴様は違う…38人目…東雲 良太。何故貴様が此処にいる?」

「さあ、どこかの誰かさんがイジメてたせいじゃないっすかね、レフ・ライノール教授」

その男、レフ・ライノールは苛立たし気に僕を見て、常に細められているその目を僅かに見開く。

本当に僕が生きていたのは想定外だったようで、その目からは殺気がとめどなく注がれている。

また、大して動揺を見せていないのも苛立ちに拍車をかけているよ

うだ…。

「レフ教授!」

『レフ…?レフ教授だった?!彼がそこにいるのか!』

マシユはレフの登場に大きな声で驚き、ロマンはカルデア内に居なかつたため死んだと思っていたのか、これまた大きな声で驚く。

僕は…どうだろう?

殺しても死ななそうだとは思っていたのだけれど。

時折、敵意が見え隠れするような毒舌が発せられれば…ね?

「ロマニ…君も生き残ったか…あの時すぐに管制室に来いと言ったにも関わらず、私の指示を聞かなかったんだね?」

『それよりも、どうしてあなたがそこに——』

「屑が口を開くんじゃあないよ」

『——っ!!』

明確な悪意を込められて放たれた言葉はロマンの口を閉じさせ、マシユの顔を曇らせる。

マシユはレフに比較的懐いていたから、そのダメージは想像に難くない。

レフは大きなため息を吐いて片手で自身の顔を覆う。

役者染みたその動作は、どこか陳腐にすら見えてくる。

「人間というものはどうしてこう——そう、定められた運命からズレたがるんだい?」

「先輩、下がって…下がって!!あの人は…あれは私たちの知っているレフ・ライノールではありません!!」

マシユは全身に身の毛がよだつ程の悪寒を感じ取り、素早く盾を構えて所長と立香さんの前に入る。

そうでなくとも、衝動的に本能的に盾を構えて前に出ていたとは思わう。

だけど、所長は…。

「レフ…レフ…生きていたのね、レフ!!」

所長はレフが生きていたと言う事に目を見開いて驚き、大粒の涙をこぼしながらレフへと駆け寄ろうとする。

クー・フリーンは小さく舌打ちをし、頭をポリポリと搔いた後に所長の前に立ちはだかる。

「姉ちゃん、極限状態で頭イツちまったか？」

「どきなさいー！英霊風情が、私はレフと話があるの！」

「退いてやれ、クー・フリーン。最早死人に何か語ったところで聞く耳を持たんだらう」

…お師匠は目を閉じ、澄ました顔で…残酷な宣告を行う。

今まで、不思議ではあった…お師匠もクー・フリーンも名前を一切呼んでいなかった。

所長を、半ば居ないものとして扱っているように見えていたのだ。

こういう時、勘が変に働いてしまう事に腹が立つてくる。

出会いは最悪だったけども…所長の事を心底嫌いになった訳では無かったから…。

『え、所長が…死んで…え？』

ロマンは言葉を失い、マシユと立香は信じられないと言わんばかりに目を瞬かせ、クー・フリーンは軽いため息を吐いて所長に道を開ける。

しかし、所長はお師匠の言葉に足を止め、レフを見つめる。

「ねえ、レフ…わたし、生きてるわよね？だって、こうして此処に居るって言う事は——」

「…ほう、私の口から言う手間が省けて助かるよ」

一縷の望みをかけてレフへと声をかけるも、それは無残に引き裂かれる。

レフは愉悦に笑みを浮かべてお師匠へと声をかけるが、お師匠は涼やかな顔で鼻で笑う。

「小姓が気安く私に話しかけるな。貴様は私と対等の立場に居るとでも？」

「っ…格の低い英霊が、王に仕える私を愚弄するか…!!」

冷徹にして冷酷、一片の曇りもなく放たれた言葉は聞く耳の身体を震わせる。

それはお師匠の中にある女王としての在り方…誰も並び立つもの

はいない無双の存在。

だが、それと同時に挑発でもあったようで、レフは王と言う言葉を口にす。

沸点が低いが故に、こちらを侮っているが故に情報をポロリと漏らすのだろうか。

「事実だ、魔術師モドキ…貴様は私と並び立つには些か器が足りぬ。これでは仕えられている王とやらが憐れでならんな」

「…レフ・ライノール…お前は何者だ？」

僕は心が急速に冷めていくのを感じる。

どこまでも冷たく。

どこまでも優しく。

それは、恐怖からではなく。

これは、脅威からでもない。

目の前の存在に対して浮かぶ感情が、希薄になっていくのを感じてしまう。

僕は人ならざる何かを見つめ、首を傾げる。

お師匠の挑発から我に返ったレフは、ハツとなった後に気を落ち着かせる。

「いけないいけない…兵器如きに熱くなるなど言語道断だ。改めて自己紹介をしよう…私はレフ・ライノール・フラロウス。貴様たち人類を処理するために遣わされた2015年担当者だ」

フラロウス…どこかの悪魔の名前…だったかな？

僕はそれをひどく冷めた眼差しで、手から何か流れ落ちている事にも気付かずにゲイ・ボルクを握り込む手の力を強める。

「なにせよ、カルデアスの磁場によって守られているとはいえ、いずれ消滅するものに手向けとなる名乗りであれば良いが…」

「手向け…手向けかあ…なら、僕からも」

僕は無造作に朱槍をレフの心臓に優しく突き刺し——真名を紡ぐ。

「^{ゲイ}穿ち^{ボルク}散らす^{フラク}死華の槍」

「ガッ…!!!」

「ひっ…!」

レフの体の内側から破裂するように朱槍の穂先が無数に突き出して、まるで彼岸花の様に緑を基調としたスーツをどす黒い赤に染めていく。

僕は今…どんな表情カオをしている？

泣いているのだろうか？

笑っているのだろうか？

怒っているのだろうか？

僕には鏡が無いからどんな表情をしているのかが分からない。

無造作に放たれた現代の宝具に、立香は小さな悲鳴を上げる。

駄目だよ、こんなことで悲鳴を上げてたら…もつと辛いことがいっぱい来るかもしれないんだから。

「お前は殺し過ぎだよ、レフ…カルデアのマスター候補生たちや職員ならいざ知らず、他の人たち、巻き込みすぎ」

レフの体の中に無数の槍の穂先が引っ込むと同時に、ゲイボルクを引き抜いて血を払う。

どうやら、レフは体の内側から槍を炸裂させる程度では死なないうまく、血を吐き出した後に高らかに笑う。

「がふっ、ククツアハハハッ！それが本当の顔か、東雲 良太！まるで表情のない人形のようなだ！」

「そう」

僕は小さくレフに返事をしてやり、その首を跳ね飛ばそうと槍を横に振ろうとするが、突如お師匠に身体を抱きかかえられてマシユの隣まで下げられる。

所長はクー・フリーンが首根っこを掴んで、マシユの元まで持ち上げて運んできている。

後退した瞬間、黒い何かが大空洞の天井を削り取りながら現れる。

「お師匠、あれ殺せないよ？」

「うむ、うむ…あれはお主が殺すほどのモノでもなかろうよ」

お師匠は、まるで僕をあやす様に頷き笑みを浮かべる。

うむ、価値無し…戦士でなければ特でない、のだろうか？

首を傾げていると、レフは与えた傷を癒しながら僕の事を睨み付け

る。

睨み付けられる理由が無いんだけどね…だって、彼は殺したのだから？

「東雲 良太…ふざけた物言いを…!!」

「他のみんなは貴方と同じ言葉を言ってると思うよ、レフ…なんでしたっけ？」

「呑気に話してる場合じゃねえだろ、マスターさんよ!」

レフは天井を見上げて満足そうに頷き、いつもの不気味な笑みを浮かべる。

どうにも調子が狂っている気がして、軽くノックするように自分の頭を叩いて気分を入れ替える。

どうにも天井の化け物が気になって仕方がない。

僕は尻餅をついていた立香さんへ手を指し伸ばす。

「立てる?…多分、さっきと同じくらいキツイ戦いになるよ?」

「だ、ただ、大丈夫です!」

立香さんは僕の手を取ろうかどうか悩む素振りを見せるものの、結局は僕の手を取る。

僕は立香さんの身体を引き上げる様にして立たせ、どこか勝ち誇るかのような顔をするレフを不思議そうに見つめる。

「まったく、私ともあろうものが屑に激昂する事になるとは…だが、これでももう会う事は無いだろう。さようなら、憐れな修復者達。これでも私は忙しい身でね…君たちが絶望に顔を歪む瞬間を見れないのは残念だが…まあ、彼女が君たちの相手をしてくれるだろう」

「ライダーのやつに細工しやがったな…!」

クー・フリーンは獣の様に鼻面に皺を寄せ、怒りを露にする。

ライダー、と言うのは頭上から迫ってきている巨大な黒い塊の事だろう…とても英霊の様には思えないのだけれど。

「苦労したよ、かつてのマスターのアンデッドを抱きかかえる彼女を従えさせるのは…まあ、君たちを処理するための労力だから文句は言えないが…では、神代の化け物退治に励んでくれたまえ」

「野郎…!!」

レフはそれだけ言い残すと姿を消してしまい、その瞬間巨大な塊が大聖杯を押しつぶすようにして落ちてくる。

それは、無数の蛇の集合体の様に見える、ただの一個の生命体の様にも見える。

聞こえてくる叫びは悲鳴の様にも聞こえ、贖罪の様にも聞こえてくる。

僕は残り一画しかない令呪を撫でる。

『今すぐ皆をレイシフトさせる！』

「いや、それではその魔術師を保管できぬ…アレを穿ってからでも遅くはあるまい」

ロマンは声からも伝わるほどに動揺し、焦った様子で僕達をカルデアへと帰還させようとする。

しかし、お師匠はそこに待ったをかけ、笑みを浮かべて巨大な塊に對して朱槍をつきつける。

「魔境、深淵の英知…その一端をお主達に披露してやろう」

「さて、まずはお主達に対魔眼の結界を施さねばな」

お師匠は手始めと言わんばかりに原初のルーンを起動し、僕たちの周囲にルーン文字を漂わせて空気に溶け込ませていく。

それは何処か幻想的な光景で、この非常時だと言うのに安堵してしまふ。

「あやつの真名はメドゥーサ…いや、最早ゴルゴンと言っても良いか。あやつの事は直接見ず、戦う私だけを見る様にせよ。そうでなければ例え結界内であつても石化は免れん」

「分かりました」

僕は素直に頷き、黒い塊…ゴルゴンへと目を向けないようにする。

あれは、呪いと言う呪いを一身に集めたあらゆる化け物よりも醜い何かに見える。

もし直視しようものならば、あつという間に僕まで呪われて体を石に変えられてしまいそうだ。

「わ、私は…まだ、褒められてもいないのに…死んで…?」

「所長…」

所長は力なく地面に膝をついて頂垂れている。

立香さんは所長の背中を労わる様に優しく撫で、かけるべき言葉が見つからないのか口を噤む。

所長の今の姿は普段よりも痛々しく弱々しい…心を絶望に吞まれて、自暴自棄にならなければ良いのだけれど。

「マシユよ、今の魔術師と立香では足手まといになる。しっかりと守ってやるのだぞ?」

「はい、先輩たちはお任せください」

マシユは自分の胸をドンツと叩いて笑みを浮かべ、盾を握る力を強める。

そんなマシユの顔にお師匠は満足げに笑みを浮かべる。

「うむ、良い返事だ。では、クー・フリーン…アルスターの戦士の流儀、若人たちの目に確りと焼き付けてやろう」

「ハッ、言ってる。アイツの首級は俺が貰うぜ」

クー・フリーンはそう言うや否や槍を構えて、獣の如き神速で大聖杯に鎮座するゴルゴンへ向かって疾駆する。

聖杯戦争で闘うはずだった英霊：ゴルゴン。

恐らくその尻拭いを自分の手でしてやりたいのだろう。

お師匠は、フツと笑って右手にゲイ・ボルクを呼び出し、手放した瞬間につま先で一気に天井近くまで蹴り上げる。

「多くの勇士を驚嘆せしめた我が技を見よ、『蹴り穿つ死翔の槍』！」

同時に跳躍したお師匠は上空で回転し続ける朱槍をオーバーヘッドキックの要領で石突を蹴り抜き、真っ直ぐにゴルゴンに向かって撃ち出す。

投擲と同等の速度で突き進む朱槍は、途中で眩いばかりの赤い光を放って無数の槍へと分裂していく。

まるでクラスタ爆弾の様に分裂した槍は、ゴルゴンの肉体へと次々に食らいつき、串刺しにしていく。

その効果範囲にクー・フリーンも居たが、背中側から宝具に巻き込まれているにもかかわらず健在。

いずれも素早い身のこなしで槍を回避していき、大きく跳躍してゴルゴンの肉体にその手に持つ紅蓮の朱槍を突き立てる。

「凶体ばかり大きくて、狙うまでもねえぜ!!」

「高レベルの魔眼持ちだ、一気に決着をつけるぞ」

ゴルゴンは衝撃波を伴う咆哮をあげ、クー・フリーンと自らの肉体に突き立てられた無数のゲイ・ボルクを弾き飛ばす。

その咆哮は大空洞をビリビリと震わせ、まるで地震が来たのではないのかと錯覚してしまう。

ゴルゴンのその肉塊の様な身体から無数の蛇の如き触手が伸び、戦場を駆け回るクー・フリーンとお師匠に向かって襲い掛かる。

その速度は視認することが不可能なほどで、まるで霞の様に臙げに見えるだけだ。

しかし、2人には当たらない。

勿論当たる訳にもいかないと云うのもあるけど、ランサーの英霊は

常に速度に特化した英雄が選ばれる。

2人ともルーン魔術による肉体強化を行って、常時よりも速く、そして反応しきる事ができる。

事実として、お師匠は触手が掠めていく度に朱槍を呼び出して深々と突き刺し、壁や床に縫い付けていつている。

「これならば、あの小娘の方が手強かったか？」

「騎士王と理性の無え怪物と一緒にしてやるんじゃねえよつとー！」

クー・フリーンはまるで軽業師さながらの跳躍で触手による一撃を避けきり、触手を蹴って更に跳躍。

まるで雷光の如き軌道で触手を蹴っては本体へと近づいていき、呪いの朱槍に魔力を貯め込み始める。

「この一撃手向けとして受け取れ…!!」

本体の真正面へと出たクー・フリーンは肉体強化と自己修復のルーン魔術をフル回転で行い離れた位置にいる僕の耳に届くほどの身体が軋む音が響き渡る。

膨大な魔力反応に気付いたゴルゴンは、クー・フリーンの真正面に触手を展開し突撃、大顎を開かせてクー・フリーンの肉体を丸呑みにする。

僕は突然、全身から魔力が抜き取られるような感覚に陥って膝をつく…カルデアのバックアップが足りないレベルで魔力を持っていかれてる…？

「りよ、良太くん!？」

「だい、じょうぶ…まだ行ける…!」

立香さんは突如膝をついた僕に驚て声をかけるものの、僕は心配いらないと言わんばかりに首を横に振り、戦闘に注視する。

この特異点に入ってから既に6時間近く経っている。

途中で休憩を挟んでいるとはいえ魔力を全開まで回復するには至らず、騙し騙しでここまでやって来たツケが出たのかもしれない。

でも、倒れない…お師匠たちのマスターなのだから、倒れる訳にはいかない。

突如、ゴルゴンの触手が風船のように膨らみ破裂する。

地上に現れた紅蓮の彗星は触手を貫いてゴルゴンの本体へと迫り、肉体を貫通せしめる。

真名『突き穿つ死翔の槍』：クー・フリーンが使う現時点の宝具で最も火力のある対軍宝具だ。

クー・フリーンは素早くお師匠の後ろまで後退し、手元に戻って来た朱槍をその手に掴む。

「良太、令呪を解放せよ…あの身は私が預かろう」

「分かりました…令呪を以て告げる——スカサハよ、宝具を起動しゴルゴンを滅ぼせ」

最期の一画を消失し、お師匠に令呪による魔力ブーストをかける。

僕の右手に刻まれていた令呪は乱暴に拭った後の様に朧げな跡が残るのみ…一日一画補充されるとはいえ、少しばかり寂しい思いもある。

ある意味で、マスターとしての証だから。

お師匠は一足飛びでゲイ・ボルクによる痛みへのうち回るゴルゴンの前へと赴き、高らかに宣言する。

死を——。

「門よ、開け…『死溢るる魔境の門』」

静謐に行われた真名解放…僕たちの目の前に現れたのは、あの影の国の巨大な門そのものだ。

あれは、影の国へと通じる唯一の門…10年と見続けてきたからこそ、見紛うはずもない。

「送還宝具つてやつだ…俺たちは裏側に居るから問題ねえが、あれの正面に立ったら死は免れねえ」

「それほどに強力なんですか?」

立香さんはクー・フリーンの言葉に首を傾げる。

その目にはただ門が出来上がっているように見えるだろう…だが、ゴルゴンをよく見れば分かる。

その肉体の崩壊が始まり、大空洞内部の魔力をも吸い始めていることに。

「ゴルゴンよ…せめて冷たく、暗い、わが国で眠りに就くが良い」

お師匠は門の上へと昇り、いつも僕が見ていた時の様に座してゴルゴンが吸い込まれていく様を眺めている。

ゴルゴンは雄たけびを上げる間もなく影の国へと連れ去られ、やがて吸い尽くした門はゆっくりと重々しい音と共に閉じられ消失していく。

大空洞内部は静寂が残り、冬木の聖杯戦争の終わりを告げる。

「おっと、強制送還が早えもんだ…良太、お前の時代に戻ったらキチンと呼べよ？戦働きは俺の十八番なんでね」

「…必ず、兄さんの事を呼びますよ」

小さく頷くと、僕の手にはルーン文字が刻まれた小石を握り込ませて来る。

成程、触媒・縁で召喚すれば、精度は格段に跳ね上がるだろうなあ…。

「じゃ、暫しのお別れだ…嬢ちゃん達も気張れよ！」

「ひゃんっ！」

「せっセクハラッ!!」

消える直前に立香さんとマシユに近づいたクー・フリーンは、ガシツと二人のお尻を掴んでから消えていく。

…女癖悪かったみたいだしなあ…召喚されたら僕の背後に居るお方が非常に怖いのですが…兄さん…。

お師匠は僕の背後に立って顎を擦りながら、何やら物騒な事を呟いている。

「うーむ、死ぬか…死ぬなセタンタ。来たら串刺しにしてやるか」

「ぜっひっ!!」

顔を真っ赤にした立香さんとマシユは、お師匠に詰め寄る勢いで頷いて怒りを露にする。

あつ、これは僕では止められそうにありません。

胸中でクー・フリーンの前途に手を合わせていると、お師匠は所長へと近づいて見下ろす。

所長はレフに裏切られたと言うショックから未だに立ち直れ切れず、嗚咽を漏らしている。

「お主、死ぬか？生きるか？」

「もう、無理よ…結局、私には何にもできなかったのよ…」

「そ、そんなことありません！」

所長は最早生き残ると言う気力さえ見せず、全てを諦めてしまっている。

まだ、物事は始まったばかりなのに…ここでリタイアすると決めかけてしまっている。

そんな諦観の言葉を聞いたマシユは盾を放り出して所長の手を握り、首を横に振る。

「所長が居なければ、今こうして私たちが勝利を手にすることが出来なかったのは事実なんです。ですから、所長…何もできなかったなんて言わないでください」

「そうですよ、所長。あのバーサーカー・ヘラクレスの襲撃の時だって、所長が立ち直らなかつたら全滅してたんですから」

マシユと立香さんは所長を勇気づけようと励まし、とびきりの笑顔を見せる。

その笑顔は極地にあつて力強く、美しく思える。

所長は、そんな2人の言葉を聞いて顔をぐしゃぐしゃにして涙を流し、体を震わせる。

「それで、お主は諦めるか？」

「ま、まだ…諦めない…レフ…レフに会わないと…」

レフ…仕留め損ねてしまったけども、きつとこの先の特異点修復を行っていけば必ず行き当たるはず。

2015年担当者と言っていたので、他にも担当者が出てくる可能性を否定はできないのだけれど…。

お師匠はやれやれと呆れた様子で肩を竦め、ルーン文字を展開していく。

「魂の物質化…と言うものは魔法の域…私にも扱えん。故に肉体の無いお主は現実世界に帰還することができぬ。故にお主の魂を別のモノに封ずる。いずれ肉体代わりの依り代を得るまでの緊急的な措置だな」

「そんな業…どうやって…?」

所長の魂はむき出しの状態で、いわゆる亡霊と同じ状態だ。

それを別のモノに封じるとなると、それ相応の道具が必要になると思うけど…。

僕は思いついた様に回収していた水晶体をお師匠へと差し出す。

器と言う点でもこれなら…。

「聖杯か…確かにこれならば、魂を現世に繋ぎ止めるに十分な魔力を有しているであろうな。それでどうする…魔術師オルガマリー・アニムスフィア。一種の賭けよ…それに乗るか?」

お師匠は僕から聖杯を受け取ると、所長の目の前にそれを差し出す。

暫らく所長は呆ける様にそれを見つめ――

冬木の特異点は無事に解決した。

ただ、特異点そのものは今すぐ崩壊する、と言う事もなく時空の浮島の様に漂い続けて世界の修正力によって忘れ去られるように消えていくようだ。

…カルデアの職員は大半は外に避難し、そのまま帰らぬ人となった。

外は最早人の存在そのものを許さない異界と化し、外に出た瞬間今の世界の修正力に従って人の存在をかき消してしまう。

カルデアに残された人員は20余名…僕達マスターも負担にならないようにカルデアスや他の施設の保守を手伝っていかなければ、きつと誰かが潰れてしまうと思う。

常に不安に晒され続けなければならないから。

レイシフトを無事に終えた僕たちは、出迎えてくれたロマンと二三言葉を交わした後立香さんが疲労によって倒れてしまった。

此処に来るまで何も訓練を受けていない彼女が、特異点の中で倒れなかったことこそが奇跡だろう。

マシユとロマンで慌てて立香さんを部屋に運ぶために管制室を後

にするのを見届け、僕もまた同じように倒れる。

「…一応、男の子ですので」

「つまらん意地を張ったな…まったく」

隣に立っていたお師匠は、僕の身体を米を担ぐ様にして持ち上げて管制室を出ていく。

何とも情けない姿だけど、今は他の職員の目もない為お師匠の好意に甘えようと思う。

もし、こんな姿を晒してしまったら、彼らに気を使わせることになつてしまうから。

「聖杯を座としての疑似的なサーヴァント化…よくできましたね」

「言つたであろう、賭けだ。それに勝つたのはあの魔術師よ」

お師匠は僕の案内を必要とせず、僕の部屋のある居住ブロックへと迷うことなく進んでいく。

魔境の智慧によつてお師匠は様々なスキルを取得することができ、恐らく千里眼による未来予知から僕が管制室まで歩くルートを辿つているのだと思う。

千里眼の無駄遣いだ…。

お師匠は管制室に安置しておいた聖杯の事を思い出したのか、クスリと笑う。

「マスター適正の無いものが、英霊化を果たすとは夢にも思わなかったが」

「案外、所長も無茶しますね…」

こう、お米の様に担がれているので、力の入らない状態の中必死に腕を上げて手がお尻に当たらないようにしている僕を誰か褒めてほしい。

足の方は駄目です不可抗力です柔らかいですはい。

プシュツと僕の部屋の扉が開いた音が響き、お師匠は憚ることなく僕の部屋へと入ってベッドへと放り投げてくる。

「グエ…」

「初めての实战にしては…まあまあ、と言つた所か。しかし、精進せねばなるまいな？」

「アツハイ…頑張りますお師匠。あと力入らないんで無様な格好ですみません…」

僕は仰向けのまま首だけをお師匠へと向ける。

首から下に力を入れる事が出来ないほどに僕の身体は疲れ切り、ベッドに寝転がれていると言う心地よさから段々と瞼が重くなってくる。

「とは言え、褒美を与えてやるのも悪くは無かろうな…」

お師匠は部屋の電気を消して暗くすると、ごそごそと何かを漁り始める。

僕は最早意識を手放しかけていて、お師匠が何をしているのか見当もつかない状態だ。

「碌なものがないな。まあ、良い…この服で我慢するでしょう」

「んあ…？」

いきなり体をずらされ、頭を持ち上げられたと思ったたら何か柔らかくて良い匂いがしてくる。

僕は、それがなんであるのか気付かぬままに眠りへと落ちていく。

「ふむ、寝顔をこうして見れるのは役得よな？」

幕間の物語くカルデア立志編く

#14

百を数えるころには義務になり。

千を数えたころに忘却した。

最早この身に死は逃げて。

私は世界に取り残された。

故に——私は願ったのだ——己の死を。

影の国は人理焼却の余波で消えてしまったために、僕は実に10年ぶりに夢を見た。

それはやがて枯れ果ててしまった人の成れの果て。

こんなはずではなかったと、叫びたくても叫ぶことを許されなかった人の夢。

なんであんな夢を見たのかは分からない：けれども、僕は少しだけ胸が苦しくなった。

人は生まれて、やがて老いて死ぬ：その正常な流れを見つめ続けなければならぬ事の恐怖は…。

ゆつくりと体を起こして、きよろきよろと辺りを見渡す。

冬木における特異点を解決して、管制室で倒れて、お師匠にお米様抱っこしてもらって役得ゲットして…：放り投げられた辺りまでは覚えていたのだけれど…。

夢、だったのだろうか？

とりあえず、クローゼットが漁られて衣服が滅茶苦茶になっているのだけは解せぬ…：泥棒でも部屋に入ったのだろうか？

「はあ…：体は…：まあ、動くかあ…」

軽いため息を吐いてからもそもそとベッドを降りて、ボロボロになっているカルデアの制服を脱いでバスルームへと入る。

カルデアの住居ブロックには職員やマスター用の個室が用意され

ていて、手狭ながらもミニキッチンとシャワールームがあるので引き籠るのに最適な環境となっている。

個人的にはシャワールームではなく、ユニットバスと言う形であれば湯船に浸かる事も出来て良かったのだけど…文句は言えないか…。また、住居ブロックに隣接するように研究ブロックが配置されていて、売店もそこにあったりする。

売店の店主は…おいおい話すでしょう。

あのインパクトは中々忘れられそうにない…偉人っていうか変人だったんだな、的な意味で。

少々傷が沁みるのを我慢して、体についた汚れを落として素っ裸のままバスルームから出る。

グチャグチャになっているクローゼットからバスタオルを引っ張り出すのを忘れていたのだ…。

「火事場泥棒にしてはアレだよね…野郎の衣服漁るって相当な特殊性癖な気がする…」

ぼんやりと呟きながら体を拭いていると、唐突に部屋の扉がプシュツと言う音と共に開かれる。

昨日は本当に疲れていて、すっかり眠ってしまったので部屋の扉に鍵をかけるのを忘れてた…。

頼む、ロマンとは言わない、男性職員の誰かが訪ねてきてくれ…と言う僕の微かな願いは無残にも打ち砕かれた。

「おはようございま…す…」

扉の前に立っていたのは僕と同僚であるマシユ・キリエライトと、人類最後のマスターの1人である藤丸 立香さんの2人だ。

2人とも僕の事を心配して部屋を訪ねてきてくれた様なのだけど、生憎と僕は全裸…つまりゾウさんを2人に晒してしまっているわけ…。

「……………」

何とも言えない微妙な空気が、僕の部屋の中に満ちていく。

立香さんとマシユは目をパチクリとさせながら僕の身体を舐めまわす様に見て——無論ゾウさん込み——徐々に顔を赤くさせ、僕は対

照的に顔をどんどんと青褪めさせていく。

待って、ポリス案件、待って…不可抗力だしここ僕の部屋だしお城だし僕悪くないから待って…。

「…失礼しましたー!!!」

立香さんとマシユは僕の身体を目に焼き付け終えたのか、クー・フリーンもかくやと言わんばかりの速度で扉の前から走り去っていく。

…とても昨日倒れたばかりの人間の速度じゃないなあ…マシユは一応英霊だけでも…。

部屋の前に誰もいないことを感知したセンサーが、開いた時と同じ音を立てて扉が閉まる。

「…ははっ」

呆然としていた僕は、ただ乾いた笑いを漏らすしかなかった。

クリーニングしたばかりのカルデアの制服に身を包んだ僕は、どんな顔をした顔をしながら管制室へと向かう。

自室のPCのメールの受信ボックスに、ロマンから管制室に出頭するようにメールが入っていたためだ。

いつもは引っ切り無しに誰かが歩いていたはずのカルデア内は、しんと静まり返っていてまるで異界の様に感じてしまう。

管制室に近づくにつれ、ところどころ修復途中の状態で放置されているのが見て取れる。

何百人といった職員が20人程にもなれば、人手不足もやむを得ないだろう。

管制室の扉は僕が破壊してから修復の目途が立っていないようで、ブルーシートで代用してある。

ブルーシートを潜って中に入ると、既に立香さんとマシユ、ロマン…そして、お師匠が待機していた。

「やあ、おはよう東雲くん。よく眠れたかい？」

「もうグッスリですよ。怪我はまだ痛みますけどね」

一先ず、立香さんとマシユには意識を向けずに素知らぬ顔でロマン

と会話をする。

ロマンは人の良さそうな笑みを浮かべながら、右手で首を揉んでいる。

…誤魔化しているけど、目の下にクマができているな…無理もないけど。

「今回は軽いデブリーフィングをするだけだ。次の特異点に取り掛かるのは来週を予定しているから、今はまだ身体を休めていてくれ」

「助かります…それで、所長は…」

管制室の中央…『カルデアス』の下に安置されている聖杯を見て首を傾げる。

所長は聖杯を一時的な座として魂を登録、疑似的な英霊として魂の保存を行っている。

その為、英霊の様に魂だけの状態でカルデア内部を移動したりすることはできるのだけども…。

「所長であるマリーは前線で指揮を執っているよ。なんせ、レフがちこち爆破してくれたおかげで発電所も無傷とは行かなくてね…」

「所詮小物のした事だ。お主達ならうまくやれるだろうさ」

「影の国の女王にそう言ってもらえると、気持ち助かりますよ」

お師匠は鼻で笑いながら肩を竦める。

レフ・ラなんとかさんは、どうも自分の計画に絶対な自信があるように、カルデア全体を陥落させるような仕込みはしていなかったようだ。

その結果が冬木的一幕だったのだとすれば…いずれ自分で墓穴を掘って紐無しバンジージャンプを決めてくれそうな気がする。

「さて、東雲君も来たことだし本題に入るとしよう。冬木の特異点を解決し、歴史から切り離れたにも関わらずカルデアスは燃え続けている。その原因を探る為の助言を影の国の女王スカサハから得て、僕たちは過去の地球をスキャンしてみたんだ。すると…」

ロマンは管制室にカルデアスに現状を反映するように伝えたと、燃え盛るカルデアスは青い輝きを放ってよく知る地球の姿になる。

ただ、ところどころ大小はあれど、空間が歪んでいるようにも見受

けられる。

正常な世界地図とはとてもではないけど言い難い。

「この狂った世界地図は、過去の時空が歪んだが故に引き起こされたものだ。これらは冬木とは比べ物にならない大きな特異点…特異点ごとに時代は離れているけども、これらは全て人類のターニングポイントとも言うべき過去を改ざんしているものの様なんだ」

——この戦争が終わらなかつたら。

——この航海が成功しなかつたら。

——この発明が間違っていたら。

——この国が独立できなかつたら。

人類の転機とも呼べるターニングポイント。

成し得たからこそ今があるその過去を無かつたことにされれば、確かに人類は今よりも文明は後退していたかもしれない。

特異点は現在観測できるだけでも4つ…いずれもレイシフトを行うには検証回数が少なく不安定だそうだ。

すぐに特異点へと向かって解決していきたいのは山々なのだけけれど、無理をすれば破綻する。

僕の身体のように…一年と言う期限があるけど、戦える人間は僕と立香さんとマシユしか居ない以上無理はできない。

誰かが欠ければそれだけ事態解決は遠のいてしまう。

「お主達に人類の…世界の命運が重くのしかかっている。辛い戦いになるであろう。逃げたくもなるだろう…それでも、お主達は前を向いて戦っていけるか？」

お師匠は優しい声色で僕たちに語り掛けてくる。

全てを諦めて逃げ出してしまうのも、また一つの道だろう…。

それでも、僕は…。

「私は、戦います。戦って、掴めるはずの未来を今一度取り戻します」
「私もです。私は先輩の英霊…先輩が戦い続ける限り、決して諦めません」

立香さんとマシユは力強く胸を張って、笑顔で選択する。

安易にできないであろう選択を、笑って辛い選択を手を取った。

…きつと、彼女は英雄になれる素質を持っているのかもしれない。
窮地において、絶望を振り払う勇気を…。

「して、良太…お主はどうするのだ？」

「お師匠、愚問ですよ。僕は戦います…それだけの術をあなたに叩き込まれましたし、天の助けは待つてはおれぬって考えなんです」

そう、誰かの助けは待つてはいられない。

これだけの異常事態…解決できるのならば、自分の身体を張つてでも解決しなくちゃならない。

…僕の友人たちだつて、明日も明後日も生きて、予定があつて、笑つていた筈なのだから。

「ありがとう…その言葉でボクたちの運命は決定した」

ロマンはホツとしたような笑みを浮かべ、胸を撫で下ろす。

彼とて、この運命に抗いたい人間の1人なんだろう。

「これよりカルデアは、所長であるオルガマリー・アニメスファイアが予定した通り、人理継続の尊命を全うする。目的は人類史の保護、及び奪還。搜索対象は各年代と、原因と思われる聖遺物・聖杯。我々が戦うべき相手は歴史そのものだ。君たちマスターの前に立ちはだかるのは多くの英霊、伝説になる」

ターニングポイントを歪めると言う事は、それ相応の敵が待ち受けているだろう。

それこそ、冬木のアーサー王と同等か、それ以上の…。

それでも僕たちは止まらないし止められはしないだろう。

死に物狂いの強行軍と化するのだから。

「それは挑戦であると同時に、過去に弓引く冒険だ。我々は人類を守るために歪められた人類史に立ち向かうのだから…。けれど、生き残るにはそれしかない。未来を取り戻すためにはこれしかない…たとえ——」

——どのような結末が待つていようと…。

全てが無駄に終わるかもしれない。

それでも何も成さないよりは遥かに良いと僕は思う。

誰かを守るために、誇れるだけの戦いをすると言う事は、なにより

も難しい事なのだろうから。

「以上の決意をもって、作戦名はファーストオーダーを改める。これはカルデア最後にして最初の使命。人理守護指定Grand Order。魔術世界における最高位の使命を以て、我々は未来を取り戻す!!」

「応ッ!!」

鬨の声を上げる様に、腹の底から声を出す。

ビリビリと大気が震えるようなその返事は、僕の決意そのものだ。かならず、この手に未来を取り戻すと言う、覚悟。

すると、突如背後からご機嫌な女性の声か僕たちに向けられる。

「ふっふくん♪そんなマスター達に、この私が素晴らしいプレゼントを用意してあげたよ」

「はえ?」

「そのお声は!」

立香さんは少々場違いなその声に首を傾げ、マシユはズレた眼鏡を指で押さえ直しながら僕の背後へと目を向ける。

その女性は:そう、美しいと言う単語が非常に似合う:そんな雰囲気身を纏っている。

比喻抜きでその肉体、顔に至るまで黄金律に沿って形作られ、まるでモナ・リザの様だ:と言うかモナ・リザである。

「なんだ、レオナルド:声をかけた時は手放せないくっつけて断つてたのに来たのかい?」

「これから大変になるのに、私も何もしない訳には行かないからね」
「レオナルド:男性なんですか?」

女性なのにレオナルド:立香さんの言葉もつともな疑問だろう。

「だけど、あっている:なんせこの人っていうか:英霊は:」

「そうとも、この私こそが万能の天才、レオナルド:ダ・ヴィンチちゃんやんき!立香くん、今後私の事はダ・ヴィンチちゃんと呼びたまえ」

「はあ~?!?」

「:ニユーハーフなんだよなあ:」

なんでも、ダ・ヴィンチはモナ・リザの事が大好き過ぎて英霊とし

て召喚される際に肉体を自己改造してモナ・リザの肉体へと作り替え
たそうなの。

肉体は女性なのでニューハーフでも何でもない気はするけども…
性同一性障害とも違うだろうし、判断に困る変人だ。

それでも英霊…しかも研究ブロックにてダ・ヴィンチ工房と言う名
の売店を開いてたりする。

「おっと東雲くん…そんなこと言っちゃやう悪い子には英霊召喚システ
ム用のアイテム、上げるのやめちやおっかなー」

「わー、ダ・ヴィンチちゃん今日も美しく」
「お主…」

背後でお師匠が呆れているけども気にしてはいけない…貰えるも
のは貰ってなんでも活用するのだ…一人暮らししているとね、貧乏学
生は色々鍛えられるのです。

ダ・ヴィンチちゃんの言う英霊召喚システム…『フェイト』は、カ
ルデアにおいて英霊を呼び出すために作られたものらしい。

詳しい説明は省かれているけども、とある街の大魔術を元に作られ
たとかなんとか…。

とある街、ねえ…？

ダヴィンチちゃんは手に持った2枚の護符の様な物を、それぞれ1
枚ずつ僕と立香さんに手渡す。

「急場で仕込んだから2枚しか作れなかったけ…ど…それをシステム
の触媒として使えば英霊を呼び込むことができるはず。と、言う訳で
今から研究ブロックにある英霊召喚実験室に行ってみよっか？」

「戦力の増強は戦の基本よな…まあ、良太はクー・フリーンを呼び込む
だろうが」

「スカサハさん、お死置き…期待してまつす」

立香さんはクー・フリーンのセクハラを忘れたわけではないよう
で、親指で首を掻く切る仕草をしてお師匠と楽し気に話している。

…兄さん、どうやら召喚されて即退場する羽目になりそうです…。

研究ブロックの中心部に位置する英霊召喚実験室。

その中央にマシユの持つ巨大なラウンドシールドを配置して機器を接続すると、ラウンドシールドを中心にして召喚するための術式が展開されていく。

科学と魔術が交錯したその光景は何処か幻想的で、子供心にわくわくさせてくれる。

「じゃ、最初に東雲クンからやってみよっか。そのシールドの上に呼符を置いてくれれば、後は自動でやってくれるからね」

「なんだろう…この便利を突き詰めたかのようなお手軽感…」

対ヘラクレス戦で切羽詰まった状況で詠唱していたのが、馬鹿らしく思えてくる。

とは言え、この召喚方法はカルデアでしか成すことが出来ない為、便利ではあるけども不便ではある。

特異点攻略中は、召喚による戦力増強は出来ないと言う事に他ならないからね。

僕はマシユのシールドの上に呼符と一緒にクー・フリーンのルーン文字が刻まれた小石と一緒に置く。

触媒はいらないうけども、少しでも精度を上げて呼びかけに応じて貰う為だ。

「それじゃ、起動するよ〜ん」

「わあ…」

マシユのシールドの上の呼符と触媒の小石が分子レベルにまで分解され、金色の光と共に3つの輪が回転を始める。

その光景は美しく、立香さんは感嘆の声を上げる。

お師匠を呼んだ時と同じような光の爆発が起き、あまりの眩しさに腕で目を覆っているとやがて光は弱くなり、その場にあの街で感じた力強い存在を感じ取る。

「よう、良太…また会ったな。サーヴァント・ランサー、お前の呼び声に応じ参上した。長い付き合いになるだろうが頼むぜ、兄弟」

クー・フリーンは、あの冬木でお師匠に霊基を弄ってもらった時の姿で顕現する。

恐らく、これは僕と契約した状態を座の本体が記録し、僕との縁、

クー・フリーン自身が用意した触媒に反応した為なんだろう。

「よろしく願います、兄さん。ところでですね…冬木の街で最後にやったことを覚えてますか?」

「あん? ああ、ケツ掴んだやつか?」

「そう、それ。お師匠がご立腹なんで、後で絞られてください」

僕は心中で十字を切り、静かに死刑宣告を言い放つ。

僕は悪くないし、正直女性陣を敵に回したくない。

なので、これは必要な犠牲なのだ…。

ああ、立香さんの真似をしてマシユまで首を掻つ切るポーズを!!

「じゃ、つぎは藤丸クンだね。ちゃちゃつとやってみようか」

「誰が来てくれるんだろう…」

そんな後輩ポジの行為に目を向けず、立香さんは期待に胸を膨らませながら呼符をシールドの上において離れる。

ダ・ヴィンチはシステムのエックを終えてすぐさま起動。

僕の時と同じく金の光から3つの輪が広がり、光の爆発が起こる。

さっと視線を逸らすと、視線の先でお師匠がクー・フリーンにキヤメルクラッチを仕掛けているのが見える。

南無三…。

「サーヴァント・アーチャー…真名をエミヤ。召喚に応じ参上した。キミが私のマスターかね?」

「は、はいっ! 藤丸 立香です!!」

「受諾した。これからよろしく頼む。ところでだ、マスター…アレはなんだね?」

エミヤ…短い白髪を上げた、浅黒い肌をした赤い外套の英霊は間違はなく冬木で兄さんが決闘を行ったあの英霊だろう。

エミヤは、お死置きを喰らっているクー・フリーンを指さして怪訝な顔をする。

まあ、そういう顔になるよね…分からないでもない。

「セクハラサーヴァントですので」

「ほう…稀代の大英雄は色を好むか」

エミヤはクー・フリーンをバカにするように鼻で笑い、軽く肩を竦

める。

「弟子としては大変恥ずかしい姿を見られてしまって、少しだけやるせないんですが…。」

「おう、まあたテメエか…。」

「それはこちらのセリフだ、ランサー。それにしてもだ、随分と無様な姿だな」

「うるへえ…。」

「ライバル同士の感動の再会がこのような形になるのは…どうなんだろうか？」

「ややカオスとなったこの英霊召喚実験室で、僕はどうやって収集をつけたものか思案するのだった。」

荒涼とした大地を、僕はクー・フリーンと2人で駆け抜ける。

眼前に燃え盛る黄金の腕状のトーチの形をしたターゲットを3体発見する。

その『腕』は掌を上に向けて炎を吐き出していて、その炎の中に輝く星の様な物体が見える。

僕はすぐさまクー・フリーンに指示を送り、攻撃を開始する。

「持ち前の速度を活かしてかく乱し、各個撃破！」

「あいよ！これで何体目だ!？」

「これで60体！早くしないと!!」

クー・フリーンは敵3体の内真ん中の『腕』に対して大跳躍からの奇襲で思い切り振り下ろした朱槍で両断。

挟み込む様に展開していた腕は、燃え盛る炎の中にある星を回転させて魔力の塊を作り出し始める。

それらの魔力は、全て奇襲してきたクー・フリーンに向けられている。

僕は身に着けていた新たな魔術礼装である『カルデア戦闘服』に仕込まれている疑似魔術回路を起動させ、手を銃のようにして人差し指をクー・フリーンの背後にいる『腕』へと向ける。

『「ガンド」!!』

「あらよつとー！」

ガンド：それは元々アース神族の巫女が使用する脱魂魔術を起源とする呪いの魔法だ。

物理的な威力を伴ったものは『フィンの一撃』と呼ばれるらしい。僕のこの魔術礼装を用いたガンドは物理的な威力は伴わないものの、対魔力スキルが高い相手に対しても届けば少しだけ動きを麻痺させることが出来る。

その代わり、疑似魔術回路を冷却するまでにスパンがあり、連続使用はできないので使うタイミングを見極める必要がある。

ガンドが直撃した『腕』は呪いによって身動きを止め、クー・フリー

リンに対して攻撃をする事が出来ない。

クー・フリーリンは素早く一刺しで前方に居た『腕』を撃破すれば、青の外套を翻しながら後方宙返りの要領で跳躍し、背後に居た『腕』を真上から一突きで仕留め、着地と同時に地面に叩きつける。

「はあ、はあ…」

ぴっちりとしたボディスーツ状の戦闘服は見た目とは裏腹に耐熱耐寒機能に秀でて快適…な筈だった。

僕は全身から滝のように汗を流し、乱れる呼吸を整える。

理由は単純明快：現在進行形で呪われているからに他ならない。

「行けるか、マスター？」

「もちろん、行けなくても行きますよ兄さん。そろそろこのフィールドの終わりが見えてきましたからね」

荒涼とした大地の先に、青々とした草原が見えてくる。

普通であればあり得ない環境ではあるけど、ここは仮想シミュレーター内：あらゆる状況を想定してフィールドを作り上げる事ができるのだ。

僕たちはここまで雪原、溶岩地帯、ジャングル、森林、荒野と駆け抜けてきた。

遭遇した敵は全て殲滅して、だ。

『立香君もそろそろその最終エリアに入る頃合いだ。合流できるかな？』

「わかりました、こちらもエリアが見えてきたので移動を開始します」

ロマンから立香さんが順調に難関を突破できたと言う連絡が届く。

あちらはあちらで相当な地獄を見せつけられたはず…心の奥でほんの少しだけ申し訳ない気持ちになるもの、お師匠からの呪いはないのでそこだけは安心した。

この仮想シミュレーター訓練は、兄さん達を召喚した直後にお師匠から提案された軽い歓迎会みたいなものだ。

はじめお師匠から提案されたときは、内心断るべきではないかと思っていた。

言うまでも無く、あの地獄の修行を立香さんに課す訳には行かない

と言う真つ当な理由だ。

地獄を見るのは僕と兄さんだけで良い…。

なんて思っていたら立香さんは乗り気で『やります！』と声を上げ、エミヤはマスターの意向に従おうと同様に肯定。

マシユも同じく興味津々と言った様子で挙手してしまう始末…：オノレエ。

こうして仮想シミュレーターの中に叩き込まれた訳なんだけども、僕に対してお師匠は2つの枷をつけた。

それが魔力消費量を倍加させる呪いと、ガンドの様に体調を悪化させる呪いだ。

後者は軽めの呪いだったので、少し熱がある程度で済んでいるものの、魔力消費量倍加がやばい。

半分宝具を封印されたような状況に陥っているのだ…：撃てば、僕は無防備な隙を晒しかねない。

「赤マントも無事に抜け出したか…：まあ、あいつなら心配ねえわな」

「仲良いですよね、なんだかんだ言って」

「やめろって…：おら、行くぞ」

クー・フリーンが駆け出すのを見て、僕も再び足に力を入れて走り出す。

荒涼とした大地を抜け、青々とした草原のエリアへと踏み込むと爽やかな風が僕の頬を撫でていく。

合流ポイントまで向かうと、いつものカルデア制服に身を包んだ立香さんとマシユ、エミヤが並んで僕たちの到着を待っていた。

「おっそーい！」

「うん、ごめんね、ちょっと、手古摺って、ましてね…」

「あ、あの東雲さん、大丈夫ですか…？」

立香さんは此方の事情をまったく知らないのです、天真爛漫な笑顔で僕の事を茶化してくる。

対照的にマシユは僕の疲弊具合を見て、おろおろとした表情でタオルを差し出してくる。

僕は有り難くそのタオルを受け取って、顔に張り付いた汗を拭って

いく。

「まるで、全身に鉛を仕込まれたみたいな倦怠感がね…ハハッ」

「一度訓練を中止すべきでは…」

「始まったら完遂するまで終わるわけないじゃないか…マシユ?」

乾いた笑い声をあげて口元から魂を吐き出していると、何故かこの場にいる筈のないモフリ要員が僕を憐れむかのように足に身体を擦り付けてくる。

なんで、フォウが此処に居るんだろう?

「どうやら、私のシールドに隠れていたみたいで…」

「フォウ!」

「フォウ、これからラスボスが控えているからね?あまり近くにいたら巻き込まれちゃうからね?」

僕は足元で必死に体を擦り付けているフォウに対してしやがみ込み、やさしく頭を撫でる。

僕の言うラスボスとは、言うまでも無くこの仮想シミュレーションをやるうと言い出した張本人である。

フォウは僕の浮かべた乾いた笑みに何か思う所があったのか、同情するような眼差しを向けてくる。

「随分と遅かったな、クー・フリーリン?」

「そつちは早かったじゃねえか。珍しく弓兵に徹してもしたか?」

「そんなところだ。彼女もまだまだ経験が少ないからな。それよりも…君のマスターはどうしたんだ?」

エミヤは周辺を警戒しながら、僕の変調を目にして訝しがるような視線をクー・フリーリンへと目を向ける。

クー・フリーリンは、ため息交じりに肩を竦めてエミヤに答える。

「スカサハからの試練ってやつさ。突っ込み癖を少しでも減らそうって魂胆だろ…通常よりも倍の魔力消費量で俺とスカサハの現界を維持してやがる」

「それは…いくらカルデアからのサポートがあるとは言え、無茶ではないか?」

御尤もです。

御尤もですエミヤさん、もつとお師匠に言つてやつてください。

「あの女、こと修行に関しちや全力で来るからな……。俺が弟子だったころなんていきなり殺し合い紛いの訓練しかけられてな。見込みのない弟子を振るい落とすつもりでもあったんだろうが……。とにかく遊びがないんで、こつちも必死に食らいつくしかねえ」

「…東雲君。私は、君に深い同情を禁じ得ない」

「あ、はい……。どうも……」

エミヤは何とも言えない曖昧な表情で此方を見つめ、僕はがっくりと項垂れるしかない。

それでも…それでもお師匠と居られるだけで僕は嬉しいのだけだ。ど。

「漸く揃った様だな。待ちくたびれたぞ」

蜃気楼のように朧げな姿で此方に歩いてくる影。

それは徐々に実体を得てはつきりとしたシルエットを作り出す。

悠然と歩く姿は王者を思い起こさせる覇気を伴い、その手に持つ2本の朱槍は得物の血を求めて妖しい光を放つ。

影の国の女王スカサハは、僕たちの前に姿を現して冷たい笑みを浮かべる。

「おっと、本命が来なすつた…準備は良いか？」

クー・フリーンは素早く槍を構え、エミヤはその手に黒い弓と刀身にカバーが付いたような剣を一振り用意する。

エミヤはその剣に魔力を込めはじめて弓に番え始める。

「クー・フリーン、40秒で良い時間を稼げるか？」

「ハッ、良いぜ。マスター、少しばかり耐えてくれよ！」

「わかりました。兄さん、全力で動いてください！」

「マスター達の守りは私が！」

全員で役割を決めた瞬間に、僕は魔術礼装に仕込まれている疑似魔術回路を起動。

英霊3人の霊基を一時的に底上げして戦闘力を上昇させる。

クー・フリーンは稲妻の如き速度で僕たちの居た場所から姿を消すと、お師匠に向かって槍を真一文字に振り払う。

「ほう、随分と速くなつたものだな」

「あんたにこの槍の冴えを見せてやりたくつてねえ……！」

お師匠は涼しい顔をしてその槍の一撃を左手に持った槍で受け止め、素早く右手の槍でクー・フリーリンを貫こうとする。

クー・フリーリンはお師匠の一撃を軽く体を逸らすことで避け、受け止められていた槍を基点にして背後に回り込んだ勢いそのまま回し蹴りを叩き込む。

お師匠は一連の動きを理解していたのかすぐさま跳躍してクー・フリーリンの頭上を飛び越しながら5本の朱槍を呼び出し、弾丸が如き速度で一斉に撃ち出していく。

「そらっ！」

「なんの!!」

クー・フリーリンは至近距離で撃ち込まれたにも関わらず全てを素早く槍を振ることで弾き飛ばし無力化、着地したお師匠と同時に地を蹴って踏み込み、高速の連続突きを互いに繰り出していく。

幾重もの紅の牙が交差するも互いの身を傷つけるには至らず、交差するたびに激しい金属音が草原に広がっていく。

お師匠とクー・フリーリンの描く奇跡は陽炎の様に揺らめき立ち、魔力が籠っているのか弾ける度に周囲の草原を焼いていく。

幾合も合わされたその瞬間、エミヤの弓が大きく引き絞られる。

「退け！赤原を往け、緋の猟犬——『フルンディング赤原猟犬』!!」

エミヤの声と共に放たれる剣……赤原猟犬は真っ直ぐにクー・フリーリンの背中を目掛けて飛び、クー・フリーリンは体を大きく仰け反らせることでお師匠の槍とほぼ同時に避ける。

そのままお師匠の胸目掛けて吸い込まれるように着弾するかのよう_うに思われた赤原猟犬は、お師匠が朱槍を振るう事で容易く弾かれてしまう。

弾かれて空中に回転しながら放り出された赤原猟犬は、切っ先をお師匠に定めてすぐさま突撃していく。

その様は名前の通りの猟犬……獲物に対してしつこく追撃していくのだ。

これには感心したかのように眉根を吊り上げたお師匠は、素早く5本の朱槍を呼び出して赤原猟犬へと差し向け、軌道を逸らし続けながら克蘭の猛犬による突撃を受け止めていく。

「馬鹿な…あれでも騎士王が迎撃を諦めたレベルの魔力量だぞ…!？」

「え、エミヤさんー」

立香さんはエミヤの言葉に驚き、思わず声をかけてしまう。

騎士王が迎撃を諦めるほどの力を持った魔剣…それをお師匠は5本の朱槍による迎撃で逸らし続け、その状態でクー・フリーンの猛攻を受け止め続けている。

これが、武芸百般を修め、影の国を守り続けてきた女王の実力…それも、英霊化の影響で実力が発揮できない状態なのだ。

末恐ろしいと言葉さえ生温い…それゆえに頼もしくも感じる…とんでもない勢いで僕の魔力を抜き取っている事実を除けば。

「I am the bone of my sword.」

エミヤは、手を抜いてはられないと言わんばかりに新たな剣を取り出す。

それは剣と言うには刀身が捻じれていて、最早ドリルの様に見える。

エミヤは躊躇することなくその剣を弓に番え、大きく引き絞っている。

「――『カランドボルグII 偽・螺旋剣!!』」

今か今かと大きく引き絞られた螺旋剣は、エミヤの真名解放と同時に空間を削り取るかのように射出され、クー・フリーンはお師匠と槍を交わした瞬間に危機を察知して大きく跳躍して僕の元まで後退する。

螺旋剣と赤原猟犬…その二振りがお師匠へと直撃しそうになる瞬間、大型爆弾もかくやと言わんばかりの巨大な爆発が起きる。

その衝撃波は凄まじく、マシユが慌てて宝具を展開して壁を作らなければ、爆風で僕たちが吹き飛ばされていたかもしれない。

しかし、それでもまだ終わっていないように思える…何故ならば現在進行形で僕の魔力は減り続けているからだ。

「あれでもまだ現界してるってのか……！良太踏ん張りどころだ！」

クー・フリーンは今だ熱波吹き荒れる宝具の結界外に飛び出し、朱槍を全力で投擲する構えを取る。

同時に、爆炎を突き破る様に紅蓮の彗星が僕たち目掛けて投げ込まれる。

『貫^{ゲイ}き穿^{ボルク}つ死^{オルタナティブ}翔^{テイブ}の槍』：お師匠は宝具を開帳し、僕達を一気に殲滅する気だ！

僕は自分が膝をつくことも厭わずに魔力を全力でクー・フリーンに流し込み、クー・フリーンもそれに応える様に笑みを浮かべる

『突^ゲき穿^イつ死^{ボル}翔^ルの槍^ク!!』

真名解放と共にお師匠のゲイ・ボルクに合わせて投擲されるゲイ・ボルクは、空中で確かに拮抗し、互いに押し合う様に動きを止める。

「いけえっ!!!」

僕は思わず腹の底から討ち破れと願う様に声を出し、このゲイ・ボルク合戦の勝敗を見守る。

だが、僕たちは忘れていたのだ……お師匠は何本ものゲイ・ボルクを持っていたことに……

ゲイ・ボルク同士の激突は、双方に込められた魔力が切れると言う形で唐突に終わりを迎え、その瞬間にもう1本……本命のゲイ・ボルクが今だ立ち上る煙の向こうから投擲される。

その威力は先ほどと寸分も変わらず、投擲することで風圧により晴れた煙の向こう側では満足そうに笑みを浮かべるお師匠の姿が見える。

その姿は流石に爆発に巻き込まれたせいかボロボロで、左目がつぶれたのか目を閉じてしまっている。

だと言うのに、その威圧感は健在だ。

クー・フリーンは真名解放を終えたばかり……ついでに言うとな僕の魔力が底を尽きかけていて、とてもじゃないが2射目は間に合わない。そこへエミヤが前へと躍り出て、右手を飛来する朱槍に向かって翳す。

「エミヤさん?！」

「此処は私が耐えてみせます、だからエミヤさんも!!」

立香さんは自身の英霊がこれから行う事が理解できず、マシユも再び宝具を使う為にラウンドシールドへと魔力を込め始める。

「I am the bone of my sword. | |」

『熾天覆う七つの円環』!!!」

アーチャーの掌に薄い紅色をした蕾が現れた瞬間巨大な7枚の花弁で出来た花へと変じ、眼前に障壁が7枚展開される。

このエミヤと言う英霊は一体何者なのだろう…ありとあらゆる剣を呼び出し、あるいは矢の代わりとして扱い、そして今は巨大な盾を作り上げて見せた。

ロー・アイアスとゲイ・ボルクが衝突した瞬間、クー・フリーンの時と同じく拮抗状態を作り上げる。

しかし、その盾は1枚、また1枚と薄氷を割る様に容易く突破されていき、4枚まで破壊されてしまう。

「エミヤさん、遠慮しないで私のありったけの魔力を使って!」

「了解した、マスター!!」

エミヤは突き出していた右腕に左手を支える様にして添え、膨大な魔力を盾に流し込む。

それと同時に僕はクー・フリーンに対して目くばせで指示を送りこむ。

今は無防備になっている…このチャンスを逃す訳には行かない。

クー・フリーンが姿を消した瞬間、耳元に金属音が再び響き始める。

やはり、光の御子…その速度はあらゆる英霊を凌駕しているのかもしれない。

やがて、残り1枚となった盾にゲイ・ボルクが食い込み始め破れそうになった瞬間、マシユがエミヤを押しつけて大盾を構える。

「真名、偽装登録…!…うううわああああ!!」

裂帛の気合と共に解放される守護結界。

それはマシユの気迫に呼応するように光り輝き、ゲイ・ボルクの勢いが急速に落ちていく。

行き場のなくなった魔力が守護結界の外で爆発を起こし、目を焼く

ほどの閃光が――

パシュっと言う音と共にコフィンの扉が開き、僕たちはフラフラとした足取りで管制室へと出る。

魔力と言う魔力は底を尽き、最早足元はおぼつかない。

対照的に、立香さんはまだまだ元気があると云わんばかりに確りとした足取りだ。

「いやー…スカサハさんってすごいね!」

「はい。あれで英霊化の影響で実力が100%引き出せていない状況だと言う事ですので、実際の女王スカサハはもつと強いと言う事になりますね」

立香さんの言葉にマシユは同意するように頷き、補足説明を行う。

その言葉に僅かばかり頬をひくつかせた立香さんは、迂闊な発言をしないように注意しようと心に固く誓っていた。

「皆お疲れ様、随分と大暴れしたみたいだね」

「大暴れなんてもんじゃないですよロマン…地獄…僕にとつては…」

ロマンは朗らかな笑みを浮かべて僕たちの元に歩み寄り、皆を労つていく。

根っこが善人だと言う事が彼の身体からにじみ出てくるようだ…

この人が裏切者ではなくて本当に良かった…。

「藤丸 立香、ぼさっとしていないで早く来なさい! 貴女にはこれから魔術に関する講義を受けてもらうんですからね!」

「ゲエツ、所長!?!」

「マリー、発電所の方は目途がついたのかい?」

偽・英霊オルガマリー所長は、頬を怒りで上気させながら立香さんの襟首を掴む。

昨日のレイシフト中にめそめそしていたのが、まるでなかったかのようなのだ。

意識を切り替え、精力的に働くことでレフの1件を頭の片隅に追いやっているだけなのかもしれないけど…。

「ええ、奇跡的にメイン動力に傷が入ってなかったから…そちらも首

尾よくやりなさい」

「はいはい、所長殿の仰る様に頑張りますよ」

所長はロマンの返事に満足したように頷き、そのままズリズリと立香さんを引き摺って管制室を出ていく。

英霊化してから筋力が上がったのだろうか？

ぼんやりとそんなことを考えると、後方でクー・フリーンとエミヤが会話しているのが聞こえてくる。

「君の師匠は…」

「皆まで言うな…またあそこに突っ込まれるぞ！」

「承知した…だが、あれで軽めなのだろう…？」

ひそひそとした小声での会話は、エミヤにトラウマを植え付けるのに十分なインパクトがあったらしく顔色が些か優れていない。

お師匠もなんだか、面白い玩具を見つけたみたいなの目をしていて、エミヤの受難はこれからも続いていくのかもしれない…。

僕は一先ず訓練前に支給された戦闘服から制服に着替えようと管制室を出ようとしたのだけれど、いきなり体を後ろから担がれてしま

う。

「やはり体力が無いのが一番の問題だな…この後は屋内訓練場へ向かって筋力トレーニングだ」

「え、あの…もう無理ですお師匠！」

「そら、まだまだやることは山積みだ」

お師匠は鼻歌交じりに僕を地獄の4丁目辺りに連れ出すべく歩き始める。

「うわああああん!!助けて!助けてえ!!」

「……………」

クー・フリーンとエミヤに助けを求めるべく手を伸ばすが、2人もさつと目を逸らして僕の事を見捨てる。

…大英雄とそれに張り合う英雄が同時に僕の事を見捨てた瞬間である。

僕はもうすべてを諦め、訓練を受ける他なかった…。

翌日、僕は体を起こすことも儘ならないほどに痛めつけられたこと

は、言うまでも無いだろう。

クー・フリーリンを召喚してから早4日…修行して修行してご飯食べ
て補修作業手伝って講義うけて…と言うある種異常な生活リズムの
中、僕はなんとか命を繋ぎながらカルデアで楽しく過ごしています。
楽しく、と言ったは良いものの、カルデア内に悲壮感が漂っている
のは間違いなく、職員の皆さんは食事もあり喉が通らない様子で日
に日にやつれていつてしまっているように思える。

20余名程度の人数に世界の命運が握られてしまっている…その
重圧は計り知れないものだ。

そしてそんな状況で作戦の矢面に立って戦うのがまだ10代の子
供である僕と立香さんの2名しかいないともなれば、皆の期待は一身
に注がれることになる。

僕は——覚悟はできている。

元より影の国で魂だけとはいえ、女王に鍛えられた戦士見習い…心
構えも覚悟もできている。

勇猛に誇り高く戦う者…たとえ敵が強大であろうとも、僕は手に持
つ朱槍を落としたりはしない。

それは、きつと絆すらも手放してしまう事に他ならないだろうか
ら。

でも、立香さんは…？

彼女は、ただ連れて来られただけの一般人だ。

それこそ、事情も何も知らされていない状態で極限のサバイバルに
叩き込まれ、生死の境を彷徨っていた。

にも拘らず、彼女は折れずに立ち上がり、快活に笑い続けた。
人として異常な様に感じてしまう。

だって普通の人の反応って、オルガマリー所長が取り乱したときの
様な反応をする筈なんだから。

「…考え事ばかりしていると寝れない…」

僕はムクリと自室のベッドから体を起こして、立ち上がる。

寝巻であるスウェットを着たまますリッパを履いて、僕はそのそ

とした歩き方で部屋を後にする。

連日の修行の影響で筋肉痛が凄まじい：ルーン魔術で痛みを誤魔化したりに耐えてはいるものの、ここにきて魂魄との違いをまざまざと思い知らされている気がする。

薄暗い通路をペタペタとした足音を立てながら歩き、僕は地下にある食料プラントへと向かう為にエレベーターへと入り、ボタンを押す。

地下にある食料プラントは、主に野菜をメインに生産する所謂野菜工場となっていて、流石に食肉に関しては冷凍と言う形で備蓄されている。

野菜に限って言えば大事に食べていけば1年以上充分生産し続けることが出来るものの、食肉に関しては毎日1食肉入りとして1年保つかどうかと言った具合だそう。

タンパク質と言う点では大豆の生産も行っているのですが、ソイミートとして加工すればまあ、色々と誤魔化しは利く筈。

けれども食の質が落ち込んでしまうのは、避けようがない事実だろう。

「なーんて、僕が心配した所でどうしようもないか〜…」

誰も居ないエレベーターの室内だと言うにもかかわらず、僕はボソボソと独り言を呟いていた。

僕は周囲に誰も居ない状況になると、ついつい独り言を言ってしまう癖がある。

両親が他界してからと言うものの、家では1人きりの生活が続いていた。

家を訪ねてくるもの等大半がセールスマンで、電話も親戚からかかってくる程度。

学校の友達とは遊びはするものの、深くまで入り込ませようとはしなかった。

そんな状況にもなれば、自然と静寂が嫌になって何かしら音が聞きたくなったのだろう。

こうして独り言を言う癖が出来てしまったと言う訳だ。

ポンと言う軽い電子音と共にエレベーターの扉が開き、僕は食料プラントへ足を踏み出す。

流石に工場内は衣服を洗浄して入る必要があるので立ち入ることは出来ないけれど、通路には工場内が見える様に窓が設けられていて、そこから窓の外を覗くと青々とした緑の光景が広がっているのが見える。

機械的に一括管理されているこの場所は、野菜の生育に合わせて収穫から種撒きまでオートメーション化されている。

正直、人の居ない今の状況下では非常に助かるだろうなあ…。

通路が変わらずペタペタと歩いていると休憩するためのフロアを見つけ、自販機からオレンジジュースを購入してバルコニー状——と言っても全面ガラス張り——に突き出ている場所まで行きベンチに腰掛ける。

ボンヤリとした表情で窓の外を眺め、時折ジュースで喉を潤わせていく。

すると、突如目の前に赤い外套の弓兵…エミヤが僕の目の前に霊体化を解いて姿を現した。

「こんな夜更けにどうしたのだね…睡眠もマスターとしての立派な仕事だったはずだが？」

「単純に眠れないと言うだけです…本当はエントランスフロアに行つて外の景色を見ようと思っていたんですけど」

エントランスフロアは、世界の境界ともっとも近いフロアになってしまっている。

万が一の事故が起きてエントランスフロアの境界に揺らぎが観測されてしまった時、その場に人間が居た場合存在を保証することが出来なくなってしまう。

そういった事情もあって、現在エントランスフロアは立ち入り禁止令が発令し、一切の立ち入りが許されていない状況になっている。

「意外だな…君は大概の事には動じない、器の大きい人間だと思っていたのだが」

「そんな大層なものなんてないですよ。数か月前まで学生だったわけ

ですし」

「あの無謀な動きは若さゆえの思慮の浅さ、と言った所か…私としてはマスターは後方に居てくれた方がありがたいのだがね」

エミヤはこの数日、立香さんと一緒に英霊とマスターの関係を最良のものとすべく、僕の修行に相乗りする形で一緒に仮想シミュレーターによる訓練を行っている。

もちろん僕は2人の訓練に混ざることには無く、お師匠からくだけられた修行内容を淡々と行っていただけだ。

今にして思えば、エミヤと立香さんは僕と言う人間を見定めるために一緒に居たのかもしれない。

「マスターである以前に、僕は影の国の女王の門下生…その末席にいる人間です。たとえ蛮勇であろうとも、僕は只管に誇れる戦士でありたい」

「それは…かの女王にとってと言う事かね？」

「いいえ」

エミヤの視線がやや鋭いものに変わった気がする。

僕は彼の言葉に首を横に振り、その鷹の様な目を真っ直ぐに見つめ返す。

「僕は…僕の誇れる僕でありたい。たとえ他人に蔑まれ様とも、詰られ様とも、憐れに思われ様とも…僕が行ってきたことは正しかったと…誇りに思える自分でありたい。だからお師匠の修行にもついて行く。弱いからと、現実から目を逸らしたくない」

「…理想に溺れ、そのまま溺死する覚悟がある？」

「死ぬ気はありません。結果死ぬことになろうとも」

そう、死ぬ気はない…僕は生きて…いつか彼女の前に立ってみたいから。

「生き汚さは、かの大英雄と同じ性質か…似た者同士の主従と言う訳だな」

「兄弟弟子ですから」

エミヤは呆れたように肩を竦めると、実体から霊体へと切り替えて僕の目の前から姿を消し去る。

立香さんは大空洞での一件…レフを一突きにしたあの瞬間の光景から、僕の事に僅かばかりの恐怖を覚えているのだろう。

それはとても正常な反応だと思う。

普通の感性であれば、人を殺すと言う事に大きな躊躇を覚える筈。だけど、僕の場合は価値が無いと判断した瞬間、それがまるで虫のように見える。

害虫を殺すことに躊躇を覚える人間なんて極僅かな筈だ。

「…思考が危ないなあ」

ボンヤリとそんなことを口から漏らして、頭を軽くノックするように叩く。

一度悪い感情は廃棄して、物事をフラットに考えよう。

僕は、大丈夫。

オレンジジュースを一気に飲み干し、容器を近くにあつたダストボックスに放り込む。

「ぞーして、こうなっちゃったんだらうね…」

期待とかそう言ったこととは無縁の生活だった訳で。

覚悟はできていても、重いものは重く感じてしまう…それでも、前を向き続けなければ立香さんに重荷が行き過ぎてしまう。

彼女にはマシユもいるし、きつと助けてくれるはず…だから、僕は適当にいい人の皮を被っていればそれでいい。

そうすることで、物事が円滑に進むのなら良いじゃないか…我儘は言っていられないんだし。

ぽつり、ぽつりと独り言を繰り返し大きく深呼吸をする。

「よし、愚痴ったぞー」

とりあえず、不満と言う不満を頭の中にぶちまけて、自分の事は棚上げにして来た道を戻り始める。

少しばかり足取りが軽くなるのは、空元気からではないと信じた
い。

幸いなことにエレベーターは使われておらず、すぐに乗り込むことができた僕は素直に居住ブロックまで階層を昇っていき、到着するのを壁に寄りかかって待ち続ける。

いざ扉が開かれれば、またペタペタと言う足音をさせながら僕は自室に向かつて歩き続け、部屋の中に入り込む。

「くあ…」

欠伸をしながらベッドに倒れ込む様にして寝転がると、僕はそのまま瞼を閉じて眠り始める。

——夢の中で、何処か安心するような匂いがした気がした。

「おお…なんとか直ったか…」

「いや、手伝わせちゃって悪かったね」

管制室の大きな扉の修復作業をダ・ヴィンチちゃんと一緒に行い、これを無事に終了した。

今日は何故かお師匠から休養を言い渡され、シミュレーター内で槍の素振りでもするかと管制室に向かったら、扉の前で四苦八苦しているダ・ヴィンチちゃんの姿を見かけたのだ。

中身は男性とは言えこれを見過ごして良いとは言えず、僕が手伝う旨を申し出たらダ・ヴィンチちゃんは満面の笑みで首肯し、今に至ったわけだ。

僕はダ・ヴィンチちゃんと協力しながら、管制室の扉にかけられていたブルーシートの折り畳み作業を行う。

「いや、流石に助かったよ。万能の天才とは言え、一人でこの扉を修復するのは骨だったからね」

「まあ、緊急時とは言えぶっ壊した張本人ですし…」

僕が初めて実戦で扱った全力のルーン魔術…その威力をもって、燃え盛る管制室とを隔てていたこの扉を破壊したのだ。

今思えば相当な無茶だったろうが、あの時は結界に綻びが生じていたからこそどうにか破壊できたように思える。

「本当の意味で壊してくれたのはレフ・ライノールだったけどね。まあ、彼も存外に詰めが甘い。いや、上位者と言う立場に酔いしれて危機管理がなっていないかった…と言うのが正しいかな」

「お師匠が言う小姓以下じゃないですか…」

ブルーシートを畳み終えたら荷物を抱え、ダ・ヴィンチちゃんに連れられるようにして彼：彼女の工房へと向かう。

一先ず今日の補修作業はここで終わりだ。

連日のように根を詰めて作業し続けても、身体に悪いだけだから。これは所長が全職員に『必ず十分な休息をとること』と言うお達しがあつた為で、僕としても納得できるところだ。

1年しかない：ではなく、1年もあると言う風に考えるのはとても前向きな事だと思う。

研究ブロック内にあるダ・ヴィンチ工房は、そのまんま彼女のアトリエを模した内装となっている。

カルデアの近代的な内装と相反し、その室内には木と画材と薬品の匂いが染みついている。

ある意味で人の営みが色濃く出ているように感じられる。

「ここまで運んでもらっちゃって悪いね。ブルーシートは適当にその辺に置いておいて」

「分かりました」

ダ・ヴィンチちゃんは、工房の奥に向かいながら僕にそう指示をして姿を消す。

何やらゴソゴソと音を立てているので、何かしらの用意をしているようだ。

僕は工房の片隅にブルーシートを置いて一息つき、工房の中を改めて見渡す。

工房：と言うよりも芸術家のアトリエと言った側面の強いこの部屋は、女性らしさと言うものからはかけ離れていて、どこか男の子の秘密基地と言った趣を感じる。

自分の趣味の為の自分だけの城：そういう物には多少なりとも憧れてしまうものだ。

「何か気になる物でもあつたかい？ 相応の物を持ってくれば、私だつて売るのは吝かではないけれど…」

「いえ、秘密基地みたいで良いなあ、と思っただけです」

「秘密基地！なるほど、それはそうだろう。何といつてもこの部屋は

私が私の為に趣味全開で無許可で構築した所だからね」

：所長の許可を取らずに勝手にカルデアの一室を占拠しただけでなく、部屋まで改装したのか：自由人此処に極まれり。

僕が呆れた様な目で目の前の万能の天才を見つめっていると、ずいっとマグカップが差し出される。

「さ、飲みたまえ。淹れたてのホットチョコだよ」

「あ、ありがとうございます」

「なに、扉の修復を手伝ってくれた、ほんの謝礼さ」

マグカップの中身は、甘い香りが漂うホットチョコレートがなみなみと注がれている。

季節としては真夏なのだけれど、生憎とこの場所は標高6000メートルの山の頂上：しかもカルデア内部は空調が行き届いていて、快適に過ごせるようになっていて。

夏と言う言葉とは、既に無縁な場所と化している。

「はー…」

「甘いものと言うのは疲れを取りやすくしてくれる。君はちよーつと頑張り屋さんだからね。肩の力くらいは抜いたほうが良いと私は思うよ」

マグカップの中身を一口飲むと、優しい甘さが口いっぱいに広がっていき、思わず縁側でお茶を飲む老人の様なため息がこぼれる。

ダ・ヴィンチちゃんはそんな僕の姿を見てクスリと笑い、これまた老人のような助言を――。

「何か言ったかな？」

「いえ、何でもないです」

素直な感想を頭の中で思い浮かべていたら、僕の頭の真横をダ・ヴィンチちゃんが常に着けているガントレットがロケットパンチの様に勢いよく飛んで、背後の壁に突き刺さる。

：勘が良いと言うのだろうか…？

「まあ、冗談はさておいてだ――」

「いえ、冗談では済まされないものが僕の頭を掠めていったのですが」「君はもう少し自分がただの人間だと言う自覚をしたまえ」

「アッハイ」

僕の主張は丸つきり無視され、ダ・ヴィンチちゃんはジト―つとした目で僕の事を見ている。

恐らく、ダ・ヴィンチちゃんは僕の仮想シミュレーター内での訓練の動きの事を言つて非難しているのだろう。

クー・フリーンと共に戦場に飛び出し、兄弟子の討ち漏らしから逃げて身を守るでもなく寧ろ前進して朱槍を自ら振るう…おおよそマスターがすべきことでは無いと言う事は理解しているものの、魂に染みついてしまっている戦い方なので僕としても止め様がない。

バトルジャンキーと言う訳ではないと思うのだけれど…。

「私たちは君も立香クンも失う訳には行かないんだ…若い君たちに重荷を背負わせていると自覚しても尚ね」

「…お気持ちはありがたいですよ。大切にしてくることは分かりますから」

でも、きつと僕は止まらない。

坂を転がり落ちる小石の様に戦場を駆け抜けていくことだろう。

その点、ダ・ヴィンチちゃんには申し訳なく思う。

「肝に銘じてほしい。クー・フリーンは兎も角、スカサハは正規手段で召喚された英霊だ。キチンと体調管理をしたまえよ？」

「…うはあ、わかりました」

クー・フリーンは兎も角…とはどういう意味なのだろうか？

思わず首を傾げつつも、体調管理はしつかりしなくてはならない事は確かなので素直に頷く。

僕はマグカップの中に残っていた冷めたホットチョコを飲み干し、マグカップをダ・ヴィンチちゃんに手渡す。

「ごちそうさまです」

「お粗末様。さあ、どこへなりとも行きたまえ」

用は済んだ、と言わんばかりに手を振られ、僕は大人しく工房を後にする。

僕は再び槍の素振りを行うべく、管制室へと向かうのだった。

第一特異点 邪竜百年戦争オルレアンく救国の聖処女く

#17

——人々に担ぎ上げられ、人々の旗にされ、人々に利用され、人々に見捨てられた。

——だからこそ、正しい。この地上において誰が、何がこの本心を

——裁くことが出来ると言うのか？——

「……」

僕は寢床からむくりと体を起こし、軽く背筋を伸ばして凝り固まった背骨を丁寧に解していく。

部屋の片隅に簡単に設置した小さめの仏壇を見てから漸くベッドを降りた僕は、軽く欠伸をかみ殺してから仏壇の前に正座していつものように線香を焚いて、静かに手を合わせる。

亡くなり、人理焼却によつて存在すら否定されていようとも、僕は天国に居るであろう両親に欠かさず挨拶をする。

大切な、大切な家族だからこそ。

最早思い出の中の人になつていたとしても、これは毎朝の必要な儀式だ。

十分に挨拶を終えれば着ていたパジャマを脱いで丁寧にたたみ、まずは体を清める。

空調がしっかりとしているカルデア内部とは言え、寝ている時の汗

と言うのは莫迦にならない。

朝シャンは将来的にハゲるとは言うけど、禿げたら頭髮等脱毛クリームで一掃してやるのだ、フハハ。

等と益体もない事を考えながら清め終えれば、僕は用意していたカルドア戦闘服に袖を通す。

訓練だからではなく、これが快適だから着ると言う訳でもない。

今日は最初に攻略する第一特異点へ出陣する日なのだ。

今回は検証に検証を重ねた上でのレイシフト実証となるので、カルデアからのサポートも一定は期待ができる。

一定は、と言うのは言うまでも無く、アクシデントにより補給が受けられない場合を想定しての発言だ。

そもそもが想定外の事態が連続するであろう攻略だ…常に最悪のケースを想定しての行動を心掛けるべきだろう。

「あ、これも着るんだった…」

僕は兄弟子やエミヤの身に着けている外套に似た、黒のフード付きの外套を手にして身に纏う。

流石にピッチリスーツで特異点を歩き回る訳には行かないだろう…と言うエミヤの提案で、急遽僕に支給されたものだ。

顔を晒したくなければ深めにフードを被ることで、ある程度顔を見られずに済む。

なんというか、某暗殺者なりきりゲームの主人公みたいな雰囲気があるなあ…。

過去の…それも無かった事になる特異点に人相も何も無いかもしれないが、指名手配なんて言われて人相書きが広まってしまっただけ、行動できる範囲が絞られてしまう可能性がある。

外套自体には特別な魔術はかけられていないけども、僕としては比較的気に入っていたり。

準備を終えた僕は、腰に備えられているポーチに小石が入っているのを確認してから部屋を後にする。

「おはようございます、東雲さん」

「おはよー…」

「フオウ！」

「おはよう、マシユ、立香さん、フオウ。立香さんは…気分悪そうだね？」

部屋を出た瞬間、僕の目の前にマシユと立香さんが通りがかる。

フオウは、魔術協会の時計塔の生徒が着ている制服に身を包んでい
る立香さんの肩に乗っている。

僕も本来であればこの時計塔の制服に身を包むべきなのだろうけど…激しく動く機会が必ずあるだろうことを考えると戦闘服の方が動きやすい為、僕は周囲の勧めを押し切って戦闘服に身を包んだ。

まあ、それは兎も角として、彼女たちの部屋は僕の部屋から離れているので恐らくブリーフィングの時間を知らせに此方へと立ち寄ってくれたみたいだ。

「なんか変な夢見てさ…：バーサーカーが6騎召喚される夢…なんか魚眼みたいな人いたし」

「狂人で魚眼…インスマスかな？」

「まあ夢は夢ですし、気を引き締めましょう！」

立香さんはイエーイとマシユの言葉に両手を上げて応え、フオウも乗じるかのように一鳴きする。

悪夢を見て気分が悪いと言うだけで、平常心を保ち続けているところを見ると、これからの任務に些かも不安を感じていない様だ。

3人と1匹とで会話しながら管制室へと入ると、所長とロマン、ダ・ヴィンチちゃんの3名が僕達を出迎える。

…ダ・ヴィンチちゃん呼称をしないと、最近ロケットパンチが飛んでくるようになりましてね…：へへッ。

「来たわね。それでは、これから『第一特異点』であるフランスの聖杯探索のブリーフィングを始めます」

「先ずは、キミたちにやってもらいたい事のおさらいだ」

そう言うと、ロマンはコンソールを捜査してカルデアスを巨大なモニターの代わりにして情報を表示していく。

1つ目は特異点の調査及び修正。

僕たちがレイシフトによって赴く時代は、人類の決定的なターニン

グポイントと言える歴史的事変の真つ只中だ。

その歴史を歪めて無かった事にしようとしている存在を調査し、排除することで歪みを正すことが出来る。

これがクリアできなければ2016年は2017年を迎える事無く消滅し、『王』とやらの目的は達成されてしまう。

そして2つ目が『聖杯』の調査及び回収。

お師匠が冬木で語った通りであれば、各時代の特異点に聖杯ないしそれに連なる物が確実に存在していることになる。

それらの調査を並行して行い、発見次第回収：もしくは破壊することが求められる。

大聖杯の様な魔力炉であることを考えれば破壊は避けるべきだと思う。

下手に破壊することで爆発でもしたら、目も当てられないからね。

第2目標に関しては破壊は最終手段で、あくまでも回収することを目的とすることになるだろう。

そして、これらとは別に作戦行動中に行わなければならないのが、霊脈を基点としたベースキャンプの設置だ。

ベースキャンプを作ることの特異点に対するカルデアからの干渉が大幅に楽になるそうで、補給物資の転送及び召喚している英霊の転送も可能になる。

英霊に関してはコフィンを利用したレイシフトによる転送でも構わないのだけれど、レイシフトの試行回数が少なく、管制室職員の経験が浅い状態の現状を鑑みると悪戯にリスクを負う事ができない。

と、言う訳で人間3人ならまだしも高密度情報体でもある英霊のレイシフトは、今後実験を繰り返して…と言う事になりそうだ。

「ベースキャンプの設置は、マシユのラウンドシールドを設置することで簡単にできるわ」

「英霊としては未熟ですが、がんばります！」

「ん〜、マシユは良い子だ〜」

所長がベースキャンプの設置方法について言うと、マシユが胸を張ってドンツと自分の拳で誇らしげに胸を叩く。

すると、立香さんはマシユの肩を抱き寄せて頭をペットか何かの様に撫でる。

決して、フランスだけに白百合なんて見えてない…見えてないっただら見えてない。

「さくつて、ここからはお待ちかね。ダ・ヴィンチちゃんの出番だから、立香クンとマシユはイチャついてないでしっかり私の話を聞く様に」

「は〜い」

「い、いちやついてなんか…」

ダ・ヴィンチちゃんは良いネタを見つけたと言わんばかりに眼光鋭くさせた瞬間、すぐに朗らかな笑みを浮かべて立香さんとマシユを窘める。

前に言ってたなあ…『自分も含めて芸術家気質の英霊は例外なく偏執者』だと…。

立香さんはダ・ヴィンチちゃんの言葉に素直に頷いて離れ、マシユは顔を赤らめながら呟く様に否定する。

僕としてはそこらへんどうなのか詳しく聞いてみたい…青少年だからね、仕方ないね。

「私はカルデアに召喚された身だ。なのでマシユの様に、おいそれとレイシフトする訳にはいかない。よって基本的には支援物資の提供、開発が主だった仕事になるだろう。その上で…これらを見つけたら必ず回収して私の元に戻ってきたまえ」

そう言うとダ・ヴィンチちゃんは、小さな緑色をした立方体を胸元から取り出して指先に摘まんで見せる。

なんて言うか、メロンゼリーみたいで美味しそうだ。

「はい、東雲クン涎流さない!」

「流してませんよ、ダ・ヴィンチちゃん!」

「キミの心が流していると言っているのさ…。これはマナプリズム。マナと呼ばれる魔力が結晶化したものでね、これを持ってきたら相應の品と交換してあげよう」

どうやらダ・ヴィンチちゃんはそのマナプリズムとやらにご執心ら

しく、色々と貴重な品々と交換してくれるようだ。

カルデアの召喚システム関連の品とも交換してくれるようで、戦力拡充が急がれることを考えると確りと集めていきたいところだ。

「さて、私からは以上だ。支援物資に関しては用意しておくから安心してくれたまえ」

「では、これらを踏まえた上でレイシフトする先の情報を——マリー、何を膨れているんだい？」

「…あなた達が取り仕切るからでしょう!?!私が所長で最高責任者なんだから、少しは自重しなさいよ!!」

どうも、所長は言うべきことを片っ端からロマンやダ・ヴィンチちゃんに言われていたのが気に入らなかつたらしく、顔を赤らめて目を吊り上げる。

どこか歳不相応な少女らしい一面を皆にさらけ出していて、この場に居る職が手を止めて微笑ましく見ている。

それは言うまでも無く僕もだ。

「所長く、レイシフト先の情報くださ〜い」

「はあ…東雲、貴方本当にこれから戦地に赴くって意識があるのかしら…?」

「戦士としての心構えは叩き込まれてますよ。その上で、ガツチガチに理論武装しても仕方ないでしょう?生きるか死ぬかの単純な二択なんですから。だったら細かいことは考えず、朱槍を握るのがベストってだけです」

にへらつとした顔で所長の言葉に答えると立香さんからの視線を感じるものの、僕はそれを気付いてい居ないフリをして無視をする。

多分、立香さんは表面上取り繕うのが得意なんだろう…恐らく、不安で胸がいつぱいの筈。

だからこそ、緊張のない発言をする僕の事が気になって視線を向けてくる。

…精一杯、フオローしなくちゃね。

所長はコホン、と軽く咳ばらいをして気を取り直し、モニターに特異点の年代と情報を表示していく。

「では、特異点に関する情報を提示します。場所はフランス全土。年代は1431年：丁度救国の聖女であるジャンヌ ダルクが火炙り刑に処された年ね。細かな情報は実際にレイシフトしなくては分からないけれど、恐らくジャンヌ ダルクが聖杯を得て復活。俗にいう百年戦争が続けられていると考えられるわ」

ジャンヌ ダルク：聖処女と呼ばれる少女は祖国を守るために戦い、そして最後は裏切りによって魔女として散っていった悲劇のヒロイン：なのだけれど、とんでもない脳筋だったなんて話もあって、フランスとしても扱いに困ってたなんて説もあつたそうなの。

そして、百年戦争とは当時のフランス王国の王位継承権を巡ったイギリスとフランスの戦争の事を指している。

別に百年間ずっと争い合っていた訳ではなく、休戦期もあつたと言う話だ。

ていうか、百年やりあう事ができる国力持ってたら世界征服できる気がする。

「所長、それはレイシフトして到着したら戦場ど真ん中つて事は…」
「立香君、それに関しては安心してほしい。観測できる範囲ではあるけど、争った形跡のないエリアを探して座標にしている。いきなり戦場に飛ばされることは無い(筈)だよ」

ロマンは小さく筈と言つて誤魔化しつつ、朗らかに笑う。

こればかりは鬼が出るか蛇が出るかと言う所なのだろう：最初からお師匠達が傍に居ないのは手痛いけども、守りに関しては超級なマシユが居る。

「ここはマシユの踏ん張りどころとして見るべきだろう。」

「ロマン、摘まみ出されたいのかしら?」

「ははは、そんな訳ないだろう?き、所長」

ロマンは右手で首筋を揉み解しながら朗らかに笑つて所長の敵意を受け流し、話の続きを受け流していく。

こうした2人のやり取りをみていると、まるで学生時代からの旧友…いや、悪友の様に見える。

…友人かあ。

「まったく…兎に角、レイシフトしたら近くの集落に向かって情報を集めるところから始めて頂戴。カルデアスとシバによる観測では大まかな事は拾えても、細かいところまでは分からないわ。だから提示できる情報もこれだけしかない…この点に関しては謝罪しましょう」

所長は深々と頭を下げて、僕たちに謝罪してくる。

この様子にロマンはおろかマッシュや立香さんもおろおろとして動揺を隠せない。

所長はプライドが高く、決して頭を下げるような人間ではないように思っていたからだ。

「顔を上げてください。最初の行動指針が明確になっただけでも僕たちは非常に助かります」

「そう…。では、これでブリーフィングを終えとします。これより Grand Order ファーストミッションを行います。我々の双肩に人類の…世界の命運が重くのしかかっていることを意識し、各員の奮闘を期待します」

所長の宣言と同時にモニターがカルデアスに切り替わり、フランスの国土が拡大されて表示される。

あくまでも国土がわかると言うだけで、町単位で細かく見る事は出来ない様だ。

だが、東側の山脈の麓付近に光点が灯り、『Donremy-lia-Pucelle』と表記される。

恐らくそこが、僕たちのレイシフトによる移動先になるのだろう。

「では、マスター2名とマッシュはコフィンに入って待機してくれ」

「はー」

管制室の床下から、せり出す様にして3つのコフィンが出現する。

僕たちはそれぞれのコフィンの中に入り込んで身を委ねれば、小さなモーターの駆動音と共に扉がしっかりと閉まる。

僕は静かに深呼吸をして、少しだけ強く拳を握り込む。

『ふうむ。少し緊張しているか?』

——唐突に脳内に響く様にお師匠の声が聞こえてくる。

恐らく、契約を果たした英霊とできる念話によって声をかけてきた

のだろう。

不覚にも、お師匠の声を聞いた瞬間に僕は安心してしまつて、身体
の力を抜いてしまう。

『お主の事は短期間に存分に鍛えた。この私も共に居るのだから、へ
マをしたらどうなるか分かつているだろうな?』

——心配しているのか恫喝しに来たのか…。

眉間に皺を寄せると、小さく笑い声が聞こえてくる。

どうやら、お師匠は僕を揶揄ったらしい。

むうつと唸ると、コフィン内に管制室のオペレーターからのアナウ
ンスが入る。

『アンサモンプログラムスタートします。…頑張ってくださいね』

オペレーターの女性は、少しだけ申し訳なさそうに声をかけてく
る。

少しばかりの後ろめたさが、きつとそうさせたのだろう…。

女性の声に引き続き、電子音声による案内が開始される。

——レイシフト開始まであと3、2、1

——全工程クリア。グランドオーダー実証を開始します。

こうして、波乱に満ちた僕たちのGrand Orderは開始さ
れた。

轟音と悲鳴。

咆哮と絶命。

この場は暴力に支配され、生死を境に繰り広げられる大舞台。

彩る喝采は死の匂い…此処に観客なんて居る訳がない。

いや、居るのか…それは今いる町の住人達だ。

拝啓、お父さんお母さん…どうやら僕は戦場の真つ只中に放り込まれたようです。

僕は逃げ惑う町の人たちとは対照的に、この手にお師匠から授かった朱槍を手にして大きく跳躍する。

身体強化のルーンは僕の身体を英霊には及ばないとは言え、超人的な膂力を容易く発揮させる。

勿論魔力のコントロールは最小限…力を発揮すべき時に発揮させることで負担を大幅に減らしていく。

これはお師匠が課した修行による成果だ。

消費量が二倍三倍と増えていけば、否が応にも節約術を身に着けると言うものだ。

僕が跳躍した際には一匹の竜…のなりそこないであるワイバーンが、住人たちに食らいつこうと急降下してきている。

その背は堅い甲殻に覆われているものの、我が槍を防ぐにはあまりにも脆い。

「せーのっー」

急降下してきているワイバーンの背中に向かって朱槍を深々と突き立て、内側に炎のルーンである『カノ』を叩き込む。

僕の朱槍は武器と言うよりも魔術師の触媒としての側面が色濃い。故に単純なルーン魔術でも容易く威力を増幅させて、上空でワイバーンを内側から焼き尽くして殺すことが出来る。

地面に激突する瞬間に、ワイバーンを蹴って民家の屋根に着地する。

瞬時に視線を彷徨わせて、この襲撃を指揮しているであろう人物を

探す。

この時代、神秘の色は大分薄まっている筈なので、幻想種たる竜が群れを成して町を襲撃するなんて起こる訳がない。

だが、現実としてこの町は竜の襲撃を受けている。

ならば、この竜達は何者かが呼び出して使役している可能性がある。

雑兵は潰しても後から湧いてくるため、やはり根っこを腐らせるほか無いだろう。

「お師匠、居るんでしょう?」

「うむ、中々良い手際だった。して、何用か?」

したり顔でお師匠は僕の傍らに実体化し、蹂躪されていく町並みを見つめている。

本来であれば、マシユがベースキャンプの設営を行ってから英霊を呼び出す手筈になっていた筈なのに、こうしてお師匠が傍らに居る事に僕は首を傾げたくなるがグツと堪える。

今はそんなことを問答している場合では無いのだから。

「お師匠、この竜種を操っているであろう首魁の討伐をお願いできますか?僕は、このまま遊撃手としてワイバーン狩りを行いつつ町人の避難を促しますんで」

「ふむ…良いだろう。お主が相手するには、英霊は荷が重い」

お師匠は小さく頷くと町の西側を鋭く睨み付け、一瞬で姿を消す。

恐らく、戦うべき敵の首魁を一瞬で見つけたのだろう…恐るべし千里眼。

僕は朱槍を持つ手に力を込めると、自身にルーン魔術による呪いをかけていく。

その名をアトゴウラ…敵対者はこの陣を見た瞬間に退却は許されず、僕と言う存在に襲い掛かるしなくなる。

僕は大きく深呼吸した後、絶叫に似た雄たけびをあげる。

その瞬間、この町に居たワイバーンは僕の方へと一斉に目を向けて咆哮をあげる。

「さて、ここ一番の戦働きをしなくては、お師匠に申し訳が立たなくな

る…」

町に降り立っていたワイバーン、上空に待機していたワイバーン：それらを合わせてざっと10匹と言った所か。

幻想種であることを考えれば、町一つ潰すのに過剰戦力も良いところだと思う。

たかがワイバーン、されどワイバーン：並の剣や弓矢では、精々翼膜を破れば良いところだろう。

それだけ、この竜が持つ鱗や甲殻と言った鎧は堅い。

それも歳を重ねた個体になるほど頑丈さが増していくのだ…だが、この場に居るのは殆どが若い緑色の個体ばかり…対して苦労はしないはずだ。

「そうら、こつちだこつち！町人よりも僕の方がおいしいぞ！」

僕は民家の屋根の上を走り、あるいは跳躍することでワイバーンを町人たちから引き離す様に走り続ける。

町人たちは東側へと殺到しているので、必然的に西側に行くことになる。

魔力の消費具合から察するに、お師匠はあまり本気を出して戦ってはいない様だ…様子見か何かだろうか？

あちらはお師匠に任せているので、僕は僕の仕事をしていこう。

ワイバーンは一斉に僕の後を追いかけて、急降下してくる。

僕はその一撃をひらりと跳躍して避け、すれ違いざまに朱槍を素早く振るって翼膜をずたずたに引き裂く。

これだけでワイバーンは飛ぶことが困難になり、地べたを這いずり回るトカゲと化するのだ。

さて…ワイバーンと言う存在は空を飛ぶことに特化した存在だ。

地竜と呼ばれる存在よりもその脚力は低く、猛禽類の様に急降下からの鉤爪や体当たりが主な攻撃方法となる。

よって、こうして翼膜を切り刻むだけで大幅な弱体化が狙えるようになる。

『東雲君！君どこに居るんだい!?!』

「ロマン！冬木の時みたく連絡つかなかったらどうしようかと思いま

したよ！」

僕は翼膜が破れて飛ぶことができず、民家の屋根に墜落したワイバーンの頭を朱槍で一突きしながらホッと胸を撫で下ろす。

どうやら通信は充分可能な状態なようで、この分なら立香さん達との合流もスムーズに行う事が出来るかもしれない。

僕は槍についた脳漿を振り払って落とす、再び駆け始める。

兎に角ヒットアンドアウェイを繰り返して、確実に仕留めるしか道が無い。

散々修行で相手してきたのだもの…戦い方はとうの昔に熟知している。

『とにかく無事で良かった！君だけ座標点がズレるわ、女王は待機室からいきなり消えるわで大騒ぎだったんだよ』

「原因に関しては後回し！今僕は町を襲撃しているワイバーンを相手に大立ち回りしているんで！」

僕は頭上すれすれを通過していくワイバーンの鉤爪をのけ反ることで掻い潜り、お返しとばかりに朱槍を腹に深々と突き刺し真名解放を行う。

『穿ち散らす死華の槍』！』

真名を解放された朱槍はワイバーンの体内で華開き、ワイバーンの肉体を突き破る様にして花卉と言う名の槍の穂先を無数に突き出させ引っ込んでいく。

素早く朱槍を引き抜いて、転がる様にしてワイバーンの下敷きにならないようにすると、そのまま屋根から街路に落ちて着地する。

着地した隙をワイバーンは見逃す訳もないのだけれど、そんなことは承知済み。

僕は素早く9番目のルーン文字『ハガル』を起動させ、散弾状に電を放ってワイバーン達に牽制する。

もちろん翼膜に当たれば、ラッキー程度には考えていたけれど。

再び足に力を込めた僕は、炎に包まれる民家の間をすり抜ける様に走り続ける。

追わせては迎撃して確実に1匹ずつ仕留めていくことで、僕は順当

にワイバーンを狩っていく。

下手に2匹同時に襲い掛かろうものならば、互いが互いを邪魔して僕に攻撃することも適わなくなる。

大きい凶体に生まれたことを恨むが良い！

突然、僕の前方に何かを粉碎するような…爆砕するような音が響き渡る。

思ってたより派手に戦ってるなあ…。

『前方に英霊の反応がある！』

「そつちはお師匠に任せてます」

方向転換しようと足を踏み出した瞬間、爆弾が爆発したかのような衝撃と共に無数の瓦礫が僕とワイバーンに襲い掛かる。

僕は素早く横道に入って大多数の瓦礫を避ける事に成功するものの、ワイバーンはそうもいかない。

ワイバーンは降って来た巨大な家の残骸が直撃し、悲鳴にも似た咆哮を上げて地面に激突する。

少しばかり可哀想に思えたものの、僕は背筋に氷柱を突き立てられるような感覚がしてそのまま跳躍。

民家の屋根に着地した瞬間に更に跳躍すると、僕が居た所に炎を纏って大回転する謎の物体が通り過ぎていく。

…ガ〇ラみたい…。

そんな特撮怪獣が脳裏に通りつつも、僕はお師匠が戦っているであろうポイントまで走っていく。

ワイバーンに関しては殲滅を凶らずも終える事ができたので、自身にかけていた呪いを解呪しておく。

『な、なんだったんだ…あれ…？』

「すくなくとも敵の宝具じゃないですかね？あんな質量兵器連発されたら堪ったもんじゃないですけど…」

あのクラスの質量兵器に対抗するためには、少なくともヘラクレスくらいの膂力を持った存在が居ないと対抗しきれないと思う。

防ぐにしても、マシユとエミヤで障壁を張りまくるしかないだろう…。

僕がお師匠の元へと辿り着くと、その場は民家が建っていた跡は無く、最早瓦礫のがの字も無い更地と化していた。

恐らく、あの質量兵器がこの状況を作り出したのだろう。

「終わったのか、良太？」

お師匠は辿り着いた僕の元まで後退し、しかし視線は前方に居る存在へと縫い付けられている。

その存在は紛う事なき英霊：青みがかった長い髪に白い肌、その目は何処か鋭いものの美しい。

胸元からへその下辺りまで大胆に開かれたスリットのあるドレスが、何処か痴女い気がする。

そんな感想を持った瞬間、お師匠から脳天に拳骨を叩き込まれる。

「戦場で見惚れるでない、馬鹿弟子が」

「いや、おかしいでしょあれ、痴女ですよ痴女。お師匠も相当アレですけど素肌晒してないからまだセーグフツ」

僕は弁解するように声を上げるのだけでも、お師匠は腹に拳を叩き込んで僕の事を黙らせる。

グヌヌ…。

思わずお腹を抑えながら蹲る僕の背中を足で踏みつけつつ、お師匠は言葉を続ける。

「あれは聖女マルタ。暴れまわっていた悪竜タラスクを言葉で鎮め、ステゴロ改心させた奇跡を起こした紛う事なき聖人だ。狂化スキルを付与され、ある意味バーサーカーの様な存在となっているがな」

何故だろう…：脳内で変なルビが割り振られている気がしてならない。

僕は改めて、お師匠に踏まれたまま英霊マルタの事を見つめてみる。

聖女…と言うのは納得できるかもしれない。

凜とした佇まいや身に纏うオーラの様なものが、何処か聖職者を思わせる。

だからと言って、あの格好はどうかとも思うけど…。

「さて、聖女マルタよ…：退くならば今は見逃してやらんでもない」

「……」

「いや、待つてくださいい…見逃すんですか?」

お師匠はその手に持つ朱槍をマルタへと向け、見逃すと口にする。恐らく、お師匠はマルタの目的を見抜いているからこそそう言ったのだけれど…彼女は敵だ。

人を散々食い荒らしたワイバーンを用いてこの町を襲撃してきた、僕にとって撃滅すべき敵だ。

そこに疑問を挟む余地はない。

「…どういいうお積りでしようか?」

「さて、な…。案山子の苦勞を知っているからこそ、とだけ言っておこるか。ほれ、どうするのだ?私としては最終的にどうであろうと問題は無いのだ。故に、お主を此処で討ち果たしても構わん…分かるな?」大局には大きく差し障る問題ではない…にも関わらず、見逃すとはどういうことなのだろうか?

今後の立香さんの負担を考えるならば、敵は一騎でも多く…いや、逆に減られると困るとでも言うのだろうか?

特異点には聖杯が必ず存在している…それを敵対者が確保していると仮定すると…。

嫌な確信めいた予感が冷や汗となって僕の額を濡らし始める。

お師匠が此処で討ち果たしても構わないと言ったのは、新たに追加される英霊と武を競い合う事ができるからか!

バトルジャンキーすぎますよお師匠!と言う言葉をグツと飲み込んで、事の推移を見守っていく。

「…分かりました、此処は退きましよう」

「うむ、物分かりの良い娘子は好きだぞ」

狂化スキルが付与されているにしては、マルタは理性的に此方に対応して会話ができています。

そもそも、聖人に狂化スキルが付与されるような逸話は存在しないだろう。

恐らくは後から付与されたもの…それゆえに狂化スキルも低ランクのものになっているのかもしれない。

マルタは此方に背を向け霊体化して姿を消すと、戦場となっていた町に静寂が戻ってくる。

「うゝむ、次はヤコブの手足を用いての格闘戦で戦ってみたいものだ」
「…ヤコブの手足ってなんですか、お師匠？」

ヤコブ、と言うのは創世記に出てくる偉人だったわけ？

その名を冠した格闘技…と言うのは分かるけども…。

「ヤコブの手足と言うのはな、極まれば大天使でさえその首を落とすとされる古代の格闘技の事を指している。かの格闘技を受け継ぐものはいなくなり、今の今までその格闘技を実際に見たことは無かったのだが…あの歩法は間違いないであろう」

「お師匠、場合によっては先制ゲイ・ボルクも辞さないですからね？」
大天使、と言う事は英霊よりも上の神霊…更にその上って事になるのだろうか？

それを素手で縊り殺す…？

人間辞める格闘技とか、受け継がれるわけがないんだよなあ…。

僕は呆れつつも、気を引き締めてマルタと言う存在の認識を改める。

うん、間違いなくバーサーカーだわ。

『まさか、ドラゴンライダーまで出てくるとは…一応、この特異点は他の特異点よりも揺らぎの小さいものだったんだけど』

「大量のワイバーンに関して問題ですよ…この時代の武器じゃ対応できないでしょうし、支援もあまり期待できないかも？」

僕の朱槍は神秘を色濃く残した特別製…槍術にはそこそこ自信があるし、若いワイバーンに関しては後れを取ることはずあり得ない。

だけど、この時代は基本的に火器と言ったら大砲の事を指す。

大砲で空を縦横無尽に飛ぶワイバーンに攻撃するのは一苦勞な筈だ。

「根元を叩けば良いだけの話よ…。魔術師よ、マシユ達と合流するのは暫らくかかりそうか？」

『えっあっはい！彼女たちの居るドンレミ村からは離れた位置にある

所ですからね、早くても2日程はかかるかと』

合流に2日…その間成すべきことは成しておく必要があるかもしれないな。

お師匠が漸く僕の背中から足を退かしてくれたのでよろよろと立ち上がり、身体についた砂埃を簡単に手で払う。

「お師匠、その間にこの町の人たちを別の町まで護衛するのはどうでしょうか?」

「いや、護衛をする必要はあるまい。この町には近づかぬように厳命し、火を放しておく。我々はこのまま合流せずに遊撃隊としてフランスを練り歩く方が賢そうだ」

『その場合、こちらからの支援がほぼ受けられなくなりますよ!』

火を放つ、と言うのはこの町に残っている遺体がアンデッドと化して復活することを防ぐ為だろう。

アンデッドはこの世に未練の有る者…とりわけ、非業の死を迎えたものがなりやすい。

こんな理不尽な殺され方をすれば、アンデッドになるのも必定だろう。

そして、遊撃隊…と言うのも悪くはない。

現状、敵には僕とお師匠の存在しか知らされていない筈だから、一つ所に留まらずに移動し続ける事でマシユ達が裏で動きやすくなる狙いがある。

「なに、常に動き回る訳ではない。合流すべき時には必ず合流するからな。その間に、マシユ達は可能な限り戦力を整える様に言っておくのだ」

『は、はあ…分かりました。東雲君もそれでいいかな?』

「僕は構いません…英霊が相手でもお師匠が相手してもらえれば何とか生き残れるでしょうし」

英霊相手に長時間生き残るのは、綱渡りするよりも難しい…まだまだ未熟な僕では攻撃を防ぐので精いっぱいになるだろう。

冬木の黒化英霊とは訳が違うのだ。

ロマンとの通信を打ち切り、僕は深く溜息を吐き出す。

「お師匠」

「どうした？」

僕は思わずお師匠を呼び、その顔を見つめる。

その顔は戦火にあつて色あせる事無く、ただ只管に美しく映える。

「なんだか、今後が不安で仕方ないです…」

冬木は災害によって燃えていた。

けれどもこのフランスの地は、英霊による襲撃で血に濡れ続ける…
勇猛を以て踏破しようにも、不安はどうしても僕の影を付きまとう。

「言ったであろう…困難に立ち向かえと。お主は此度が初陣と言つても差し支えない状態だ…ならば、向き合つて克服するしかあるまいな」

「分かりました…きつと、乗り越えてみせます」

僕は小さく頷き、改めてこの戦場となった町を見渡した。

フランスを巡っての遊撃作戦は、結局のところ効果を見せる事無く僅か1日で頓挫することになってしまった。

聖女マルタに襲撃された町『ラ・シャリテ』を出た翌日、立香さんの前に敵の首魁が現れたためだ。

敵の名は竜の魔女ジャンヌ・ダルク：言うまでも無くサーヴァントで、クラスはエクストラクラスと呼ばれる特殊な例外に該当するルーラー：つまりは裁定者だ。

ルーラークラスの英霊は特殊なスキルにより、その時代に存在している英霊の数や位置を正確に知ることが出来るのだと言う。

つまり、僕とお師匠がどれだけ派手に暴れて目眩ましをしても、立香さん達の存在は相手方に知れ渡っていたことになる。

流石にお師匠もそこまで『千里眼』で見通していた訳ではなかったらしく、その話を立香さんから通信で聞いたときは互いに仏頂面になってしまったものだ。

いや、お師匠の場合は『どうして此方に仕掛けてこなかったのか?』と言う不満だった気がするけれど。

立香さん達の目の前に現れた英霊はジャンヌ・ダルクを含めて3騎：ジャンヌを除いた二騎に関しては、どちらも狂化を付与された英霊だったらしい。

ご丁寧の名乗りまで上げてくれたそうで、どちらも真名は判明している。

『ヴラド・ツェペシュ』と『カーミラ』：いずれもこのヨーロッパにおける知名度は最高の英霊で、所謂反英霊と呼ばれる存在だ。

反英霊は恐れるべき怪物としての側面を持つ存在だ。

英雄とは程遠い、暗君や怪物等が該当する。

もつとも、ヴラド公が反英霊に属するのはいまいちピンと来ない気もするけど…。

だって、彼は国の民を守るために非情に徹した、護国の英雄としての側面があるのだから。

僕の見解と世界の見解の相違かもしれない。

そんな最悪な状況下でも、少しだけ幸運な事があった。

1つは、時代における知名度の相違：ヴラド公は今年産まれる予定で英雄としての名を挙げておらず、カーミラに至っては後世の存在：よって、この時代における知名度は両者共に最低クラス。

聖杯によるバックアップはあるのだろうけど…この差は中々に大きい。

そしてもう1つ：それは、はぐれサーヴァントの存在だ。

この特異点は一応聖杯戦争の形式をとった物であり、聖杯を巡る戦いとして英霊が召喚されている。

しかし、どの英霊も竜の魔女の支配下に置かれており、正しく聖杯戦争が機能しなくなっている。

そこで円滑な聖杯戦争を行うために、聖杯は新たに7騎を独自に召喚したそうだ。

7騎対7騎の聖杯戦争…この形式を聖杯大戦と呼称されるとお師匠が教えてくれた。

ジャンヌ達に追い詰められた立香さん達を助けてくれたはぐれ英霊は3騎。

キヤスター『ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト』。

ライダー『マリー・アントワネット』。

そして…ルーラー『ジャンヌ・ダルク』。

後世の存在…しかし、世界的な知名度を誇る音楽家と悲劇の王妃はまだいい。

ルーラーがもう1騎存在していると言うこの事実、僕達を混乱させるには十分な状況だった。

とは言え、この3騎が居なければ立香さん達がジリ貧だったのは間違いない、命からがら撤退することができたそうだ。

僕たちは今後の方針を詰める為に一度合流することを決め、『ティール』と言う山間の町で合流することにしたのだけれど…。

「うふふ…ま^且・す^那・たあ^様…」

「ヒエツ…マスター呼びなのに別の呼び方に聞こえるっ」

「お主、余程好かれていようだな…何か特別な縁がある様にも思えんが」

「日本人つてだけじゃないですかね…」

はぐれ英霊に会いました。

ええ、僕の間から見ても美少女だと言う事はハッキリと分かります…目が死んでなければ。

白く美しい絹の着物に身を包んだ白雪の様な繊細な肌を持つ少女は、このティエールの町にある広場に1人で佇んでいた。

近かつた事もあり、僕たちが一番乗りでこの場所にやってきたわけのだけれど、この少女と僕の視線が合った瞬間に白い頬にさつと朱が差したと思ったら、まるで恋人か何かの様に『安珍様く』なんて声を上げて此方に駆け寄り抱き着かれ…今に至る。

些かお師匠の機嫌が悪いような気がする…ああ、柔らかいなあ…僕より年下に見えるけど、発育は大変宜しい。

青少年だから、反応しないようにするだけで手一杯です。美少女だから、反応しないようにするだけで手一杯です。

「あらやだ、わたくしついたら名乗り上げもしないで…」

「アツハイ」

「声が小さいぞ良太？」

「アツハイ」

何でだろう…何で僕は針の筵の上に立っているのだろうか？

お師匠は腕を組んで僕と死んだ目をした英霊を見つめ、僕は返答に声を詰まらせ、英霊は英霊で頬を赤く染めたまま僕から離れて目の前に立つ。

「くらす・ばあさあかあ、清姫でございます。安珍様、思い出していただけましたか？」

『清姫…安珍清姫伝説の龍になった少女か！』

「知っているのか、ロマン!？」

『知ってるも何も日本人の君なら知ってるんじゃないのかい!？』

安珍清姫伝説…僕には馴染みのない所謂民間伝承の一つだそうなの。

ざつくばらんに言うのと、安珍と言う美貌の僧侶に一目ぼれした清姫

が裏切られて悲恋に終わる、よくある物語：清姫が龍に変化して安珍を蒸し焼きにすると言う点を除いて。

逃げる安珍を追いかけるうちに執念で龍へと変化したらしい。

良太知ってる、これストーカーって言うんだよね？

しかも、僕はその安珍と言う人間とは縁も所縁も無いのだけれど：目の前の清姫は僕がその生まれ変わりだと信じて疑っていない。

「ん？良かったな良太：お主に春とやらが来たようだ」

「いいえ、よくありませんお師匠。っていうか人の気持ち知ってそれ言ってるんだったら、相当性格悪いっすよ」

「はてさて何のことやらな？」

お師匠は僕から顔を背けて揶揄う様に笑みを浮かべる。

清姫はそんなお師匠の態度を気にかける事もなく、再び僕の腕に抱き着いてくる。

なんていうか、雛鳥のすり込みに近い反応な気がする：初めて出会ったマスターを安珍認定して溺愛する雛鳥ならぬ雛龍。

：ん、これ立香さんだったらどうなっていたんだろう？

なんて考えていたら、広場に聞き知った声が響き渡る。

「あーっ!!美少女と美女とイチャイチャしてるうっ!!」

「ゴカイデスカンベンシテクダサイゴメンナサイ」

「だから声が小さいと言っておるうに：」

「まあ、ますたあとわたくしが相思相愛だなんて：ぽっ」

どうやら立香さん達も到着したようで、此方に駆け寄って立香さんは力強く僕達を指差してニヤニヤとした笑みを浮かべている。

命の危機に晒されていたと言うのに何というバイタリティ：オリハルコンメンタルは見習いたいなあ。

こういう状況でも狼狽えない鋼の心が欲しいです。

「東雲さん、最低です。見損ないました」

「まあまあ：マシユ、恋は素晴らしいものなのだから応援しなくては駄目よ？」

「いや、マリー：あれは恋と言うには微妙なところだと思っただけだね」

後からマシユと大きな帽子が特徴的な少女、黒い衣服に身を包んだ青年、そして紺色の衣服を鎧で包んだ女性がやってくる。

恐らく、帽子の少女がマリー・アントワネット、青年がヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト…そして、最後の女性がジャンヌ・ダルクだろう。

ジャンヌは浮かない表情をしていて、マリー達の会話に加わろうという気配が無い。

それもそうだろう…自分と同じ存在が守ろうとした国を滅ぼそうとしているのだから。

「なんであれ東雲さんとスカサハさんが無事で良かったですよ」

「立香さんが襲撃されたって聞いたときは肝が縮んだけどね」

マシユからの辛辣な視線と離れようとしないう清姫を意識から外し、にまにまとした笑みを浮かべている立香さんと再会を喜ぶ。

誰も欠けておらずはぐれ英霊を4騎味方に加えられたのは心強い。

残り3騎が襲撃されていなければ、見つけるのも時間の問題だろう。

「レイシフトの事故の原因は後々詰めるとして…今後の方針に関してなんだけど…」

『現状の戦力だけでも充分じゃないかしら?』

「所長、時間は限られていますが無いです訳ではありません。石橋を叩いて渡る方向で行こうと思うのですが」

ロマンの代わりに通信に出た所長に、僕は部隊を二手に分ける案を提案する。

僕とお師匠、クー・フリーリン、清姫の偵察によるオルレアン襲撃隊と立香さん、マシユ、エミヤを中心とした英霊搜索隊による戦力の集結だ。

敵の7騎を僕達で受け持つのは荷が重いけれど、戦働きに定評のある兄さんと最大戦力であるお師匠による散発的な攻撃は、相手方の戦力を此方にくぎ付けにするには充分なはず。

その間に立香さん達には英霊を集めてもらい、合流。

一気にオルレアンを陥落させると言う流れだ。

詳細な部分は戦力が集結したときに詰めるべきだろうが、作戦の第一段階は中々良い感じだと思う。

「と、まあこんな感じで竜の魔女さんにはワイバーンが千切っては投げ、千切っては投げされるのを見てもらおうかと」

『時々、貴方性格悪くなるわよね…?』

「やだなあ、敵に情けなんてかける必要ないじゃないですかー」

「うわあ、東雲さん良い笑顔…」

にこり…いや、にたりと笑みを浮かべると、立香さんは若干引き攣った様な笑みを浮かべる。

「良太君、と言ったわね?そうすると貴方の負担が凄い事になると思うのだけれど…」

「王妃、切れる手札は切っていかなければ切り札にならない訳ですよ。僕たちは現状我儘を言えるほど手札がある訳ではない。だからこそ、多少の無理は押し通ります」

「それは…」

マリーは僕の身を案ずるように声をかけてくるけど、さつき言ったように切れる手札が無い。

実際問題相手はじわりじわりと領土を侵すだけで特異点を維持できるわけなのだから、僕たちは常に追い詰められているわけだ。

ならばこそ、切り札を切る…余裕ぶっこいていられるのも今の内だレなんとかさんと『王』とやら。

「…東雲 良太さん。あの竜の魔女との決着は私が合流するまで待つてはいただけないでしょうか?」

「ジャンヌ・ダルク、救国の聖女…きつと、竜の魔女との決着は貴方自身に着けなくちゃならない事だと思います」

「ありがと——」

「けれども」

僕はジャンヌの言葉を遮って、言葉を続ける。

切り札を切るのだから、僕は悠長なことをするつもりはない。

「首級を取る時は取ります。特異点を解決すれば起きたことは無かった事になり、死んだ人間すらも正しい時代に乗って生き返る。けれど

も、今のこの時間の流れにいる人間が苦しんでいい道理はない。だから、取れるときは取ります。…僕はね…他人の命を弄ぶやつが——」
——憎くて仕方がない。

広場に静寂が満ちる。

お師匠は涼しい顔をし、清姫は頬を赤らめて此方を見上げているけども…どうも相当な表情をしていたようで、皆息を？…む。

「まあでも、竜の魔女を討つには至らないとは思うかな？」

「ほう…それは私が居ても、か？」

「はい」

お師匠の目がスツと細められて些か不機嫌そうな声をあげられるけど、僕は臆することなく力強く頷く。

「相手は確実に聖杯を得ている状況でしょう。お師匠が一騎当千…無双の境地に居たとしても無限に湧き出る雑兵相手に手間取るのは必定ですから。こればかりは僕の魔力総量と英霊としての器の限界に由来してるんですけどね」

お師匠はカルデアからの魔力的なバックアップを受けていない。

ほぼ、僕からの魔力提供で現界を保っている。

短期決戦であれば、フル稼働させることもできるかもしれないけど、今回は持久戦が主だったものになる。

また、英霊の器と言うものはクー・フリーンの様に特殊な召喚でもない限り、クラスに定められたスキルに依ってしまう。

出来る筈なのに、クラスが邪魔をして出来ないことがあるのだ。

そうなるも本来の実力を十全に発揮することが難しくなる…以前、本気ではないとお師匠が言っていたのはこれが原因だ。

聖杯戦争による召喚システムの制限なので文句は言えないけど…。更に相手の数を考えると、確実にこちらがスタミナ切れを起こすだろう。

よって、首魁が姿を現しても僕達だけでは対応しきれなくなるわけだ。

「ふむ…事実なので認めなければならんか」

「…あんなに強いのに…」

お師匠は僕の事を褒める様に頭を撫で、立香さんは立香さんで以前の訓練を思い出したのかゲンナリとした顔でお師匠を見ている。

そうだね、クー・フリーンとエミヤが居たのに追い詰められたからね…気持ちには分からんでもない。

『わかりました。では、その作戦で行くことにしましょう。マシユ、ベースキャンプを設置しなさい。そちらに必要な物資と英霊の補充を行います』

「はい、わかりました」

所長は作戦を了承し、マシユにベースキャンプの設置を指示する。

兄さんが傍らに来てくれると言うのは本当に安心する…僕にもあんな兄弟が居たらなあと思わずには居られないほどに。

親戚の叔父さんは良い人なんだけどね…。

なんて、考え込んでいるとバツバツサと羽ばたく音が耳元に届く。

「あら、こんなにオーディエンスが居るなんて。アイドルと言う存在は本当…罪ね〜」

マシユがベースキャンプを設置しようとした瞬間、空からとんでもないものが舞い降りた。

「あー、嫌だぞ…僕は今とてつもなく嫌な予感がしているっ！」

アマデウスは空から舞い降りてきた自称アイドルの少女を見て、顔を引きつらせながら青褪めさせる。

確かに、僕もアマデウスと同じ意見ではある。

理由はその姿…長く赤い髪の毛に可憐さを思わせる顔立ちの少女に似つかわしくないものが存在している。

頭には長さの異なる捻じれた角、背中と腰には竜を思わせる翼と長い尾が付いていたからだ。

このフランスの現状を鑑みるに、竜種と縁がありそうな存在は竜の魔女に与していると考えてしまう。

お供にワイバーンが居ないのが不思議だけど…一応慎重に動こう。

万が一英霊同士の戦いが起きてしまったら、この町…ティエールもタダでは済まない。

「まあ、可愛らしいお嬢さん！わたくしの名前はマリー・アントワネット。お名前を聞かせていただけるかしら？」

「ま、マリー…不用意に近づいたら駄目だろう!？」

マリーは僕たちの緊張なんて知ったことでは無いと言わんばかりに白百合の様な可憐な笑みを浮かべ、竜種の少女へと歩み寄る。

アマデウスが慌てて引き留めようとするものの、マリーは言葉が耳に入っていないのか止まる気配を見せない。

僕は格納していた朱槍を呼び出して右手に握り込み、すぐに動ける様に身体強化の準備を進める。

「立香さん、万が一の場合はこの町から一旦離れよう。勝ち目は充分にあるとは言え、町を巻き込むわけにはいかないし」

「…ん、多分大丈夫じゃない？ほら——」

立香さんに撤退を促す様に言葉をかけると、立香さんはキョトンとした顔で竜種の少女を指差す。

つられて僕もそちらへと目を向けると、竜種の少女は軽く狼狽えて顔を真っ赤にしている。

「うえっ!?可愛い…?そ、そうよ!アタシはポップでキュートなアイドルなんだから当然よね!」

「…アイドルってやっぱりあのアイドルなんだろうか?」

「東雲、あれがアイドルなんて言う存在なのだとしたら、間違いなく崇拜している奴らの耳はイかれている。僕の予想が間違っていたら君の尻を舐めたって良い!」

アマデウスは聞くに堪えないと言わんばかりの声色で、苦虫とか苦い草とかを磨り潰して煎じたお茶を飲んだような顔になっている。

…彼は音楽家だ。

恐らく、彼の耳には彼女の声が凄まじい公害のように聞こえているのだろう。

僕は充分可愛らしい声に聞こえているのだけれど。

「でも、アイドルであるアタシの事を知らないのは問題ね。いいわ!自己紹介してあげる。アタシはサーヴアント界一のアイドル!ポップでキュートな鮮血魔嬢!エリザベート・バートリーよ!!」

少女は地面にマイクスタンドっぽいものを突き立てて飛び上がり、その上で可憐にポーズをキメて名乗りをあげる。

エリザベート・バートリー…この名前が本当に彼女の真名なのだとしたら…。

僕は朱槍を握り込む手に力を込めて真っ直ぐにエリザベートを見つめるが、お師匠が手で制して首を横に振る。

「待つが良い…アレには敵意の欠片もないのだ。竜種とは言え数は我らが勝っているのだから、そう急ぐこともなからう?」

「…分かりました」

お師匠は柔らかい声色で僕の事を窺め、首を横に振る。

エリザベート・バートリーと言う人物にはもう1つの真名がある。

その名はカーミラ。

ジョゼフ・シエリダン・レ・ファニユの怪奇小説のタイトルにして主人公。

エリザベート・バートリーが、カーミラのモデルになった人物なのだ。

そしてカーミラと言うと…竜の魔女に与している英霊と言う事になる。

だけど、立香さん達の様子を見るに、彼女とは初対面の様で何処か生暖かい視線を彼女に送っている。

『いずれ黒歴史になっちゃうような振舞いだよね★』

みたいな。

「エリザベート・バートリー…と言う事は、あの黒ジャンヌに与するカーミラと同一の存在と言う事…ですよね？」

「…そう、アタシが居るのね？」

マシユはエリザベートの名前を聞いた瞬間にハツとなり、カーミラの名前を口にする。

そんなマシユの反応を目にした瞬間にエリザベートの身体が僅かに強張り、声色が冷たくなる。

「そう、そう言う事…マスターも無しに呼び出されるなんて可笑しいと思っていたけど、まさかアタシが呼び出されていたなんてね」

「えいつ」

「むぐつ」

エリザベートは尾を強く地面に叩きつけ、憎しみの籠った声色で声を絞り出す。

それは絶対に認めてはならない過ちの姿なのだと言わんばかりに。

カーミラ…いや、エリザベート・バートリーは貴族としての立場を利用し、少女たちの血を搾るだけ搾り取った残忍な人物だ。

もつとも質が悪かったのが、その行いを悪であると認識せず、そして周囲の人間が指摘をしなかったところにある。

その最期は監獄城チエイテの石牢の中で日を見る事も人との会話もなく、孤独なものだったと聞いている。

最期まで、己は悪いことはなにもしていないと訴え続けながら…この少女は、その過ちを犯していることを認めている。

認めているからこそ、過ちを犯したままの存在であるカーミラを憎く思っているのかもしれない。

そんなエリザベートの憎悪に染まる顔を、両頬を包む様に触れる者

が居た。

「駄目よ、アイドルはみんなに愛と笑顔を振りまくものだもの！だから、にっこりと可愛い笑顔を見せて？」

白百合の王妃、マリー・アントワネットだ。

彼女は花のように可憐な笑みを浮かべてエリザベートの頬を優しく撫で、窘める。

それは母の様であり、姉の様でもある。

「そ、そうね。高々吸血鬼ごときで笑顔を曇らせるなんて、アイドル失格だわ！」

「うふふ、ねえみんな、彼女にも竜の魔女を懲らしめる為に手伝ってもらいましょう？」

マリーはエリザベートの手を優しく握って隣に立ち、思い切ったことを口にする。

エリザベートの口ぶりからして、間違いなくはぐれ英霊の一騎：味方に引き込むことは異論はなく、皆一様に首を縦に振る。

振るけども僕とアマデウスだけは微妙にぎこちない。

なんていうかこう：不安を感じているのだ。

アマデウスはもつと別の理由があるみたいだけれど…。

「これで、はぐれ英霊は後二騎。幸先が良いね！」

「ひと先ず今日はこの町で一泊、翌朝から作戦を決行しようか」

立香さんの言葉に頷き、日が傾きかけているのを見て予定を立てる。

僕は兎も角、立香さんは歩き通しで疲労がかなり溜まっている筈だ。

それに、ベースキャンプを設置して戦力の補充もしなくてはならない。

「それで、カーミラはどこにいるのかしら？アタシはアタシの手でアタシに決着を着けたいのだけれど」

「それでしたら、東雲さんのグループに入った方が確実かと…。吸血鬼カーミラはオルレアンに居る筈ですのぞ」

マシユはエリザベートの質問に答え、作戦の概要を掻い摘んで説明

していく。

戦力を此方に集中させるのだから、立香さん達について行くよりは僕と陽動組に入ってもらった方が遭遇しやすい筈だ。

エリザベートは此方へとつかつかやって来て、手を差し出す。

「話は理解したわ。貴方を一時的にマネージャーにしてあげる」

「マネージャーって言うより共闘者だけどね…よろしく」

差し出された手を握って握手をしようとする、空からケタタマシイ鳴き声が響きあがる。

すぐに意識を切り替えた僕は、空へと視線を移して苦虫を噛み潰した顔になる。

どうやら、あちらさんは僕を休ませる気が無いようだ。

「立香さん達は住人の避難を最優先に。僕とお師匠でアレを迎撃します！」

雲の切れ間からワイバーンの群れが飛び出してくる。

その数20騎…足にはタコのような悍ましい何かを掴んでいて、ティールへと接近してくると一斉にそれらを投下してくる。

タコはベチャリ、と言った感じで床に叩きつけられるとモゾモゾと全身をくねらせて5本ある触手を足のようにして体を起こし、手当たり次第に暴れ出す。

ティールの人たちはワイバーンとタコの襲来によって悲鳴をあげ、蜘蛛の子散らす様に逃げ惑い始める。

僕はひしつとしがみ付いたままだった清姫を無理矢理振りほどいて、住人に襲い掛かろうとしていたタコを手を持つ朱槍で刺し貫いて一息に絶命する。

「お師匠、空のはお任せします！」

「では、お主はこの小娘2人を上手く使って見せよ」

「マシユ、町の人たちを助けるよ！」

「はい、先輩！」

それぞれが成すべきことを成す為に動き出そうとした瞬間、清姫が待ったをかける。

「お待ちください、ますたあ。ますたあのお役に立つのも良き

わり、しまいには口角から泡を溢れ出させながら墜落していく。

僕は緩慢な動作で上空を見上げながら両腕を広げて、人の姿に戻って気絶したまま落ちてくる清姫を受け止める。

僕でこの有様なのだから、直撃を受けた清姫はもっと辛いだろう。事実として目を回してしまっているし。

「~~~~♪ふう、気分は最ツ高だわ！」

「~~~~ッ!!完全に声がデスメタルじゃねーか!!」

歌い切ったエリザベートは、周囲の反応に目もくれずに爽やかな汗を流して満面の笑みを浮かべる。

マシユは立香さんの前に立って立ったまま気絶し、アマデウスは綺麗な死に顔を晒しながらマリーに看取られ、ジャンヌは曖昧な表情を浮かべて頷き、お師匠は感心したように頷いている。

まさしく死屍累々：結果としてワイバーン軍団を一瞬にして壊滅させたとは言え、テイエールの住人達まで巻き添えを喰らって気絶してしまっている。

僕はあまりの惨状に、思わず兄弟子のような口調で怒声をあげる。

エリザベートはビクツと身を竦ませて此方を見やる。

「デスメタなんかじゃないわよーア・イ・ド・ル！皆失神してるけど、アタシの可愛さと神がかった歌声にイっちゃってるだけなんだから」「そうだね！神がかってたよ!!」

主に音痴と言う方向において。

兎に角凄まじい音量、そして城の様な音響設備によりとてつもない破壊力を誇っている。

空気がある限り、この宝具から逃れる事はできないかもしれない。

「まるで死地に赴く戦士の鬨の声のように心地よかったぞ、小娘。屈強な戦士でも中々あのような声は上げられまい……」

「だから！アイドルだって言ってるでしょ！ウガーツ!!」

お師匠はうっとりとした顔で、エリザベートを別の観点から褒め讃える。

確かにあんな鬨の声を上げられれば、相對した存在は委縮してしま

委縮できるだけの意識を繋ぎ止める事ができるのなら……だけど。

「あ、あはは……とにかくよろしくね……エリちゃん」

立香さんは、よろよるとした足取りでエリザベートへと近寄って声をかける。

エリちゃんと言う愛称が気に入ったのか、不機嫌だったエリザベートは掌を返す様に満面の笑みを浮かべ、立香さんへと向き直る。

「エリちゃん……可愛らしい響き……気に入ったわ、子犬！」

「子犬……いいけど……」

立香さんを気に入ったのか、エリザベートは竜の尾を犬のように振りながら姦しく立香さんに話しかけている。

僕は、いろいろな意味で無傷とは行かなかった迎撃戦にため息を零し、周囲の惨状を見渡して両手で顔を覆ってメソメソと泣き始める。

これ、テイエールの人たちになんて言えばいいの……。

「フオウ……きゆう……」

寄り添ってくれるフオウだけが、この場における唯一の癒しの様な気がした。

#21

作戦開始から早2日。

ベースキャンプからクー・フリーン達を呼び寄せて、役割分担の確認を終えてテイエルを出発。

それから僕たちはエリザベートの^{ゲリラ}ドラゴンブレスを軸に、オルレアに不規則なリズムで攻撃を仕掛け続けている。

無論、近くに居ると僕達にまでもない被害が出るので、エリザベートには単独ワンマンライブに行ってらっしゃいと言って、別行動させているのだけど。

夕暮れに暮れなずむ平原：ワイバーンの死骸が積みあがったちよつとした山に腰掛け、僕は遠くに見えるオルレアンを見つめる。

「ここにきてアナグマ決め込まれるたあなあ」

「恐らく、籠城するだけの余裕があると言うことか、此方が攻め込まないと言う確信があつて出てこないかのどちらかでしょう」

「あちらには無尽蔵の魔力炉である聖杯があるのだろうか。余裕を持つと言うのも当然であろう」

クー・フリーンは狩りつつたワイバーンの肉を手際よく解体して血抜きをしながら、つまらなさそうに吐き捨てる。

心躍る様な戦場になるかもしれない、と意気込んだは良いものの、蓋を開けてみれば定期的に現れるワイバーン退治に従事する羽目になったのである。

これは面白くないだろう：なんせ相手に護国の将が居るのだ。

そう言った武人と槍を交えるのは、兄弟子にとって生甲斐にも等しいのだろうか。

「おう、嬢ちゃん、火い起こしてくれよ」

「はい。お料理の時間でございますね？」

僕の背後にしがみついていた清姫は、兄弟子の言葉に頷いて漸く離れる。

：なんていうか、彼女が居ると本当に何か大切なものを失いそうな気がしたので立香さんの護衛に（押し）付けようとしたのだけれど、こ

れを清姫が頑なに拒否。

こうして、僕の班に炊事係として付き従うことになった。

勿論、戦闘においてはバーサーカークラスの名に恥じない攻撃力で、僕たちの助けになってくれるのだけれど。

清姫はカルデアからの補給物資の中から携帯用の竈を出し、手際よく調理の準備をする。

本人曰く家事スキルA++++らしい…まあ、実際料理は美味しくできていたし、甲斐甲斐しいので良いお嫁さんにはなれると思う。

盲目的でなければ。

「して、良太よ…明日はどうするつもりか?」

「アナグマを決め込むのであれば罫が明きませんし、立香さん達の首尾次第ですが…」

「俺に師匠が居るんだ、並大抵の事じゃ勝利は揺るがねえってもんさ」
お師匠はオルレアンを顎で指し示しながら、攻め込む段取りをつけるべきだと提案する。

流石にそこそこの抵抗をするものだと思っていたけど、籠城戦に持ち込まれるとは思っていなかったので僕としても肩透かしも良いところだった。

何事も物事は上手くいかないもの…僕はカルデアに通信を入れ、立香さん達の様子を伺う。

「ロマン、あちらはどんな塩梅ですかね?」

『はぐれ英霊の一人と接触して、一緒にそちらに向かってもらっている。ドラゴン退治のエキスパートだから——』

「ロマン……?」

朗報が聞こえた瞬間、突如通信がぶつ切りになり途切れる。

それと同時に周囲の魔力濃度が格段に濃くなり、まるで神代の頃今まで急速に遡ったかのようだ。

おそらく、待機中の魔力濃度が急激な上昇を見せたことによって、まるでジャミングの様にカルデアとの繋がりが断たれてしまったのかもされない。

「お師匠、兄さん…何か来ます」

「おうよ…ビリビリとした殺気が、あの城からこつちに向けられてやる」

僕はワイバーンの屍の山から立ち上がり、オルレアンの方へと目を向ける。

それに合わせて、夕食の支度にとりかかっていた清姫はその手を止め、僕の元まですり寄ってくる。

僕はそれを片手で制しつつもオルレアンから目を逸らさず、城の影で蠢く巨大な何かを見やる。

夕日に照らされる体軀は光を吸い込む黒…その体は城が犬小屋に見えるほど大きく、広げる翼は力強くも禍々しい。

正に悪竜…竜の魔女が使役するに相応しい巨大なドラゴンが、僕達を睨み付けている。

「あのドラゴンが居るからこそその籠城かあ…」

「うむ…実に屠り甲斐のある巨軀よな」

「そう言うのはアンタだけだぜ、スカサハ？」

お師匠とクー・フリーンが朱槍を手取るのと同時に、僕も格納していた朱槍を手を持つ。

確かに大きく、遠く離れた位置に居るにもかかわらず、此処まで魔力濃度を神代にまで回帰させるその覇気は此方の戦意を委縮させるに十分な迫力を有している。

けれども、お師匠は…僕らはその程度では怯まない。

これで怯むようでは、そもそもお師匠の厳しい修行に長期にわたってついて行けるわけがない。

「闇の時間である。血の晩餐である」

唐突に響く男の冷酷な声。

僕は素早く清姫を突き飛ばして距離を開け、お師匠とクー・フリーンも素早い身のこなしでその場を退避する。

僕たちがその場を離れた瞬間に、足元から鋭い杭の様なものが飛び出していく。

何も無かったはずのその場所に突如として現れた杭は、その場に残ることなくバシヤツと言う音と共に液体へと還っていく。

「ほう、腑抜けでは無いか…。貴様らの血はさぞや美味であろうな？」
夕日が地平線へと消えゆく中、無数の蝙蝠が大空から舞い降りて人型を成す。

闇を思わず黒の貴族服に身を包んだその男性は、淡くも美しい金糸の様なブロンドをたなびかせ、冷酷な光を宿す鋭い眼差しが僕達を射抜く。

底冷えするようなその眼差しの鋭さは僕の心の片隅に恐怖を生み出すが、僕はそれを飲み込んで真っ直ぐに受け止める。

「護国の将、ヴラド・ドラクレアとお見受けしますが、如何に？」

「ほう…竜の子と余を呼ぶか…ククツ」

あえて、僕は敬意を払う。

いかに反英雄、反英霊であろうとも…彼の功績は讃えるべきものだからだ。

元来、ドラキュラ…否、ドラクレアとは竜の息子と言う意味合いである。

それが転じて訛り、吸血鬼の名として扱われるようになったのだ。そんな僕の敬意にヴラド公は肩を震わせ、片手で顔を覆いながら静かに笑い始める。

どこか自嘲気味に感じるその笑みは、己の立場を正しく理解しているからこそその悲しい笑みの様だ。

「いかにも、余こそがヴラド・ドラクレア…いや、ツェペシユである。余は闇に堕ちし、狂いし悪魔である」

「…清姫、君に頼みがある」

僕は簡潔に清姫に頼みごとを言う。

要は、ヴラド公との戦いに横槍が入らないように周囲のワイバーンを片付けてもらうと言うだけ。

彼女の性格上僕の頼み事は決して断らない。

心苦しくはあるけれど、彼女は竜種であるとは言えただの小娘だ。

勿論僕よりも遥かに戦闘能力は高いけれど、同じ英霊同士となれば話は別…下手すると足を引っ張りかねない。

だからこそ、彼女には露払いを頼むのだ。

「分かりました、ますたあ…この清姫、必ずやますたあの言いつけを守りいたします！」

僕の予想通りに清姫は満面の笑みで頷き、颯爽と駆け出す。

ヴラド公は、彼女を横目で見るだけで手出しをしようとはしない。

「お師匠、良いですね？」

「…まあ、良かろう。私の出番はすぐに来るだろうが、な」

次いで、うずうずとしているお師匠に釘を刺す。

万が一が無いと言え、億が一はあるかもしれない…それに、あのオルレアンの巨大な悪竜に対抗するにはお師匠の全力稼働が必須になつてくる。

僕が生粋の魔術師でない事が本当に悔やまれる…もう少し魔力量が多ければ使える手も多いのだけれど。

「さてと…もうちよい派手にやり合えると思っていたが…サシの決闘になるか」

「で、あるな。なに貴様の血を戴き、次に貴様のマスターの血を戴くだけだ。単純に順序の差である」

クー・フリーンは、僕の前に出てヴラド公と対峙する。

夜の帳が完全に落ち、空には朱い満月が昇る。

彼方には爆音が、そして豪焰が上がり、ワイバーン達の悲鳴が平原に響き渡る。

「そうかい…戦士の礼儀だ。名乗らせてもらうぜ」

クー・フリーンは槍を構え、ヴラド公に対し鋭い殺気をあてる。

ただそれだけで荒れ狂う風が巻き起こったかのように、ビリビリと大気が震えだす。

ヴラド公もずぶり、と掌から鋭い杭の様な槍を取り出して構える。

「ランサー、アルスターの戦士クー・フリーン。我が名を手向けとし、その心臓…貫い受ける」

「来るが良い大英雄…我が領域にてお相手しよう」

轟音の様な咆哮と共にクー・フリーンの姿が霞む。

持ち前の速力を十全に活かしたその速さは僕の目には捉えきれず、影さえも掴ませない。

対してヴラド公は悠然と構え、地に槍を突き立てる。

『カズィクル・ベイ
血濡れ王鬼』

槍の穂先から地を赤く染め上げ、瞬時に無数の杭が地面から突き出していく。

だが、それらの杭をもつてしてもクランの猛犬は捕まらない。

何故ならば、クー・フリーンは既に高く跳躍して一直線にヴラド公へと襲い掛かろうとしていたからだ。

しかし、それを許すほどヴラド公も見立てが甘いわけでもない。

「ちいっ！」

「串刺しの時間だよ、クランの猛犬よ。モズの早贄の様に無様を晒すと良い」

地から突き立てられていた無数の杭は触手の様に蠢き、空中で無防備なクー・フリーンへと一齐に襲い掛かる。

失策に気付いたクー・フリーンは、素早く手に持つ朱槍を振るう事で急所目掛けて突き進む杭を薙ぎ払う。

杭に朱槍が当たった反動を利用して体をよじりながら杭の腹を蹴りつけて更に跳躍、朱槍に魔力を込めて一気に突き出す！

「オラアツ!!」

「ぬっ…!?!」

魔力を込められた朱槍は持ち手の半ばから鞭のように伸びて、杭の隙間を縫うように槍の穂先をヴラド公へと直進させる。

真名解放無しとは言え、一刺一殺の呪いの朱槍…心臓とはいかないまでも、確実に対象を食い破る猟犬の様に相手を追い詰めるのだ。

だが、ヴラド公は驚きはするものの慌てはしない。

「チツ…い」

ヴラド公は吸血鬼の側面を強化された状態で召喚されている状態で、自身の肉体を変化させることで槍の一撃から容易く逃れる。

それも無数の蝙蝠になることで、対象を自身から蝙蝠へと逸らし上手く難を逃れる。

クー・フリーンの着地の隙を見逃さないヴラド公は、蝙蝠から霧へと更に肉体を変化させ、クー・フリーンの背後へと素早く移動する。

「他愛なし」

「舐めてんじや…ねえっ!!」

背後から掴みかかろうと掌を伸ばすヴラド公に、クー・フリーンは振り向くことなく石突でヴラド公の腹を突き刺してそのまま投げ飛ばす。

獣の如き直観か、それとも先ほどの光景が目には焼き付いていたのかクー・フリーンは石突についた血を素早く払いつつもその場から離れる。

血が杭と化して、クー・フリーンの肉体を串刺しにしようとする襲い掛かって来たからだ。

「光の御子よ…貴様が真にそれであるならば、余を焼くことさえ容易いであろう?」

「言つてろ、タヌキが…」

まるで逆再生の早回し…ヴラド公の腹の傷は、何事も無かったかの様に血が傷に向かって吸い込まれていき、衣服と共に傷が塞がっていく。

吸血鬼としての権能を如何なく発揮していると言う事か…。

「まだ、余力はあるな?何を躊躇しているのかは知らぬ…しかし、それで余を斃せるとは思わぬことだ」

クー・フリーンは口角を不敵に吊り上げ、身体を引き絞る様にして槍を構えて一気に直進する。

ヴラド公もそれに付き合う様に真っ直ぐに進み、互いに槍を交えて火花を散らしていく。

槍が交差するたびに甲高い音が響き渡り、血の匂いが徐々に濃くなっていく。

遠くより、暴風が吹き荒れるかのような羽ばたく音が響き渡る。

それと同時に、遠くから聞こえてきていたライブも消える。

「どうやら、彼女も因縁の相手に巡り合った様だ。

「お主…はぐれを此処で使い潰すつもりか?」

「…潰れるのであれば、それまででしょう。僕たちは勝てる手段を以て勝たねばならない」

「に、しては立香を遠ざけているだろうに…」

「…本命は彼女ですからね」

僕は右手首を掴んで祈る様な面持ちで、クー・フリーンの戦いを見守る。

決して、令呪は使わない。

この令呪を使うタイミングはまだ先…あの神代の竜との対峙で使うべきなのだ。

お師匠は僕の傍らに立って、僕の真意を見透かすように声をかける。

聖剣の一撃すら防ぎきるマシユの盾。

あらゆる宝具を湯水のごとく扱う事の出来るエミヤ。

そして、はぐれ英霊3人の内、1人は竜の魔女と同じルーラーであるジャンヌ。

一方此方はお師匠と兄弟子と言う百戦錬磨が居る代わりに、お師匠に本領を發揮させることが難しい僕と、戦い慣れをしていない清姫、自称アイドルの血濡れの伯爵夫人…捨て石になるならばこちら側しかない。

幸いにして本領を發揮できないとは言え、お師匠は充分に強く、兄弟子もまた生き汚さで言えば一等賞だ。

億が一でも充分に生還できるはずだ。

「本命は立香さん…とはいえ、此方も本命のつもりであの魔女に挑むのですから、此処で潰れられても困りますよ」

長々とした槍戟は、やはり将と戦士の差であるのかクー・フリーンに軍配が上がった様だ。

ヴラド公の槍を的確にいなし、返す手で確実に肉を削ぎ落とす。

もちろんその際に現れる杭はクー・フリーンの肉体を傷つけていくが、矢避けの加護によって確実に致命傷だけは避けていく。

また、ヴラド公とてバックアップがあるとは言え、無尽蔵の回復機能を持っているわけではない。

燃料がなければ吸血鬼の権能は働かないのだろうから。

「悪いがここで店じまいだ…『刺し穿つ——』」

ヴラドの槍を弾き飛ばし、がら空きとなった心臓目掛けて真名を解放せんとした瞬間に上空から黒い焰を伴った剣が僕達に向けて襲い掛かってくる。

僕は両足をルーン魔術で強化しつつ全速で後退することで直撃は避けるものの、剣が地面に直撃した瞬間に起きた爆炎によって体を軽く炎で炙られてしまい、慌てて着ていた外套を脱ぎ捨てる。

お師匠とクー・フリーンも奇襲に対して回避行動を取ることで難を逃れ、上空に浮かぶ黒い影へと目を向ける。

「これは余の戦いである。邪魔をするな!!」

「戦い？殺されかけていたくせに良く吠えるわね！ほんと、笑っちゃうわ!!」

それはあまりにも巨大にして強大…びりびりとした覇気がその巨軀から発せられて全身が粟立つ。

全長にして20メートルはあろうかと言う黒色の悪竜が、僕達を殺気だった目で睨み付けている。

その頭には見知った顔の色違いの少女が立っている…なるほど、あれが黒ジャンヌか…？

「でも、私は寛大です…負けかけていた貴方に更なる力を与えましょう。死ぬ気で戦いなさい吸血鬼」

「貴様…それは余に対する侮辱と知れ!!」

せせら笑う様に竜の魔女はそう言う、ヴラド公は顔を怒りに歪めて敵意を竜の魔女へと向ける。

「どうやら、ヴラド公からの人望は得られていなかったようだ。」

「侮辱？兵器に誇りも何もないでしょうに！いまさら何を言ってるの、化け物の癖に！だから、私は命じます」

「貴様アツ!!」

ヴラド公は背から巨大な蝙蝠の翼を広げて大空へと飛び上がり、一直線に竜の魔女の元へと向かう。

だが、一足遅い。

竜の魔女は小馬鹿にしたような笑みを崩さずに宣言する。

「ヴラド三世、令呪を以て命じましょう——」

——
レジェンド・オブ・ドラキュリア
鮮血の伝承を暴走させなさい。

真の夜の帳が、今落ちる。

#22

「おのれ…おのれえっ!!」

「重ねて命じます。我が敵をその身が崩壊するまで殲滅しなさい。あはははっ!」

鮮血レジエンド・オブ・ドラキュリアの伝承と言うのは恐らく、ヴラド公の持つ特殊なスキルなのだろう。

名前から察するに、ヴラド公の吸血鬼としてイメージつけられたその側面を前面へと押し出す、ある意味不名誉極まりない代物だろう。

ヴラド公の肉体にこそ大きな変化は見られないものの、全身から黒い魔力が溢れ出し、喉が渴くのか首をかきむしりながら憎しみを竜の魔女へと向ける。

しかし、竜の魔女…黒ジャンヌはそれを嘲笑うかのように手に持っていた本を燃やしながら令呪による強制命令権を発動させる。

ヴラド公はその強制に抗う事が出来ずに、わなわなと体を震わせながらゆっくりと此方へと視線を向ける。

血よりも朱く暗い眼、口を開いて息を吐き出せば異常発達した犬歯が見える。

万人がイメージするであろう吸血鬼と言うその存在が、僕の目の前に存在している。

ヴラド公は乾いた唇を舌で湿らせた瞬間、その姿を震ませる。

「あぶねえ!!」

「血…その、温かい血はオレのものよ!!」

瞬きをした瞬間に僕の目の前に現れたヴラド公は、一切の躊躇なく鋭利なナイフの様に伸びた爪を備えた手刀を僕の喉元目掛けて叩き込もうとする。

しかし、クー・フリーンはその凶行を許さずに僕を蹴ることで跳ね飛ばし、手刀の一撃を朱槍を以てはじき返す。

「げうっ…!!」

凄まじい衝撃が僕の身体に走り、痛みに意識が明滅するものの慌てて受け身を取って地面を転がり素早く体を跳ね起こすと、その直前に

まで僕が居た所に無数の矢が突き刺さる。

矢と言う事はアーチャーの英霊が此方を攻撃してきたと見て良いだろう。

僕はルーン魔術を起動させて、矢避けの結界を自身の周囲に張り巡らせていく。

遠くに清姫が龍と化して吐き出すドラゴンブレスによる炎が見える。

あの分であれば、恐らく此方に戻すことはできないだろう。

ワイバーンが集中的に清姫に集まり始めている為だ。

「兄さん!!」

「おうよー」

クー・フリーンは全身に僕から提供される魔力を行き渡らせ、ルーン魔術による筋力、敏捷のステータスを爆発的に増加させる。

ヴラド公と鏢迫り合いを演じていたものの、突如跳ね上がった力を前にヴラド公は無様にも両腕を跳ね上げさせられ、その腹を思い切り蹴り抜かれて弾き飛ばされる。

弾き飛ばされたヴラド公は地面に直撃する瞬間に、肉体を無数の蝙蝠へと変じさせて大空へと舞い上がり、朱く輝く月を背に蝙蝠の化け物にも見える悍ましい姿を晒す。

その姿には最早護国の将と言う人の面影は無く、人の血や肉を啜る悪鬼の様な醜さしかない。

「そうよ、それでいいのよ…さあ、戦いなさい串刺し公!!」

「スカサハ、上のデカブツの足止めは頼むぜ。あの吸血鬼の引導は俺が渡す」

「よかろう…良太、お主は…」

ヴラド公が悍ましい咆哮を上げる中、黒ジャンヌはさも愉快気に啗い僕達を見下し続ける。

クー・フリーンはそんな黒ジャンヌの様子に苛立ちを隠そうともせず、全身から魔力放出を行う。

お師匠はクー・フリーンの言葉に素直に頷き、僕の方へと視線を向ける。

その視線は何処か心配そうで、らしくないようにも思える。

「構いません、此処で討ちとります!!」

「良かろう。魔境、深淵の英知…かの邪竜に見せてくれようか」

お師匠は自身の周囲に10本のゲイ・ボルクを呼び出すとそのまま、上空に待機する邪竜ではなく、黒ジャンヌに向けて撃ち込みつつ跳躍する。

黒ジャンヌは油断をしていたのか突如飛来してきたゲイ・ボルクを目を見開きながら視認し、手に持っていた旗を振るって黒焰を出して迎撃していく。

「ファヴニール!この鈍間!!私を守りなさい!!」

『!!』

ファヴニール：確か…ニールベルンゲンの指輪に出てくる邪悪な竜。
ジークフリートとの激闘の果てに斃され、かの英雄が竜殺しと呼ばれるきっかけになった存在だ。

邪竜は自身に向かって跳躍してくるお師匠に向かって顔を向け、口の端から炎を漏らし始める。

その凄まじい熱量は口から洩れる炎の光だけで察するには充分であり、その口から放たれるであろうドラゴンブレスが直撃しようものならば、トップサーヴァントであろうとひとたまりもないだろう。

充分に引き付けられてから放たれるドラゴンブレスは、確かにお師匠に向かって放たれる。

しかし、お師匠は足の裏から魔力をジェット噴射させる様にして跳躍の軌道を無理矢理変更し、しかしまるで舞うかの様にドラゴンブレスを避けて手に持つゲイ・ボルクに魔力を込め始める。

ドラゴンブレスに目が眩んだ僕は、爆発するような音のする方へと目を向ける。

まるで、小さな隕石が降り注いだかのようにクレーターが無数に出来上がり、血生臭くも爽やかな風が吹いていた草原とは思えない光景となっている。

『カズィクル・ベイ
『血濡れ王鬼』!!』

「おらあっ!!」

ヴラド公は自身の腹を搔っ捌く様にして開き、腸や溢れ出す血を無数の杭として放つ。

それは、腐臭にいた悪臭をまき散らし、此方の戦意を削ぐ勢いだ。だが、それでもクー・フリーンの槍の冴えは鈍らない。

むしろその鋭さは徐々に増していき、悪鬼どころか神すら穿ち殺さんとする勢いだ。

クー・フリーンは自身に向かつてくる杭に向かつて極限まで練り上げた魔力を込めた一突きを解放し、一気に融解させていく。

その一撃は因果逆転の力はなくとも膨大な熱量を持ち、振れていない地面は捲り上がりながらガラス状に溶けていく。

流石にこの一撃を受けては吸血鬼と言えど焼き尽くされるのみ。

故に自信の肉体を霧のようにして霧散させることによってヴラド公はクー・フリーンの一撃を難なく回避する。

「わわっと…!!」

神代の激戦にも似た光景を呆けて見ていた僕の顔の横を、遠方より射られた矢が通り過ぎていく。

何れも僕の頭を狙って放たれたものだけど、僕の矢避けの結界が上手く働いてくれたおかげでギリギリの位置で逸らすことに成功している。

現在、僕の魔力は2人に分けてしまっているので、自衛用の結界が弱まってしまっている。

今はまだ神秘を纏っていない矢なので何とか凌げてはいるものの、敵のアーチャーが宝具を使用してきたら僕の命はすぐに消し飛んでしまっていることだろう。

なので、僕はギリギリの死線をお潜り抜け続けなければならない。当たるかもしれない、と言う絶妙な距離感を保つことで真名ばれを恐れるであろう相手の心理について宝具を使わないと言う選択を取らせ続ける。

だけど、それも超時間行えるようなものではない。

もって5分…その間に暴走するヴラド公と頭上に居る黒ジャンヌとファヴニール…さらにはエリザベートのお相手の撃破をこなす必

要がある。

裏目と言えば裏目：まあ、僕も無茶を言っている自覚はあったし、態と立香さんを戦場から遠ざけてはいたのだけれど！

だけれど、どの道やらねば僕らは全滅必至：僕自身死ぬ気はさらさらないので、死ぬ気で魔力を捻出しつつ逃げ続ける。

上空へと見やると、お師匠は絶えずゲイ・ボルクを黒ジャンヌへと撃ち込み、黒ジャンヌはそれをファヴニールを盾に、あるいは自身が繰り出す黒焰と剣ではじき返す。

戦場を見渡すと既に50を超えるゲイ・ボルクが、かつてヴラド公が行った串刺し刑の様に地に突き立てられている。

その朱槍の林の中を、黒と蒼が幾度も交差し火花を散らしていく。

黒は悪鬼ヴラド公：吸血鬼のもつ純粋な『暴力』と多様な変化で克蘭の猛犬を翻弄し続ける。

対する蒼は克蘭の猛犬クー・フリーン：その手に携えている朱槍は2本。

1本は師匠であるスカサハから下賜された愛用の朱槍。

そしてもう1本は、お師匠が黒ジャンヌを攻撃した際に落ちてきた古い朱槍だ。

多様な変化に翻弄されてはいるものの、その槍の鋭さは正しくお師匠と並び立つに相応しく、時折炸裂する炎が見える。

槍術と原初のルーンによる、強力な魔術を並行して行っているのだ。

これらの手数はヴラド公の手数に勝るとも劣らず、互いに傷を増やしながらかも一切の手は緩めない。

総力戦の名に相応しく、死闘がこの場を支配している。

「このババア、私ばかり攻撃をして!!」

「口の聞き方から躰けねばならんとはな…まったく、その邪竜ファヴニールもお前の元では宝の持ち腐れだな」

大凡そ聖女と呼ばれていた存在が言っただけなような罵倒をお師匠に浴びせてくるけども、お師匠は意に介した風もなく絶えず黒ジャンヌに向かって攻撃を仕掛け続ける。

苛立ちのあまり黒ジャンヌは気付いていないが、お師匠はまるでにじり寄る死神の様にジワリジワリと距離を縮め続けている。

ファヴニールも取り付かれる愚を避けるために不用意に肉弾戦を行う事ができず、防戦を強いられ続けている。

ヴラド公も首筋に牙を突き立てられない苛立ちを忌々し気に唸り、クー・フリーンに猛然と襲い掛かる。

クー・フリーンは対照的に不敵な笑みを浮かべながらも、その目は凜猛な猟犬が如くだ。

ブラド公はクー・フリーンに向かって手刀を貫手の要領で叩きこみ、宝具の真名を解放。

腕から無数の杭が突き出していく。

手刀を紙一重で避けるクー・フリーンは、襲い来る杭を離すために旧い朱槍を腕に向かってかち上げる様に突き出しつつ手放す。

さすがにこれにはヴラド公も腕を跳ね上げない訳にもいかず、朱槍に貫かれたままの右腕を掲げる様に上げてしまう。

『アンサズ』!!』

高らかに宣言するように紡がれるルーン魔術起動の呪文。

それはキャスタークラスの時に得手としていた、炎の魔弾を生み出すルーン魔術。

たった1発の魔弾はバスケットボール大の大ききで練り上げられて、身動きが取れないヴラド公の胸元に炸裂する。

爆炎が2人を包んだ瞬間、クー・フリーンは素早く周囲のゲイ・ボルクへと駆け寄っては燃え盛るヴラド公に向かって投擲し、腹に、肩に、足に…容赦なく串刺しにしていく。

いずれも死の呪いを纏った古い朱槍だ。

内包されている神秘は言わずもがな、ヴラド公の肉体を傷つけるには充分であり、やがてその肉体は仰向けに倒れて地面へと縫い付けられる。

「この一撃…手向けとして受け取るが良い…その心臓を貫き受ける―」

「ヒュ……」

ヴラド公の身体に跨る様にして立ったクー・フリーンは、静かに死刑宣告の言葉を紡ぎ出す。

せめて、化け物では無く戦士として死ねと言わんばかりに。

『刺し穿つ死棘の槍』——』

逆手に持たれた朱槍を心臓目掛けて突き立てる様に下ろし、しかしすぐさま引き抜いて飛来する矢をヴラド公の血を振り払いながら凄まじい勢いで叩き落していく。

その槍捌きの前には矢など止まって見えると言わんばかりだ。

心臓：正確には霊核を破壊されたヴラド公は、クー・フリーンに手を伸ばしながら塵の様に消え去り、戦場に吹く風がその塵を運んで痕跡を消していく。

「手古摺ったな…わりい、マスター」

「兄さん、清姫と合流して弓手を討ち取ってください。アレにいられるとマシユの盾があっても立香さんの身が危ない」

「いや、そいつには従えねえな…こっちはテメエに消えられたら困んのさー」

そう言うなりクー・フリーンは僕の目の前まで一瞬で踏み込み、僕の脇腹を通す様に朱槍を突き出す。

その直後に金属がぶつかり合う甲高い音が響き渡り、何者かの気配が遠退いていくのが分かる。

「くっ…そう簡単にはいかないみたいだ」

「馬鹿が…アサシンクラスでもないやつが、暗殺者の真似事とはな」

集中力を切らしていた所為なのか僕は背後にまで迫っていた危険に気付かず、危うく死ぬ寸前だったようだ。

慌てて背後へと振り返ると、羽帽子を被った中世的な人物がサーベルを構えて立っている。

その表情は笑みを浮かべてはいるものの、どこか空虚さすら感じられる。

「なんにせよ、私は令呪によって君を斬らなければならぬ。ああ、斬ってみたくなる…単身私たちに歯向かう愚か者を！」

デオンがサーベルの切っ先を此方に向けると同時に、お師匠が僕と

デオンの間に割って入る様に空から降りてくる。

それと同時に僕たちの足元に13のルーン文字が展開されていく。

「宝具が来る！備えよ!!」

緊迫したお師匠の声と同時に、上空から豪雨の如き無数の矢が降り注いでくる。

その宝具は広域殲滅に適したもののなのか、敵味方問わずに降りかかる。

それは黒ジャンヌや目の前のサーベルを持った英霊も例外ではなく、忌々し気に舌打ちしながら逃げ惑っている。

お師匠の張った原初のルーンによる結界は、急場で作ったためか降りかかる矢を逸らす範囲が徐々に徐々に狭まっていき、身動き一つ取ることにも難しくなってくる。

「流石に撤退を考えねばな…」

「退いても無理そうですね…!」

お師匠は僕の魔力を元に結界を維持し続ける。

つまり、僕が完全にバテきってしまうと、結界を維持することが出来ずに矢によって穴だらけにされてしまう。

しかし、絶え間なく降り注ぐ矢は撤退を許さない。

必死に頭をフル回転させて打開策を練ろうとした瞬間、落ち着き払った男性の声^ガが耳に届く。

「邪悪なる竜は失墜し、世界は今落陽に至る。出合い頭だが、これも運命だ…撃ち落とす。『幻想大剣・天魔失墜』!!」

それは、上空から黄昏の剣気を伴って放たれた。

極度に大気中の魔力濃度が高まり、その大剣から放たれた一撃は矢の豪雨を弾き飛ばし、ファヴニールの頭の角を斬り飛ばす。

更に追撃と言わんばかりに、どこぞで見た特撮怪獣染みた亀の甲羅が超高速回転をしながらファヴニールの頭に直撃する。

「マルタ…あなた!!」

「安易に令呪切ってくれて助かったってもんよ、ジャンヌ・ダルク!」
「っ!退きなさい!!」

特撮怪獣みたいな竜…タラスクが直撃した瞬間に乗り移ったのか、

あのラ・シヤリテを襲っていたマルタが黒ジャンヌの目の前で、とてもしてはいけないような笑みを浮かべながら拳を揉み解している。

黒ジャンヌは慌てた様子でファヴニールに頭を振り払わさせて、マルタを引きはがすと同時に雲の切れ間へと逃げる様に飛び去っていく。

「病み上がりではこの程度か…そんな剣士よ、次はオレが相手をしよう」

「…いや、私はこのまま退かせてもらうよ。我らが竜の魔女も退いてしまったからね」

バル・ムンクを持つ剣士は、その大剣の切っ先をサーベルを持った英霊へと差し向けるが、意外にも理知的だったのかあっさりとサーベルを鞘にしまって背を向ける。

「あまり時間もない…君たちには期待しているんだから頑張ってくれなきゃ困る」

「っ…あなたは！」

「それは敵に聞く言葉ではない…それに聖女マルタの加護とそのドラゴンスレイヤーが居れば大丈夫だろう。ああ、次は殺し合えると良いね」

サーベルの英霊は言うだけ言うと、一足飛びで戦場を離れていく。

僕は倒れそうになる体を槍で支えながらもマルタとバル・ムンクを持つ剣士、ジークフリートへと目を向ける。

「清姫とエリザベートと合流して撤退…事情、聞かせてもらいますよ」

2人は僕の言葉に静かに頷き、敵対する意思を見せない。

もつとも黒ジャンヌを攻撃するくらいだから敵ではないのだろうけど…マルタに関しては詳しく話を聞く必要がある。

今ある問題を片付ける為、僕たちはさっそく行動に移した。

#23

オルレアン撤退から数時間後：ティエールの町のある山の麓を野営地とした僕らは、不穏な輝きを湛えた月が中天に輝くころに立香さん達と合流。

互いの収穫について報告し合いながら、起こしたたき火を全員で囲む。

此方はヴラド公、カーミラを撃破、竜殺しとして名を馳せたジークフリートと、敵側についていたはずのルーラー・聖女マルタを味方に引き込むことに成功。

立香さんはティエールから南西に下った先にある、ボルドーと呼ばれる町にて聖人：こちらも竜殺しとして有名なライダー・ゲオルギウス：またの名を聖ジョージを味方に引き入れることが出来た。

ゲオルギウスは散発的にワイバーンの襲撃を受けていたボルドーから人々を逃がすために戦っていたと言う話なのだけど、昨日からワイバーンの襲撃頻度が激減。

お陰で弄することなく、ボルドーの人々を避難させることができたそう。

：物事と言うのは、何がどう転ぶのか分からないものだなあ。

「さて、聞かせてもらおうか：聖女マルタ。お主はあの竜の魔女の英霊だとおもっていたのだから？」

「ええ、確かに私はあの竜の魔女である、黒いジャンヌ・ダルクによって使役されていました。彼女は配下に居る英霊すべてに狂化スキルを付与し、自由意思を可能な限り剥奪しています。もちろん、例外もありませんが…」

マルタは小さく頷いて、今日に至るまでの話を始める。

僕たちはそれを黙って聞くのみだ。

アマデウスはマルタの声：声紋から嘘かどうか見破ろうと、些か視線が鋭く感じられるけど。

「本来狂化スキルを付与できる英霊と言うものは、元々バーサーカーであつたか、バーサーカーの資質を持つ英霊のみとされています。い

くら偽物の聖杯と言えども特異な条件では属性付けは難しく、付与できても精々がDランク止まりになります。そう言った事情もあって、最初こそ彼女の命令を拒んでいたのですが…」

「令呪を使われ、否応なしの殺戮マシーンとならざるを得なかったか。キミの対魔力能力は、かのブリテンの騎士王と並び立つが、狂化を施されては抵抗も難しいと言った所か」

「では、聖女マルタ様が東雲君を助けてくれた時に令呪を使わなかったのは…ルーラーの持つ各英霊の令呪…その二画を使い切っているのですね」

マルタの言葉にエミヤが続き、ジャンヌが納得したように頷く。

各英霊の令呪を二画ずつ所持している…あの分だと令呪の真つ当な使い方はしてこないだろうけど、それでも脅威は驚異だと思う。

「それって、はぐれである私たちの分の令呪も持つてるってこと？」

エリザベートは、僕の背中から身を乗り出す様にしてジャンヌに質問をする。

どうも、エリザベートは竜の血を引いていると言う事もあってか、ジークフリートやマルタ、ゲオルギウスが怖い様で、僕の背中に隠れ続けている。

いや、険悪な態度で接されても困るのでこれはこれで構わないのだけれど…僕の左隣にいるライアス^清スレイヤー^姫IIサンが剣呑な雰囲気^姫を全身から発しているの、非常に胃が悪い。

努めて意識から外しているものの、怖いものは怖いのだ。

そんな僕の心境を知ってか知らずか、終始穏やかな雰囲気^姫を崩さずにジャンヌは首を横に振る。

「…私の考えが正しければ、彼女はルーラーとして…いえ、英霊として出来ない状態の筈。そもそも聖杯戦争として成立していたものを、ルール違反が行われた事をトリガーとして大戦に切り替わっています。流石にイレギュラー召喚な上、対応した令呪を配られていない皆さんの分までは用意されていませんよ」

「そ、なら良かったわ。土壇場になってマネージャー裏切りたくないし」

この言葉にゲオルギウスやジークフリートも、僅かに顔の表情を緩めて安堵した様子だ。

彼らには今置かれている本当の状況を、所長やロマンを交えて説明してある。

この戦いに負けると言う事は、彼らが成し遂げてきたことすべてが無駄になったと言う事になる。

人類史の焼却と言うものは、他ならぬ英霊達を否定することに繋がっているから…。

「ふむ…で、あれば指揮官の意見を聞きたい。今後はどの様にオルレアンを攻略するのか？」

『私の意見としては、ファヴニールをジークフリート、ゲオルギウス、スカサハの3騎に任せ、清姫、エリザベートでワイバーンに対する露払い。エミヤ、クー・フリーン、マリィ、アマデウスで残る英霊を討伐し、藤丸 立香、マシユ、ジャンヌでオルレアンの本丸を討とうと思うのだけれど』

「わ、私もですか!？」

ゲオルギウスは顎髭を手で撫でながら笑みを浮かべて頷き、先ほどから立体映像でこの場に居合わせている所長に質問を行う。

その内容に一番驚いたのは、他の誰でもない立香さんだ。

『デミサーヴァントとは言え、単独行動のスキルが無い以上マシユと貴女はセットで動かなければならないのよ。エミヤはアーチャーのクラスなので、問題はないのだけれど…』

「し、東雲さんは…」

『駄目ね…東雲は貴女より駄目。現界に関しての魔力提供を直にスカサハに行えない東雲が、彼女の傍を離れるのはそれなりにリスクを伴う』

立香さんは地面に座ったまま自分の手を強く握りしめ、歯を食い縛る。

相手の本拠地に少数精鋭で潜り込むなんて言うのは、中々覚悟がいる事だと思う。

特に、自身に何もないと思っている人には…。

そんな立香さんを憂いてか、マシユは立香さんの手を優しく握って顔を覗き込む。

「大丈夫です、先輩。何があっても私が守りますし、ジャンヌさんだって一緒なんですから！」

「それに、英霊討伐組のメンバーも大概だ。すぐにマスターの元に馳せ参じる事になるだろうさ」

「それは…」

マシユは勇気づける様に声をかけ、エミヤもまた安心させる様に口にする。

2人の言葉に意を決したのか、顔を上げて力強く頷く。

「分かりました！頑張ります！」

『エミヤが言ったように、ファヴニールの問題はあれど大英雄がいるのだから心配する必要はないわ』

「ふむ、話がまとまったところで…些細な問題、しかし解き明かすべき事があるだろう」

お師匠はピンツと人差し指を立てた後、その人差し指をマルタへと向ける。

…確かに些細な問題と言えば些細な問題ではあるのだけれど、マルタには1つ不可思議な点がある。

「な、何かありまして、オホホ…」

「おほほ、ではない。お主、何故クラスを鞍替えしている…見た所、遭遇していた時に持っていた杖も無いようだが？」

お師匠が指摘した瞬間、場の空気が一瞬にして凍り付いた。

正確には凍り付いたのはマルタのみだったのだけれど、彼女は表情を強張らせてまるで油を刺していないブリキのロボットの様にギギギ、と顔を逸らす。

その反応から察するに、杖を無くした件に関してはあまり触れられたくはない様だ。

だが、空気を読めない人と言うのは、何処の世界にもいるものである。

「おいおい、宝具失くすなんざあ、相当の事態だぞ？スカサハが壊して

もしたか？」

「たわけ、あのような神秘の塊をおいそれと壊せるわけも無かろう？」

「ふむ…事情を話してもらえますかな？」

クー・フリーリンは首を軽く壊した後にお師匠に目を向けるが、お師匠はそれを鼻で笑う。

神秘の塊と言うくらいなのだから、本当に相当な代物を失ってしまったと言う事になる。

マルタはますます肩を落として落ち込んでしまい、深いため息をついてしまう。

そんなマルタの様子を見かねてゲオルギウスは救いの手を刺し伸ばすけども、マルタは力なく首を横に振る。

「話しましょう…何か疑念があっても面倒なので——」

そう言つて話し始めた杖紛失…正確には杖消失事件の顛末は、なんとも不可思議な話であった。

令呪によつてラ・シャリテ襲撃を終えたマルタは、令呪が無くなったことを良い事に勝手に黒ジャンヌと袂を分かち、再起を図るために付近を流れる川へと向かつていたそうだ。

聖女マルタは水に関わる事が多かった——途中で補足としてロマンが説明してくれた——それで、水辺の近くに居ると本人曰くノつてくるそうだ。

そんな川辺に丁度いい霊脈を見つけたマルタは、低いランクとは言え狂化スキルと折り合いを付けるために主に祈りをささげていたところ、『あの人』なる人物からいただいた聖杖が消えていた、と言うものだった。

「マルタ様…あの人、と言うのは…」

「…ええ、その通りです」

「ですが、今の貴女は大変落ち着いていらつしやる。もしや、これは奇跡が…」

ジャンヌとゲオルギウスは、『あの人』と言う言葉にざわつき、杖が消えてしまった謎についてもマルタの信仰が奇跡を呼び起こしたのだらうと言う事で、何故か納得してしまっていた。

『英霊のスキルに奇跡と言うものがあるのだろうか。奇跡とは不可能な事柄を可能にせしめる事を言う。女王スカサハは霊基を弄れるものの、聖女マルタにその能力はない。きつとこれもイエス「あ??」ロマンが何かしたり顔で解説をしようとする、突如ヤンキーの恫喝の様などみ声がロマンの言葉を遮る。

今度こそ、その豹変ぶりを目の当たりにした僕たちは一瞬息のみ、ジイツとマルタに向けて視線を向ける。

「あ、あら…私ったら…コホン。皆様が言う様にきつとこれも主の思し召しだったのでしよう…杖が無くなってしまう以上この拳を使って戦うしかありませんが…罪滅ぼしをしなければなりません。そうしなければ、ラ・シヤリテの…ひいてはフランスの人々に顔向けすることができないのですから」

「やはり貴女は聖女さまなのね！私、親交を深めるためにもつとお話をしてみたいわ。ね、ジャンヌ?」

「え、ええ…聖女マルタ様の篤い信仰。そのお話を少しでも聞かせていただければ…」

マリーはそんなヤンキーみたいな気質を見せたマルタの事など意に介さず、ポワポワとした雰囲気崩さずにマルタへと駆け寄り、その両手を掴む。

無論アマデウスはそれを止めようとするものの、こうなっては止まらない事をも知っているのか諦めた様な顔をしている。

「あ、僕ちよつと席外しますね」

「ますたあ、この清姫もご一緒に」

「用足しに行くだけだから絶対来るな、来ちゃあ駄目なんだ…」

とりとめのない談話に移ったところを見計らって僕が立ち上がると、清姫は虚ろな眼差しでついて来ようとする。

とは言え用足しをしに行くつていうのに女の子を連れていくほどの剛毅さを持ち合わせていない僕は、これまた虚ろな目で清姫の申し出を断る。

「わかりました…。すぐに戻らなければこの清姫…すぐに駆け付けますので…」

「ジャーマネ相手に執着し過ぎよアオダイシヨウ。もう少し大人しくしていたらどうなのよ？」

「コモドオオトカゲに言われたくありませんわ……」

「な・ん・で・す・って〜？」

まさしく一触即発……そういった雰囲気纏い清姫とエリザベートは互いに視線を交差させる。

仲裁しようと声をかけようとすると、エリザベートは後ろ手でさつさと行けとジエスチャーをして僕を追い払う。

心の中で礼を述べつつ、漸く身軽になったその足で僕はその場を離れるのだった。

……エリザベートのライブ、聞いてやるくらいはすべきかなあ……？

まるで、足手まといだった。

ワイバーン相手にどうにかなろうとも、僕は英霊相手には無力なのだと言う事実を只管に突き付けられていた。

防戦くらいならできる？

何と言う傲りなんだろう……アサシンクラスでもない存在に暗殺されかけるなんて、良い笑い話じゃないか……。

そんな暗い感情を必死に胸の内に抑えつけながら、僕は皆とは離れた場所で兄弟子相手に槍を振るっている。

突いて、薙いで、払って……いずれも鋭い殺気を込めたままに、必死に振るっていく。

だが、兄弟子であるクー・フリーンはいずれも受ける事無く見透かしたように避け続ける。

「そら、もっと突いてこい。テメエは見込みがあるんだからよ」「っ……せいっ!!」

強く踏み込み、渾身の一撃を突き込む。

勿論ルーン魔術による身体強化を乗せた一撃は、常人であれば視認することすら不可能だろう。

だが、人ではない存在にはその限りではない。

やはり、クー・フリーンは僕の一撃を容易く避ける。

瞬間首筋に走る殺気に、僕は慌てて突き出していた手首を立てる事で、死の一閃を手に持つ槍で受け止めて致命傷を避ける。

しかし、その一撃は容易く僕の身体を弾き飛ばして背中から強かに地面に身体を打ち付けてしまう。

「ヒュ…!!」

身体から絞り出す様に息を吐き出し、反動で地面から浮いた瞬間に槍の石突を地面に叩きつけて、腕力だけで体を上へと跳ね上げさせる。

身体が充分に跳ね上げられれば、支点にしていた槍を薙ぎ払われて空中でドラム式洗濯機の中に放り込まれたかのように大回転し始める。

「ほい、一丁上がり!」

「ぐえ…」

クー・フリーンは無様に空中で回転している僕の胴体を軽く蹴り上げて、肩で受け止めてそのまま担ぐ。

お師匠に引き続いて、兄弟子にまでお米様抱っこされる羽目になってしまった…。

いやまあ、お師匠程気兼ねしなくていいのだけれど。

「なあに、焦ってんだ?」

「…焦ってるってわけじゃ…」

槍の軌道どころか僕の心の内まで見透かされていたようで、快活に笑いながら僕のお尻をペシペシと叩いてくる。

「ったく、マスターもまだまだまだケツが青いもんだ。その分じゃ女を抱いたことすらねえだろ?」

「兄さん、セクハラっすよセクハラ〜」

僕は仕返しと言わんばかりに胸板に膝で思い切り蹴るものの、大してダメージになっていないのか体幹がぶれる事が無い。

まあ、僕も身体強化は切っている上に強く蹴っている訳でもないの
で、じやれているようなものなだけだ。

「スカサハに強いところを見せてやりてえってのは分かるけどな…畜

勇は駄目だつたろうが」

「…僕は、できる事をしたいんです。何もしいままでその場に居るのが…苦痛で…」

何もできないと言う事は、死んでいることに等しく感じてしまう。きつとそれは…あの人達を見てしまったからなのだろう。

僕の親権を押し付け合っていた、あの人たちを。

「それこそ馬鹿だって話だ。英霊なんてのは呼び出した奴の兵器だからな。お前はその場に居るだけで兵器を使っているに等しい。お前は居てくれるだけで俺たちに戦う理由をくれてんのさ」

「居るだけで…?」

クー・フリーンは僕の言葉に小さく頷き言葉を続けていく。

「スカサハはどう考えてるか分からねえけどな、俺っていう戦士はお前に勝利を奉げる駒みてえなもんだ。お前が見ているってだけで恥ずかしい戦いはできねえってなもんさ。単純なもんだろう?」

「それが、マスターと英霊の関係性なんでしょうか?」

「少なくとも、俺とお前の関係性ってだけだ」

英霊それぞれに個性や性格があるならば、英霊の数だけ付き合い方と言うものがある。

少なくとも、クー・フリーンは僕に自分で言ったような使うものと使われるもののドライな関係性を求めている。

勿論、情が無い訳ではないのだろうけど、少なくとも戦場にそれを持ち込むつもりは無い。

「…そんなものですか」

「そんなもんだ…あんま難しく考える必要はねえだろ。明日は正念場だ…気張れよマスター」

クー・フリーンはそれだけ言うのと快活に笑って、野営地へと僕を運ぶ。

マスターとしての在り方…それが僕の頭の中で眠るまでグルグルと回り続けた。

広大な平野で、僕たちは待ち受ける軍団を睨み付ける。

空を覆いつくさんが如くのワイバーン達はけたたましく咆哮をあげてこちらを威嚇し、しかし襲ってくる素振りは見せない。

それは絶対的な強者としての誇り驕りがあるからだろう。

強大な邪竜ファヴニールは、天を貫かんと大きな咆哮をあげて憎しみに満ちた目を僕達に：とりわけ縁の深い長身瘦躯の大剣使いへと注ぎ続ける。

かの剣士はそれでも臆することなく、泰然とした態度を崩さない。

ジークフリート：かつてファヴニールを討ち取った悲運の英雄は、この戦場においても英雄然とした雰囲気をも崩すことは無い。

ピリピリとした空気の中、ファヴニールの足元から邪竜の旗を掲げながら竜の魔女が前へと出てくる。

「こんにちは、ジャンヌの残り滓」

「……いいえ、私は残骸でもないし、そもそも貴女でもありませんよ、竜の魔女」

「……？」

完全に見下した視線を送り嘲る様な笑みさえ浮かべていた黒ジャンヌは、ジャンヌの言葉に虚を突かれたような顔になり、訝しがる様に首を傾げる。

英霊、と言うものは座からコピーされた分身：所謂分霊と呼ばれる存在だ。

故に、同一人物ではないと言う言葉には僕としても些か疑問に思わざるを得ない。

「貴女は私でしょう。何を言っているのです？」

「今、何を言ったところで貴女に届くはずがない」

ジャンヌは深呼吸してから毅然とした力強さで前へと進み、その手に持つ救国の御旗を高く掲げる。

それは目の前の脅威に対する猛然とした反抗であり、不退転の覚悟の顕れでもある。

「この戦いが終わってから、存分に言いたいことを言わせてもらいます！」

「ほざくな!!」

黒ジャンヌはジャンヌの言い分、態度が気に入らないのか、怒りに顔を歪めて黒焰を纏った魔力を放出させる。

まるで、自身の怒りを僕達に見せつける様に。

「この竜を見よ……この竜の群れを見るがいい！今や我らが故国は竜の巣となった！」

黒ジャンヌは空いた腕を大きく広げて、自慢の玩具を誇るかのような笑みを浮かべる。

無邪気に邪悪に笑みを浮かべ、正しいものを見せるかのように。

「ありとあらゆるモノを喰らい、このフランスを不毛の土地とするだろう！それでこの世界は完結する。それでこの世界は破綻する。そして竜同士が際限なく争い始める。無限の戦争、無限の捕食……それが真の百年戦争——邪竜百年戦争だ！」

「貴女は……間違っている!!」

愉悦に歪んだご高説を真っ向から否定するように、立香さんが声を張り上げる。

そう、それはジャンヌ・ダルクの願いの終着点としては、あまりにもかけ離れてしまっている。

そもそも、彼女が旗を掲げた理由は……

「何……!!?」

「必至に戦って！必死に耐えて！それでも前を向いて、裏切られて！それで憎むのは良い、憎まれても仕方がない！マリーだと言ってた、『フランス王家は貴女にうしろめたさがある』って……だから、それはきつと正当な怒りなんだと思う……」

「ならば、私の行う事に口を出すな、小娘！」

「でも、その願いは間違っている!!」

立香さんの言葉に、汚物を見るかのような視線を向ける。

まるで、触れるなど言わんばかりに……そして、真っ向から否定する言葉が立香さんから放たれた瞬間、突如ファヴニールの身体に大砲に

よる砲撃が叩き込まれる。

「次から次へと…っ!!」

僕達から見て右方向…そこにフランスを守る兵士達が一齐に大砲をファヴニールやワイバーンに向けて撃ち続けている姿が見える。

その先頭には白い鎧を身に着けた騎士の姿がある。

「撃て…ここがフランスを守れるかどうかの瀬戸際だ!後の事など気にするな、フランス中からかき集めた砲弾と言う砲弾!撃って撃って撃ちまくれ!!」

「ジル!!」

「ジル・ド・レエ…私のすることを貴方が否定すると言うの!?!」

かたや喜びに、かたや悲しみに満ちた声で先頭に立つ騎士の名を呼ぶ。

ジル・ド・レエ…青髭と呼ばれた狂気の殺人嗜好者は、しかしその片鱗を感じさせない強い勇士としての覇気を存分に僕達に見せつけてくる。

「恐れるな!嘆くな!退くな!!人間であるならば、此処でその命を捨てろ!!!」

火砲に、咆哮にかき消されるはずのその言葉は、遠方であっても僕達の耳にしつかりと焼き付く様に聞こえてくる。

まるで力強い獅子の咆哮が如し、だ。

「もう一度言う!恐れる事は決してない!何故なら我らには——」

——聖女がついている

あまりにも力強い想い。

それは確かに彼らを鼓舞し、そして僕達をも鼓舞させる。

兄弟子は朱槍を肩に担ぎながらニツと口角を吊り上げ、お師匠は心地よさそうに瞳を閉じて言葉に酔いしれる。

アマデウスは少しばかりの呆れと共に楽隊を用意し、マリーは咲き誇る白百合の如き可憐さを笑みを以て伝える。

エリザベートはこの極地において臆することなく気力に満ち溢れ、

清姫はこの土壇場においてもブレずに僕に寄り添い続ける。

タラスクの背に仁王立ちするマルタは拳を揉み解しながら、感極まっているジャンヌに声をかける。

「あんな風に言われたら、負けなんて認められない…このカチコミであの魔女ぶん殴って改心させるわよ！」

「マルタ様…はい!!」

マシユは盾を前へと構えて立香さんの前に立つ。

「マスター、貴女は私が必ず守ります…守ってみせます！」

「うん！マシユ、行こう!!」

「じゃ、手筈通りに…立香さん、君は後ろを振り返らずに突っ走れ！」
全員の準備が整ったところで、僕は立香さんに声をかける。

振り返らずに突っ走れ…振り返ってしまおうと足が止まってしまおうだろうか。

ならば、彼女には走って走って走りまくって…オルレアンへと辿り着いてもらう必要がある。

何故ならば、目の前にいる魔女はただの幻影…この場に居はしないのだ。

カルデアだって無能じゃない…遭遇した英霊の霊基はすべてチェックしているし、その霊基パターンが戦場に現れればすぐに察知できる。

普段はヒステリックでもやる時はやる司令官と、勤勉なドクターがいるのだから…できないわけがない。

「強固な信念…反吐が出そう。ファヴニール！あの聖女を、あの軍を、この祖国を!! 悉く燃やし尽くしなさい!!」

ファヴニールが一步前へと出ると、合わせる様にジークフリートとゲオルギウスが一步前へと出る。

信を置けると思ってくれているのか、その背を僕達に向けながら。「三度、貴様と相見えようとはな。もしかすると、別の時空、別の世界では違う形で繋がったかもしれないが——!!」

「ジークフリート…竜殺し!!」

ジークフリートは、その手に大剣を持って天に向かって掲げる。

邪竜を前にした英霊は、まるで1枚の絵画の様に美しく見える。

「ファヴニール！邪悪なる竜よ！俺は此処に居る！ジークフリートは此処に居るぞ！！再び貴様を黄昏に叩き込む。我が正義、我が信念に誓って！！」

「蹂躪しなさい！！」

ジークフリートがバルムンクをの切先をファヴニールへと差し向けると同時に、猛然とファヴニールが大地を踏みしめて此方へと向かってくる。

ファヴニールの巻き起こす砂煙に黒ジャンヌは巻かれると同時に姿を消す。

おそらくオルレアンで高みの見物と洒落込むつもりなのだろう。

「走れ！走れ！！走れ！！」

「途中まではお供しますわ。さあ、行きますわよ！

『ギロチン・フレイカー
『百合の王冠に栄光あれ』！』

それぞれがそれぞれの仕事を行うために、散開してオルレアンへとひた走る。

この場に残されるのは、ジークフリート、ゲオルギウス…そしてお師匠であるスカサハと僕だけだ。

僕はこの手に朱槍を持って、深く息を吐き出す。

「…すまない、この土壇場で言う事でもないのだが…」

「どうかされましたか？」

先ほどまで雄々しかったジークフリートは、しかし非常に申し訳なさそうな声をあげる。

自信がない…と言うのとはまた少し違うのだけれど、口にすべきでは無いけど言っておかないと後悔するような…そんな雰囲気だ。

流石に隣に立つゲオルギウスもそんなジークフリートに感化されたのか、不安そうに声をかけている。

「…正直に告白すると、どうして勝てたのか俺にも分からん」

「いきなり不安な事を言いますね…ジークフリート殿程の英雄が」

ゲオルギウスは手に持っていた長剣の切先を僅かばかり下げて、ジークフリートへと顔を向ける。

言葉とは裏腹に不安さを感じさせない表情だけでも。

「記憶に刻まれているのはただ一つ。あれは勝利して当然の戦いではなく、無数の敗北から僅かな勝ちを拾い上げるような戦いだった。慎重に策せ、大胆に動け、広い範囲で物事を見ろ、深く一点に集中しろ」
ジークフリートは僕へと顔を向け、ジークフリート自身が死闘の中で感じ取っていた感覚を言葉へ変えていく。

「海のように、空のように、光のように、闇のように…矛盾する2つの行動を取れ。そうしなければあの邪悪なる竜は絶対に倒せない」

「だ、そうだ…良太、お主も覚えがあらう?」

「何ッ?!」

お師匠はジークフリートの言葉にくつくつと笑い、僕の肩をポンと叩く。

…思い起こされる、忘れもしない春の夜…どうあがいても勝てやしなさそうな波濤の獣との一騎討ち。

自身の持ちうるすべてを叩きつけ、なお勝てそうにもない絶望感…。

僕は思わず頭を抱えてガタガタと震えだす。

「勘弁してくださいください勘弁してください悪口言わないんで勘弁してください」

「まったく…神秘の薄れた個体とは言え、波濤の獣を制したのだからシャキッとせんか!」

「なんと、噂に名高い海獣クリードを…これも主の思し召しか…ジークフリート殿、この戦い、安心してマスターに剣を預けられますな」
「フツ…よもやこんな豪胆なマスターに出会えるとはな…」

ファヴニールが目前に迫り咆哮を上げると同時に、脳裏に居るあの海獣の咆哮と声が重なる。

「や、や、やってやらあつ! かかってきやがれクソ海獣があつ!!!」

「ふむ、やけっぱちになったな…では、各々全力で事にあたるとしよう」

「出鼻を挫くといたしましょう…これこそがアスカロンの真実!」

僕が朱槍を地面に突き立てて13の原初のルーンを展開し始める

のと同時に、ゲオルギウスは高く剣を掲げて宝具の真名解放を始める。

それと同時にジークフリートもバルムンクを肩に担ぐ様にして構え、ファヴニールへと敵意を漲らせる。

「撃ち落とす…『幻想大剣・天魔失墜』!!」

「汝は竜・罪ありき! 『力屠る祝福の剣!!』」

同時に放たれる竜殺しの宝具は、こちらへと突進してくるファヴニールの体軀を確かに押し留め、ファヴニールは大きくたたらを踏む。

しかし、邪竜はこれでは止まらないと言わんばかりに口内に爆炎を滾らせ、一直線にすべてを焼き払おうとする。

「そら、すぐに倒れてくれるなよ!」

お師匠はファヴニールの下顎を下から突き上げる様にして朱槍を投げ放ち、頭を思い切り上へと跳ね上げさせる。

すでに吐き出されなければならぬドラゴンブレスは、その一撃によつて天空へと放たれて炎の柱が一時的に出来上がったかのようにもみえる。

真名解放をしないであれだけの一撃を叩き込むお師匠が凄いのか、それとも言うほどファヴニールが弱いのかは分からない。

けれども竜殺しを含め、僕達に一切の油断は無い。

お師匠や一時的にパスを繋げたジークフリートとゲオルギウスでさえ、僕から遠慮なく魔力を持って行っているのだから。

すぐさまファヴニールは頭を足元にいるお師匠へと向けて、その逞しい前足を思い切り持ち上げてそのまま下ろす。

その一撃は容易く地震を引き起こし、衝撃波が荒れ狂う様に放たれる。

しかし、そこは影の国の女王…武芸百般を修めた戦士であるお師匠には非常に鈍重であり、前足を振り下ろす頃には跳躍してファヴニールの頭へと取り付いている。

同じくして、ジークフリートとゲオルギウスがファヴニールを左右から挟撃し、分厚い甲殻に覆われた足を、腹を自慢の宝具で斬り裂い

ていく。

「そらっ!!」

傷を付けられたファヴニールは猛り狂い、頭を大きく振ってお師匠を振り落とそうとするも右目にアンカー代わりと言わんばかりに朱槍を突き立てられて振りほどくどころか視界を奪われる羽目になる。

これには堪らずファヴニールは逃げ出そうと大きく翼を動かしてゆっくりとした速度ではあるものの大空へと舞おうとする。

「地べたを…這え!!!」

令呪を一画、自身の魔力代わりに消費して13の原初のルーンを起動。

僕の前から放たれた原初のルーンは、ファヴニールの周囲を取り囲んでそれぞれがファヴニールの肉体に楔の様に喰い込んで地面へと引きずり下ろしていく。

空に逃げられたら、手数を減らしかねない…それを許せるほど余裕はない。

だけど、人1人分の魔力ではもって数秒の儂い拘束に過ぎない。

それでも…その数秒、あの人たちが許すものではない。

「刺し穿ち、突き穿つ…『貫き穿つ死翔の槍』!!!」

お師匠はファヴニールが飛び上がった瞬間に頭を蹴って、ファヴニールよりも高く跳躍。

僕が拘束術式を展開したのと同時に本命の朱槍の真名を解放し、地面へと縫い付ける様に心臓目掛けて投げ飛ばす。

朱槍は紅蓮の彗星となってファヴニールの背中から地面へとめり込む様に貫き通し、一際甲高い咆哮をあげる。

心臓を貫かれて尚動こうとするファヴニールは、しかしゲオルギウスの決死の一太刀によって片翼を付け根から切り飛ばされて逃げ道さえも完全に塞がれてしまう。

「ジークフリート殿、トドメを!!」

「邪悪なる竜は失墜し、今こそ土に還る時…! 落陽へと至る我が剣を見よ!!」

ジークフリートが大剣を高く掲げると同時に、邪竜の似姿の様に角

と翼、強靱な尾が生える。

ジークフリートはかつて、あのファヴニールの血を浴びて強固な肉体を得た逸話がある。

おそらくその血は呪いそのもの…やがて自身を邪竜へと至らしめるような強力な呪いだっただのかもしれない。

それが今こうして発現し、しかし自身の力となって大剣の輝きが増していく。

「さらばだ、ファヴニール!! 『幻想大剣・天魔失墜』!!!」

神代の濃密な魔力が乗った剣戟は唐竹割に繰り出され、ファブニールの脳天から尾までを突き抜ける。

一瞬の静寂の後にファヴニールの肉体は左右に分かたれるように開いていき、黒い霞となつて消えていく。

「見よ！聖女の騎士があのだ大な邪竜を打倒した！ワイバーンどもが混乱している今こそ好機！進め!!」

ジル・ド・レエは僕達がファヴニールを打倒したのを見て、士気を上げて進軍を開始する。

それに対して僕は顔面を蒼白にして、立つのもやつとと言うだらしない姿を晒してしまっている。

「はあ…はあ…なんとか、なつた…」

「マスター、東雲 良太…ここは俺と聖ゲオルギウスでワイバーン退治を行つておく。君は女王スカサハと共にもう一人のマスターの元へ」

「ええ、それがよろしいでしょう。あの城は伏魔殿…何が起こるか分かりませんからな」

よろよろとした足取りでどうにか立ち上がった僕に、ジークフリートとゲオルギウスの2人が声をかけてくる。

そう、まだ大将首を挙げていない…つまり、決戦が終わっていないと言う事だ。

「お師匠、お願いします」

「まったく、倒れてくれるなよっ…」

お師匠へと抱えて運ぶようお願いしますと、肩に担ぐ様にして抱き

かかえられる。

まるで米俵か何かの様だ…いつもこの方法で運ばれている気がする。

「ジークフリート、ゲオルギウス…フランス国民を守ってあげてください。無かった事になるとは言え、死んでいい訳ではないですから」
「ああ、分かっている…俺の思う正義をかざし、竜を退治するとしよう」

「マスター、ご武運を」

2人と言葉を交わし終わると、お師匠は加減なしの全速力でオルレアンへと走り始める。

皆が無事なのは分かっているけど、大詰めも大詰め…これで終わりにしなければ…！

剣を生み出し手に持てば、それを矢として弓に番えて標的を打ち抜く。

赤い外套の弓兵は、自身のマスターとは対となるもう1人の戦いをつぶさに観察していく。

あの日、あの夜…人としての生気を失った機構を彼は垣間見た。

それはただ在るだけ。

かつての自分がそうであったように、たつた1つの望みを果たすことに執心する自動人形に他ならない。

(あれは…ともすれば危ういものだ。もつとも、私よりも些か私欲に満ち溢れた望みなのだろうがね)

自身のマスターとそのメインサーヴァントであるマシユ・キリエライト、そしてこの特異点の渦中の人物の片割れであるジャンヌ・ダルクは漆黒の騎士を討ち果たしてオルレアン城内へと侵入を果たし、それと同時に朱槍を持つ東雲 良太も酷く消耗しているものの邪竜を滅ぼすことに成功する。

弓兵は、ほうと感嘆の息を吐きながらもやはり苦い顔をする。

窮地にあつて、人と言うものは恐怖に竦む。

如何に強大な獅子が傍に居ようとも、万が一と言う事を考えずにいられないのが人間だ。

余程の愚者でもない限りは、だが。

はたして、かのマスターはどちらなのだろうか…と思索するも、その思考は傍らに現れた猟犬によって遮られることになる。

「おう、赤マント。こっちのマスターも移動を開始した。いっちょよ派手に城落としと行こうや」

「了解した、青マント。では、仕上げに掛かるとしようか」

朱槍を持った青い外套の槍兵が、弓兵の傍らに立って気さくに声をかけてくる。

彼にとつて共闘は一度や二度ではないし、敵対もしてきた。

故に互いの手札は理解しているし、この特異点に入る前にすり合わ

せもそれとなくこなしている。

チームであるが故に私情を挟む余地がない。

そんなものは犬に食わせてしまい、兵器としての本分を全うするのが弓兵の信条であった。

（感情を余分な贅肉…と言っていた少女は、さて…どうだったか…）

脳裏に微かに残る、故郷で起きた聖杯戦争…そのマスター。

あかいかくまは今でも弓兵の脳裏に焼き付いて、思わず笑みを浮かべてしまう。

「なくに、ニヤついてやがる?」

「なに、君も私の事を過保護だなんだと言えんと思つてな」

「はあ?」

槍兵のマスターが、影の国の女王に抱えられて移動するのが見える。

槍兵としては、自身のマスターにかかる負担は極力減らしておきたいのであろう。

彼らの進む道を立ちほだかる様に飛来するワイバーンを見て、弓兵は軽く肩を竦めて弓に矢を番えた。

オルレアン城に着く頃には、カルデアからの魔力バックアップもあつてか僕のコンディションはある程度の回復をすることが出来た。

ルーン魔術による身体強化を以てしても全力疾走のお師匠に追いつくのは困難なので、着くまで運ばれ続けた訳だけど…。

道中の障害はエミヤや清姫、エリザベートが順次駆逐してくれていたもので、非常に快適ではあつた。

「酷い臭い…」

「まるで子供の癩癩と言つたところだ。怒りをぶつけずには居られないから、こうして所かまわず見境なく殺すことに執心したのだろう。行くぞ」

城内の通路を歩くと、空気に焦げ臭さや生臭さと言つたものが含ま

れていることに気付いて顔を顰める。

恐らく、オルレアンに住んでいた人々を自身の在り方そのままに殺し続けた結果なのだろう。

城には死臭が染みついてしまっている。

ジャンヌ・ダルクは火刑に処されるまであらゆる拷問と凌辱を受けて、その尊厳を踏みにじられ続けたと言う。

人の悪性をまざまざと見せつけられ、魔女として処刑された彼女の怒りは想像に難くない。

だけど、僕達と行動を共にしたジャンヌは、そんな怒りを見せずに裏切者に対して手を差し伸ばした。

救って見せると戦い続けた。

僕達の想像とは違い、彼女は只管に穏やかだった。

ならば…いま、この城の惨状を作り上げた黒いジャンヌは一体何者なのだろうか？

「どれ…種明かしと行こうか、マスター？」

「色々考えても無駄ですからね」

城主の間の大きな扉を押し開き、戦場となっていたであろうその部屋に入る。

余程激しい戦闘があったのか、その部屋はどこどころが砕け、或いは焼け焦げている。

しかし、立香さんとマシユは傷だらけの身体で力強く立ち、そして部屋の中心で対峙する3人を見つめる。

1人は僕達と行動を共にした救国の聖女ジャンヌ・ダルク。

彼女は哀れみの表情を浮かべたまま、床に倒れている黒いジャンヌ・ダルクとそれを抱きかかえる黒い魔術師を見つめる。

「さあ、安心してお眠りなさい。後の事は私に全てお任せを——」

「ああ…ジル…貴方が戦ってくれるなら…私は——」

ジル：そう呼ばれた黒い魔術師は、穏やかな笑みを浮かべて黒ジャンヌを赤子をあやす様に慰める。

ジャンヌはそれを痛ましそうに見つめ、そして黒ジャンヌがジルの腕の中で消えていくのを見つめる。

彼の腕の中には、清水の様に清らかな輝きを放ち続ける杯だけが遺される。

「彼女は私ではなかった。そもそもそんな存在ですらなかった…」

「あの、それは一体——」

「勘の鋭いお方だ」

ジャンヌⅡ黒ジャンヌではない…？

ジャンヌは確信を以てそう口を開けると、マシユが困惑した呟きを漏らす。

それを制したのは僕でも、立香さんでもなく黒い魔術師のジル・ド・レエだった。

「我が願望の一端…如何でしたかな、聖処女よ」

「貴方は…私の死を境に狂い果ててしまったのですね…」

ジルは左手に恭しく杯を持ちながら立ち上がり、不気味すぎるほどに穏やかな笑みを浮かべてジャンヌだけを見つめる。

それは漸く再会できたと言う、喜びと郷愁を滲ませた笑みだ。

「いいえ、いいえ…私は狂っていませんぞ。私はただ在るがままにいるのです」

「その結果が私の姿を模した人形なのですか？」

「言ったはずですぞ…一端であると——」

竜の魔女は実在しない…それこそ、本当にジャンヌ・ダルクに憎しみと言った感情が無い事を指示している。

彼女は、なるほど…確かに聖人なのだろう。

大よそ人の考えとはかけ離れたものを持ってしまっている様なのだから。

「私の願望はただ、貴女を蘇らせることでした。そう！この万能の願望器、聖杯によって！」

ジルは左手に持っている杯を、天に掲げる様に僕達に見せつける。それは間違いなく聖杯と呼ぶに相応しい清らかさを湛しやあくえている。

それを目にした瞬間立香さんとマシユの身体が強張り、互いに視線を交えさせる。

僕は立香さんの肩を叩いて首を横に振り、事の成り行きを見守らせ

る。

「心から…心底から願ったのです。当然でしょう？私は貴女をお救いしたかったのですから。だと言うのに、聖杯にその願望は拒絶されました。万能の願望器でありながら、それだけは叶えられないと！」

ジルは血が滲むほど拳を握り締め、憎々し気に聖杯を見つめる。

藁をも継る想いで願ったその願いが叶えられなかったが為に、その無念のぶつけ所が無いから…。

「だが、私の願望など貴女以外には無い！ならば、新しく創造するしかない！私が信じる聖女を！私が焦がれた聖女を！そうして——」

鬼気迫る顔で痛烈な叫びをあげたと思えば、すぐさま穏やかな表情でジャンヌへとジルは手を伸ばす。

それは漸く手に入れる事ができたと言わんばかりに。

「聖杯そのものを核とし、私のジャンヌ童の魔・ダルク女を造り上げたのですよ…ジャンヌ…」

「…ジル、貴方の中の私は、最早私では無くなったのですね…。ええ、道を違えてしまった貴方を私は論しましょう。確かに裏切られました。確かに嘲弄されました。成してきたことに対する対価として、無念の最期と言えるでしょう」

ジャンヌは共に戦った戦友の変わり果てた姿に悲しみの表情を浮かべ、首を横に振る。

僅かに声を震わせながら、ジャンヌは言葉を続ける。

これ以上、道を違えさせてはならないと。

「けれど、祖国を恨むはずがない。憎むはずがない。何故なら…この国には大切に想っている貴方達が居たのですから」

「おお…お優しい。あまりにお優しいその言葉。しかし聖処女よ、その優しさ故に貴女は1つ忘れておりますぞ。例え、貴女が祖国を憎ま
ずとも——」

——私自身が、この国を、憎んだのだ!!!

ジルは怒りに身を震わせ、咽喉を掻きむしりながらどす黒い血涙をその魚眼の様な目から流す。

それはきつと消え果ぬ憎しみ。

それはきつと燃やし続けねばならない、黒い情熱なのだと言わんばかりに。

「そうー私は憎い！貴女にすべてを押し付け！果ては魔女として認めたこの国が！故に滅ぼそうと誓ったのだ！——ああ…それでも、それでも貴女は赦すのだろうか、お優しい聖処女よ…」

「ジル…」

悲痛な狂信者の叫びは最早、止まらないし止められない。

ジャンヌはその痛ましい姿に、胸元を抑えて名を呟く事しかできずにいる。

「しかし、私は赦さない。赦してなるものか!!神とて、王とて、国家とて我が怒りは止められぬ！止められぬ以上は滅ぼして見せよう！故にこれは正当なのだ！正当な怒りを以て託された我が願望!!だからこそ私はジャンヌを造り出すことができたのだ!!!」

「だからこそ…彼女は私たりえない…それを分かっている筈ですよ。ねえ…ジル・ド・レエ」

狂い果てた狂信者…憤怒にその身を焦がしたが故に、ジル・ド・レエはジャンヌを理解できなくなってしまっている。

その怒りは室内を満たし、立香さんとマシユはビクリと身を震わせる。

それほどまでに鬼気迫る気迫がそこにあった。

そんな怒りを間近で見せられたジャンヌは、毅然とした表情でジルを見つめる。

「それでも…貴方が恨むのは道理でしょう。貴方が聖杯で得た力で、この国を滅ぼそうとするのも悲しいくらいに道理です。そして、そこに対峙すべきなのは私なのでしょう。私は、聖杯戦争の裁定者…ルーラーなのだから」

「我が道を阻むな、ジャンヌ・ダルクウウツ!!」

ジルは怒りのままに攻撃的な指向性を持たせた魔力の塊を造り出してジャンヌに対して叩きつけようとするも、その一撃はジャンヌの軽やかなステップと共に回避される。

「立香さん、良太さん…お2人はこの城から脱出を。彼は私が連れて逝きます」

「それは！」

「そうしなくてはならない…ああなってしまったのは、きっと私の責任ですから」

立香さんは首を横に振って一緒に戦おうと言おうとするも、ジャンヌはそれをやんわりと止める。

きっとジャンヌなりに責任を感じてしまっているからこそ…なのだろうけど。

「僕達にも彼には用事があるからね。具体的にはあの左手に持っているもの…とか？」

「そ、そう聖杯回収をしなくちゃいけないから、ジャンヌ1人にするなんて選択肢ないんだよ！」

僕達は僕達で彼に用事がある。

この時代を乱した最たる原因である聖杯…その回収をしなくてはならないからだ。

助け舟と言わんばかりに顔を輝かせた立香さんは、ブンブンと首を縦に振って無理やりにも戦列に加わる。

そんな立香さんと僕を見たマシユはクスリと笑みを浮かべ、ジャンヌは諦めたように肩を落とし、小さく『ありがとう』と呟く

僕がジャンヌより前へと一步出ると、お師匠は軽いため息を吐いて僕の襟首を掴んで持ち上げる。

「グエー」

「まったく、マスターが簡単に前に出るでない。聖女よ、露払いは私とマシユで受け持とう。お主はあの狂信者の濁った眼を戻してやると良い」

「…はい！」

お師匠は自身の背後に僕を無造作に放り投げると、静かに槍を構え

る。

僕らが揉めている間に、ジルはタコともヒトデともつかない怪物を聖杯で強化を施しながら生み出し始めている。

「おおー見よジャンヌよーこれが、これこそが正当な貴女の怒りですぞ!!」

呼び出した怪物は次第にジルの肉体を覆っていき、室内を埋め尽くし始める。

その速度は時間が進むにつれて加速していき、城主の間にミシミシと軋む音が響き渡り始める。

僕は手に持つ朱槍に魔力を込めて触媒とし、原初のルーン一文字を空間に書き出して背後の壁に打ち込んで破壊する。

あれは、このまま此方を押し潰す気だ!

「皆、この城から退避!ここじゃ狭すぎる!」

僕の言葉に一同素直に頷いて、僕が壊した壁の穴から慌てて飛び出していく。

お師匠が殿となる形で部屋を出た瞬間、爆発するかのような音と共に肉の塊が膨れ上がり、僕達が駆け抜けている通路を一気に埋め尽くしていく。

このままでは逃げ切れないと悟ったのか、マシユはその手に持つ巨大な盾を構えて正面に見える壁に思い切り叩きつけて脱出口を作り上げる。

「皆さん、此処から脱出を!!」

マシユは焦りに若干上ずった声を上げるや否や、立香さんの身体を些か乱暴に抱えて穴から外へと飛び降りていく。

「ぎゃあああ!!」

「そら、とつとと行かんか!」

「まって!お師匠うう!!」

立香さんが悲鳴を上げて脱出するのを確認したお師匠は、再び僕の襟首を乱暴に掴むとそのまま無造作に穴に向かって投げ飛ばして僕を城から脱出させる。

その瞬間、僕の視界に入ったものは、城を取り込んで尚大きく成長

する巨大な肉の柱だった。

——この世に神がおわすならば

——必ずや、この私めに天罰がくだるでしょう

「兄さん！着地任せます!!」

お師匠によつて城内から放り出された僕は、巨大な肉塊に内側から浸食されて巨大な柱の様な化け物となるのを目撃する。

それはあのヒトデの様なタコの様な：名状しがたい、生物として嫌悪感を覚えずにはいられない醜悪な姿を晒している。

天高く聳える様に立つそれは、狂った男の歪んだ怒りを代弁しているかの如くだ。

「つたく！世話の焼ける弟だなあ！」

僕の声に反応を示したクー・フリーンは、すかさず宙に放り出されている僕を空中でお姫様抱っこの要領で受け止め、難なく着地をして勢いそのままに僕を地面へと降ろす。

降ろされるままに僕はそのまま駆け出して、肉の塊となったオルレアン城から離れていく。

城門前まで移動すると、そこには無事に脱出することができた立香さんとマシユ、ジャンヌがオルレアンを見上げていた。

「東雲さんー！」

「遠慮なしにぶくぶく大きくなっちゃったなあ…あれ自体が強力な魔力炉になつてゐるみたいで、カルデアとも通信できないし…」

「ジル…」

打開策を相談しようとするカルデアと通信を取ろうとするものの、莫大な魔力の嵐の所為か思う様にカルデアとの通信ができずにいる。

…ある意味、好き勝手するチャンスではあるのだけれど。

立香さん達と揃って肉の柱と化したオルレアンを見上げていると、肉の柱の天辺付近が内側から異常な程大きく膨れ上がり始める。

それと同時に僕の両足に力が入らなくなり、思わず両手を地面について四つん這いの体勢で倒れ込んでしまう。

「う……あ……」

全身を襲う倦怠感と渇きにも似た何か……体内から急速に魔力が失われていくのを感じ、僕はあの肉の柱の中で何が起きているのか察する。

……お師匠は生粋のバトルジャンキーだ。

お師匠はその立場上、影の国から外に出る事が叶わない。

彼の国の門を閉ざし、中に居るものを外へと出さないように見張らなければならぬからだ。

強敵との闘いを求めて止まないにも関わらず、自分から挑みに行くことが出来ないと言うジレンマ。

それを常々抱えていた訳なのだけれど、人理焼却に伴って影の国は消滅……つまり、お役目から解き放たれた状態になっている。

そんな存在が自由に強敵と戦っていい状態になったらどうなるのか……？

答えは勿論——

「おうおう、あの女派手にやっていやがるな……良太、踏ん張れるか？」

「そんな……このままでは、東雲さんの魔力が枯渇してしまいますよ!」

マシユが顔面蒼白となっている僕の背中をさすりながら、思わず声を荒げる。

体内の魔力が枯渇してしまうと、最悪死に至ってしまう。

こんなところで、僕はまだ死にたくはない……死ねない。

まだ、望みも何も果たしていないまま死にたくはない……だから、僕は死なないように必死に地面にルーン文字を刻み始める。

「枯渇して……ここで死ぬってんなら、それまでつてただけだ……マシユの嬢ちゃん。俺たちケルトの戦士は常在戦場ってな」

「ぜえ……ぜえ……」

フエオ、ラド、ゲボ、ジェラ、イング……5文字のルーン文字を円になる様に書き込み、ありったけの魔力を掌に載せて叩き込んでルーン魔術を発動して結界を起動。

僕は睨み付ける様に、先ほどからお師匠が内部から派手に壊して落ちてきている蠢く肉塊を見つめる。

その肉塊は地面に落ちると同時に人間大のヒトゲ型の魔獣となり、動き始める。

「兄さん！」

「マシユ！」

僕はすかさずクー・フリーンに魔獣を仕留める様に指示を出す。

僕が声を上げるのと同時に、立香さんも僕の意図を察したのかマシユに同様の指示を出して立ち向かわせる。

クー・フリーンは持ち前の速度を活かした戦いで魔獣たちの群れの隙間を縫うように駆け抜け、血風をまき散らしながら無数の魔獣を蹴散らしていく。

その姿は正に猟犬…その異名に偽りなしと言ったところだ。

マシユは、クー・フリーンが撃ち漏らしてしまった魔獣を丁寧に手に持つ巨大な盾を叩きつける様にして挽肉に変えていく。

時に堅牢な盾は、恐るべき打撃兵器と化す…英霊の膂力であれば、その威力は推して知るべし。

魔獣たちの血が宙を舞うと、その血は地に落ちる事無く霧散して消えていく。

魔獣が消されるたびに、僕の体内魔力が僅かばかりに増えていくのを感じていく。

僕が起動したルーン魔術は、所謂邪法に近いものだ。

生贄を得る事で魔力へと還元し、常に補給することができる。

「ぜえ…ぜえ…」

それでも、お師匠が持つていく魔力量の方が遥かに多い…。

お師匠が仕留めるのが先か、それとも僕が力尽きるのが先か…まるでチキンレースの様な戦いがこの場に起こっていた。

「この匹夫めがああ!!!」

「そおら、この程度で私が止められると思うなよ!」

魔獣オルレアン体内…東雲 良太が外で必死に魔力をかき集めている最中、影の国女王スカサハは活き活きとした顔で手に持つ朱槍を

華麗に舞わせて血風を巻き上げ続ける。

その身に返り血は一滴も付かず、場所が場所ならば華麗な踊りの様にも見えたことであろう。

キャスター、ジル・ド・レエはスカサハに対して自身の持ちうるあらゆる魔術、そして魔獣による集団戦法で排除しようと試みるも一向に排除できないままだった。

ジル・ド・レエ：彼の身は確かにキャスターの英霊として顕現しているにも関わらず、彼自身は魔術師としては未熟だった。

それもその筈：彼自身は魔術師ではなく、その手に持つ宝具と聖杯こそが彼の魔術師なのだから。

莫大な魔力炉となる2つの触媒：奇跡の願望器『聖杯』と宝具
ブレラー・テイズ・スベルブック
『螺湮城教本』。

ジル・ド・レエは螺湮城教本の召喚魔術を暴走させることでオルレアン城を巨大な魔獣と変え、手に持つ聖杯によって制御を成し得ている。

彼自身は魔術を扱う事に長けている訳ではないのだ。

故に魔獣の体内すべてが彼の武器ではあるが、それだけ：彼が信奉する神と同等の物を突き殺してきた影の国の女王にとって、アスレチックにも等しいものであった。

体内に生まれ出る魔獣は、スカサハの存在を認識した瞬間に襲い掛かり、そのたびに叩き潰される。

その光景を見せつけられ続けたジル・ド・レエの狂気の中、1つの恐怖が芽生え始める。

血風の中舞う影の国の女王：その顔には微笑が張り付いたままなのだ。

対軍宝具を使う訳でもなく、己の身体能力のみで魔獣の体内を駆逐し続ける。

——勝てない

そう認識してしまう訳には行かない。

自らの怒りが正当なのだから、この怒りを以て世界を呑み込まなくてはならない。

ジル・ド・レエは自身を奮起し、励起し、想起する。

自身が勝つための方策を…。

「フン、やはり借り物の魔術師風情では無理か…もしや、とも思っただがな。魔力炉を2つ有していながらこの程度。つまらんど、ジル・ド・レエ」

「ただの英霊風情が大口を！貴様如き我が友プレラーティーより賜った魔術書があれば、蹂躪するに充分！フハハ！フハハハハ！！」

ジル・ド・レエは聖杯に満ちる魔力を螺旋城教本に注ぎ込み、天高く掲げる。

室内を満たしていた肉塊がジル・ド・レエの元まで引いたと思えば、まるで大樹の幹の様な巨大な触手が無数に現れてせせら笑うスカサハへと殺到する。

本来であれば全力で回避すべきものであろう。

本来であれば如何な大英雄であろうとひとたまりもない一撃であろう。

しかし、影の国の女王スカサハは退かない。

「果てなき武芸の果て…神さえ殺した槍の一突きを見るが良い——」

大型爆弾がさく裂したかの様な轟音。

巨大な触手は確かにスカサハに殺到し、轢殺し、塵殺した。

その手ごたえを感じ取ったジル・ド・レエは両手を仰々しく広げて、勝利の確信と共に幼子を手にかけた時と同じような絶頂を迎える。

「見よ…これが…これが私の怒り！誰にも止められるものではないのだ！否！止めてはならぬものだ!!」

憤怒に彩られた狂気に騎士の精神は最早無く、それは狂人だけが持ちうる自己陶醉しかない。

ジル・ド・レエの怒りは聖女の怒りの代弁…それはただの驕りだ。

怒りは自身の怒りでしかなく、決して他者が代弁できるような物では無い。

正当な怒りであるならば、代弁等と宣う必要が何処にあるのだろうか？

スカサハに群がっていた触手がピタリと動きを止めた瞬間に爆発を起こし、礫の如く無数のゲイ・ボルクが部屋中に突き刺さる。

ジル・ド・レエは表情を凍り付かせたまま、何かを蹴り抜いたままの姿勢で佇む槍兵の英霊を見つめる。

「期待外れだな。これならばまだ弟子どもを蹴散らした方が準備運動になる」

「キイイイヤアアアツ!!!」

無傷。

かすり傷一つ負うことなく佇むその姿は最早黒い死神に他無く、ジル・ド・レエは狂ったように螺湮城教本による召喚魔術を連続で行い、雲霞の如く魔獣を呼び出し続ける。

スカサハはもう飽いたと言わんばかりに、部屋中に突き刺さるゲイ・ボルクを抜いては鋭く投げ放つ事で螺湮城教本を破壊しようとするも、魔獣たちが分厚い壁の様に立ちはだかつて破壊を阻む。

「終われん！終われるわけがない！私の竜の魔女聖女の為にもこんなところで終われる筈もない!!」

「いいえ、ここで終わりにしましょう…:ジル」

スカサハが新たに槍を抜き放つのと同時に、この戦場に聖女が歩み出る。

ジャンヌ・ダルク…:数日前に火刑にかけられ、その身を委ねた聖女…:彼女は何かを決意したかのように力強く、そして自愛に満ちた眼差いでジル・ド・レエへと歩み寄っていく。

「ああ…:ああ…:ジャンヌ…:この怒りに終わりなどあってはならない。貴女を魔女等と宣った愚かな民衆を一人残らず殺しても足らないのだから!!」

「いいえ…:もう、充分なのです…:貴方は充分私に尽くしてくれた。だから…:その怒り諸共に委ねましょう」

ジャンヌは腰の鞘から剣を抜き放ち、ジル・ド・レエの眼前まで歩を進める。

雲霞の如く現れていた魔獣はジャンヌを恐れる様に退いていき、その歩みを止める事ができないでいる。

「信仰も、怒りも、そして私の騎士である貴方も…私が連れて逝きま
す」

「何故だ…何故貴女はそうまでもこの世界を愛すると言うのだ!？」

「決まっています…私が愛した皆が居るからです。確かに私は魔女と蔑まれ教会から破門された身…されども私には大切な貴方たちが居た。私にはそれで充分なのです」

素朴な笑みを浮かべたジャンヌは、ジル・ド・レエの手から聖杯を取ってスカサハへと投げ渡す。

ジル・ド・レエは、ただただ呆然とした顔で、毒気が抜かれたかのような顔でジャンヌの顔を見つめ続ける。

「影の国の女王、誉れ高き武芸者であるスカサハよ…この場から脱出を。いずれ、轡を並べるときが来ることでしょう…その時は…」

「良からう。縁としては充分、その時が来るのも早からうが…」

スカサハは投げ渡された聖杯を受け取ると同時に背を向け、肉で覆われた壁を槍で穿ち抜き外へと脱出していく。

それを見届けたジャンヌは剣の刃を両手で握り締める様にして持ち、言葉を紡ぐ。

「——主よ、この身を委ねます——」

「以上が事の顛末だ」

レイシフト完了後のデブリーフィング。

お師匠の報告を聞いた僕達は一斉に小さくため息をつき、あの燃え上がる瞬間にジャンヌが、そしてジル・ド・レエに思いを馳せた。

ジャンヌもジル・ド・レエもフランスを愛した1人の人間たちだ。

ジャンヌは異端審問にかけられ、愛する人たちに見捨てられても憎まなかった。

愛する人たちが幸せになれるのならば、と納得したうえで火刑に処された。

死後、その遺体が辱められたとしても…。

だが、ジル・ド・レエは赦せなかつた。

きつとジル・ド・レエが愛したものは、フランスと言う国ではなく…。

「ともあれ、アクシデントの連続ではあつたけれど、無事に第一特異点の人理修正を行う事ができました。今後はレイシフトの精度を上げつつ通信装置の強化を行ったうえで第二特異点攻略を行います」

「二先ず、2週間の間は大きな調査は控える形になるね」

オルガマリー所長はパン、と手を叩いて緩んだ空気を引き締め直し、今後の予定をスクリーンに投影していく。

日々の訓練は当たり前前として…小規模のレイシフト実験と言うのが気にかかる。

「所長、この実験ってなんなんですか？」

「特異点の人理修復を行った、と言っても冬木のようにすぐさま特異点が崩壊するのではなく、時空の海を漂いやがて消滅するように消えていくの。つまり、その間は新たな火種が起きやすいと言う事よ。よつて、そう言った火種が起こる前に問題を摘み取ると並行して、現在残っているスタッフの練度を上げるために小規模のレイシフトを第一特異点を中心に展開します」

時間は一切無駄にできない上に、実践訓練程身に着くことは無い…と言う事か。

失敗が許されないからこそ、気を引き締め続けなくてはならない。

「はいはい！質問良いですか!？」

「帰って来たばかりだと言うのに本当に元気ね…いいわ、言つてごらんなさい」

立香さんは元気よく立ち上がりながら手を挙げて、質問したいとアピールする。

マシユは隣で少し恥ずかしそうにしながら立香さんの服の裾を引っ張って座らせようとする。

「次の特異点はどんな所になるんですか!？」

「良い質問ね…場所が分かれば当時の世俗や風習を学ぶこともできる

でしょう」

所長は感心したように頷き、心なしかねちっこい笑みを浮かべているようにも見える。

所長は手元の機械を操作してスクリーンに資料を投影していく。

西暦60年…地名は…。

「ローマ帝国で…いきなり範囲広がり過ぎでは!？」

僕は思わず椅子を蹴倒す勢いで立ち上がり、思わず大声を上げる。

ローマ帝国…フランス全土だった第一特異点なんて比較にならない広大さを誇る国土をもつ大帝国として今なお名を馳せている。

様々な政治家を生み、西暦60年と言うと確か暴君ネロの時代だったはず。

世界史でも習うからなあ…超有名だし…。

「そうは言うけど、確かにこの時代が特異点と化して歪んでいるのは確かだ。現地赶赴いたら協力者を探さないと、だね」

Dr. ロマンは首を揉み解しながら、ご愁傷さまと言わんばかりの乾いた笑みを浮かべる。

一筋縄で行くわけが無いだろうけど…暴君ネロが治めているとなれば先行き不安にならざるを得ないなあ…。

魔力吸いの結界のお陰もあってか前回の様な醜態を晒さないで済んだ僕は、自室のシャワールームで丁寧に汚れを落とした後に徐々に柔らかいベッドの中に潜り込んだ。

野宿続きだった為に柔らかいベッドで眠れると言うのは、非常に緊張が解けて良い…。

野宿の最中は、寝ていても周囲の変化に気を配り続ける必要があったから…。

温かいエミヤ特性の食事、温かいお湯の出るシャワー、温かく柔らかい抱き枕付きのベッド…文明万歳。

「あっ…そんな…ます旦那様たあ様つたら、大胆…でも、わたくしはいつでも…」

とても可愛らしく、且つどこかえっちな熱の籠った声が聞こえてく

る。

旅の終盤で良く聞いた声な気がする…とはいえ疲れているので幻聴なんだろうな…と思った僕は、柔らかくて良い匂いのする抱き枕を強く抱きしめなおし意識を落とそうとしたところで、はたと思い直す。

僕の部屋に抱き枕なんてあつただろうか…？

開けたいような開けたくないような…嫌な悪寒が背筋に走るのを感じながらゆっくりと目を開ける。

「ああ、ますたあに今夜…わたくしのすべてを奉げる事ができるのですね！」

「……?!?!?」

僕は全身に魔力をみなぎらせて片手でベッドを押す様にして体を跳ね上げさせ、後転の要領でゴロゴロと床を転がって部屋の出入り口まで向かって後頭部を扉に強かに打ち付ける。

「……?!? ナンデ!? キヨヒメナンデ!？」

「それはもう、ますたあの為ならば火の中水の中草の中…時空の彼方でさえも追いかけてみせますわ！」

「ヒエッ…」

何故だか扉はロックされたまま開かず、清姫はまるで蛇の様な身のこなしでするとベッドから降りるとまるででけてけの様に僕の足元まで這ってくる。

その姿はまさしく妖怪…ストーカーなんてメじゃない、もっと恐ろしいものの片鱗を感じざるを得ない。

「ですから…今後ともよろしくお願いしますね…旦那様」

「か、帰れー!!」

悲鳴にも似た僕の叫びは誰の耳に届くこともなく、そこで僕の意識は途絶えた。

幕間の物語くカルデア熱闘編く

#27

翌朝：僕は何故か体を丸めた防御態勢で部屋の入り口で眠りこけていた。

柔らかいベッドの上で寝ていなかったせいも、身体の疲労はこれっぽっちも取れていない…と言うかつい先程まで警戒状態を保っていたかの如く筋肉が強張っていて、自分の身に一体何が起きていたのだろうか…？

こういう時は朝から湯船につかって全身を揉み解す様にストレッチするのが良いのだけれど、生憎とこのカルデアの部屋には湯舟と言うものは存在せず、シャワーのみしか利用できない。

とはいえ、贅沢も言っていられないほどの倦怠感が全身を襲っていた僕は、のそのそとした動作でシャワールームへと入っていき体を清めていく。

清め…と言うとなんだか頭の片隅に何か引つかかる様な…ああ、そうか…清姫だ。

彼女は先の第一特異点にて、僕の事を安珍だの旦那様だのと言ってすり寄って来たバーサーカーの英霊だ。

少女がバーサーカーと言うのも不思議な話だけれども、安珍清姫伝説における逸話を紐解けば納得せざるを得なくなるとダ・ヴィンチちゃんは言っていた…なんでも、男に逃げられて追いかけるうちに愛情が憎悪に代わり、執念から龍に転じたとか何とか…。

恋慕の情と言うものは時に人の心を溶岩の如く燃え滾らせてしまうものなのだろう…僕は、どうだろうか？

恋い焦がれてはいる…とは思っているけど、果たしてそれが憎悪に変わるほどの恋慕なのかと問われると…それもまた違う気がする。

…こういういった感情もきつと人それぞれなのだろうし、多分あの清姫を基準に考えてはきつと駄目だろう。

僕はシャワーを浴びて思考をさっぱりとさせてシャワールームか

ら出ると、目の前にいる筈のない人物が穏やかな笑みを浮かべてバス
タオルを差し出してくる。

「旦那様ますたあ、こちらをどうぞ。初めてますたあの身体を見ましたが、鍛え
ていらっしやるのですね…ぽっ」

「……」

僕は目を白黒とさせて、契約をした覚えのない清姫を見つめるのと
同時に昨夜起きたことが脳裏にフラッシュバックを起こす。

そう、疲れ果ててベッドにダイブしたその時に、彼女は既に僕の
ベッドの中に潜り込んでいたのだ。

直後、僕は逃げ場のない部屋の隅まで全力後退し、疲労からそのま
ま気を失ったのだ。

「な、なな…なんているんですか…?!」

「わたくし、ますたあの為ならば例え時空の果てであろうとも駆けつ
けてみせます。尽くす女ですから」

僕は全身から冷や汗を流しているような感覚に襲われ、しかし表面
上は平静さを保ちつつ清姫からバスタオルを受け取って体について
いる水滴を拭きとっていく。

清姫はそんな僕を頬を赤らめながら顔を背け、ちらちらと此方の様
子を伺う様に視線を何度も送ってくる。

「ああ、こうしてますたあのお世話ができるなんて…この清姫、感無量
です」

「…何時から居たの？」

「あのふらんすの一件で強制退去された直後ですから…そう大して間
を開けてないかと。勿論、わたくしとしては間を開けるつもりはあり
ませんでしたが!!」

レイシフト後と言う事なのは、当たり前だけど…単独で召喚されて
いる状態とは言え、僕に掛かっている負担は大きく増えていない。

如何な英霊であろうとも、現界に必要な魔力量と言うのは途方もな
い量となる。

騙し騙しではあるものの、僕の疲労が完全に抜けきらないのはメイ
ンサーヴァントであるお師匠…スカサハとのパスが直接繋がってし

まっていることが原因になっている。

そも、聖杯戦争と言う形式で召喚される英霊は、勿論マスターとなる魔術師からの魔力提供を以てして現界し続けるのだけれど、聖杯からのバックアップがあつて初めて現界維持を保つことができるような。

カルデアの召喚システムも聖杯戦争の形式を踏襲する形で、マスターをバックアップしている。

具体的には、このカルデアと言う施設自体を疑似的な依り代として仲介させる形で現界させる事でカルデアのメイン動力から魔力供給を行つて維持。

マスターは戦闘によつて生じる魔力消費のみを補填する形で、英霊を補助していく。

故にカルデアのマスターに求められる資質は家柄から来る魔術師的な地位や魔術回路の本数等ではなく、安全にレイシフトを行う為の適正なのだ。

だからこそ、今まで魔術とは無縁だったと言う立香さんがマスター候補として抜擢されているのである。

「…僕、君と契約をした覚えがないのだけれど？」

「いいえ、わたくしはますたあとの縁を元に召喚に応じたのです。ですからわたくしはますたあに尽くす愛されさあばんと妻なのです！」

「結婚した覚えもないです、はい…」

一向にブレる事が無い清姫を見て、深いため息をつきつつ僕は新品の制服に袖を通していく。

間違いなくカルデアを依り代として僕と契約をしている状態の様だ…と、なるとこのカルデアで一番召喚システムに詳しいであろう人に直接聞いてみる必要があるだろう。

このまま問題があるかもしれない状態で召喚システムを使い続けるのだけは本当に不味い気がする。

必ずしも此方に友好的な英霊ばかりが召喚されるとは限らないのだから。

「いいえ、わたくしとますたあは、結ばれる運命の元に出会つたので

す。ですからこれは夫婦も同然……!」

「そこで言い切られても、僕同意してないっすよね!？」

「いいえ、ますたあがわたくしと契約してくれたと言う事実がありますので。ので!!」

清姫はそれが真実だと言わんばかりの勢いで、着替え終えた僕の身体にしがみついてくる。

鼻孔を華やかな香りが擦っついていき、女性特有の柔らかな身体が押し付けられてくる。

何よりもバーサーカーだと言うのに、その膂力はあくまでも少女の範疇に収められたものであり、決して僕に害をなそうと言う気配は感じ取れない。

少しばかり名残惜しい気もするけど、ダ・ヴィンチちゃんに清姫の件を聞く必要があるので僕はやんわりと清姫の身体を離す。

「あぁん……ますたあのいけず……」

「いけずじゃないし、何度も言う様だけど、僕は清姫とは結婚してないからね? 取り敢えず、行くところがあるから大人しくしてて……」

余計に疲労が溜まった様な気がして眩暈を覚えるものの、僕は気を取り直して部屋から出て研究エリアへと向かう。

現在カルデアのシステム周りの責任者は、ダ・ヴィンチちゃんが担当している。

これはダ・ヴィンチちゃん以外に適任者がいなかったため、緊急的な措置に過ぎない。

ダ・ヴィンチちゃんも英霊である以上、カルデアに何か起きた時現界を保っていられるかどうかは分からない。

しかし、彼以上の頭脳を持っている存在が現状——と言ってもこの緊急時以前からだけ——存在しない為、頼むしかなかった……と言うのが内情だ。

本人は現在置かれている状況を深く理解してくれているので、二つ返事で請け負ってくれたと言う事だ。

僕はダ・ヴィンチちゃんの工房までたどり着くと、木製の扉をノックして中へと入る。

「お、来たね。君が此処に来ることは承知していたとも」

「一体何やったの…」

ダ・ヴィンチちゃんは工房内に設えているショップカウンターの奥で椅子に腰かけ、優雅なコーヒーブレイクを楽しみながら僕と3歩後ろからついてきた清姫を見つめる。

今の発言を察するに、どうやらこのイレギュラーな召喚はダ・ヴィンチちゃんが1枚噛んでいる様だ。

疲れを吐き出す様に僕が深いため息を吐き出すと、ダ・ヴィンチちゃんはパンツと両手を合わせて拝む様に頭を下げる。

「いや、この天才も極々たま〜に失敗をするものでね。こういうのを猿も木から落ちる、と言うのかな？ハハハ」

「ははは、こやつめ」

「待った待った、そんなに怒らないでくれたまえ。我々としても得難い戦力を確保している状態な訳だし、そう悪い話でもないだろう？」

ダ・ヴィンチちゃんは、僕を馬か何かの様に宥めながら、カウンターの下から英霊召喚システムの触媒となる呼符と虹色の金平糖の様な拳程の大きさがある結晶体を取り出す。

呼符は言わずもがな、兄弟子クー・フリーンや錬鉄の英霊エミヤを呼び出したときに使用したので知っているけど、隣に置かれた金平糖擬きは何なのだろうか？

「この結晶体は聖晶石と呼ばれるもので、このカルデアの動力部で生成される魔力結晶体なのさ。この結晶体は莫大な魔力を蓄えていて、その総量たるや1個で君の手に刻まれている3画分に相当する。まあ、それだけの魔力総量があるなら触媒の代わりにできるかなーっと思って英霊召喚システム『フェイト』に使用してみたんだけど…ちよ〜つとそこで手違いがあつてね」

「…まあ、原因は分かりましたけど、それだとダ・ヴィンチちゃんが契約したって形になりませんか？」

「だから言っただろう…手違いがあつた、と。いや、この私もまだシステムの全貌を把握しきつていた訳ではなくってね」

ダ・ヴィンチちゃんはドヤ顔でコーヒーを啜り、ふうと一息つく。

ダ・ヴィンチちゃんは、このカルデアでも古参に部類する存在だ。もつとも、本人は比較的好き放題をやっていた質なので、真面目に業務に励んでいた訳ではない様だけど。

それでも、ダ・ヴィンチちゃんは天才と呼ばれた存在だし、現在進行形で自身を天才と言って憚らない。

そして、僕達にはそれを否定するだけの能力は無い。

それだけ…言ってしまうえば異質と言う事だ。

「どうも、『フェイト』はレイシフト可能なマスター候補生を対象としてでしか起動できないように何者かがロックをかけていたみたいだね。しかもこれがシステムのメインフレームと同期してあるものだから、下手に手を出そうものなら最悪レイシフトできなくなる。随分と手の込んだ事をしてくれたものだよ」

「それで、二者択一状態で選ばれたのが僕だった訳ですか…だったら、放送か何かで英霊を召喚したことを周知すべきだったんじゃない？」

日常的に魔力をガンガン吸われると言う恐怖の事態が免れたのは良かったものの、何故このヤンデレ娘なのだろう…心理的な負担が半端ないんですけど…第一特異点のティエールでは、立香さんやマシユからは白い目で見られたし…。

おそらく、清姫はこれからも正妻を主張し続けるだろう…外堀を凄まじい勢いで埋めながら。

別に嫌いなわけではないけれど、その…僕には…。

「それはわたくしがダ・ヴィンチさんをお願いしましたの。ますたあとの再会を劇的なものにしたかったので…」

「そうだね、劇的だったね！抱き枕かと思つたよ!!」

「まあ！そのまましつぽり抱いていただけでもよろしかったのに…」

「東雲クンもスミに置けないねえ…」

「スミに置いておいてほしかったんですけど！けど!!」

僕は両頬に手を添えながら顔を赤らめる清姫に抗議を込めた視線を送るものの、本人は何処吹く風と言わんばかりにあらぬ妄想の世界に旅立ち、そんな様子を見たダヴィンチちゃんはニヤニヤとした笑みを浮かべながら此方を見つめてくる。

僕は力なくがつくりと肩を落として、今日何度目かのため息を吐き出すしかなかった。

あれから清姫をどうにか言い包めてダ・ヴィンチちゃんに押し付けた僕は、カルデア戦闘服に身を包んでレイシフトを利用した戦闘シミュレーション内の密林をお師匠であるスカサハと駆け抜けている。

密林は地面がぬかるんでいる上に大小さまざまな木々の根が突き出していて、非常に走りづらい。

しかも鬱蒼と生い茂っている所為で視界も悪く、目標が目立つ存在とは言えまるでカムフラージュでも施されているかのようにその姿を見つける事は出来ない。

僕は一度足を止めて木陰に身を潜め、手に持つ朱槍で地面にルーン文字をいくつか刻み込んでいく。

「ふむ…やはり此方の様子を伺っているようだな」

「変に仕掛けられるよりはまだ良いですよ…おかげで下準備ができるわけですし」

お師匠は僕の傍らで涼しい顔で瞳を閉じ、僕が動くのを待っている。

お師匠は今回の戦闘シミュレーションを行うにあたって、1つの条件を設けた。

それは、宝具の開帳は行わないと言うものだ。

これはゲイ・ボルクが必殺の一撃である上に、全力投擲を行った場合、僕の魔力が枯渇してしまう可能性があるためだ。

カルデアのサポートを万全に受ける事ができない僕は、魔力の枯渇によって動けなくなるばかりか、お師匠の現界維持も困難になってしまう可能性がある。

今はシミュレーターによる訓練なので命の危険はそれ程ないとは言えるものの、実際にそれを起こす訳にはいかない。

宝具を開帳しなくても十二分に敵と渡り合う事ができるようにする、と言うのが今回の訓練の趣旨になっている。

僕は大きく深呼吸してから地面に刻み込んだルーン文字を起動させ、連鎖的に他の地点にも刻み込んだルーン文字を起動させる。

すると、僕と同じ姿をした幻影が浮かび上がり、少量の魔力を抱えて四方八方へと駆け出していく。

これで、あちら側に動きが出る筈だ。

「フツ…一斉にお主が増えたものだから、慌てて動き出したな」

「所詮は獣…ってことなんでしょね。行きましょう」

遠くで木が倒れるような音が響き渡る。

今回のシミュレーターの標的である獣が、幻影を襲ったために出てきた物音だろう。

僕達は音を頼りに再び密林を走って標的へと追い込みをかけていく。

1つ、また1つと幻影が消えていく度に僕達は標的へと迫り、密林の中でも大きく開けたエリアへと辿り着く。

その場に居たのは奇妙な獣だった。

全身は闇に侵されたかのように黒く、頭には目に相当する器官は無く、口腔内はズラリと鋭い牙が並び立つ。

獰猛な豹を思わせるような体躯は自動車の様に大きく、太く先端が先細りをする長い尻尾は蛇の様にのたうち回っている。

「これが、ソウルイーター…」

「生きとし生けるものの天敵と言ったところだ。この魔獣は生ける者の血肉だけでなく、その魂ですら腹の内に収めてしまう。性格は獰猛にして残忍…獲物と見定めればそれを注意深く観察し、最大の効率を以て罠り続ける。恐怖に打ち震えた魂程、甘美になるようだからな」
お師匠が槍を構えるのと同時に、僕は先ほど起動させたルーン文字を停止させて目の前の戦闘に注力する。

全力で戦わないとはいえ、現界も戦闘に必要な魔力も基本的には僕が賄っている状態だ。

しっかりと足を引っ張らないようにしなくては…！

お師匠が踏み込むと同時に、ソウルイーターは四肢に蓄えられた凄まじい筋力を如何なく発揮して低空を滑り込む様にして跳躍し、素早

く前足に備えられた鋭い爪を振り下ろす。

お師匠はその一撃を槍の穂先で素早くいなして地に叩き下ろさせ、いなしたときの反動を利用して素早く体を回転させて鋭い回し蹴りを目のない顔へと叩き込む。

強かに打ち付けられたソウルイーターはその場に踏ん張ることが出来ずに蹴り飛ばされ、地面を転がっていく。

だけど柔軟な身のこなしで体勢を整えると、素早く体を左右に振る様にして跳躍する。

お師匠がソウルイーターを標本の様に縫い付ける為に5本ものゲイ・ボルクを投擲したためだ。

目の見えない状態で如何にして察知したかは分からないけど、すんでのところで回避しつつもかすり傷を負ったソウルイーターは激昂し、咆哮するような仕草をみせる。

「…?!」

その瞬間、周囲の音が掻き消える。

比喻でも何でもなく、風の音もお師匠が振るう槍捌きも耳に入ってこなくなる。

お師匠は涼しい顔で槍を握り続けているので、恐らくなんともないのだろうけど、僕には致命的な状態だ。

視覚は言わずもがな、聴覚と言うものは相手の動きを察知するうえで重要な役割を担っている。

その聴覚が、恐らく一時的なものであろうと使えなくなると言うのは視界以外の全方位に無防備を晒しているのとそう変わりが無い。

僕は右手を横に払う様にしてルーン文字を展開して地面に固定させ、万が一の対処のために矢避けの結界を展開する。

これで少なくとも投擲物による被害を最小限に避けられるはずだ。

咆哮を終えたソウルイーターは、全身からドロリとしたタールの様な黒い物質を発生させる。

それらは、地面に黒い染みを作り出しては気化していき、ソウルイーターの全身を黒い靄が覆っていく。

全身が黒い靄に染まり切った瞬間ソウルイーターの姿が掻き消え、

次に視認できた瞬間お師匠の身体が空高く弾き飛ばされているのが見える。

血が流れていないところを見ると、お師匠はあの見えない攻撃を事に捌ききった様だけでも、本調子ではない状態でそう何度も捌ききれるものでもないだろう事は想像に難くない。

僕は手に持つ朱槍を地面に突き立て、ルーン魔術によって地面から強靱な蔦状の植物を呼び起こし、ソウルイーターの捕縛を試みる。

この土地は自然にあふれ、植物が多く自生している為にこうした魔術による負担が少なくて済む。

しかし、そんな事はソウルイーターも御見通しだったようで神速の如き素早さで蔦を避け、或いは鞭のようにしなる尻尾で断ち切り僕へと狙いを定める。

「スカサハアツ!!」

聴力が戻ると同時に、英霊の名を呼ぶ。

死ねない、死にたくない…シミュレーションの中だと言う事は頭の中からスッポリと抜け落ちて、礼装に宿る魔術スキルを行使する。

ソウルイーターは一直線に僕に向かって駆けている。

故に、最早回避は互いにできない…できないのだからこれは最早必中とも言える精度で僕の掌から強力な呪いが叩き込まれる。

『ガンド』

物理的な痛みは伴わないものの、その強力な病魔の呪いは相手に一時的な神経麻痺を起こさせて、まるで時が止まったかのようにソウルイーターの肉体を硬直させる。

ほんの数秒の拘束でしかないものの、確かな隙をお師匠が見逃すはずもなく上空から5本のゲイ・ボルクを投擲してソウルイーターの肉体を地面に縫い付け、トドメとばかりに落下速度の乗った槍の一突きを脳天へと叩き込んで着地をする。

「はあ…勝てた…」

「私が付いているのだ…勝てて当然とも言えような。とは言え、お主自身が魔術に徹した点は評価しよう」

お師匠はソウルイーターの頭部からゲイ・ボルクを引き抜いてター

ルの様にどす黒い血を振り払うと、女神もかくやと言わんばかりの笑みを浮かべて僕の頭を優しく撫でる。

心地よさと照れくささで顔を赤らめると、お師匠は良し、と頷く。「ではこのまま魔物狩りを続行するとするか。ああ、シチュエーションはランダムで変えるように…。そうさな、6時間もやり続けられれば身に染みてこの馬鹿弟子も突撃癖を直すことだろう」

「まって、お師匠、まって。加減！加減と言うものをですわね!?!」

「そうら、私がコソコソと狩っていた難敵ばかりだ。気を緩めるなよ?」

先ほどよりも何処か輝いているように見える笑顔を見せたお師匠は、僕の襟首を掴んでずるずると引きずり始める。

僕はジタバタともがいて抜け出そうとするものの、お師匠^{魔王}から逃げられるわけがなく…結局この日の戦闘訓練は深夜にまで及ぶこととなったとき…。

燃える、燃える、燃える、燃える…。

見渡す限り業火に包まれた街、冬木は轟音と共に瓦礫が飛び散り、辛うじて原型を保っていたオフィス街のビルが崩落していく。

炎が燃え上がる音、瓦礫が崩れ落ちる音に混じるのは、無数の獣の声と空気を斬り裂く快音だ。

戦闘開始から早30分：僕と立香さん、マシユは戦場にて前線で鬼神の如き戦いを繰り広げる赤と蒼の軌跡を呆けたように見つめる事しかできないでいる。

本来であれば、僕や立香さんが魔術や礼装に施された魔術スキルを駆使して彼ら英霊の闘いをサポートすべきなのだろう。

それが、できない。

本来であれば、マシユは彼らに混じって…あるいは彼らが撃ち漏らした敵をその大きなラウンドシールドを以てして撃退すべきなのだろう。

それが、できない。

赤い錬鉄の英霊の無限とも思える剣が、蒼い猟犬の英霊の深紅の槍が、敵対するすべてを1つ残さず撃滅せしめてしまう。

獅子の肉体に山羊の頭と蛇を合成された強力な魔獣合成獣キメラであるうと、彼らの前に姿を現した瞬間に眉間を深紅の槍で一突きにされ、足元から伸びる無銘の両刃剣の群れにその身を八つ裂きにされる。

「まったく…これも腐れ縁の1つなんかねえ!？」

「ああ、まったくだ。ただ、今までと違う点があるとすれば、君とこの街で共闘していると言う点だがね」

蒼い猟犬：クー・フリーンが悪態を尽きながら神速の踏み込みで深紅の軌跡を残しながら突撃をし、木っ端の様にアンドット…スケルトンの群れを粉々に吹き飛ばせば、赤い錬鉄の英霊…エミヤの黒い弓から放たれる偽・螺旋剣カラドボルグIIによる剣弾がゴーストの群れを一直線に消し飛ばしていく。

「ハッ！月でも手え組んでやった事もあったっけなあ!？」

「何時の話かね!?!こんな時でもなければ、私と君が手を組むなど考えられんのだがね!」

まるで気心知れた友人の様に世間話をしながら敵対存在を蹴散らしていく景色は現実味を感じさせず、まるでアメリカのアクション映画を見ているかのようにも感じてしまう。

『大分数が減ったわね?大橋までの道を切り開けたのならそのまま突破して爆心地へと向かいなさい!』

「りよ、了解です、所長!マスター、東雲さん、行きましょう!」

「そ、そうだね!」

「じゃあ、マシユを先頭に突っ切って、兄さんとエミヤに殿をお願いしよう!」

消滅したはずの特異点F:炎上し、呪いに汚染された冬木を僕達は駆け抜け始める。

第一特異点よりも濃い死の気配を漂わせるこの街の異常を解決するため――

――1時間前:カルデア管制室――

「それで:緊急事態発生って:何があったんです?」

カルデア内にスクランブル要請を示す警報が鳴り響き、僕と立香さん、マシユは管制室へと規定通りに戦闘態勢で集合する。

その場には既にクー・フリーンとエミヤの姿もあり、2人とも何処か神妙な面持ちで立っている。

カルデアスの前に鎮座された聖杯から所長が肉体を実体化させると、カルデアスが回転して特異点を示すポイントを指し示す。

そのポイントは日本:それも、過去に異変を解決した冬木市のようだけど:。

「それは今から説明します。ロマニ、カルデアスに情報を」

『了解。さて、まずはこれを見てくれ』

カルデアスに示されたポイントを拡大させると、そこはやはり以前赴いた冬木市であり、依然として街全体が燃え上がっている。

航空写真のように街全体を俯瞰するようにしか確認できないものの、そこには人が生活している痕跡はやはり無い。

今もそこかしこを魔物たちが闊歩し、いる筈のない得物を追い求めているのだろう。

「この特異点Fは、以前私たちが解決を図ったものと完全に一致しているの。教会や柳洞寺での戦闘の痕跡や、大聖杯の存在していたエリアにも崩落跡が確認されていることからそれは間違いない。：問題は、消滅したはずのこの特異点が今になって復活したのかが分からないかったのだけれど…」

「そこからは私が説明しよう、オルガマリー・アニメスファイア」

「エミヤ先輩…？」

所長を軽く手で制し、錬鉄の英霊エミヤが前へと出る。

彼は幾ばくか眉間に皺を寄せていて、些か不機嫌そうにも見える。「…あまりこういう事情は話すものではないとは思っているのだが、今回ばかりはそうも言ってられなくてね。今回の原因に関して心当たりがある」

「エミヤさん、もしかして…この冬木と縁がある英霊なんですか？」

「それも含めて説明させてもらうよ、マスター。まず私が英霊となった経緯に関しては置いておく…その部分はあまり関係が無いのでね」

立香さんの言葉にエミヤは小さく頷き、腰に手を当てて軽くため息を吐く。

どうも、その辺の記憶は本人にとってあまりいい思い出でも無い様で少しばかり渋い顔をしている。

「まず前提として私は冬木における第五次聖杯戦争に召喚された英霊であり、またその聖杯戦争の生き残りであるマスターでもあった男だ。故にこの時の聖杯戦争の事情には否が応にも詳しくなってますってね。ついでに言えば、その猟犬も第五次にてランサーとして召喚されている」

「ほんと、腐れ縁なんですね…」

「それな。ほくんと嫌んなっちゃうよなあ？」

僕がポツリと呟きながらクー・フリーンとエミヤを見比べていると、クー・フリーンが茶化す様に口を開き、エミヤがそれを咳払いをすることで制する。

「話を続ける。端的に言つて、この頃の冬木の聖杯は凶悪な呪いに汚染されていてね。あらゆる願いを叶える願望器としての役割は果たすが、必ずそこに生じる過程は負の側面しか見出さない。例えば、自身が世界で一番優れた魔術師になりたいと願えば、世界中の優秀な魔術師全てを呪い殺す事で、結果的に願った人間を世界で一番優れた魔術師にする…と言った具合にね」

「そんな…」

「所謂辻褄合わせ…と言ふやつだろうな。結果が願ったものであれば、過程がどのようなものであれ負の方法を執る。：問題は、その聖杯：正確には小聖杯と呼ばれるものの欠片を埋め込まれた少女が居たと言う事だろう」

少女、と口にした時、エミヤの目が何処か朧げな物を見るかのよう
に遠くを見つめていることに気付く。

それはもう手を伸ばしても掴むことができないもののように、しかし朧気であるが故にそれをはっきりとは認識することが出来ないよう
な…。

「今回の異変は恐らく、その少女が埋め込まれていた聖杯の欠片が引き起こしたものだろう。故にその位置も特定がしやすかった」

「良太、前に行動したときにセイバーが聖杯を奪った時の事を話したのは覚えてるよな？」

クー・フリーンの言葉に僕は小さく頷き、あの時話していたことを思い出す。

「確か、聖杯の模造品がセイバーの大聖杯確保とほぼ同時に爆発を起こして呪いを撒き散らしたんですよね？」

「おう、その聖杯の模造品ってのが、コイツの言うお嬢ちゃんのことなんだろうよ」

「おそらく、だ。故に今回の目的地は冬木市の住宅街エリア：その爆

心地と言う事になる」

冬木でキャスターだったクー・フリーンと合流してから目撃したあの爆心地は、非常に強力な呪いが渦巻いていると言う話だった。

その強力な呪いこそが汚染された聖杯の残滓……と言う事なのだろう。

問題は、その呪いに対して僕達がどの程度対抗できるのか？と言う事なのけど……。

「その呪いに関しては、今回ばかりは私が協力するでしょう」

「お師匠？」

どうするのだろうか、と頭を捻った瞬間、霊体化していたお師匠が実体を現して僕の隣に突如として現れる。

お師匠はモデルの様な歩きで前へと出ると、此方へと振り向く。

「流石に街1つどころか世界を焼き尽くしかねん呪いを前に、対策1つ無くして立ち向かわせるのはしのびないと言うもの……過信をしてもらっては困るが、それなりの対策をお主達に施すでしょう」

「そんなにエグいんですか？……その、呪いって言うのは……」

立香さんは不安そうにお師匠を見つめると、お師匠は何処か力強く頷いてニコリと笑う。

「うむ、エグいな。なんせ、存在自体は神代の頃より存在していた泥と同質のものだ。神秘を失った人間ではひとたまりもあるまい。しかし、この特異点の放置は後々に大きな災いとなる可能性がある。それにだ……」

お師匠は会話を区切ると、いつも僕を扱っていた時の様な凄く良い^{怖い}笑みを浮かべる。

……僕達は最早覚悟を決めなければならない様だ……。

「この程度の困難で逃げ出したり失敗を犯してしまうようであれば、人理修復なんぞ夢のまた夢。必死に食らいつけよ？」

「デスヨネー」

お師匠の言葉に僕と立香さんは同時に同じ言葉を口にして、がつくりと肩を落とした。

「やあああつ!!!」

マシユが裂帛の気合と共に盾を構え、まるで走る城塞の様に橋の上に溢れかえるスケルトンの軍団を弾き飛ばしていく。

後方では絶えず炸裂音が響き渡っているのが聞こえ、クー・フリーンとエミヤが奮戦しているのが分かる。

2人にはタイミングを見計らって此方へと合流してもらおう手筈になっている。

こと、クー・フリーンは戦場における仕切り直しに長けた英霊だから、適当なところで切り上げてくれるだろう。

「マシユーもうひと踏ん張り!!」

立香さんはカルデアの制服に備わっている魔術スキル『瞬間強化』をマシユに施し、マシユの膂力を大幅に引き上げる。

礼装による魔術スキルはクールタイムに時間がかかる欠点があるのだけれど…。

「これもオマケ！道を切り開いて!!」

「はああああつ!!!」

僕がルーン魔術による身体強化をタイミングよく加える事で、マシユの英霊としての力を存分に引き上げ続ける。

シールドダー：盾とつけられたエクストラクラスの英霊は、こと守ると言う一点において非常に強力な力を見せる反面、攻めの一手となると凡庸な能力しか有せないでいる。

本来であればそんなことはないのだろうけど、クラスとしての型枠が攻撃をすると言う事を不得手にしてしまっている様だ。

マシユは決して速度を緩める事無く進軍を続け、僕達もマシユから遅れないように必死に走り続ける。

勿論、僕と立香さんもこの戦場から生き残るために、身体強化を魔術によって行っている。

あと少しで大橋を抜けられる…と言うタイミングで、無数のスケルトンがまるで壁の様に立ちふさがり、マシユの盾を正面から受け止めて弾き飛ばす。

「うあつ…まだ…まだ行けますー！」

弾き飛ばされたマシユは素早く体勢を整えて着地し、素早く盾を構え直して足を踏ん張らせる。

全身から魔力を放出させると同時にスケルトンの壁が崩れ、まるで鉄砲水のように僕達へと雪崩れ込んでくる。

「真名・偽装登録…はあああつ!!」

マシユは躊躇することなく宝具を展開することで眼前に迫ったスケルトンの群れを結界によって受け止め、こちらへと進ませないようにする。

しかし、大橋に残った撃ち漏らした敵は僕達の背後へと迫りつつある。

「立香さんはマシユの援護を！背面は僕に任せて！」

「お願いします!!」

僕は概念礼装であるゲイ・ボルクを展開して握り込めば、素早く朱槍を回転させながら体を捻ってまるで引き絞られた弓の様に突撃する瞬間を待ち構える。

同時に立香さんは令呪を起動させれば、マシユの宝具を補助してより堅固なものへと強化する。

宝具を持たないただのアンデッドの群れであれば、結界を破るのに時間がかかるはず…ここで僕達がすべきは…。

「マスター！マシユ・キリエライト！走れ!!」

「おうよ、マスター。テメエは真つ直ぐ目的地に突っ走りなあつ!!」

スケルトンの群れが間近に迫り、一気に蹴散らそうと一歩踏み込むうとすると、上空から無数の矢がそれこそ嵐のように降り注いでスケルトン達を射抜いていく。

それと同時にクー・フリーンが僕の横を一瞬通り過ぎた後に跳躍してマシユの防御結界を飛び越え、その手に持つゲイ・ボルクへと魔力を送り込む。

「おまけだ！此奴も持っていけ！突き穿つ死翔の槍!!」

相手がスケルトン…さらに言えば橋の上と言う事もあり威力は大分抑えられてはいるものの、クー・フリーンが放った必殺のその一撃は、投擲された瞬間にまるで大樹から枝が伸びる様に無数に分裂していつて寸分違わずスケルトンへと突き刺さる。

たった二手で、クー・フリーンとエミヤは、スケルトンの群を蹴散らしてしまった。

英霊とただの魔物との絶対の格差はあるだろうけど…これほどまで戦闘能力に差があると、少しばかり魔物に同情をしてしまうかもしれない。

僕と立香さん、マシユは互いに視線を交わして頷き、すぐさま爆心地である巨大クレーターへ向かって走り始める。

クー・フリーンとエミヤは引き続き殿役だ。

このまま爆心地まで、ゾロゾロと魔物達を引き連れていくわけにもいかないからね。

骨の擦れ合う音、何かが燃え尽きる音、かつてが崩れ去る音…その死の大合唱の中走り続けるとクレーターが目の前に広がってくる。

「立香さん…マシユ…行くよ!!」

「行くうー!」

「はい！マシユ・キリエライト、突撃します!!」

クレーターへと飛び出すと、斜面に着地してまるでスケートの様に滑っていく。

中心地に向かうにつれて徐々に…血なまぐさい臭いが漂ってくる。

それは、まるで地獄の釜の蓋を開けた時に似て、僕達の心を徐々に凍り付かせていく。

…今回、お師匠と清姫はカルデアに残っている。

お師匠は試練だから、の一点張りで来なかつたのだけれど、清姫に關しては練度不足…更に言えば冬木の呪いの特異性を考慮してメンバーから外すことになった。

冬木の聖杯からあふれ出す泥は、英霊が触れると性格が反転し、制御から離れてしまうそうだ。

清姫の場合、もし制御を離れてしまった場合強大な障害となってしまう可能性が高い：それも僕を執拗に狙ってくるようになって身動きが取れなくなってしまう。

そう言った事態を考慮し、かつて第五次聖杯戦争を経験してきたクー・フリーンとエミヤが僕達をバツクアップする事になったのだ。

僕は頭の片隅でちよつと失敗だったかもしれないな、とボヤキながら斜面を滑り終えた勢いそのまま爆心地の中心まで一気に駆け抜ける。

果たして、そこにあつたものは…。

「女の、子…？」

それを前にして、僕達は足を止めてその場に立ち尽くしている人物を見る。

その少女は焦点のあつていない視線をある方向に向け続け、うわ言の様に『センパイ、センパイ』と言い続けている。

どこかあどけなさが残る顔には呪いが侵食しているのか、ひび割れのように染みが広がり、身体を黒い帯状の物が肌を覆っている。

足元はボコボコと泡を立てている黒い泥の様なもの溜まっていて、僕が一步足を踏み出した瞬間その泥は一気に広がり一斉に隆起し始める。

「しよ、所長！女の子が！」

『藤丸、落ち着きなさい！あれはもう死んでいるわ！』

「で、でも…！」

泥はあつという間に少女を守る様に覆いつくすと上半身だけの巨人の様に人型となり、顔のない頭を此方へと向けてくる。

「っ…！お2人とも下がって!!」

『そんな…アレの反応はサーヴァントそのものだ！あの少女の遺体が霊核の代わりになっているとでも言うのか!?!』

マシユは危険を察知して盾を構え、僕は立香さんの前に立ってゲイ・ボルクを構える。

泥巨人の解析を進めていたDr. ロマンは、英霊と変わらない存在だと判明したことで驚いた様に大声を出す。

ニタリ、と誰かが笑った気がした。

泥巨人はその大きな両腕を天高く振り上げれば、そのまま無造作に僕たち目掛けて振り下ろしてくる。

流石にシールドダーと言えども質量差があつてはそのまま押し潰され、あの泥の中に取り込まれかねない。

立香さんをマシユに抱えさせれば、僕と二手に分かれる様にして飛び出してその一撃をギリギリのところ避ける。

泥巨人の剛腕を避けた瞬間に僕は朱槍を地面に突き立てて剛腕によつて生じた衝撃波で吹き飛ばされないように踏ん張り、同時にルーン文字を起動させて高密度の火炎弾を5発作り出して泥巨人に撃ち込む。

しかし質量差か…それとも高密度の魔力集合体だからなのかは分からないけど、着弾する瞬間に僕の作り上げた火炎弾は霧の様に霧散してしまう。

「僕達じゃ太刀打ちできない!?!」

「東雲さん!!」

泥巨人が僕の方へと注意を向け、薙ぎ払う様に腕を横薙ぎにしてくる。

全身の肉体をフル稼働させて跳躍をするよりも早く迫りくるその腕は、立香さんの叫びと共に僕に叩きつけられる…筈だった。

「だから!俺たち英霊が居るんじゃないやねえか!違うか、マスター!?!」

「兄さん!!」

「マスター、遅くなつてすまない。マシユ、君はマスターを頼む」

「エミヤさん!」

僕に迫りくる剛腕は、クー・フリーンの放った原初のルーン文字による結界によつて弾かれ、泥巨人はその衝撃に上体を大きく逸らす。

エミヤはマシユにマスターの護衛を頼むと、全身の魔力を漲らせる。

「クー・フリーン、時間稼ぎはお手の物だろうか?」

「ああ!?!俺に指図してんじゃないやねえぞ!」

「やれるんだな!?!」

「誰に物言つてやがる!!」

エミヤが問いかけた瞬間、獣の様な獰猛な笑みを浮かべたクー・フリーンは、その俊敏さを活かして泥巨人を翻弄するかのよう高速で動き回り、僕の物とは比べ物にならない高威力のルーン魔術を泥巨人へと放ち続ける。

だけど、魔術に対して特に高い耐性を持っているように思える泥巨人は特に疲弊した様子もなく、ルーン魔術ではじけ飛んだ部位をすぐさま再生させて、でたらめに腕を振り回し続ける。

『I am the bone of my sword.』
『Steel is my body, and fire is my blood.』
『I have created over a thousand blades』

クー・フリーンは不敵な笑みを浮かべながら嵐の様に繰り出される剛腕を掻い潜り、すれ違い様にゲイ・ボルクで腕や胴体を刺し貫き、着実にダメージを稼いでいく。

僕は合わせてルーン魔術を起動させる事でクー・フリーンの身体能力を強化し、その槍の一撃を、或いはその俊敏さを補助していく。

立香さんは意識を集中させてエミヤへと魔力を送り込み、彼の詠唱のサポートを必死に行っている様だ。

『Unknown to Death.』
『Nor know to Life.』
『Have withstood pain to create many』

エミヤの肉体から莫大な魔力が溢れ出し、彼を中心に四方八方へ魔力が奔り、紫電が大気を駆け抜ける。

その爆発的な魔力放出量に、泥巨人はエミヤへと顔を向けてまるで求めるかのようにその右腕を伸ばしていく。

「テメエの相手は俺だって言ってるんだ！この木偶の坊が!!」
『『ガンド』!!!』

クー・フリーンは伸ばされた泥巨人の右腕を真下から跳躍して、ゲイ・ボルクで一気に突き抜ける。

泥巨人から別たれた腕は上空高く舞い上がって爆弾のように破裂し、僕達の頭上に降り注いでいく。

僕とクー・フリーンはお師匠から授けられたルーン文字を一斉に起

動させて、降り注ぐ呪いの泥を弾き飛ばしていく。

「真名・偽装登録…先輩、耐えてください!!」

マシユは、立香さんとエミヤを呪いの泥から守るために躊躇なく宝具を展開し、降り注ぐ呪いの泥をはじき続ける。

その守護結界はまるで城壁の様にも見え、そしてこんな状況でもなければとても美しく尊いものの様にも見えた。

『Yet, those hands will never hold any
So as I pray, UNLIMITED BLADE WORKS.!!』

エミヤが詠唱を終えると同時に彼を中心に炎の渦が広がって、僕達と泥人形を包み込んでいく。

不思議とその炎は熱が無く、ただ冷え切った鉄の様な冷たさだけが肌に残る。

炎の渦が収まり、ゆっくりと目を開くと目の前に錬鉄の英霊の大きな背中がある。

周辺は荒涼とした大地が広がり、まるで墓標の様に無数の刀剣が突き刺さっている。

空は暮れなずむ黄昏色をしており、巨大な歯車がまるでカラクリを動かしているかのように重い音を響かせながらゆっくりと回転している。

僕達は、クー・フリーンを含めて全員エミヤの背後に纏められ、泥巨人は僕達の前方100メートル程のところで見ている。

『固有結界…大禁呪の1つじゃない!』

「…マスターでもあったと言っただろう? オレは元々魔術師でね…もつとも、できることはコレだけだったのだが」

所長の言う固有結界…それは術者の心象風景をカタチにして、現実を侵食させることで発生させる特殊な結界の事だ。

ただ、その展開、維持には世界からの修正力もあって非常に困難で、保つても数分が限度って事らしいのだけど…。

「…今、キミを休ませてやる。酷い悪夢だからな」

エミヤは此方を呆然と見つめている泥巨人へとゆっくりと歩き出

せば、突き立っている剣の内の一振り…式典用の儀礼剣の様な宝具を手に取り徐々に駆け出す。

それと同時に周囲の突き立っていた剣が一齐に宙へと浮かび上がり、まるで豪雨の様に泥巨人へと襲い掛かっていく。

その一振り一振りが見紛う事なく宝具…神秘を秘めた兵装であることは疑う余地もなく、その宝具をあるうことかミサイルの様に泥巨人に降り注がせて爆発させていく。

『壊れた幻想』と呼ばれるそれは、宝具が壊れた瞬間に内蔵した神秘を放出させることで文字通りの爆弾とするものだ。

内包した神秘の量にも依るのだろうけど、その一撃一撃は間違いなく必殺の一撃と言える。

壊れた幻想によって泥巨人はやがて原型を失い、泥に埋め込まれたあの少女の上半身が露になる。

エミヤは一気に跳躍してその少女の元まで飛び込むと、手に持った儀礼剣を胸元に深々と突き刺し、真名を解放する。

『勝利すべき黄金の剣！』

「人類の抑止力、と言えば聞こえは良いが、その実態はただの掃除屋と言うやつだね。私が目指していたモノとは遠くかけ離れた存在だったよ」

特異点での異常を無事に解決したその夜…たまたま寝付けなかった——実際は清姫がベッドでモゾモゾしていた——僕は、廊下で立香さんと鉢合わせ、食堂で温かいココアでも飲もうと食堂へ向かった。すると、そこにはエミヤが清潔感のある白いエプロンを身に着けて水回りの清掃を行っていた。

彼が召喚されてから、食堂はエミヤが担当することになっている。レのつくオジサンの爆破テロによって人員が少なくなってしまうたカルデアの負担を少しでも減らし、ついでにバランスの良い食事を提供すべきだろうと彼が言い出したのが事の発端だ。

僕と立香さんはエミヤに事情を説明すると二つ返事で承諾してく

れて、すぐに甘いホットココアを用意してくれた。

そうして静かな食堂にホットココアを啜る音が響く中、エミヤが誰に聞かせるでもなく口を開く。

「多を生かすために少を切り捨てる…言っている事の正しきは理解できても、私はそれを受け入れる事ができず、疲弊し、摩耗し、磨り潰されていった。そんな果てにあったのは過去の自分を殺して未来を無かった事にする…等と言う、くだらない願いくらいなものだ」

「その…エミヤさんは…それで第五次聖杯戦争へ？」

「まったくの偶然の産物だったがね。ああ、結果はロクでもなかった。笑い話にしかならん」

エミヤは肩を竦めてニヒルに笑うと、僕達2人を見つめる。

「結果がどうあれ、そこに至るまでの道は間違っていないんだ…と自分自身に言われ、あまつさえ敗北を喫したのだからな。…だが、磨り減ってしまった私には随分と効いた」

「…あの女の子が言っていたセンパイって…言うのは…」

「さて、ね…もう遠い昔の話だ。ああ、2人とも…飲んだ後のマグカップはきちんと水につけておいてくれ。明日朝食の準備をする際に私が洗っておく」

エミヤは立香さんの問いに軽く肩を竦めるだけに留め、霊体化して姿を消す。

彼は未来の存在…第五次聖杯戦争を生き延び、目指したものの果てに到達した人間なのだろう。

きつとそれは並大抵の努力でなれるわけでもなく、そしてなったあとも地獄の様な日々が続いたのだろう。

それでも…間違っただけはなかったと思える強さは…目指さなければならぬ強さの様に思える。

「…私ね、もつと頑張らなくちゃって思った」

「立香さんは、頑張ってるんじゃないかなあ…？」

エミヤが消えてから暫らくして、ポツリと立香さんが言葉を漏らす。

どこか悔しさを滲ませたその声は、僕に向けられているようにも感

じられる。

「今のままじゃ、私はマスターとしてはまだまだ足手まといなのかもしれない…マシユにも助けられてばかりだからね」

「僕は、お師匠に色々な術を叩き込まれてきた…だからやれる選択肢が多いっただけだよ？」

「それは、分かっているんだけどね…」

立香さんは残っているホットココアを一気に飲み干して、すくつと椅子から立ち上がる。

どこか落ち込んでいた様な表情だった立香さんは、両手で自分の頬を強く叩くと、びしっと僕に指を差し向ける。

「けど、私は東雲さんみたいに器用じゃない！器用じゃないからやれることを頑張るの！なので、これは宣戦布告デス！」

「はい？」

僕はキョトンとした顔で立香さんを見上げ、立香さんはフンと不敵な笑みを浮かべて僕の事をまっすぐに見つめる。

「東雲さんよりも強くなかったって構わない、魔術が誰よりも下手でも構わない、だけど決して諦める事だけはしないってね！それじゃあおやすみ！」

「お、おやす、み…？」

立香さんは足取りも軽やかに食堂を出ていき、僕だけがポツンと一人取り残された。

第二特異点 永続狂気帝国セプテムく薔薇の皇帝く

#29

——流れ星を見た……

——鮮烈に夜空を駆け抜け、そして消えていく様は……

——ああ、まるで戦士の様なのだと……

——俺はあのようにして生涯を終えるもの

だと……

——そう、確信したのだ——

朝：僕は目を覚ましてからまず、隣で静かな寝息を立てている存在にゲンナリとつつ体を起こしてベッドから抜け出る。

——全身に微量な魔力を流して、魔術回路を一時的に励起させることでコンデイションをチエックする。

——一ヶ月弱：お師匠に鍛えられ、兄弟子と駆け抜け、特異点を2つ解決したお陰なのか：それともメデイカルチエックの際には発見できなかったのかは分からないけれども、僕の魔術回路の総数は全部で27本へと増えている。

——魔術回路が増えると言う事は、それだけ魔術を行使するための魔力が多くなると言う事で大変喜ばしいことだ。

——特異点Fは偶然に。

——第一特異点は死に物狂いで駆け回って。

——そうして突破してきたのだ：今後も運だけで突破できるとは限らないし、実力が身に付いていくのは今後の事を考えれば重要な事だろう。

——励起した魔術回路に勘付いたのか、ベッドの中で眠っていた存在が

モゾりと体を起こして目元を擦りながら此方を見つめてくる。

「おはようございます、ますたあ^{旦那様}」

「…心臓に悪いから、ベッドに潜り込まないでくれるかな?」

「まあ!主従^{夫婦}の関係であれば当然の事!わたくしはますたあがお眠りになった後もお守りしているだけですのに…よよよ…」

「変なルビ振らないでくれるかな!」

ベッドの中に潜り込んできた存在…それは言うまでも無く偶然僕と契約することになった清姫だ。

清姫は毎晩のように着物を着崩した状態で僕のベッドに潜り込み、ヒシッとしがみ付くような形で眠りに就いている。

既成事実を用いて正式に責任を取らせようと言う恐ろしい計画が垣間見えて、僕としては非常に心臓に悪い。

良家のお嬢様で透き通る様な白い肌、魚が住まない様な澄んだ瞳、鈴の様な可愛らしい声、数え年で13…つまり12歳にしては恵まれたボディライン…普通に考えれば、ここまでされて恋に落ちない青少年は居ないだろうけれども、僕自身目を向けている人は他に居るしそもそもロリコンでもない。

と言うか犯罪案件ですよ、ええ…。

「わたくし、諦めません。必ずやますたあを…ふふふ…」

「ほんと、勘弁してください…」

ゲンナリとしながら部屋の隅に置いてある両親の位牌に挨拶をしつつ、軽い筋トレを行う。

腹筋や背筋をする際は清姫に足を押さえてもらい、腕立ての際は背中に座ってもらう。

この時ばかりは流石に会話を行うだけの余裕や邪念を抱く事なんてある訳もなく、部屋には僕の苦し気な息遣いが響くばかりだ。

もつとも、清姫は邪念ダダ漏れのウツトリとした顔をしていた訳だけれども…。

筋トレを終えれば清姫を放り投げる様にして部屋から追い出してからシャワーで汗を流し、僕専用^にに新調されたカルデア戦闘服へと身を包む。

僕達マスターが身を包む礼装には、3つの固有の魔術スキルが設定されている。

これらのスキルはカルデアからの魔力供給をメインにして作動するようになっていて、使用者に負担をかけないようになっている。

本来の設計思想としては、魔術を使えないド素人でも魔術による援護を円滑に行う為：だったか。

立香さんは魔術の素養があると言う事なので、所長が時間を作っては実践的な魔術講座を開いて叩き込んでいる。

僕の場合はお師匠がルーン魔術を叩き込んでくれたお陰もあつてか、援護の為の魔術はそれ程困っている訳ではない。

故に、僕の着込んでいるこのカルデア戦闘服のスキルは通常の物とは異なるスキルが付与されている。

1つ目はガンド：相手の運動機能を一時的にマヒさせる呪いを放つもの。

2つ目はオーダーチェンジ：これは離れた位置に居る英霊と英霊同士の位置を交代させる為の転移魔術だ。

適用されるのはあくまでも英霊だけであつて、人間は位置を入れ替える事が出来ない点は注意が必要だと思う。

3つ目は霊子譲渡：緊急的な魔力補充をカルデアからの魔力供給で賄い、宝具の起動を補佐する。

僕としてはこれが一番重要なスキルになる。
理由は言うまでも無くカルデアを介さず契約をしているお師匠：スカサハが原因だ。

お師匠はカルデアを介して召喚されていない弊害で、現界を保つためには僕の魔力を使用する他無く、僕が契約している3騎の中で一番の大喰らいと化している。

こうなるとお師匠、クー・フリーン、清姫の3騎を同時に動かすと魔力を賄いきれなくなる可能性がある。

もちろん令呪を緊急バッテリーの様に使えば問題はある程度解消されるものの、令呪は全部で3画しかなく、1日に追加補充される画数も1画までと長期的な戦闘を見た時に不安が出てしまう。

そうした問題を解決するために、ダ・ヴィンチちゃんを筆頭にカルデアのスタッフが特別に霊子譲渡スキルを開発してくれる事になった。

とは言え過信は禁物：性能自体は令呪による魔力ブーストの20%相当と言う事なので、タイミングは非常に難しいものになるだろう。

「…よし」

鏡で身だしなみをチェックして整え終えれば、僕は部屋の扉を開ける。

其処には頬を膨らませて不満顔の清姫、デミサーヴァントとして武装状態になったマシユ、カルデアの制服に身を包んだ立香さんが立っていた。

「お、今日も同衾だったのかな？」

「立香さん、顔がゲスいっす」

「あ、あはは…東雲さんは準備は良いですか？」

立香さんは何処か狂気を感じるような瞳でニヤニヤと僕の事を見つめ、マシユはそれに乾いた笑いをあげつつも僕に声をかける。

僕はその言葉に静かに頷いて、静かに一歩踏み出す。

「それじゃ、行こうか」

「アンサモンプログラム スタート」

「霊子変換を開始 します」

コフィンに入ってからやや緊張した面持ちで目を閉じる。

今回の舞台は1世紀ヨーロッパ：イタリア半島を起源とし、地中海を制した大帝国…古代ローマ帝国だ。

その領土は広大であり、特異点Fは言わずもがな、第一特異点なんて比較にならない。

敵も味方も分からない状況に送り込まれる中で、頼りになるのは仲間である立香さんとマシユ…そしてカルデアに来てくれた英霊達だけだ。

だけど、やるしかない…この特異点を解決しなければ、僕達は静かに死ぬしかないのだから。

求められるは聖杯の探索…果たして、今回は無事に終える事ができるだろうか…？

「レイシフト開始まで あと3、2、1…」

「全工程 完了」クリア

「グラントオーダー 実証を 開始 します」

レイシフトによる感覚は奇妙なものだ。

まるで意識がどこかへ落ちる様に…。

身体がどこかへ行ってしまうような…。

そういう不安な感覚が一斉に襲い掛かる。

とは言え、そんな感覚はほんの数秒の事であって、すぐにレイシフト先へと移動することが出来る。

肌を感じる柔らかな太陽の光、鼻をくすぐる蒼い香り。

ゆつくりと目を開くと、そこは爽やかな風が吹く草原の丘だった。

「ふう…今回も無事、転移に成功しましたね」

「うう…この感覚は慣れないなあ…」

「キューウ、フォーウ！」

マシユと立香さんは周囲を見渡しながら、ホツと胸を撫で下ろしている。

どうやら前回同様にフォウまでついてきたようで、マシユの盾の影から飛び出して立香さんの胸に飛び込んでいる。

…小動物の特権だなあ。

気を取り直して、僕も周囲を見渡すと、傍らに清姫とクー・フリーンの姿があることを確認する。

「古代ローマつつつてたな…って事は、あの赤い皇帝サマの時代かね？」

「兄さん、時代的にはもう亡くなってますよね？」

今回のこの特異点の年代は紀元60年…クー・フリーンの没年は紀元2年と言われている、微妙に時代が噛み合わない。

故にクー・フリーンがこの時のローマ帝国の皇帝と知己と言う可能

性は限りなく低く、また皇帝が知っていたとしてもアルスター伝説を目にしていた、と言う可能性が高いだけに留まる。

あ、そういえばこの時代であれば、影の国に通ずる道がまだ開けている可能性がある。

もしかしたら、千里眼でこの時代に生きていたお師匠が此方を見ている可能性があるなあ…。

「言ったら、英霊は様々な時代の聖杯戦争に呼ばれるってな。月で行われていた聖杯戦争で、ちよつとばかしネロっー皇帝サマのところまで客将やつてたことがあるのさ」

「兄さんは有名ですもんね…北欧じゃ日本で言うナマハゲ扱いだって聞きましたよ」

「フィンの野郎に騙される程度には馬鹿なナマハゲだけどなー」

フィン、と言うとフィン・マックールの事だろうか…？

これまた時代が合わないので知己じゃないはずなのだけれど…もしかしたらギリシャ神話ばかりにあれこれ話が盛られているのかもしれないなあ…。

「…あの光の輪…此処にもあるんだね」

軽い談笑を行っていると、立香さんは空を見上げて渋い顔をする。

…冬木の時は曇天に覆われ見えなかつたけれども、フランスの時にはキチンと目にする事ができていた巨大な光の輪が、この時代の空にも存在する事が確認できる。

この時代に輪があると言う事は、更なる以前の時代…紀元前にあたる時代から存在している公算が高い。

とは言え、今はこの場の特異点の解決が優先だ…現状害を感じないのであれば、放置しておくしかない。

『とりあえず、現状の報告をしなさい』

「所長、此方は全員無事にレイシフトを完了しました。問題は、この場が首都ローマではないって事なんですけど」

所長からの通信で、僕はすぐさま返答して現在地の確認を急がせる。

今回のレイシフトの予定ポイントは首都ローマの筈だった。

今いる場所は何処までも続く青々とした丘陵地帯であり、首都と言
うには活気と言うものが存在していない。

丘陵地帯から見える範囲にあるものと言えば、整備された街道くら
いだ。

この街道はローマへと続く道であり、物資の移動や軍の派遣をス
ムーズに行う為に最優先で整備された…と言う事を学校で習った。

広大な領土を持つが故に、治安維持のための軍の派遣は重要な意味
合いを持つのだ。

『ちよつと、ロマニー！どういふことなの？』

『あれ、おかしいなあ…きちんと首都ローマに設定されているだけ
ど…いや、位置的には近い場所にレイシフトしているんだけど』

「転送座標の調整ミス…でしようか？」

「時代は正しいんですね？」

…フランスにてドえらい目に合った身としては、この座標ズレに関
しては本当に勘弁してもらいたいと思っている。

目を開けたら剣林弾雨の戦場でしたとか本当に勘弁してほしい…。

マシユは、不思議そうな顔で首を傾げ、立香さんは冷や汗を一筋か
きつつ時代の確認をする。

『うん、時代に関しては問題ないよ。ローマ帝国第五代皇帝——ネロ・
クラウディウスが統治する時代なのは確かだ。でもおつかしいなあ
…』

「でもドクター、すごく牧歌的な丘ばかりなんだけど…」

「フウー…フオーウ!!」

立香さんから飛び降りたフォウは、高く飛び跳ねてある方角に何か
起きているとアピールを行っている。

僕達はそちらへと目を向けるものの、なだらかな丘くらいしかない
様に見える。

だけど…クー・フリーンは何かを感じ取ったのか、ニイツと笑みを
浮かべる。

「ああ、匂う…匂いやがるな。こりゃ大規模な戦闘が近くで起きてや
がる」

『待て待て、この時代に首都の郊外で大規模な戦闘なんて起きた記録はないぞ?!ネロ・クラウディスだってまだ晩年と言う訳ではない!』
『ロマーニ、もう特異点に足を踏み入れているのよ?つまり、何かしらの異常が起きていると言う事。聞きなさい、まずはその戦闘に介入しなさい。首都が近いと言う事はそこへ攻め入ろうとしている筈よ』
「音のする方向へ急ごう!」

僕達は顔を見合わせて頷き、フオウを先頭になだらかな丘を駆け抜けていく。

霊体状態で姿を隠していたお師匠とエミヤも姿を現す。

「エミヤさん、何が見えますか?」

「ふむ、大部隊と少数部隊の戦闘だ。どちらも『真紅と黄金』の意匠を用いているが、少数部隊の方は若干異なる。あれは…」

「おうおう、見えるねえ!皇帝サマがはりきって戦ってるじゃねえか!」

エミヤはアーチャー特有の鷹の目を用いて、戦場を戦う部隊の違いを僕達に伝えていき、少数部隊の先陣を切っている存在へと目を向けた途端に曖昧な表情になる。

クー・フリーンもその存在が見えたのか、エミヤとは対照的に快活な笑みを浮かべる。

「先陣切って戦ってるのが第五代皇帝のネロ・クラウディウスだ。皇帝サマは生身でも強いみてえだな!」

「ほ、本当に暴君ネロなんですか!?歴史資料では男性であると…」

僕も学校の授業ではネロ・クラウディウスは男である…と言う事は習っている。

故に歴史の齟齬を感じざるを得ないものの、女帝と言う存在は好ましくないと思っていた歴史家が勝手に改変したのか、それともあのアーサー王の様に性別を偽っていたのかのどちらかなのだろう。

「大部隊は首都ローマを襲撃するつもりのようなのだ。後方にまだ部隊を控えさせている」

「それでは、立香さんは後方部隊の撃退を。僕達で目の前の戦闘に介入します」

「あつあのー…で、できれば人殺しは…」

『…割り切りは必要よ、藤丸?』

戦場に立つ…と言う事は、人を殺すと言う事に他ならない。

…時に犠牲を払わなくてはならなければ目標を達成できないならば、切り捨てなければならぬだろう。

だけど、彼女は違う…彼女は、極力犠牲を出さないようにしようとしている。

命は等価値であるのだと、切り捨てて良い犠牲はないのだと。

「所長、その辺は現場サイドに任せてもらっていいですか?最終的に解決できればいい訳ですし」

『東雲…良いでしょう。ただし!怪我だけはしないように!!』

「…はい!」

所長の言葉と同時に散開し、立香さん、マシユ、エミヤは後方部隊の襲撃を開始する。

彼女は2週間の準備期間の間に、他にも英霊を呼び込むことに成功している。

余程の事がなければ、彼女に傷をつける事は夢のまた夢だろう。

「まったく、お主は甘い男だな」

「それがますたあの良いところ…流石はわたくしのますたあですわ」

お師匠が呆れた様な声で軽くため息を吐き、清姫はここぞとばかりに僕の腕に抱き着いて頬を赤らめながら此方を見上げてくる。

僕はそんな清姫をやんわりと離しながらお師匠へと目を向ける。

「殺し殺されなんてしたくないのが現代の普通ですよ。僕は兎も角として」

「ほう…お主は覚悟できていると?」

「僕は貴女の弟子で、心構えも叩き込まれましたから。だからこそ、立香さんの代わりに手を汚す立ち位置に居られるってもんですよ」

僕は概念礼装であるゲイ・ボルクを手に持ち穂先を大部隊へと向ける。

「先手は清姫…宝具を解放して皇帝陛下正面の部隊を蹂躪、残った部隊をお師匠と兄さんで各個撃破します!」

「承知した」

「おうよ！」

「承りました、ますたあ…それではご照覧あれ!!」

清姫はにこりと華の様な笑みを浮かべ、その身を燃え上がらせる様に魔力を放出する。

その炎の勢いは天を衝き、その身を龍へと変じさせる。

『転身火生三昧!!!』

全てを焼き尽くす龍へと変じた清姫は、皇帝ネロと衝突していた部隊をその身の炎で包み込み焼き尽くしていく。

突然の横槍に大部隊は混乱に陥り、急速に勢いが衰えていく。

僕の傍らから跳躍で大部隊のど真ん中に降り立ったお師匠とクー・フリーンは互いに背中合わせで周囲を見渡す。

「力を見せるが良い、勇士。出来なければお前の命を貰うまで」

「おう、かかってきな」

お師匠は凜とした声で涼やかに兵士達を見つめ、クー・フリーンは凜猛な獵犬そのものの殺気を放ち槍を構える。

更に後方からは何か弾ける衝撃音、空気を裂くような音が此方からも響き渡り、大部隊は混沌の極みへと達する。

クー・フリーンが雷光の如く踏み出せば人が木つ端の様に弾き飛ばされ、お師匠が軽やかに舞えば血風が嵐の様に吹き上がる。

この2騎に加えて部隊を蹂躪し続ける炎の龍の存在に、戦意を失ったのか蜘蛛の子を散らす様に撤退を始める。

「なんだよ、あつけねえな…」

「ただの兵士の中にも玉があると思っただが…期待外れだったな」

立ち向かう事をせず、逃げていく兵士達を見て矛を収めたお師匠とクー・フリーンは、心底がっかりしたような声を上げる。

かたや影の国にて英雄を鍛え上げ続けた伝説の存在…かたや鮮烈にその生涯を駆け抜け、未だに恐れられる最強の戦士だ。

立ち向かうと思う人間は、自惚れ屋か自殺願望者だけだと思う。

清姫は戦闘が終わったのを確認してその身を人へと戻し、両手を広げて此方へと駆け寄ってこようとしているのが見える。

勝敗は決したと見て良いだろうな。

僕は魔術で上空へと信号弾を放って遠くに居る立香さん達に合図を送り、ほんの5分程度の戦闘らしきものが終わったことを伝えるのだった。

「剣を納めよ、勝負はあった！…そして貴公たち、もしや首都からの援軍か？」

謎の軍勢とローマ帝国第五代皇帝ネロの軍勢との戦闘は、僕達カルデアの横槍の甲斐もあって大勝に終わった。

戦の趨勢が決したのを認めたネロは勝利の勝鬨をあげ、立香さんと合流した僕達の姿を値踏みするかのようにつめる。

僕やクー・フリーン、お師匠はケルトの戦士特有の装束を身に纏い、清姫はこの時代よりも後の日本の着物を身に纏う。

更に立香さんは近代的なカルデアの制服を身に纏い、エミヤに至っては何時の時代にも属してなさそうな紅い外套姿…訝しがるのも無理は無いだろう。

「すっかり首都は封鎖されていると思っただが… まあ良い、褒めてつかわずぞ」

ネロは可憐な華の様な笑みを浮かべて尊大な態度で胸を張り、その豊かな実りを僅かに揺らす。

僕はチラ、とクー・フリーンの方へと目を向けると、間違いないと言わんばかりに大きく頷かれる。

「いや、俺たちはちよつとした旅の者でね。噂に名高い皇帝サマが襲われてたんで、ちよいと加勢させてもらったのさ」

「なんと、そうであったか。と、なると首都は未だに奴らの手の内と言う事か…」

クー・フリーンが手慣れた様子で適当に話をねつ造して伝えると、ネロは瞳の奥に僅かばかり残念な感情を浮かべつつすぐに思考を巡らせていく。

奴らの手の内…と言う言葉から鑑みるに、どうやらネロは首都から追放された形になっているようだ。

と、なると今回の異変が首都にある可能性があるものの、敵兵が逃げたのは首都と覇別の方角になる。

この辺りに今回の特異点の面倒さが如実に表れている気がするも

の、一筋縄で行くようであればそもそも大事件になる訳がない。ひとまず、目の前の皇帝陛下に事情を聞かないと…。

「ともあれ、その方ら大儀であった。見れば勇猛果敢な戦士に至上の美を体現したかのような美しい女…なによりも身の丈ものの得物を扱う少女は実に余の好みだ！何とも言えぬ倒錯の美があつたな！」

「は、はあ…ありがとうございます」

大盾を持っていたマシユの存在を見たネロは大層気に入ったように鼻息荒く頷き、ぱあつと明るい笑顔を浮かべる。

先ほどまであつた戦鬪の疲れなどどこ吹く風と言わんばかりのその笑顔は、彼女の後方に控えていた兵士達をも笑顔に変えていく。

これが皇帝たるものカリスマ…と言うものなのだろうか？

「よいぞ。余と轡を並べて戦う事を許そう。至上の光栄に浴すがよい！」

「ありがとうございます」

僕と立香さんはそろえて感謝の言葉を口にして頭を下げ、お師匠を除いた全員が僕達に揃って頭を下げる。

お師匠は勇士たちの師である前に一国の王と言うべき存在だ。

そんな存在は軽々しく頭を下げるべきではない、と言う事なのだろう。

「先ほど、兄さ…いえ、クー・フリーンが言っていたように我々は旅の身…今この帝国で起こっている事件に関しては疎いのが現状ですので、少し説明していただいてもよろしいでしょうか？」

「クー・フリーン…？どこかで聞いたことがある様な気がするな…まあ、良い。その話に関しては道すがらと言う事で良いか？余たちは一刻も早く首都ローマへと帰還する必要があるのではな」

「承知しました。では、移動を開始しましょう」

僕達は皇帝ネロの先導で一路首都へと向かう事にする。

現状、確かに思える事は歴史上暴君とまで言われたその皇帝が可憐な少女であること。

そして、その皇帝が前線に赴いてまで戦場に立たねばならない程に士気が低下していると言う事だ。

本来、軍隊と言うものは統率者が先陣切って戦場を駆け回ると言う事はしない。

もしその統率者が戦死か捕虜にでもなってしまった場合、軍と言う組織が瓦解してしまうのだ。

ましてや一国を統べる皇帝が前線に出てくるなど、論外中の論外。おそらくネロの軍勢は、長期化している戦闘に疲弊しているのかもしれない。

一抹の不安を感じつつ、僕らはこの特異点解決への第一歩を漸く踏み出した。

途方もない話になってしまった…。

首都への帰還中も起こった散発的な戦闘…その敵性勢力の名は、『連合ローマ帝国』。

それは突如ローマ帝国領内で発生し、電撃作戦の様に領土を食い荒らしてしまい、既にかつての領土の半分以上を飲み込んでしまっている状態の様だ。

実態が分からず、首都の位置すらも分からない姿の見えない連合ローマ帝国は、残るローマ帝国の領土を奪いつくさんと帝国の敷いた防衛線を引っ切り無しに攻めていると言う事だった。

ネロはそんな防衛線で兵士達の士気向上の為の慰問を行っていて、留守にしている間に首都を包囲してしまった。

ネロ達を襲っていた部隊は、首都を包囲している部隊との挟撃に持ち込むための物だった…と言う事だ。

このままでは首都に帰還することは叶わず、放浪する羽目になってはやがて大軍に磨り潰されることとなる。

よってネロは戦闘の疲れを押しても進軍し、包囲網を敷いている指揮官の首級を上げる必要があった。

指揮官が居なくなつて困るのは、何も自分たちだけではないのだ。「多勢に無勢は戦の常ではある。ではあるが、無勢の側に立つのは嬉しくない。疲れる!!」

「確かに…このままだと私たちも疲弊するばかりで旨味が…」

ネロはウガーツと両腕を振り回して鬱憤を晴らし、戦闘後の負担が取れない立香さんは困ったように眉根を寄せる。

立香さん達は極力相手を殺さないように戦っている為、その疲弊する度合いは普通に戦うよりもどうしても高くなってしまふ。

僕達はいくまでもなるべく殺さないようにしているのであって、必要に迫られればサクリと送ってあげている。

…本当はいけない事なのだろうけどね。

「さて、良太…お主ならばこの状況…如何様にして打破する？」

「ふむ…そちらの槍兵はキレるのか？」

「なに、ちよつとした授業の様なものだ。戦士とは勇猛に戦うだけが仕事ではないからな」

お師匠は薄く笑みを浮かべて僕の方へと目を向ける。

僕は槍に付いた血を振り払って落ししながら、空を仰ぐ様に顔を上へと向ける。

さて、ここまで僕達が取得している情報で判断できる材料は…まず、一般的な兵士はほぼ人間の範疇を出ない。

これは恐らく連合が侵略した領土の人間を徴兵、教育したうえで投入しているからだと思う。

さすがにこれだけの広大な領土を攻めるとなると、いくら英霊の力があつたとしても時間がかかる筈…で、あれば手駒を増やして攻めるのが定石と言うものだろう。

続いて、指揮官に該当するものは強大な力を持った存在だ、と言う事。

基本的に人間同士の戦争を行っているのだけど、その指揮官が前線にやって来ると必ずと言っていいほど敗戦を喫するそうさ。

と、なると考えられるのが、指揮官が英霊である可能性だ。

英霊でなくとも、何らかしらの魔術的な措置を施された人ならざる者であることは疑いようがない。

特にこの時代は現代と違って神秘を多く残しているのだから…。

「少数精鋭で陽動をかけましょう。カメの頭が引つ込んでいるのなら無理矢理引きずり出すまで」

「陽動、とな？」

「分の悪い賭けですけどね…皇帝陛下にも手を借りる事になりますけど…」

僕は槍の穂先で地面に簡単な絵を描き、思いつく作戦を説明していく。

作戦、と言っても単純なもので、ネロと立香さん、マシユ、エミヤの4人を中心にした小隊規模で派手に立ち回ってもらい、指揮官を引きずり出すと言うものだ。

武力を示すだけならばネロは必要ないのだけでも、あちらはネロの首を欲している筈…並大抵の人間では太刀打ちできないと理解できれば、必ず指揮官が出てくるはずだ。

後はそいつを袋叩きにしてやれば、如何に英霊と言えども一溜まりもない筈だ。

「指揮官が出てきたタイミングで、僕達も加勢しましょう。相手に勝てるかもしれない…と思わせるのが重要なので…」

「猟犬と女王、それに龍の小娘では攻撃力が高すぎる、と言う事か」「相手の本陣叩いた方が早いんじゃないか？」

エミヤは納得したように頷き、クー・フリーンは不満顔で僕が地面に描いた絵に仮の本陣を書き足してバツテンマークを付ける。

クー・フリーンの言う事はもつとも…ただし、それは本陣の場所が最速で割り出せる場合に限られるだろう。

取り逃がす事になれば後顧の憂いとなることは目に見えているし、何より退却時に他の都市を襲撃し、蹂躪の限りを尽くしてしまうかもしれない。

「小規模…とは言えこれだけの大部隊ともなると隠密で動かして本陣を急襲することは無理でしょうし…それに本陣の場所までは…」

『いや、それに関しては此方で観測できるかもしれない』

「Dr. ロマン？」

困ったように眉根を寄せると、助け舟と言わんばかりにロマンが僕達に声をかけてくる。

姿なき声にネロは驚いたような声を上げ、興味津々と言わんばかり

に口を開く。

「ほう、声しか聞こえぬと言う事は、魔術師だな!」

『はい、姿を見せる事が出来ず申し訳ありません、皇帝陛下。自分の名前はロマニ・アーキマン。東雲 良太、藤丸 立香兩名の師にあたる者です。早速ですが、話を始めますが…首都ローマの辺りを観測した際に君たちの英霊とは別の強力な反応を確認した。その反応がある部分をマーカーするよ』

「面妖な魔術…しかし実に美しい!余は魔術師の事を気に入りそうだ!」

僕の書いた簡易的な地図に重なる様にして、シバを利用して作り出された立体映像が浮かび上がる。

其処には大まかな連合帝国の布陣と自分たちの位置、そして連合帝国側の英霊の反応があったポイントを示される。

位置としてはこの街道を迂回した先にある地点…僕は沈みゆく夕日を見つめながら深く息を吐き出す。

「…奇襲だ。奇襲をしかけましょう!夜になれば視認しづらくなってこちら側の被害を減らせるかも!」

「で、あれば短期決戦となろう…さすがにこれだけの軍勢が相手では、余の軍も長くは持ちこたえられないからな」

「いえ、軍は動かしません」

僕は首を横に振り、クー・フリーン、清姫…そしてお師匠を見る。

立香さんも同様にエミヤを見つめてから、口を開く。

「ロマン、公を此方に呼び出せるかな?」

『英霊のレイシフトかい?前回のレイシフト同様、座標がズレこんでしまうかもしれないけど…』

「ダメ元でお願い!相手が強力な英霊なら、戦力は多いに越したことはないから!」

立香さんは顔の正面で手を合わせて、拝むようにして姿の見えないロマンにお願いをする。

背後で所長が指示をしている声が聞こえるので、準備は進められている様だ。

『彼ならば孤立しても独力で合流できる可能性もあるか：所長も既にその気だし、すぐに送り込むよ』

「こちらの英霊はそれで6騎：十二分に勝算は見込める、かな？」

立香さんは前回の特異点の後、收拾された聖晶石を用いての英霊召喚実験を行い、戦力の増強に成功している。

その数10騎：そこには敵対関係にあった英霊の姿もあった。

そんな英霊をも力を貸してくれると言う状況は、今の僕達にとってありがたいと言うほか無い。

人理が無くなれば、自身が成した功績が消える：それが正道であれ悪道であれ無くなってしまおうと言う事は自身の否定に他ならない。

：この人理焼却を行おうと考えた存在は、いったい何を考えてすべてを否定しようと思ったのだろうか？

カルデアからレイシフトを開始した旨を告げられると、すぐ傍に疑似的な魔法陣が浮かび上がり光の柱が上がる。

その中から現れた存在は、長身の男：闇に溶け込みそうな黒い貴族服を身に纏い、一振りの槍を携えた1人の男。

「世界に呪わしき我が名を吠え立てよう」

月が中天に輝く頃：夜の闇は深くなり、平原を照らす光は月と星だけに限られる。

お師匠のスキル『魔境の智慧』によって騎乗スキルを一時的に付与された僕達は、灯りの無いままに目的地へ向かって馬で疾走をしていた。

ネロの軍勢には後方で待機をもらい、敵英霊との戦闘を開始したと同時に首都正面方向へと攻撃を仕掛けてもらう手筈になっている。

強力な英霊を従えた部隊による強烈な打撃で指揮系統を麻痺させ、残る軍の包囲網を食い破り首都へ直進。

そのまま首都に残っている軍勢を引き連れて戻ってくるという寸法だ。

敵陣地のテントが見えてくると、エミヤは馬を加速させてその背に立ち、黒弓に適当な剣を矢に変えて構える。

「では、始めるぞ、マスター！」

「やっっちゃえ!!」

立香さんは覚悟を決めたのか強い意志を秘めた眼差しで敵陣地を見つめ、号令と共にエミヤは弓を強く引き絞って矢を放ち、夜闇を斬り裂く風切り音を発しながら一直線に矢が突き進む。

矢を放ち、数秒後に敵陣地に爆発が起こる。

名も無き剣とは言え宝具…内包した神秘はそこらの剣では遠く及ばず、その爆発力は広範囲に渡って衝撃が走り抜ける。

「余に続け!!奪うは敵指揮官の首だ!!」

ネロは馬上で真紅の剣を抜き放ち、我先にと敵軍へと突撃をする。

僕達はそれに続く様に馬を走らせていく。

遠くから鬨の声が聞こえる…恐らくネロの軍勢も決死の敵軍突破を決行している真つ最中だろう。

首都を守っている軍勢を引き連れてくることが出来れば、今の戦況を好転させることは容易い。

もちろん、お師匠達がこの程度の軍勢に敗れる事はないけども、長引けば長引くほどこの時代の人々が不利になってしまう。

「ウウ…オオオオオオオオオッ!!!」

月明かりが一際強くなった瞬間、僕達の乗っていた馬が一斉に半狂乱になったが如く暴れ出し、僕達は地面へと放り出される。

僕は素早くルーン魔術を展開して風を操って空中に放り出された自身の身体を煽り、体勢を整えて地面に着地する。

立香さんは手綱を握っていたエミヤが抱えてくれたおかげで傷を負う事は無く、マシユも無事に降り立つ事ができた。

僕達は狂気を孕んだかのような殺気を感じ、一斉にそちらへと目を向ける。

『英霊の反応だ！来るぞ!!』

「はい、感じています…すぐ、そこに!!」

それは…獣の様であった。

全身の筋肉は爆発の時を今か今かと待つように攪み、呼吸は荒い。狂気を宿したその瞳は闇の様に黒く、しかし何処かネ口に面影を感じる。

その身は黄金の鎧を身に纏い、血の様に赤いマントが月明りに妖しく照らされる。

ネ口は一瞬その表情を暗くし、しかしすぐにその色を激情へと変えて剣の切先を英霊へと向ける。

「伯父上……!!」

「——我が、愛しき、妹の子、よ」

『今、彼女は何と言ったのかしら？伯父上と言ったの……?』

所長は信じられないと言わんばかりの声を上げて僕達に確認をしてくるものの、僕達は一言も声を発することが出来ない。

全身に狂気を孕んだ殺気を叩きつけられ、一言でも発すればそれを皮切りに戦闘が開始されると言う予感がした為だ。

だが、そんな最中でもネ口は構わず言葉を続ける。

「いいや、今は敢えてこう呼ぼう：如何なる理由か彷徨い出でて、連合に与する愚か者！カリギユラ!!!」

カリギユラ：特異点がローマと言う事で、ローマに関係するであろう英霊反英霊になりうる人物を調べていた中であつた名前。

名前、と言うよりも渾名なのだけれど…。

『小さな軍靴』と呼ばれたその男は、ローマ帝国第三代皇帝：月の女神に愛され、狂気の内に身を晒し、暴君と成り果てた悪名高き皇帝。

彼は紀元41年に暗殺され、その生涯の幕を閉じている。

故にこの地にはカリギユラを知る者は未だ多く、その身のステータスは間違いなくトツプランクの補正を受けていることは想像に難くない。

『いい、ここであのカリギユラを仕留めるのよ！野放しにしているは後々厄介な障害になる!』

「任せてください、所長!」

「心配いりません、先輩：いいえ、マスター」

所長は僕達に檄を飛ばす様に声をかけ、立香さんはそれに若干強

張った声で応えると、マシユは安心させる様に前へと出る。

その先には漆黒の貴族服に身を纏う護国の鬼将ヴラド三世が、赤い外套のエミヤが並び立つ。

「こちらは貴方に合わせて動くでしょう」

「良からう。お前の働き、期待させてもらう」

ヴラド公はその手に持つ槍を片手で構えて迎え入れる様に両腕を広げ、エミヤも両手に夫婦剣である干将莫邪を手に持ち全身の身体力を抜く。

2騎に呼応するように僕の前にはお師匠とクー・フリーンが並び立ち、乾いた唇を舌で軽く湿らせている。

清姫は僕の傍らに立って、身を守る心積もりのようだ。

「本気は出さん。ああ、きつとな」

「1人相手にタコ殴りつてのは性に合わねえが…まあ、戦争なんざそんなもんなんぞでな!」

「斯様な野蛮な振る舞いは苦手…わたくしはますたあの御傍に」

カリギユラはその身を深く沈めて左手を地に着け、ゆつくりとネロを睨み付ける様に此方へと顔を上げる。

それは獰猛な獅子にすら似ていて、此方をすべて食い破らんとする意思を感じ取れる。

その殺気に僕は手に持つ槍を構え、立香さんはマシユの影から令呪の刻まれた手を胸元に添えながら強い意志で睨みかえす。

——余の、振舞い、は…運命、で、ある

——奉げよ、その、命

——奉げよ、その、体

『すべてを奉げよ!!!』

大地を蹴り碎きネロ目掛けて飛び出したカリギユラは、その剛腕を思い切り振り上げて叩き込もうとする。

しかし、その一撃はネロに届くことは無く、ヴラド公が間に割って入ることでその一撃を受け止め、足元に小規模のクレーターが発生する。

「ぐ…闇の時間である。血の晩餐である…!!!」

「ヴラド公!!」

「ネロオオオオツ!!!」

その衝撃は僕達の足元にまで伝わり、彼のカリギユラが余程の難敵と理解するには充分だった。

ヴラド公はそのカリギユラと拮抗し続け、唐突にその身を霧の様に変化させて姿を消す。

突如として力比べが終わってしまったためにたたらを踏んでしまったカリギユラは、背後から急襲してくるエミヤの太刀筋を野生の獣の如き直感で拳を振るい、その軌道を変えさせる。

その衝撃は干将莫邪を砕くに十分な力で、エミヤは砕かれた剣を捨てては再び魔術で造り上げてその手に持って振るい続ける。

「そうらっ!!」

「退きな!弓兵!!」

「遅いぞ!!」

お師匠は高く跳躍して数本のゲイ・ボルクを呼び出して頭上から降り注がらせ、離れた位置から姿を現したヴラド公も地面に槍を突き立てる事でカリギユラの足元から無数の杭を出現させる。

カリギユラはエミヤが離脱する瞬間を逃さずに、自身も素早く横に飛ぶ事で槍と杭の挟撃によるダメージを最小限に抑える。

しかし、その無防備になった隙を克蘭の猛犬が見逃すはずがない。

「おらあっ!!!」

「叔父上、覚悟!!」

棒高跳びの要領で高く飛び上がったクー・フリーンはその勢いのままに1回転しながら槍をカリギユラに向けて叩きつけ、ネロも示し合わせたかのように英霊が如き身体能力で神速の踏み込みを見せてその剣の切先を突き出す。

避けきれないと悟ったカリギユラは左腕でその槍を掴んで受け止め、身体を無理矢理よじる事で急所を避けてネロの剣の一撃を脇腹で受け止める。

ネロの剣を脇腹に貫通させたまま、カリギユラはクー・フリーンご

と掴んだ槍を振り回して地面に叩きつけようとする。

「アンサズツ!!」

「ぐうっ!!」

地面に叩きつけられる前に槍を手放したクー・フリーンは、素早くルーン文字を展開して至近距離で火炎弾を叩きつける。

ネロは自身にも被害が及ぶことを察知して脇腹を斬り裂く様にして剣を引き抜き、後方へと跳躍する。

「グウウツ!! 『奉げよ! 余に! 奉げよ!!!』」

「こいつ、バーサーカーか!!」

「何を今更!」

火炎弾で怯んだ隙に再度接近を果たしたエミヤは、両手に干将莫邪を出現させながら素早く両腕を振るい、浅くではあるものの着実に五体に傷をつけていく。

だが、カリギュラはエミヤの攻撃に構うことなくその手に持つ槍を槍投げの要領で後方に退避したネロ目掛けて投げ飛ばす。

「——っ!!」

絶体絶命…至近距離で放たれるその一撃は、しかしネロに届くことが無かった。

「ガツ…!!」

「なっ…余を…余を庇ったのか…!」

その身を再び霧と生じさせ間に入ったヴラド公が、実体化して身を挺してネロの窮地を救ったためだ。

その槍の一撃は深々と腹部に突き刺さり、背中側に半分ほど貫通している。

ネロの体までほんの数センチで止まったのは、単純にヴラド公が槍を掴んで無理矢理止めただけに過ぎない。

その一瞬、エミヤですら僅かに動きが鈍り、その隙を突かれてカリギュラの裏拳を強かに頬に受け、身体を吹き飛ばされていく。

「よそ見とは感心せんな…?」

冷たい一声…お師匠は両手に持つゲイ・ボルクを華麗に操る事で全身に深手を負わせていく。

その連撃は薙ぎ、突き、払い：いずれもがカリギユラの反応を許すことは無い。

『ガアアアアア!!』

「血に濡れた我が人生を此処に奉げようぞ…」

カリギユラが全身に深手を負ったダメージで膝をついた瞬間、あろうことかヴラド公はゆつくりと腹に突き刺さった朱槍を引き抜き、足元に血だまりを作っていく。

その惨状は彼の宝具を使う為の物：『血に濡れた我が人生』とは、まさに彼の身体に流れる血の一滴までもが再現を続ける。

『カズイクル・ベイ
血濡れ王鬼』!!』

思い切り引き抜かれた槍の勢いに乗じてその腹から鮮血が噴き出し、カリギユラ目掛けてすべてが禍々しい杭と化しながら襲い掛かる。

串刺し公：東ローマ帝国を滅ぼしたオスマントルコを撃退した逸話が昇華されたその宝具は、確かにカリギユラの肉体を貫いていく。

「あ…ああ…我が、愛しき…妹の…子…何故、奉げぬ…奉げられ…ぬ…」

カリギユラはその身を杭に晒されながら肉体を透過させ、ネロへと手を伸ばしながらその姿を消していく。

ネロはその凄惨な姿にビクリと身を震わせつつも気丈に振舞う。

「消え、た…のか…?」

「いや…どうやら逃げられたようだ。…ほう、小間使い擬きが見ていたか」

お師匠は深く溜息を吐き出し両手に持つ朱槍を消していく。

気付けば周囲の戦場は静まり返り、勝鬨の声が夜の平原に響き渡っていく。

「そ、それよりも！ヴラドと言ったな！貴公身体、は…」

「皇帝よ。皇帝ネロよ…そう慌てるものではない。呪わしき我が身はこの程度の怪我、造作もない」

クー・フリーンの朱槍を地に突き立てながら、傷1つどころか破れているであろう衣服が治っている様を見せて、ネロを安心させる。

ネロはまるで手品を初めて見た子供の様に目をパチクリとさせ、首を横に振る。

「いやいやいや、余は目の前で貴公の身体が貫かれるのを見たのだぞ!?!」

「マスター、余は疲れた…暫らく眠るぞ」

「あつありがとうございました!」

ヴラド公はネロの反応に面倒くさいと思ったのか、その姿を霊体化させて消す。

ネロは頭の上にクエスチョンマークを大量に浮かべながら首を傾げ、しかし首を横に振って気を取り直す。

「兎に角、兎に角だ! 此度は余の方の勝ちだ! 残党狩りはあろうが! 先ず凱旋だ!!!」

意識を切り替えたネロは右腕を掲げて振り回しながら歩き始め、その後を立香さんとマシユが慌てて追いかける。

「勝ったと言ってもまだ危ないんですから、先に行かないでください〜!」

「仕切り始めると止まらないな?」

僕はその背中を見送り、この場に残った僕と契約している3騎とエミヤの姿を見つめる。

エミヤは裏拳を受けた頬が若干赤く腫れていて、少しばかり痛々しい。

僕達がこの場に残った理由は言うまでも無く、お師匠の眩気が原因だ。

「色男に箔がついたじゃねえか?」

「まったく、無事だと分かっただけで手を止める辺り、私もあのマスターに染まってきているのかもしれないな」

「それよりも、です…お師匠、小間使いと言うのは?」

クー・フリーンとエミヤの軽口を諷めつつ、僕はお師匠に目を向ける。

あのカリギュラが消えていく一瞬、お師匠だけは明後日の方向を見ていた。

おそらく千里眼によって何かを見たのだろう。

「言うまでも無く、あの冬木で出会った魔術師だ。この時代に奴はいる…が、正確な場所までは分からんな」

「呼ばれるまで引き籠ってたから耄碌したんじゃねえd…!？」

「兄さん!？」

クー・フリーンが憎まれ口を叩き切る前に鼻っ柱にお師匠の右ストレートが叩き込まれ、平原をおよそ50メートル程弾き飛ばされていく。

口は災いの元…と言う事をどうにも学習してこなかったようだ…女王メイヴにも余計な一言言つて怒らせた所為で死因になったって…の…。

僕は心中で手を合わせつつ、お師匠に話を促す。

『レフが…レフが居るのね?』

「ああ…ただし、どうも聖杯を使って魔術的な結界を作り出している様でな。千里眼でも詳しい位置は見通せぬ」

…所長はレフ・ライノールに依存していた。

正確には、依存させられていた…と言ったところだろう。

D r. ロマンの話では、このカルデアの所長となった時は上と下からの圧力の板挟みになり、精神的に追い詰められていたらしい。

そんな最中D r, ロマンと共に所長を支えていたのが、レフだった。彼が行う事は常に正しく、そして事態を好転させていく。

追い詰められた人間にとって、それは救いの神の様に思えただろう。

『いえ、居るのが分かっただけでも充分よ…必ず、彼に行き当たる…その時に…私は…』

『ともあれ、だ…皆お疲れ様。このまま皇帝陛下と一緒に首都に入ってくれ。彼女ならば君たちを無下に扱う事も無いだろう』

所長の言葉を遮る様にD r. ロマンが割って入り、一方的に通信を切る。

おそらく、所長の精神状態が不安定になった為だろう。

「立香さんには明日伝えるとしましょう…今夜くらいはゆっくり寝て

疲れを取ってもらいたいですし…」

「お主、あの娘には甘いな？」

「…同年代なら甘くなると思いますけどね」

お師匠が茶化す様に僕の事を小突いてくるが、僕は唇を尖らせながら小さく反論してすたすたと歩き始める。

気付けば月も傾き始め、夜の世界が終ろうとしていた。

夜明けを迎えて連合ローマ帝国を撃退した僕達は、勝利の興奮も冷めぬままに首都ローマへと帰還を果たした。

包囲され、不安な夜を過ごしていたであろうことは想像に難くなかったのだけれど、ローマ帝国の中心地であるこの都の住人たちは非常にタフだったようで、市場には商品が並べられ、活気の溢れる声が道行く人々にかけていた。

マシユはこうした活気ある市場が珍しいのか興味深げに周囲を見渡していて、どこかおのぼりさんの様に見えて少しだけ可笑しかった。

皇帝自身によるローマ観光もそこそこに、僕達は彼女の住まう宮殿へと招待されることとなった。

もちろん、それはこれから僕達が成すべき事、ネロ自身が成すべき事の擦り合わせをするからに他ならない。

その擦り合わせもものの5分もあれば合致し、正式な協力関係へと至ることが出来た。

ネロは、このローマ帝国を脅かす連合ローマ帝国を排除したい。

僕達は、恐らく連合ローマ帝国にいるであろうレフを捕縛し、更に聖杯を回収したい。

各々目指すべき到達点は違うものの、敵は共通している…それに、皇帝ネロから提示された待遇は願ったり叶ったりと言うほかなかった。

その内容は、僕達に対する衣食住に関する全面的なバックアップ、そして戦況や些細な情報に関する共有だ。

流石に僕としてはありがたい事この上ない訳なのだけれども、『いくらなんでも1日2日で僕達の事を信用しすぎているのでは?』と忠告を試みたのだけれど…

『共に戦い、共に笑ったものを信用せずして何とする。それに、そんな忠告をするものが連合の間者とは考えにくいからな!』

と快活な笑いと共に一蹴されてしまったわけで…皇帝の器量と言

うものは何とも計り知れないものを感じざるを得ない…。

ともあれ、皇帝ネロと円滑な協力関係を築くことができた僕達は、今日1日を休息に使う事とした。

ネロとの情報交換は所長とDr. ロマンがやるから、一晩戦闘していた僕達は休め…と言う所長命令のお陰だ。

僕としては、まだまだ働くだけの元気はあつただのだけれど、立香さんやマシユはそうもいかない。

前回と違って、今回メインで相手にするのは人間だ…それ相応の精神的負担と言うものは必ず彼女たちに押し掛かってくる。

心に整理を付けると言う意味合いでも、この休息は不可欠なものなのだろう。

さて…話は変わる訳ども、我がカルデアには浴槽に浸かると言う習慣が無い。

広大な施設であるにも関わらず、立地条件と言うその一点において水を無駄遣いする余裕なんて無いためだ。

必然的に各部屋に備えられている風呂場はシャワーのみの代物となり、汚れを落とす為だけのものとなる。

ユニットバスであればバスタブがあるので、お湯を貯めると言う事ができるのだけれど…まあ、こればかりはカルデアを立ち上げた人の意向があるので、今更文句を言ったところで始まらないし、仮に改築するなんてなったらそれこそ費用や労力が馬鹿にならない。

人理焼却中の今であるならば言わずもがな、だ。

しかーし…今僕達が居るのは華の帝政ローマ…天井から香水がシャワーの様に降り注いだりするトンデモ文明最先端の地。

何が言いたいかと言うと、大浴場がある。

湯船に、身体を、浸かれる、のだ!!

お風呂好き…とまでは言わないけれど、それでも学生時代——と言つていいのかは分からないけれど——足を延ばして湯船に浸かりたいと思った時は近所の銭湯に通うくらいはしていた。

湯船に浸かれるチャンスなんて今しかない!

と、言う訳で皆が寝静まった夜…僕はこっそりこの宮殿にある大

浴場：所謂テルマエと言う場所へとやって来た。

構造的には馴染み深い銭湯とそう大した差は無く、脱衣所で衣服を脱いでから浴場へと入っていく。

ネロの使う宮殿の浴場と言う事もあってか内装は非常に豪華：薔薇を好んでいるのか至るところにそれらの装飾が施されているのが分かる。

いくつか区分けされた部屋は空気が熱せられて、湯冷めしないように設計されている様で、この時代の日本の文明と比べるとまるで魔法を使っているようにも感じられてしまう。

驚くべきことに熱いお湯が流れるシャワーまであって、ローマ人の風呂に対する並々ならぬ想いを感じ取ることが出来る。

「…令呪^{セツ}を以て告げる。清姫、大人しくあてがわれた部屋で寝なさい」
「ああん、御無体な〜」

シャワーを浴びるときにふと手の甲の令呪が目に入り、後数分もすれば補充されることを思い出した僕は、恐らく湯船の中に潜んでいるであろう清姫に対して令呪を行使する。

案の定湯船の中から出てきた清姫は、素直に令呪の拘束に従って僕の背中を目に焼き付ける様に見つめながらペタペタと足音を立てながら退室していく。

：あんまりどうでも良い事に使うものでは無い筈なのだけれど、1日1画補充されるのであればこういった使い方も悪くはないだろう。

シャワーで1日の汚れを落とした僕は、湯船に張られたお湯に手を入れて温度を確認し、ゆっくりと湯船の中に入り方までどっぷりと浸かる。

「あゝ…：足まで伸ばせてるう…：」

オッサン臭い言葉を独り言ちながら、僕はゆっくりと全身の力を抜いて大きな湯船の上を浮き始める。

宮殿内のテルマエ：とは言え、平時では多くの人がこの場を利用していることを考えれば、今こうして貸し切り状態で使えると言うのはとんでもなく贅沢な事なんだと思う。

…：皆と温泉旅行：行ってみるのも良いよなあ。

そういえば、Dr. ロマンは日本に滞在していたことがあると言っていた様な…。

ぼんやりと取り留めも無い事を思考していると、ちやぼんと言う音共に水面が揺れる。

どうやら誰かが湯船に入ってきたようで、僕は慌てて姿勢を正して入って来た人物へと目を向ける。

「夜遅くまでご苦労さまで…す…？」

「なるほど、ローマ式と言うのも悪くはない」

薄く赤みがかかった黒髪を頭の上に纏め、涼し気な顔で笑みを浮かべている1人の女性。

その美しい肢体をタオルで隠す…等と言う事はせず、惜しげも無くさらけ出しているものの、水面が揺れて湯気も立ち上っているのによく見る事は出来ない。

「…お師匠、ここ男湯なんですか？」

「女湯の方は煌びやか過ぎて趣味が合わんのでな。なあに、男女の関係と言う訳でもないのだから何も問題あるまい？」

「……」

僕はそのまま顔の半分までお湯につかって、極楽極楽と呑気に風呂を満喫しているお師匠から背中を向ける。

まったくの盲点…こんなことは清姫くらいしかしないだろうからと気を抜いていた僕が間違いだっただろうか？

据え膳食わぬは何とやらとは言うけれども、殊更こういった感情の表現が苦手な僕としては、頭の中が混乱の極みに達してしまっている。

「あのですねえ…」応僕も男なわけです…」

「ハハッ、聞くまでも無いとは思いますが、よもやこの顔に魅入りでもしたか？」

「お師匠はもうちょっと自身の美貌に関して認識を改めるべきだと思います」

僕はお師匠に…スカサハに恋い焦がれている…と言う感情は多分間違っていないと思う。

それと同時に、僕はスカサハに対して大きく見劣りする存在であることも自覚している。

僕は兄弟子のクー・フリーンより遥かに弱い…勇気を持っているとも言えない。

「良太」

「なんですか?」

水面が再び揺れ、少しずつ少しずつお師匠が背中から近づいてくる気配を感じ取る。

僕はその動きに合わせてお師匠から離れるように動くものの、限られた湯船のスペースの中でそう簡単に逃げ切れる訳でもなく、あっさり隅の方へと追い詰められていく。

「こつちを見ろ」

「いや、だって僕もですけど、お師匠裸じゃないですか…」

「人と話すときは顔を突き合わせるべきだ。それにここはテルマエ…裸を見られて恥ずかしい事もあるまい?だから、見ろ」

「豪胆すぎませんかねえ!」

裸を見られて…と言う以前に此処は男湯なのだ。

そも混浴であっても専用の服を着て入ったりするわけで、ヌーティストビーチよろしく何でもかんでも解放していいなんて言う道理が罷り通る訳がない…と思いたい。

とは言え、僕も青少年…ましてや好意を覚えた女性ヒトの裸に興味が無い訳でもなく、お師匠の言葉がまるで悪魔の囁きの如く脳内にこだましていく。

「ケルトの流儀は何時でも剛毅なものだ。お主もワシの弟子を名乗るならば、流儀に従わんとな?」

「お、応…」

「ん…?聞こえんなあ」

お師匠は僕を揶揄う様にクスリと笑い、僕は大きく深呼吸して覚悟を決める。

すなわち顔しか見ない…顔にしか意識を集中させない。

とても柔らかかそうなものが湯船に浮いているかもしれないけれど、

僕はそれを決して見ない。

見たいけれど、見ない。

意を決してゆつくりと振り返ると間近にお師匠の顔がある。

いつも見てきたその顔は、風呂場にいるせいかやや上気していて何処か艶を感じさせる。

「初心なものだ…よもや、女の裸は見慣れないか？」

「この歳で見慣れている方がどうかと思います…」

顔を下に向けたたい衝動に必死に耐え、真っ直ぐにお師匠の顔を見つめる。

試されてる…確実に試されてる…。

意図は分からないけれど、それでも考えないと理性が音を立てて崩れて逝ってしまう…。

「お師匠…あんまり、からかわないでください…」

「…やれやれ、押し倒す程度の甲斐性はあると思っただがな？」

「そうしたら、タダじゃ済まないでしょ…？」

「うむ、その心臓をグサリ、だ」

お師匠は子供の様な笑みを浮かべて僕の隣に移動し、手で胸元を押しさえながら湯船に肩まで浸かる。

僕はお師匠から顔を背けて胸を撫で下ろしながら、ゆつくりと速くなっていた呼吸を整えていく。

…こっそり使おう、うん。

「…ほんと、色々と心臓に悪いですよ…」

「なに、お主ならば大丈夫だと踏んでいたからな。なににせよ女湯の装飾が合わんのは本当だ。無駄に薔薇の花弁が舞っていたいな」

「ネロが聞いたら頬を膨らませて怒りそうですよ、それ…」

薔薇の花びら舞う大浴場かあ…立香さんやマシユは無邪気に喜びそうだなあ。

皇帝ネロ…と言うと黄金劇場ドムス・アウレアが有名だったかな…ただ、建設自体は今から4年後のお話なので、今は存在していない訳だけれど…。

かの宮殿建設の事業はローマの大火後と言う事もあって施策として非常に評価が高かったりする。

「個人の嗜好とはそう言うものだ。さりとて、あの小娘は気にも留めぬだろうよ。国を治める者としては及第点だ」

「お師匠が評価するって珍しいですね」

「お主と同じく、人らしく振舞っているからな」

…お師匠は本来、機械的に物事を処理するような性格だったそう
だ。

それは人として死ぬことが叶わなくなり、あの暗く冷たい影の国を治める事になった事に起因している。

そういえば…夢で…見た、様な…？

「良太、お主とワシは殊更強く繋がっている。その分ではワシの夢でも見たか？」

「ような…気がするだけです…。悲痛な叫びの様な…」

お師匠は僕の頭を抱き寄せて優しく頭を撫でてくる。

視界にお師匠の裸体が広がり、僕は慌てる様に身を振りながら目を瞑る。

「これこれ、暴れるでない。所詮過去は過去…お主が気にするものではない」

「別にハッキリ覚えてるって訳ではないんですけどね…？」

お師匠の力の前にはビクともせず、僕は諦めてお師匠に頭を撫でられ続ける。

その心地良い感触は段々と緊張していた精神を解きほぐすかのよう
うで、僕は目を瞑ったままうつらうつらとしてくる。

風呂場で眠るのは不味い…し、死ぬ…。

「お、お師匠…そろそろ離してもらえませんか？」

「ワシの抱擁は気に入らんか？」

「そんな…パワハラみたいなの絡み方…ぐう…」

段々と心地よくなってしまった僕は、朧げな意識のまま言葉を交わしてそのまま意識を手放してしまう。

その夜は、微かにとても良い香りがしたような気がした。

たのしい夢だ。

ぼくとおとうさんとおかあさんと。

どこかとおくへいく夢だ。

こわい夢だ。

おとうさんとおかあさんはいなくなつて。

ぼくのむねが穿たれる。

そんな、こわい夢だ。

1日を休息にあてがい英気を養った僕達は、ネロの頼みもあつてガリアへと遠征する事になった。

所長によると、ガリアは連合ローマ帝国との戦いに於ける最前線の1つであり、今も休むことなく戦線を維持し続けていると言う事だ。

ネロはそんな最前線にて激闘を繰り広げる兵士達の士気を鼓舞し、戦線を押し上げる為に赴く必要があるそうだ。

この特異点最大の要であるネロを単独行動させると言う事は、非常に危険な状態であるため僕達はこれを2つ返事で了承し、その日の内にガリアに向けて出立する事となった。

ガリアは首都ローマよりも北方：位置的には現代で言うフランスにある地だ。

いくら街道があるとは言え距離があるために、その道程は1週間ほどかかってしまった。

ガリアの手前で陣を張っている自軍の野営地へと向かうと、ネロは自軍の兵士達を集めて声を張り上げる。

「皇帝ネロ・クラウディウスである！これより謹聴を許す！」

ネロは旅の道程で見せていた少女らしい側面を見せず、凛々しい顔立ちと声色で兵士たちに檄を飛ばす。

そのカリスマに呑まれたのか、兵士たちの顔は戦場に出ているかのような精悍さと覇気を備えている。

「ガリア遠征軍に参加した兵士の皆、余と余の民、そして余のローマの為の尽力ご苦労！是よりは余も遠征軍の力となろう。一騎当千の将もここに在る!!」

ネロはそう言うのと片腕を僕達の方へと広げ、兵士たちの視線を僕達に集中させる。

その視線に立香さんとマシユは若干たじろぐものの、小さく会釈をする。

クー・フリーンは兵士たちのその様子にニヤリと笑みを浮かべながら顎を擦り、お師匠はお師匠で涼やかにその視線を受け止めている。

ネロは兵士達を見渡した後に素早く剣を引き抜き、天に向かって掲げる。

「この戦い、負ける道理がない！——余と、愛すべきそなたたちのローマに勝利を!!!」

「!!!ローマに勝利を!!!」

兵士たちはネロの言葉に続く様に拳を振り上げて、同じ言葉を口にする。

ローマに勝利を：例えそれが短くとも平和を得るために、この時代の人々が望んで止まないものだ。

マシユは、ビリビリと大気を震わせるかのような歓声に目を輝かせる。

フオウもまるで鼓舞するかのようになり、立香さん達の前で飛び跳ねている。

「すごい歓声ですね……これが、皇帝ネロ全盛期のカリスマ……というものでしょうか？なんだか、私まで鼓舞されてしまっている様で……」

「きつと、そうだろうね……グイグイと人を引っ張っていく、そういう魅力がネロにはあるんだと思う」

歴史……と言うものは当時の人々によって、都合よく解釈されてしまうときがある。

皇帝ネロは暴君としてローマを追われ、そして最後は自身で喉元を突いて自害する。

しかしドムス・アウレアの例があるように、必ずしも悪しきことを行ってきたわけではない……ただ、必要悪として描かなければならなかった時代的背景があつたためだろう。

もつとも分かりやすい例で言えば、『パンがなければ、お菓子を食べれば良いのに』だろうか？

この言葉は、そもそもマリー・アントワネットが言った訳ではなく、昔の本の引用がいつの間にかマリー・アントワネットが言ったと言う風にすり替えられた……なんて説があるくらいである。

『藤丸、マシユ……先日話したように、過去の人間に未来の事を示唆するような発言は控える様に。どんな悪影響があるのか分からないのだ

から』

「…もどかしい、けど…救うはずの人類史が狂っちゃだめですしね」

所長は雑談をしていた立香さん達を窘める。

僕達は皇帝ネロが…そしてこのローマ帝国がどのようなになっていくのかを知っている。

もし、それが本人にとって求めている結果でなければ…きっとその結末を回避するために足掻いてしまうだろう。

もし、その足掻きが成功してしまえば、それは未来に至る道筋とは大きく異なるものとなる。

過去の改ざんは未来へと波及し、未来は別のモノになってしまうだろう。

それは人理焼却に匹敵する、あつてはならない事だ。

だからこそ、僕達は未来について、彼女たちに語るべき舌を持つてはならない。

『あれ…この反応は？マシユ、そこに——』

Dr. ロマンは何かに気が付いたかのようにマシユに確認を促そうとすると同時に、此方へと2人組が近づいてくる。

1人は少しばかり視線の置き場に困る様な軽装の赤毛の女性。

母性を強調するかの様な豊かなボデイラインは、その…うん、これ以上は発言を控えておこう。

「おや、思ったよりお早いお越しだったね、皇帝陛下。んーと…そっちの可愛らしい女の子と初心そうな男の子が噂の客将かな？見かけによらず強いって噂で持ち切りだよ」

柔和な笑みを浮かべて話す女性は、優し気な雰囲気はこちらに接してくる。

声をかけられたネロは、先ほどまでの威勢がどこに行ったのか少しばかり表情が暗い。

「遠路はるばるこんには。あたしはブーディカ。このガリア遠征軍の將軍を努めてる」

「ブーディカ…？」

マシユはブーディカと言う名前に思いあたる節があるのか、名前を

反芻してマシユはブーデイカの事を見つめる。

ブーデイカはマシユを見つめると、うんうんと頷いて殊更優し気な笑みを浮かべ始める。

「ブリタニアの元女王ってやつさ。落ちるところまで落ちたーって感じだね、アハハ。で、こっちのデカイ男が…」

ブーデイカ：ブリタニアの元女王：確か、この頃のブリタニアはローマ帝国に反発していたような…？

僕は心の中で首を傾げながらも、ブーデイカの隣に立つ暑苦しい笑みを浮かべている大男を見上げる。

一言で言うなれば：筋肉^{マッスル}、だろうか？

その男は自身の鍛えに鍛えた青白い傷だらけの肉体を余すことなく曝け出し、異様な雰囲気を放っている。

お師匠はその大男を見ると、ほう、と感心したかのように片眉を吊り上げ、クー・フリーンは不気味な微笑みに眉をひそめている。

むう…。

「おおーこの無数の圧政者に満ちた戦いの園に闘士がこんなにも集うか！さあ！今こそ叛逆の時、さあ共に戦おう。比類なき圧政に抗う者よ」

「へ？」

「は？」

「う？」

僕と立香さんとマシユの3人は、大男の発する言葉に一樣に首を傾げる。

叛逆？ 圧政者？

「ハッ!?言葉に戸惑ってしまいました…この気配は、お2人とも…」

「へ？うわあ、珍しいねえ。スパルタクスが誰かをみて喜んでるのに襲いかからないなんて…滅多にない事よ？」

「襲うんすか…」

「襲うんすよ？」

僕のボヤキの様な呟きに、ブーデイカはクスクスと笑いながら同じ口調で返してくる。

マシユの口ぶりからして、ブーディカとスパルタクスと呼ばれた大男は英霊なのだろう。

それならば、この戦線が押し返されない事に納得がいく。目には目を、歯には歯を…と言ったところだ。

僕達——所長とロマンも含め——の戸惑いを他所にスパルタクスは真つ白に輝く歯を光らせながら凄惨な笑みを浮かべる。

…襲ってこないよね？

「叛逆の勇士よ、その名を我が前に示す時だ。共に自由の青空の下で悪逆の帝国に反旗を翻し、叫ぼう！」

「はい？」

「フオオオオオ…？」

マシユとフオウはスパルタクスの言動に未だ混乱が止まらずに首を傾げるものの、僕と立香さんは互いに視線を交わし大きく頷く。

「東雲 良太です」

「藤丸 立香です」

「え、名前を聞かれてたんですか？今の、そうなんですか？」

躊躇する事無く名前を告げた僕達に、マシユは驚いた顔で此方を見てくる。

名を示せて言ってるわけだし…まあ、これなら理解できない訳でもないかな？

『どう考えてもバーサーカーよね…大丈夫なのかしら…？』

『まあまあ、はぐれサーヴァントが2騎も味方に居てくれるんだから、心強いじゃないか』

所長はスパルタクスの言動の可笑しさに眉を顰めるような声を出すものの、ロマンはこれを宥めて呑気な笑い声をあげる。

此方にいる英霊達と合わせれば過剰戦力も良いところだ…向こうが総力戦で挑んでこない限りは、ガリアの地を平定するのもそう難しくは無いだらう。

「ははーん、姿が見えない魔術師ってのはあんた達の事か。オルガマリーとロマーニ、だっけ？そして」

「マシユ・キリエライトです」

「うん、名前は聞いている。きちんと此処にも伝令が届いているからね。お気に入りの客将なんだってね、皇帝陛下?」

「……」

どうもネロは伝令文をしたためた時に、ご機嫌な内容を書き上げたようだ。

ブーデイカの発言から察するに、僕達には現状を覆す何かがあると言う期待を寄せられているようだ。

僕は、ちらつと立香さん達を見るが、意識しているのかしていないのかマシユ達と雑談している。

ん…立香さんが驚いた…?

ブーデイカがネロに声をかけているが、ネロは上の空と言った様子でブーデイカを見つめている。

「ちよつと、皇帝陛下?」

「…ん、何か、言ったか?…少し、疲れたようだ。ブーデイカ、客将達を頼む」

ブーデイカがネロの顔を覗き込む様に近付くと、やはり心ここに在らずと言った様子で弱々しい声で眉間に皺を寄せる。

旅の行程的に、少々急いだ旅路だ…先の戦闘や、日々の公務に関する疲れが此処に来てネロに襲い掛かっているのかもしれないなあ。

「ガリアの戦況について教えてやってくれ。余は頭痛がひどい…少しばかり床につく」

「あ、ああ…分かったよ。この子達はあたしに任せといて」

「良太と立香も休むと良い…長旅だったからな」

ネロはそれだけ言うと、指揮官用のテントへ向かってよろよろと歩いて入っていく。

ブーデイカはその様子を、やはり複雑な面持ちで見送っていく。

ローマとブリテンは敵対関係にあったはずだ…で、あるならばブーデイカは一体どんな気持ちでネロに協力しているのだろうか?

「少し、良いかね?…どうやら敵軍の斥候部隊が居たようだ。此方から離れていく小隊の姿を見つけた」

霊体化をしていたエミヤが僕達の前に歩きながら実体化する。

「幸い、まだ此方の動きには気づいていない状態なのでね。許可を貰えるならば、私たちの力を見てもらう良い機会だと思っただが?」

「:ガリア攻略戦の事もあるし、疲れているだろうけど頼めるかい?」
今も昔も情報と言うのは命取りに繋がる。

斥候部隊に情報を持ち帰られては、今後の作戦行動に支障が出てくる。

僕はクー・フリーンへと目を向けると、待つてましたと言わんばかりに獰猛な笑みを浮かべられる。

「はくく、しようがねえ:しようがねえなあ。ちよつくら運動してきますかね?」

「そんなに嫌ならば、私一人で片付けてくるが:~?」

「あ?その前にテメエから片付けてやろうか:~?」

「まあまあまあ」

クー・フリーンがニヤニヤとした笑みを浮かべながら茶化す様子を見ると、エミヤは呆れたように溜息を吐きながら悪態をつく。

これにクー・フリーンはコメカミをひくつかせて怒りを露にするものの、僕と立香さんは2人を必死に宥める。

戦闘中には凄まじいコンビネーションを見せてくれるのだけれど、この2人:第5次聖杯戦争の時の因縁が尾を引いているのか、普段は非常に仲が悪い。

にらみ合いを続けるクー・フリーンとエミヤを見るに見かねたのか、お師匠は両手に朱槍を持ちその穂先を2人の喉元に突き付ける。

「やるのか?ヤ^戦らんのか?」

「疾く、片付けるとしよう」

「ちよつくら片付けてくらあ」

お師匠の剣呑な雰囲気にあてられた2人は、そそくさと霊体化して姿をかき消す。

お師匠はやれやれと肩を竦めてため息を零す。

「いつまで経っても子供で仕方ない:~」

「あいつら:~大丈夫なの?」

ブーディカは何か情けない男達を見るかのような目で、2人が消え

ていった方向を見つめる。

：戦場での2人を知らなければ、きつと誰しもが2人を同じような目で見るとはだろうか。

「いえ、本当…大丈夫なんで…兄弟子なんで…あんまり…」

「え、エミヤさん料理もできるし強いんで！大丈夫です！」

僕はなんだか無性に悲しくなってしまうてブーディカから視線を逸らし、立香さんは両手をグツと握り込んで目を輝かせてブーディカに力説する。

「ま、まあ…首都包囲戦の話も聞いてるし、期待はさせてもらってるからやっ…」

「ほんと、すみません…」

なさけな—い出撃を果たした2人が帰って来たのは、きっかり5分後の事だった。

「君の師匠と言うのはいつもあの調子なのかね？」

「問答無用じゃなかっただけ、まだマシだったんじゃねえかな？」

白と黒の刃が舞い、深紅の棘が軌跡を刻む。

赤と青の英霊は、先ほど喉元に付きつけられた殺気を振り払う様に、逃げ惑う斥候部隊の兵士を適切に処理していく。

黄昏時に輝く草原を、どす黒い朱が影を落としていく。

彼らが相手をするのは人間だ…あくまで、何の力も持たないこの時代に生きる人間だ。

英霊に追われて勝てる訳も無く、彼らに補足された時点で敵兵達の命運は決まっていたと言える。

「…しかし、斥候部隊を出してきたのはどういう腹積もりなのだろうな？」

「あ？何が言いてえんだ？」

斥候部隊の始末を終えた2人は血の付いた得物を消して、互いに向き合う。

屍の中で対峙していなければ、世間話でもしているかのような気さ

くさすら感じさせる。

「奴らは聖杯を手にしていて、私たちよりも潤沢な魔力リソースがある…それならば魔術による遠見でもなんでも使って安全に覗き込むことが出来るだろうに」

「ヘッ、あのレフとかってやつは、上手く英霊を使えていねえって事か？」

「聖杯による強制服従で、力を発揮できないのか…それとも…」

エミヤは腕を組んで視線を逸らして考え込む。

優先すべきは魔術の基礎も覚束ない自身のマスターの安全…その上でこの特異点を犯す癌の切除だ。

マスターなくして人理修復を成すことが出来ない。

例え、カルデアの火が英霊の現界を保っていたとしても、英霊を扱う人間が居なければ木偶の坊とそう大差が無いのだ。

勿論、クラスによってはその限りではないのだろうが。

突如クー・フリーンがエミヤの背中を掌で叩き、意識を思考の海から引き上げる。

「突然何をするのだね…君は？」

「終わったんならとつと戻るぞ。遅くなったらあの女に何言われるかわからねえからな」

「…そうだな」

クー・フリーンとエミヤは霊体化して、自陣の野営地へと戻っていく。

黄昏時の中…色を変える事無く輝き続ける上空の光帯が不吉に輝き続けた。

ガリアの地平線を東から昇ってくる太陽が明るく照らし始める。夜の帳はとうの昔に取り払われ、これから起こる惨劇を包み隠さず晒し上げる様に地平が照らされていく。

僕は僕の英霊を引き連れ、ガリアを見渡せる丘の上で陣取っている。

無論単独で、だ。

ネ口率いるローマ帝国軍は、僕達が陣取る丘の後方で部隊を展開して開戦の時を待つ。

部隊の規模はほぼ同数…向こうは防戦に徹していれば良いだけなので、幾分気が楽なのだろうけどそうはいかない。

僕達が丘の上で陣取っている理由はただ1つ…敵ガリア防衛部隊に対して決定的な打撃を与える為に他ならない。

…最初、この案を出した時は立香さんとマシユに猛反対された。

相手は人間なのだから、手心を加えるべきなのだ。

僕はその意見を甘いとは言わないし、否定するつもりもない。

けれども此処は最早戦場で、僕達が手心を加えた所でローマ帝国の兵士たちは敵を殺すし殺されてしまう。

で、あるならば…一体どれほどの違いがあるのだろうか？

着ている礼装のフードを目深に被って丘の上で胡坐をかいて瞑想をしていた僕は、背後から近づいてくる気配にゆっくりと目を開けて深く溜息を吐き出す。

「作戦開始はまもなく…此処は君の持ち場ではないでしょ？」

「東雲、さん…」

少しばかり冷たい声色で、振り返りもせず近付いてきた立香さんに声をかける。

立香さんは僕の声色にビクリと体を震わせて、息を呑む。

きつと、今の僕は彼女が良く知るタイプの人間ではないと感じ取ってしまったからだろう。

「僕達が戦端を開き、盾であるマシユを伴って戦場を駆け抜けるネ口

率いる突撃部隊を補佐する…それが君の役割」

「で、でも…東雲さんはこれから何をするのか分かっているんですか!?!」

「人を殺すんだよ。それこそ道端の小石を蹴り飛ばす様に」

僕はゆつくりと立ち上がり、右手にお師匠から下賜された呪いの朱槍…ゲイ・ボルクを呼び出してしっかりと握り込む。

握り込んだゲイ・ボルクはまるで熱を持ったかのように脈打ち、そしてなによりも冷たい。

魔術回路を一本一本丁寧に起動させていくと、僕を挟む様にお師匠と兄弟子が朱槍を手にした状態で霊体化を解いて実体を顕す。

「な、なんでそんな簡単に言えるの!?!」

「死にたくないからだけど?」

僕は後ろへと振り返り、静かに泣きそうな顔をしている立香さんを見つめる。

僕は死にたくない。

昔、とてもとてもとてもとても…とても痛い目を見たから。

あんな痛い目を見るくらいなら…見るくらいなら…?

…いつ痛い目を見たんだっけ…?

まあ、なんであれ死にたくないし、死にたくなければ殺すしかない。

威嚇で退いてくれればいいけど、退けない存在だっているのは事実

な訳だしね。

「令呪^{セツ}を以て告げる。クー・フリーン、令呪の魔力を以て宝具の全力投擲にて連合ローマ帝国を殲滅しろ」

「おう、呪いの朱槍を^ご所望かい?」

「東雲さん!!」

令呪を1画消費すると、令呪が刻まれた右手に痺れるような痛みが走る。

僕は立香さんの制止を無視して、更に令呪を1画消費する。

「^{セツ}続けて告げる。スカサハ、令呪の魔力を以て宝具の全力投擲にて連合ローマ帝国を殲滅しろ」

「いいだろう」

令呪が消費されて更に痛みが走り、それと同時に2騎の英霊に莫大な魔力が注がれる。

其処に僕は魔術回路を全力稼働させて2騎に魔力を送り込み、宝具の全力投擲の準備を推し進める。

突如として膨れ上がった魔力は紅蓮のオーラとなつて天高く立ち上り、2騎の英霊はゆつくりとその場に身を屈める。

「どれ、クー・フリーン…あの程度の雑兵どもに手古摺ることもあるまいな?」

「ただの的当てと変わらねえだろうが…これでもうちよいホネのあるやつが釣れば御の字だけだよ」

ぐつと2人は地を這うように身をかがめた瞬間、地を粉碎する勢いで駆け出して同時に跳躍する。

それは、星にすら届くのではないかと思えるような高さで跳躍した2騎は、上空で朱槍を構える。

「二手向けとして受け取るが良い!!」

2騎からあふれ出していた魔力は手に持つ朱槍に一極集中し、まるで空間が歪んで見えるほどの濃密な魔力の塊と化す。

それは上空高くに発生しているにも関わらず、ダウンバーストが発生したかのように上空から僕達に魔力の乗った風が吹きつけてくる。

立香さんは僕を止めようと此方へと駆け寄って来るけど…もう遅い。

僕の中のありつたけの魔力が、宝具へと送り込まれていくのが分かる。

『突き穿つ死翔の槍』

『貫き穿つ死翔の槍』

全身をルーン魔術で超絶強化を施し、2騎の手から全力で朱槍が投擲される。

それは投擲された瞬間に風の壁をぶち破り、瞬時に最高速度へと到達。

投擲したときに起きた炸裂音が遅れて僕達の耳元に運ばれ、2本の朱槍が絡み合う様に飛び交い、眩いほどの光を放った瞬間にそれぞれ

の槍から大樹が枝葉を伸ばす様に無数に分裂を起こしていく。

対軍宝具：その名に恥じない広範囲に渡る宝具の雨は、ガリアに展開していた連合ローマ帝国軍の中央へと降り注ぎ、着弾と同時に莫大な魔力が一気に開放される。

僕は駆け寄ってくる立香さんの身体に飛びついて地面に押し倒して、背後から迫りくる爆発の衝撃波から立香さんの身体を守る。

その爆発は大地を大きくえぐり取り、その熱は大地を溶かし尽し、その威力は人が耐えられるものでは無かった。

有体に言えば：消滅したのだ。

塵1つ残さずに、僕達に相對する連合ローマ帝国の大部隊の殆どがこの世から消え去った。

「…怪我はない？」

「っ…」

爆発の衝撃と閃光から数分後：気を失っていた立香さんはボンヤリとした表情で僕の事を見上げ、何が起きたのか分からない様子で首を動かす。

覆いかぶさっていた僕は背中に乗る土塊を落としながら静かに立ち上がり、立香さんへと手を伸ばす。

「…1人で、立てます」

「ん…立香さんはマシユのところに行つて。清姫、立香さんを守つて」

「ますたあ…よろしいのですか？」

「よろしいですよ？」

霊体化して僕を守っていた清姫に立香さんを守る様に言い渡し、荒廃した大地を駆け出す立香さんの後を追う様に言い渡す。

ゲイ・ボルクの全力投擲から難を逃れた部隊が、再編を済ませて戦場を駆け始めているのを見たからだ。

エミヤが立香さんの守りに就いているだろうけど、恐らく連合ローマ帝国から英霊が出張ってくるはずだ。

マトモな感性をした指揮官であれば、この一撃で部隊の撤退を促すはず。

なんせ戦略的には既に向こうは敗北している…ここで無駄に戦う

のは愚の骨頂の筈なのだから。

「わかりました。ますたあ、どうか無理をなさらぬように」

「清姫もね…」

清姫が移動した気配を感じれば、僕はどっかりと座り込んで戦場の中央突破を図っている部隊を見つめる。

おそらく、あれがネロの部隊の筈だ。

お膳立ては済んだし、恐らくはこれで…。

『…東雲くん、何も君が悪役に徹する必要はないんじゃないかな?』

「なんの事なんです?」

大きいため息を吐いて、空っぽの魔力をどうにかこうにか遣り繰りしている、Dr. ロマンから僕に通信を入れてくる。

ロマンは僕の恍けた反応に深く溜息を吐き出し、話を続ける。

『確かに、今回の一撃で僕達の味方は損害を大きく減らせた。けれどもこの特異点が修復されてしまえば、仮に死んだ人間が居たとしても死んだことが無かった事になるんだ』

「死ぬなら、知らない人間がいいでしょ。一晚とは言え寝食を共にした人間が死んでしまう可能性があるのなら、そんな可能性は潰してしまった方が良い」

『…君、本当に高校生なのかい?』

味方の軍が次々と敵軍を制圧していく…それでも立ち向かってくる連合ローマ帝国軍には、一種の狂気すら感じてならない。

まるで洗脳された少年兵の様に、一途に、真っ直ぐに抵抗を続ける。

その姿は痛々しいほどに生々しく、愚かしいほどに滑稽。

笑いはしないけれどもね。

僕はロマンの言葉に肩を竦めるだけで答える。

少なくとも、お師匠に稽古をつけてもらっていた人間が普通の高校生な訳ないんだよなあ…。

「さーってどう出るかね…?」

「私は動かない、と思うがな」

霊体化を維持したまま、お師匠とクー・フリーンが戦況の行く末を見守る。

今回、派手に宝具を撃ち込んだのにはもう1つ理由がある。

それは今相手にしている将以外の英霊の炙り出し。

：強烈な魔力反応を示し、雑兵を一瞬で消し飛ばしてしまえば相手方も此方の戦力を無視することができなくなる。

そうすれば、向こうから何かしら接触を図ってくるだろうと踏んでいたのだけど…。

「お師匠、動かない理由は？」

「そもそも人類史を焼却するような連中だからな…ここで何方かの人間が幾人消えようとも大した痛みではないのだろう。広がり切っている戦線を維持するのが困難になると言うだけで、本来であれば英霊だけでも事足りるのだからな。それを考えれば、此度の戦の動き…どうにもきな臭いものではあるが」

お師匠はどこか妖しい笑いを浮かべながら、自身の考えを述べる。

おそらくこの分だと千里眼を使用しないで、現状の行き当たりばったりを楽しんでいるんだろう。

軽くため息を吐くと、戦場から勝鬨をあげる声が上がっていく。

雌雄は…決したようだ。

僕はカルデアから戦闘が終わったことを告げられると、手に持つ朱槍を杖代わりに立ち上がり、ゆつくりと立香さん達が居るであろう方角へと歩き始めた。

野営地に立てられた櫓の中に座り込み、僕は静かに石の表面を彫っている。

刻む文様は悉くルーン文字…お師匠から授けられた原初のルーンを1文字ずつ刻んでいく。

これらの小石はルーン文字に魔力を通すことで、さながら手榴弾の様に扱う事ができるため、いざと言うときの保険代わりの武器として使うことが出来る。

といっても石に込められる魔力量なんて高が知れているので、本当に困ったときの備え程度にしか機能しない。

「嫌われちまったなあ」

「いやあ、しょうがないでしょ…立香さんからすれば殺人鬼なわけだし」

僕に付き合っつて櫓で見張りをしてくれているクー・フリーンは、揶揄う様な笑みを浮かべながら僕に声をかけてくる。

結局、立香さん達と合流したのは良かったのだけれど、立香さんとマシユは僕を見るなり視線を逸らしてしまい、取り付く島もない雰囲気だ。

ネロは顔色一つ変えずに僕を見るなり褒め称えてくれたのだけだ。ど…まあ、心中複雑と言えば複雑だ。

いや、覚悟が足りなかった…と言うべきだろうか？

因みに清姫は僕の隣に寄り添うように座って、何故かハアハアと興奮している。

正直ブレずに接してくれる清姫の存在が、非常にありがたく感じってしまう。

「話し合いでどうこうできるものでもないし、隣人が死ぬよか知らない奴が死ぬ方がまだ気が楽つても分からねえでもねえよ」

「エゴ…っっちゃエゴなんですけどね…。立香さんやマシユはそれぞれなりに頑張っているわけだし」

僕は小石にルーン文字を刻む手を止め、櫓の縁に背中を預けて外を眺めているクー・フリーンを見つめる。

クー・フリーンはさっぱりとした性格だ。

ただ在るがままを受け入れ、その中で出来る事をやり遂げる…そういう在り方はとても眩しく見える。

「やめとけやめとけ。お前は俺じゃねえんだし、生き方なぞる必要ねえだろ？」

「心の中読まんでくださいよ…」

「わかりやすいっただけだろ」

クー・フリーンは意地の悪い笑みを浮かべながら、何処から調達して来たのか水筒の中の酒を一口煽って美味しそうに息を吐き出す。

「かくっ！飲みなれた味の酒つてのは美味しいもんだな！日本で味わっ

た日本酒みたいな焼けるような辛い酒も悪かねえが」

「兄さんは過去の聖杯戦争の記憶を結構覚えてますよね…?」

冬木で出会った時、記憶は保持しているけど膨大な記録量に頭が追いつかず、必要最低限の記憶しか頭に残っていない…みたいな話をしていた。

にも関わらず、エミヤもそうなのだけれどクー・フリーンは過去に起きた第五次聖杯戦争の内容や因縁を記憶していて、更には『月』で起きた何かに関してても記憶しているみたいだ。

「まあ、俺は元々キヤスタークラスだしな。覚えてるって事はそれだけ知的って事なんだろうよ」

「知的なのと記憶力って関係あるんだろうか…?」

「イレギュラーにはイレギュラーが付き物つてな。まあ、俺がお前の兄弟子で、英霊ってのは変わらねえよ」

「ますたあ、この清姫も最後までお付き合いいたします。ええ、最後まで…フフフ…」

「ワア、ウレシイナア」

清姫の最期までって果てが無さそうで怖いな…。

イレギュラーとは言え、英霊の力として申し分のない働きをしているのだから、クー・フリーンの態度を見る限り問題は無いだろう。

僕は再び小石にルーン文字を刻む作業を再開し、雑念を振り払う。

清姫もクー・フリーンも…そしてお師匠も手を貸してくれるのだから…僕は僕のできる事をするでしょう。

ガリアの地を無事に制圧してから数日：そこで従属を強いられしてきた人々の解放：加えて戦線の迅速な整理と防衛網の構築は突貫作業で進められた。

何処からともなく現れる連合ローマ帝国の手勢から自陣の領域を守るためには、常に速度が優先される。

戦争は長引けば長引くだけ、国を疲弊させていってしまう：それは彼方も同じことなのだけれど、彼方は僕達と違って疲弊を恐れる必要も無ければ、無尽蔵とも言える魔力の塊たる聖杯を所有している。

この戦争、今は圧しているとは言えども僕達が不利だと言う点は変わってはいなかった。

「君は：此処に残っていても良かったのかい？」

「あつちはマシユにエミヤが居ますし、もしもの時はカルデアから追加の戦力を呼ぶことが出来ます。ガリアは取り返したばかりで防衛網の構築が不完全：何かあつてからでは遅い」

ガリアに作られた野営地でルーンを彫り込んだ魔石を作っている僕に、心配そうにブーデイカが声をかけてくる。

僕はそれに対して建前上の理由を述べて朗らかに笑って返す。

僕と立香さんは、二手に分かれて行動することにした。

理由は言うまでも無く先の戦闘に依る蟠りが原因だ。

納得は出来ても理解はできない：まして葛藤をしていない様に見えるれば余計に彼女と溝を開ける事になる。

余計な雑念は戦場において命取り：いや、立香さんは戦闘中なら損得勘定抜きで行動してくれるだろうけどね。

ただ：彼女には考える時間が必要だとは思う。

：成すべき事の意味を。

「ふくん：まあ、君みたいな手練れがこうして残ってくれるのはありがたいけどね。でも、あんまり無理しちゃ駄目だよ？」

「あはは、無理なんてしてませんよ」

：いやまあ、考え事ばかりしていて、ガリアの地の平定もあつて寝

られなかったんですがね。

別に宝具で敵兵を蹴散らしたところで、良心の呵責なんてものは無い。

僕には僕の成すべきことがあるし、それをする為にはどうしても生き残る必要がある。

だからこそ、僕は道端の小石を蹴り飛ばす様に暴力を彼らに振るつた訳だけど。

ただ、一般的な道徳心から言ってしまうえば、僕の行った決断と言うものは悪と言えるだろう。

なんせ、最たる動機が死にたくないから、だからね。

「なら良いけどさ…困ったことがあったら、お姉さんにちゃんと尋ねだよ？君はなんだか見てて危なっかしいからね」

「タハハ…お師匠や兄さんによく言われます」

「だったら、きちんと生活態度を改めなくちゃね」

ブーディカと2人で顔を見合わせてクスクスと笑っていると、ブーディカの背後にあるテント…その出入り口にかけられたカーテンの隙間から恨みがましい視線が注ぎこまれてくる。

そうだね、清姫だね。

清姫は僕が他の英霊に現を抜かしているんじゃないかと気が気でないのだろうけど、そもそも僕は彼女と契りを結んだことは無いので、そんな風に思われる筋合いが無い訳で…。

「ところで、その大量の石はどうしたの？」

「あく、備えあればと思つて地道に作つてたんですよ、魔石。手榴弾つて言えば分かります？」

「実際に見たことは無いけれど、知識にはあるよ。爆弾つてやつでしよ？」

言うまでも無くブーディカはこの時代の女性だ。

よつて手榴弾なんて見たことも聞いたことも無い筈…それなのに知っていると言うのはどういうことなのか？

お師匠曰く、これは英霊の召喚を補助する聖杯に原因があるそう。

なんでも、1度聖杯と言うパスを通して召喚される英霊には聖杯側からあらゆる知識がインプットされるそうで、なんだつたら最新の服飾の流行まで頭の中に入ってくるのか。

ただ、凄まじい量の情報量と言う事には違いないため、その単語が出てくるまでは頭の中にはどう言ったものなのか思い浮かばないそう。

「そうです。効果は目くらまし程度ですけど、戦場じゃ命取りですからねえ…」

「へえ…これ、何個か貰ってもいいかい？」

「どうぞどうぞ。地面に投げつければルーン魔術が起動しますから」

ブーディカは僕の作った魔石を幾つか手に取ると、懐に仕舞い込み手を振って離れていく。

：胸の谷間に仕舞い込む人初めて見た…うくん、でかい。

テントからこちらの様子を伺っていた清姫は、相変わらず険しい表情で此方を見つめ続けている。

多分鼻の下を伸ばしていると思ってるんだろうなあ…そんなこと言われても僕も男ですし。

僕はその視線に気づいていない素振りです。小石を皮袋に詰めていき、腰にぶら下げておく。

これで戦闘中でもすぐに取り出して使う事ができるだろう。

「ロマン、立香さんの方は順調？」

『順調だよ。今のところ敵らしい敵は出ていないし、快適な旅だろう』
ネロ一行が出立してからと言うものの、Dr. ロマンから聞かされる状況には心配するようなものは無かった。

流石にイタズラに戦力を送り込むような真似をしないか…。

向こうにはもうカルデアが関わってきていることは分かっている筈…胡坐をかいて高みの見物でもしているのだろうか？

得物の前で舌なめずりは三流のやる事と言われているけど…。

存外に英霊に慕われていないだけだとしたら、此方としてはありがたい限りだ。

相手方の行おうとしていることは人類史の否定…ひいては英霊達

の否定だ。

慕う英霊が居たとしたら、反英雄と呼ばれる存在くらいなものだろう。

『ああ、でも通りがかりの行商から女神を見た、なんて話を聞いたらしいよ』

「女神ですか：それって神霊って事になりますよね？」

神秘を残しているとはいえ、この時代は最早人と神とが決別をした後の時代と言われている。

その転換期となったのは古代ウルク：名高い英雄王ギルガメツシユの時代らしいんだけど、それはまあ置いておいて…。

お師匠曰く、世界が人間の手に委ねられてから世界の物理法則と言うものが確定していき、神様：つまり神霊がこの世界に干渉することはできなくなったとか。

神霊クラスの顕現はエミヤの様な守護者：つまり抑止力が排斥してしまい出来ないんだとか。

仮に顕現してしまっても必ず勝利する存在を抑止力が送り込んで、早急に鎮圧してしまう。

だったら、この人理焼却はなんなんだと言いたくなくなってしまふ訳だけど：抑止力はどうも本人たちが気付かないところで起きているらしく、そうなった場合観測や認識はできないとのことだ。

…ハハツマサカネー。

『君の懸念していることは分かる。そもそも人づての噂を聞いたただけだから真偽は分からないし、何より——』

「ダウンサイジングされた英霊である可能性が高いと言う事だ。そうだな、魔術師？」

「お師匠、兄さん苛め終わったんですか？」

「苛めとはひどい言い草だな、良太？軽いウォーミングアップの様なものだ」

Dr. ロマンとの会話に割り込む形で、斥候と言う名のトレーニングに出ていたケルト最優にして最美（自称／ただし僕としては否定要素はない）の槍使いであるスカサハが戻ってくる。

お師匠はクー・フリーンの首根っこ掴んで引きずる様にしてスパルタクスを連れ立って出ていったので、一緒に帰って来るものかと思っていたのだけれど…。

「その…兄さんとスパルタクスの姿が見えないんですが…」

「ああ、あいつの両腕を縛り上げて手頃な飛竜の巢に叩き込んできた…スパルタクスはそのままだが、セタンタは圧制者と囁いておいたから仲良く運動しているだろう。ランサーにしてキャスターだからな、今一度効率の良いルーン魔術を叩き込むには打って付けだろう？」

「待って、アンタ何言ってるんですか…」

お師匠は後ろ髪を払って爽やかな笑みを浮かべた後に、その形の良いいバストを下から持ち上げる様に腕を組んで僕を見下ろす。

僕はスパルタクスの件で顔を青褪めさせるものの、その仕草にうっかり見惚れてしまい、少しばかり顔を赤くして首を横に振って本題に戻る。

兄さんには頑張って逃げ帰って来てもらいたい…こんな事で令呪を切りたくないし、念話が無い辺り余裕は余裕なんだろうし。

「は、話を戻しますけど、ダウンサイジングってどういうことですか？」

「言葉通りの意味だ。神としての権能を可能な限り削ぎ落とし、格を英霊の器になるまで落とす。そうすることで神霊も抑止力に目を付けられずに顕現することは可能だ。そも、英霊と言うものは本来、人が扱えるようにしたものだからな。英霊も器の格が上がることでより本体に近い実力で顕現することができる」

『女王の言うとおりでだよ。英霊として顕現しているのならば、仮に敵対していたにしても僕達で対処はできるはずさ』

格が上がれば本体に近くなる…あれかな、スーパー・サーヴァントだとかハイ・サーヴァントみたいな名前が付いてたりするんだろうか？

安直に過ぎる気はするけどネー！

ただ、そう言った格が上がった英霊はお師匠の言葉通りであるなら人間では制御できないのだろう。

人が扱えるようにしたものがサーヴァント…ってことなんだから。「お師匠の全力って言うの…いつか見てみたいなあ」

「ハハッ、ならばお主は鍛錬を今よりも多く積んで、影の国へと単身参らねばならんだらう。人理を修復すれば、影の国もまた修復される…無論、私もな。さて、お主は私を魔境に叩き返す日が来るか見ものだな」

「…絶対に会いに行きますよ」

夢の中でしか会えない人。

だからこそ、僕は生きてこの人に会ってみたい…会いたいと思っ
ているのだから。

「なにせよ、その女神との邂逅は吉兆になるだろう。私の見立てではな」

『女王の千里眼ともなれば、ほぼ確実にしようね。立香ちゃんにも伝えておくよ』

「早くこの特異点を解決しないとですしね」

…レイシフト中、シフト制とは言え残った職員をフル稼働して、休
みなく僕達の存在実証を続けていかなければならない。

少しでも僕達の存在実証に乱れがあると、レイシフトが失敗してしま
って最悪自分と言う存在が消え失せてしまう。

今こうして何でもなく生きていられるのは、縁の下の力持ちとも言
えるスタッフの皆の頑張りがあるからに他ならない。

レイシフトしてから2週間近く経とうとしている事を考えれば、あ
まり呑気に事を構えていられないのは事実ではある。

『とは言え、焦っても仕方がないわ。東雲、何事も落ち着いて事を進め
なさい…良いわね?』

「所長…」

所長が通信に割り込む形で僕の焦燥感を拭い去っていく。
確かに焦りは禁物だ…失敗は絶対に出来ないのだから。

「とは言え、こうも動かないままでは、考え事をどうしたってしま
うものだろうか?」

「…ソクナコトナイデスヨ」

「いいや、私が見るにそんなことはある。なので、お主を私が直々に扱いてやるとしよう。悦べよ?」

「ワア、ウレシイナア」

何となく、嫌な予感がして僕はジリジリとすり足で後退していったものの、一瞬で背後をつかれ両肩に手を置かれて耳元でお師匠に囁かれる。

これが青少年的に大人の階段を登るのお誘いであつたのであれば、本当に：本当に嬉しかったのだけれどそこは鍛錬中毒であるお師匠：甘い囁きなんて欠片も無かつた。

僕は今朝見た兄弟子と同じような状況で、ズルズルと野営地から引きずり出される羽目になつたとき。

「圧政には反逆を！反逆には痛打を!!おお！すべて我が愛で抱擁しよう!!」

「圧政者じゃねえつつつてんだろ、筋肉ダルマが!!」

見渡す限りの遮蔽物がない平原を、2人の男が疾走する。

1人は後ろ手に縛り上げられ、両腕の自由が利かなくなっている男、クー・フリーン。

もう1人は青白い筋骨隆々の大男、スパルタクス。

クー・フリーンはスパルタクスが振るうグラディウスによる剣閃を紙一重で避け、ルーン魔術による足止めを幾度も施していく。

スパルタクスの宝具の特性は事前にブーディカから説明されていた事もあり、可能な限りダメージを与えないものを選択して使用している。

その宝具：疵獣クライング・ウォーモンガーの咆哮はスパルタクスにダメージを負わせるとその一部を魔力と変換し、傷つければ傷つけるほど強くなると言うものだ。

流暢に会話を行っているように思えるが彼の狂化ランクはEX：故に傷つくことに一切の躊躇は無く、また相性がいい。

そんなお陰で、クー・フリーンはワイバーンの巣ではスパルタクス

を傷つけないように守りながら戦う必要があったし、今もこうして些細な嫌がらせ程度のルーン魔術で追いつけないように野营地へと走っているのである。

「ったく！なんでこんなのが味方なんだっての！」

「これぞ我が愛！故に圧政者よ！汝の愛を我に授けたまえ!!」

「愛をくれてやるんだったら、美人の姉ちゃんが良いに決まってるだろうが！」

会話がほぼ通じないとは言え、こうして返していないとクー・フリーンとしてもだんだん気が滅入ってくるのである。

もうそろそろ野营地に着く：そうすればブーディカが何とか抑え込んでくれる筈、と思った矢先、クー・フリーンの視界の端に数百人規模の人外が存在が映る。

人外：と言ってもそれらは皆人の姿：しかし、そこに実体が無いのだ。

クー・フリーンはしめたと笑みを浮かべ、スパルタクスへと向き直る。

「おい筋肉ダルマ！あれを見ろ！お前の大好きな圧政者だぞ!!!」

「なに!?フッフ：フハハハハハ！おお！あんな所にも圧政者が！今日と言う日は神が与えてくれた試練の日!!さあ、友よ！私と共に行こう!!! 虐げられた人たちを解放するのだ、ゆくぞお!!!」

疵獣の咆哮：その名の如く咆哮を上げながらスパルタクスはクー・フリーンが指示した人外の集団：否、英霊レオニダスの宝具へと単身突撃していく。

本来であればローマの手前で陣取る筈であったレオニダス：しかし不幸にもクー・フリーンに目を付けられてしまったが故にスパルタクスを嗾けられてしまい、使命を全うすることはできなかった。

「フハハハハ！我が愛は!!爆発するうっ!!!」

形ある島への冒険と首都ローマへの凱旋。

藤丸 立香さんはそれらを見事にこなしただけでなく、敵勢力である連合ローマ帝国の首都…その正確な座標を手に入れる事に成功した。

その場所はマツシリアよりさらに南西…現代で言えば、スペインに位置する山間の中に隠されていた。

シバによる観測でも、ローマに酷似した外観の都がうつすらとではあるけど確認できたことからほぼ間違いないと言えるだろう。

その報せを受けた僕達は、最低限の部隊をガリアに残してネロ率いる首都攻略部隊と合流。

首都攻略のための戦力温存のために、後方へと配置される運びとなった。

立香さんとは通信で2、3言葉を交わしたに留まっている。

蟠りを抱えたままの状態に僕は一抹の不安を覚えつつ、2騎のバーサーカー達と進軍を続けていた。

スパルタクスは笑みを絶やさず目指すべき圧政者へと歩みを止めず、そしてもう1騎のバーサーカーである三国志にてその名を轟かせた乱世の梟雄『呂布奉先』はその身に闘気を漲らせて1歩1歩大地を踏みしめる様に黙々と歩いている。

この2騎はこれから首都を攻略する上で重要となる、攻城兵器としての役割が強い。

しかし、狂化の特性上敵を見つけたら一直線に追いかけてしまう為に、進軍中の散発的な戦闘にはあまり使用したくない。

故に後方に配置し、最終的な武力による手綱を握るために僕とお師匠達が配置されることとなった。

「カモフラージュを施しているとは言え、こども暇ではな」

「お師匠、首都着いたら存分に暴れてもらって結構ですんで…」

「お主…私をバーサーカーか何かと勘違いしておらんか？」

先陣を切っているネロと立香さんの部隊は、散発的な連合ローマ帝

国軍との戦闘が起こっているものの、いずれも雑兵ばかりで大きな損害が出る事もなく順調に進軍している。

勿論、何か問題があれば所長達に連絡してもらってすっ飛んでいくつもりではある。

お師匠は僕の言葉に心外だと言わんばかりにスツと目を細めて冷やかな視線を送ってくる。

「いや、自分よりも強い奴に会いに行くって言ってレイシフトしてるくらいですし…バトルジャンキーなのは間違いないのでは？」

「ますたあのばあさあかあは、この清姫だけで充分でございます」
「バーサーカーってなんだっけ…」

僕がお師匠に反論をすると、清姫は僕の腕に抱き着いて頬を膨らませながらお師匠へと嫉妬の視線を向ける。

清姫のパッシブスキル『狂化』のランクはEX。
対して呂布のランクはA…スパルタクスはEX。

呂布は言葉による意思疎通は出来ない。
試したのだけれど、『ウオー』としか叫ばなかった。

スパルタクスは流暢に言葉を発することができただけけれど、会話として成り立つことは殆どない。

しかし、清姫の場合は僕の事を安珍の生まれ変わりとして見ていると言う点以外は普通に会話は成り立つし、振舞いは恋する少女のソレだ。

曇り切っていない曇った瞳なのが本当に怖いんだけど。

とりあえず、人としてイかれていたらバーサーカーと言う括りにされてしまおうだろうか…。

「女子のばあさあかあと言えよこの、清姫にございます。故に！ばあさあかあは、わたくし一人で充分なのです！」

「愛されているな、良太？」

「ソウデスネー」

お師匠はニヤニヤとした笑みを浮かべて僕を揶揄ってくる。

それに対して僕は、がっくりと肩を落として深いため息を吐き出すだけだ。

清姫は兎に角、推しが強い。

恋する乙女と言うものは、皆こんな風に猪突猛進なのだろうか？

それとも、狂化によって助長でもされているのだろうか？

どこか気の抜けたかのような漫談に、後ろを歩いていたクー・フリーンが呆れた様な声を出す。

「なにやってんだかねえ。もうちつと気を引き締めた方が良いんじゃないかねか？」

「いや、ほんと…目立った戦闘がないからどうにも牧歌的ですね」

「デカブツ2体居なきやもつと気が抜けてたんだろが…」

クー・フリーンがヘラヘラとした態度でため息を吐きだした瞬間に、猟犬を思わせる鋭い視線へと変貌する。

クー・フリーンの眼差しが変化した瞬間に、僕達の傍らで唐突に爆発音が響き渡る。

「!!!」

大地を砕き、その手に持つは中国世界でも有数の武器『方天画戟』。乱世の梟雄、無双の豪傑であるバーサーカー・呂布奉先が戦の匂いを敏感に察知し、駆け出した為だ。

その威容、その体軀からは想像もできないその速さは、まるで重戦車が風の如き速さで走っているのかと錯覚してしまう。

呂布を制御できる荊軻は現在、前線で負傷した兵を後方に下げる為の護衛任務に就いてしまっている。

「キチンとマスター契約結んでないから…！師匠、追いかけますよー！」

「良いだろう。しかし、スパルタクスはどうする？お前が此処を離れてしまうと言う事は、セタンタも清姫もお主について行くと言う事だぞ？」

「スパルタクスにもついてきてもらいます！」

「おお、ついに圧政者が私の前に現れたと言うのだな？」

スパルタクスが僕の言葉を耳に入れると、全身の筋肉を撓ませながら不気味な微笑みを浮かべてその手に持つ巨大なグラディウスを天高く掲げる。

僕は概念礼装であるゲイ・ボルクをその手に持ち、穂先を呂布が駆

け出した方角へと差し向ける。

「あつちに圧政者だ!!」

「おお！彼方にこそ圧政者あり！フハハハ！今、我が叛逆をお見せしよう！征くぞオツ!!」

「随分扱いが上手になりましたね、ますたあ？」

「とりあえず敵を圧政者認定すれば勝手に進んでくれるから…」

スパルタクスの追い求めるモノ…要は圧政者と言う名の人参を鼻先にぶら下げてしまえば良い。

それで大体の進行方向を絞ることが出来る。

彼もまた戦火の匂いには敏感だろうし、敵兵を見つければ勝手に殲滅してくれるはずだ。

『あくもう、滅茶苦茶じゃないか！』

「呂布とスパルタクスを動かしたんで僕らも行きます。立香さん達も一旦下がらせてください。敵部隊を挟撃します！」

『もうそつちには動いてもらっているよ。東雲君も急いでくれ!』

Dr. ロマンのボヤキに心中で同調しつつも、僕は両足にルーン魔術による強化術式を施して陸上競技におけるクラウチングスタートのポーズを取る。

「行きます!!」

呂布程では無いものの、大地を踏み砕く勢いで足を踏み出せば、一気に戦場に向かって跳躍する。

身体能力を強化術式で人体が耐えられる限界ギリギリまで補強し、僕は戦場を俯瞰する為に文字通りジャンプしたのだ。

勿論、着地はお師匠任せだ。

さすがに長時間強化術式で肉体を補強し続けると、自滅してしまう可能性がある。

「いっ…!!」

両足に走る痛みに歯を食い縛りながら僕は視力をルーン魔術で補強して、敵部隊の進軍位置を把握する。

僕達が進む道は隠れる場所の少ない平野だ。

しかし、部隊に魔術師が伴っていた場合、認識を阻害する魔術を

使って待ち伏せをしていた可能性がある。

前衛が行っていた散発的な遭遇戦は、偶然を装った必然である可能性が高い。

もし仮にレフが裏で絡んでいるのだとしたら、僕達…とりわけケルト最高峰の戦士であるお師匠とクー・フリーンを警戒する筈。

それに以前のガリアでの戦闘で、こちらの戦闘能力を思い切り見せつけてやったのだ。

分断するにしてももう少し上手く此方を分断しなければ、返り討ちに合う事は目に見えている筈なのに…。

「待ち伏せ…何も無いところから？単騎が突出してる…お師匠、着地お願いしますー！」

「やれやれ…跳躍の免許皆伝とはいかん…？」

「いや、普通の人間がやれるようなもんじゃないでしょおおおおお…!!??」

跳躍の最高到達点に着いたことで一瞬の浮遊感を得た後に、重力と言う名の魔の手が僕の肉体をつかみ取って一気に地面まで落下していく。

本来であれば僕自身で着地すべきところではあるのだけれど、先ほど言った通り長時間の身体強化は身体に毒。

故に僕はすぐに強化術式を解いてしまっているのです、今この空中に放り出されている状況では生身の人間も同然。

つまり、地面に着地しようとするれば、漏れなく地面を汚す赤い染みになると言う事だ。

突き進むスパルタクスの頭上を優に飛び越えた僕は、背中と膝裏を抱えられる…所謂お姫様抱っこの状態でお師匠に抱きかかえられ、難なく大地に着地する。

一切の衝撃を感じさせずに着地する辺り、跳躍の奥義を会得出来るのはまだまだ先の話になりそうだ…。

僕はそのままお師匠に抱きかかえられたまま、目と鼻の先にある戦場…中でも単騎で此方に向かってきている存在へと突き進んでいく。

「セタンタ、清姫…準備は良いか？」

「ありやあ…英霊だな」

「ますたあの邪魔をするのであれば…逃しません…」

まだ距離は開いている…だと言うのにあの黒馬の出す蹄音が、地響きを伴って此方へと伝わってくる。

それはまさにすべてを蹂躪し蹴散らすかのような力強さ…その覇気はびりびりと空気を振るわせていく。

「先生、それじゃあ手筈通り宜しく！」

「仰せのままに…ライダー」

黒馬の背に跨る長い赤い髪を三つ編みにした美少年と呼べる顔立ちの整った英霊…ライダーと先生と呼ばれた黒い長髪の鬘め面の男——恐らくこちらにも英霊だろう——が確認できた瞬間、黒馬が天高く跳躍して此方へと迫ってくる。

クー・フリーンと清姫は相手を迎撃しようとするが、お師匠がぐささま声を張り上げる。

「散開しろ！潰されるぞ!!」

「征くよ！是こそは、いずれ彼方へ至る我が霸道！」

『始まりの蹂躪制覇』!!!

ただの跳躍からの踏み潰し…その筈だった黒馬の一撃は、着地点を中心に全てを押し潰す一撃となって僕達の頭上から襲い掛かって来た。

しかし、お師匠の掛け声のお陰ですぐさま離脱することが出来た僕達は、着地後そのまま動かない敵ライダーを三方から取り囲む。

「フハハハハ！おお、君こそが私の求める圧政者!!我が愛を受け取りたまえ!!」

「思っていたよりも早い合流か…だが、問題は無い」

お師匠から漸く降ろしてもらおうと同時に、遅れてやって来たスパルタクスがグラディウスを掲げながらライダー目掛けて襲い掛かろうとする。

しかしライダーの後ろに居た男から急激な魔力反応を見せつけ、宝具を展開する。

「これぞ大軍師の究極陣地…！『石兵八陣』!!!」

上空から巨石の柱が僕達を取り囲む様に上空の雲を突き破って降り立ち、陰陽図の描かれた天板が屋根の様に爆音と共に設置される。その瞬間巨石で作られた陣内部に強烈な閃光と負荷が掛かり始める。

石兵八陣：三国志に名を連ねる蜀の大軍師、諸葛亮 孔明：それが仕掛けた罠だったっけ…？

オルレアンの時、ジャンヌ・オルタと対を成す様に竜殺しにまつわる英雄たちが呼ばれていた。

恐らく目の前の男はそうなのだろう…呂布の対になるように召喚された英霊、諸葛亮 孔明なのだろう。

「僕にも今の事態がどういう状態なのか理解しているつもりだ。だけど、僕は敢えて君たちに敵対させてもらう」

「くっ…力が…」

ライダーの少年は陣の中心に居ながら、特に堪えた様子もなく非常に申し訳なさそうな声音で首を横に振る。

スパルタクスを含め、僕達は全身に重圧がかかったかのような倦怠感に襲われ、その上で何らかの拘束術式がかかっているのか指先一つ動かすのも困難な状態になっている。

「然程時間は取らせないからさ、そこで大人しくして居てくれると嬉しい。僕はただ彼女と話をしてみたいだけからね」

「そう言う事だ。全て終わればその陣を解く。だが、邪魔をしたければそれはそれで構わない。破れるものならばな」

『待ちなさい』

ライダーが手綱を握り陣から出る為に馬を動かし始めると、砂嵐交じりの不鮮明な音声が響き渡る。

その声は、不鮮明でありながらも聞き覚えのある声なのか、孔明の眉根がピクリと上がる。

『時計塔のロードである貴方が、何故そこにいるのかしら？』

「その声…オルガマリー・アニムスファイアか」

「先生、知り合い？」

「ああ…」

時計塔：それは英国に拠点を置く魔術協会における一大勢力の1つだ。

カルデアの運営にも大きく関わっていて、僕としては関わりたくない組織の1つである。

ほら、ホルマリン漬け宣言を所長から受けてるからね…。

「私にその問いを応える義務はあるのか？」

『大いに。人理が焼き尽くされようとしている今、何故私たちと敵対するのかしら？是非ともお聞かせ願いたいわね』

同じ魔術協会の人間であるならば、敵対するのはおかしい：協会と言う1つの組織の歯車であるならば、同じ目的に向かって進むべきと言う事なのだろう。

だけど、組織の歯車である以前に人間だ。

人間である以上個人がある。

個人である以上優先すべきものがある。

だからこそ、彼は今こうして敵対しているのではないだろうか？

「なに、私には何よりも優先すべきことがある。そして、私が頭を垂れるのは何時だって『王』のみだ。そちらの言い分は理解しているが、今回はそちらに従う気は毛頭ない」

『あなた…それでも!!』

「そうだ、それでも私はロード・エルメロイ2世だ。行くぞライダー、そろそろ客がここまで来る頃合いだ」

話は終わりだ、と言わんばかりに孔明：ロード・エルメロイ2世が顔を背けると、ライダーは難なく陣をすり抜けて外へと脱出していく。

僕は、それを黙って見過ごすことしかできず、起動可能な魔術回路をフルに動員して単純な魔術による身体強化を行って指先で地面をゆつくりとだが、着実になぞっていく。

全身の痺れと言うものは徐々に薄れてきてはいるものの、呪いは着実にお師匠達を含めてダメージを与えていく…。

そのダメージを少しでも軽減する為に霊体化してもらおう事で、僕に対する負担を減らしてもらい、ダメージの回復に務めてもらう。

問題は、スパルタクス。

先ほどからダメージを受けている所為か、僅かずつではあるものの筋肉が膨張しはじめているのが分かる。

しかし、この陣を脱出するためにはスパルタクスの協力が不可欠だと思う。

お師匠を使えば、難なく潜り抜けられそうだけど、今後の戦闘で支障が出てしまう可能性がある。

それ程までに絶妙なさじ加減で、この陣が形成されているのだ。

つまり、人間は死にくく、しかし、英霊を動かすには魔力を多大に消費せざるを得ないと言う状況だ。

その点、スパルタクスは契約をしていないので、僕の魔力を食う事は無い：制御できないんだけどね。

「圧政者よ！待ちたまえ！我が愛を！我が叛逆ヲオオ!!」

「こんなところで、宝具開帳されたら、死ぬ：!!」

僕は必死に地面をなぞってルーン文字を書き込み終えるとそれを解放して、スパルタクスに強固に纏わりつく拘束術式を僅かでも緩める。

するとスパルタクスは、まるで獣の様な唸り声をあげて立ち上がりよろよろとした足取りで巨石へと向かって歩き出す。

「圧政には叛逆を：圧政者には我が愛を：ヲヲヲヲヲツ!!」

巨石へと近づいたスパルタクスは、その手に持つグラディウスを高く掲げて乱暴に巨石に向かって叩きつけ始める。

本来であれば、ライダー達の姿を追って陣から出て行ってしまはず：にも拘らず、スパルタクスは脇目も振らず巨石を破壊しようとするグラディウスを鈍器の様に振り回すのだ。

「今！圧政に虐げられし民が居る！今！圧政者によって死に至ろうとする民がいる！ならば！私は突き進もう！圧政に叛逆する為に！我が愛を証明するために!!フハハ！フハハハハハ!!」

スパルタクスの青白い筋骨隆々の肉体が一層撓み、グラディウスが巨石に深々と差し込まれると全身から強烈な魔力の放電が行われ、巨石を通してこの石兵八陣を形成するオブジェクト全体に紫電が奔り

始める。

「これこそが！我が愛！我が愛は爆発スルウツ！！」
「へ……？」

猛烈に嫌な予感がした瞬間、スパルタクスの全身が青白く発光し…
僕の意識を刈り取った。

「余は何も間違えてはいない！余こそがローマを統べる第五代皇帝、ネロ・クラウディウスなのだ！」

真紅の薔薇を思わせる刀身が翻り、連合帝国に与するライダー…アレキサンダーの身体から真紅の花弁を舞い散らせる。

エミヤの双剣が、ヴラド三世の槍が、マシユのラウンド・シールドがネロを邪魔する雑兵とロード・エルメロイ二世の妨害を蹴散らし、勝利をもたらした。

アレキサンダーは口から大量の血を吐き出して膝を折りかけるも、手に持つ剣を地面に突き立てて支えにすることで決して屈することはしなかった。

その姿は少年なれど、霸王の兆しを持つ者…後に双角王ズカルナインの異名を頂く征服王の姿のそれに近しかった。

「ガフツ…これが今の皇帝の力、か…！」

「退かぬと言った！退かずに君臨し、華々しく栄える世界ローマなのだから！！」

凜として聞く者の心を熱くするその言葉は、そうであって欲しいと言う悲痛な願いにも似ている。

だが、カルデアは…藤丸 立香は知っている。

その願いは決して果たされることが無い事を…そうとも知らず、それでも前進を続ける彼女を見て笑うものが…果たしているだろうか？

後に暴君と、悪なのだと思われることになろうと、それこそが繁栄の為の前進努カなのだと思っていて止まぬこの願いを誰が嘲笑う事ができようか。

ネロの言葉を聞いた立香は唇を噛み、顔を俯かせる。

「顔を上げよ契約者よ。これこそが王たる…皇帝たる者の信念だ。我らはその行く末を知ろうとも、顔を背けてはならぬ。大輪の薔薇が如き輝きから目を背けてはならぬ」

ヴラド三世は立香を叱咤するように声をかけ、孔明から放たれる魔

力を伴った突風を槍で薙ぎ払う事で立香に危害が及ばないように防ぎきる。

「結末はどうあれ、その過程は決して間違っではない。彼女が信じているものは決して間違いないのではないのだ。だから、顔を上げるんだ、マスター。私たちには成すべき使命がある」

「ヴラド公…エミヤさん…」

「先輩、オーダーを！」

ロード・エルメロイ二世が攻撃態勢に再度入ったのを見て、素早く懐に潜り込んだエミヤは逆手に持った黒と白の夫婦剣：干将莫邪を振るってロード・エルメロイ二世に対して素早く切りつけようとする。

しかし、その動きはブラフ：エミヤの攻撃に合わせて後退した直後、エミヤの頭上から無数の岩石が降り注いでくる。

「チイツー！」

「これでも計略には自信があるのでね…。さあ、どうするカルデアのマスター？君はもう一人のマスターに任せて逃げるほど臆病者でもないだろう？」

「っ…い！」

ロード・エルメロイ二世は眼鏡を指で抑えながら、まるで立香の胸中に渦巻くものを見抜いたかのように挑発をする。

すなわち、恐怖。

人が人を殺す事に躊躇しない戦場と言う場で、表面上取り繕っては居たが恐ろしさを感じてしまっている。

特異点Fには人は居なかった。

第1特異点オルレアンでは人が襲われていた。

だが、この第2特異点においては、事情が違う。

同じように物を考えて、家庭を育む人々が殺し合っている。

大して罪が無いような人々同士が剣を持ち、槍を持ち殺し合っている。

もう一人のマスター、東雲 良太はそれを何でもないように塵殺し、蹂躪し、それでも何も変わらなかった。

それでは私は？

エミヤは間一髪の所で後退して生き埋めになる事を防いだものの、岩石の幾つかが当たってしまったのか左腕をダランと下げている。

「ぬかったか……！」

「決断の時だ、契約者よ。生きるか、死ぬか、退くか、退かぬか……貴様は何を示す？」

「私は……っ!？」

「ほう……もう抜け出してきたか。早くしなければお前はいつまでもそのままだぞ、カルデアのマスター」

アレキサンダーとロード・エルメロイ二世の背後……その遠くで魔力を伴う眩いばかりの光が炸裂する。

それは、スパルタクスが宝具の開帳を行い、石兵八陣を打ち破った事を意味していた。

立香の脳内に僅かばかりに逃げの考えが鎌首をもたげる。

このまま待てばあの人が来てくれる。

そして、私を守る様に敵を薙ぎ払っていく。

少し……少しだけ耐えてしまえ、ば……

「う……うわああああ!!」

だが、それを良しとしない。

してはならない。

何故ならば、あの時私は傍らに居る英霊の手を取ったのだから。

優しかった後輩の手を取って奮い立ったのだから。

何よりも……彼に宣戦布告したのだから!!

立香は1歩前へ出て、マシユ、ヴラド三世、エミヤに魔術礼装による強化スキルを施す。

「私は……逃げない!!」

「フツ……それでこそだ……！」

ロード・エルメロイ二世は立香の宣言に満足げに頷き、自身の周囲に八卦陣を展開し始めるのだった。

むくり、と体を起こす。

周囲は何処か見慣れた風景で、大きく深呼吸をするように僕は息を吐き出す。

至近距離…と言うほどでもないけれど、スパルタクスの宝具による電撃爆発に巻き込まれる瞬間、お師匠とクー・フリーンが実体化してルーン魔術による障壁を張ってくれたところまでは覚えている。

しかしながら、バーサーカーの後先考えない高出力に僕の身体はまるで風に舞い散る枯葉の様に飛ばされてしまったのだ。

あれからどれだけの時間が経ったのかは定かではないけれど、問題は…。

「なあんで、影の国なんですかねえ…?」

漸く立ち上がった僕は、目の前の巨大な門を見てポツリとぼやく様に言う。

その門は今や懐かしい、お師匠と出会い、鍛えてもらった影の国に通じる門だったのだ。

とは言え、外観は鍛えてもらっていた時よりも些か新しく見えるし、何か所々血痕が見える。

「ッ…!!」

僕は無様に地面を転げまわる様に後ろへと跳躍しながら右手にゲイ・ボルクを持ち、体勢を立て直した瞬間に無造作に突き出す。

その一撃は上空から僕を突き殺そうとしてきたものの一撃と交差する形になり、火花を散らしながら僅かに僕の頬を裂きながら逸れていき、僕の一撃は相手に掠る事すらなかった。

僕は棒術の要領で相手との距離を開ける為に薙ぎ払う様に振るものの、交差した相手の朱槍によって跳ね上げられてしまい脇腹を強かに蹴り払われてしまう。

「ガッ…クソッ!!」

「…我が朱槍を持つ者…貴様、どうやって我が城から持ち出した？」

ゾツとする程までに冷たく機械的な声。

だけど、その声は…聞き間違えようがない。

何故ならば、僕はその声を毎日聞いていたのだから。

「お、お師匠…!？」

「…貴様の様な恥知らずを弟子にした覚えはないが」

黒いマスクで鼻先まで隠しているものの、あの鋭い眼差しは間違いなくお師匠である影の国の女王…スカサハその人だ。

一瞬の狼狽…油断の際にスカサハは距離を詰めて、必殺の一撃を僕の心臓目掛けて突き込んでくる。

僕は必死に身体能力をルーン魔術で補強する事でその一撃を脇下に通すことで避けるものの、遅れてやって来た風圧に身体が舞い上がり空中へと放り出される。

「こ、殺す気…!？」

「剥き出しの魂なんぞにうろつかれても邪魔なだけだ」

木つ端の如く舞い上がった僕は齒を食い縛り、身を振りながら素早くルーン文字を起動させて視界にいるスカサハ目掛けて火炎弾を連続で撃ち込んでいく。

しかし、そのいずれも涼しい顔で片手に持った朱槍で撫でる様に逸らされていき、スカサハの背後にある門に直撃して焦げ跡を残している。

「ああ、なるほど。それならば納得が行くか。どうやら将来的にワシは耄碌するらしい」

「くっ…」

届かない…分切り切っていたことではあるけれど、今の僕ではスカサハに技が届かない。

さりとて、このまま黙ってやられる訳にはいかない…僕は、戻らなくてはならない。

成すべきことを成していないのだから…!

着地と同時に両足に限界ギリギリまで強化術式を施し、視界を置き去りにする。

体感で刹那にも満たないその時間。

瞬時に互いの槍の間合いに踏み込んだ僕は、持ちうる限りの技術を総動員して朱槍を連続で突き放つ。

ミシリ、ミシリと骨が悲鳴を上げ、全身の魔術回路が少しずつその機能を弱めていく。

「多少はらしく打てるが、遅い」

「うあっ!!」

だが、スカサハには届かない…いずれの突きもまるでダンスを踊る様に避けられ、容易く間合いを詰められると鳩尾目掛けて重く鋭い拳が叩き込まれ、胃液を吐き出しながら僕の身体は車に轆き飛ばされたかのように宙を舞って地面に激突し、道端の小石の様に転がっていく。

「いつ…ぐあっ…!!」

「…消える前に教えてやる」

スカサハは素早く朱槍を弄ぶように回転させて構えると、朱槍に魔力を流し込んでいく。

アレが来る…絶対に避けられない絶死の一撃。

僕は痛みに痺れる体に叱咤を入れながら、震えながら立ち上がってスカサハと同様の構えを取る。

「槍とはこのように扱うものだ…!!」

「ああ…あああああ!!!」

ありったけの魔力を自身の朱槍に流し込み、スカサハとほぼ同時に一步踏み込んで跳躍する。

届け…届け…届いてくれ、僕の一撃…!!

『突き穿つ——』

『穿ち散らす——』

放てば必中、穿つは心臓…あらゆる道理を無視して放たれる、必死の一刺し…!!

『死棘の槍!!!』

『死華の槍!!!』

「ハ——ッグ……!!」

鋭く冷たい死の一撃を感じた瞬間に、僕は寝台から飛び起きて地面へと転げ落ちる。

全身と言う全身から冷や汗と言う冷や汗が流れ出し、僕は刺し貫かれた胸元を掻きむしる様にして傷を確かめる。

「ハアツ……ハアツ……ハア……ハア……ゆ、ゆ……め……?」

「だ、大丈夫ですか!? カルデアの方々を呼べ、東雲殿が目を覚ましたとな!」

偶然、その場に居合わせた兵士が僕の身体を寝台へと抱えて降ろすと、部下の1人に

命令を下して走らせる。

どうやら、僕はスパルタクスの一撃が原因で、昏々と眠り続けていたようだ。

「発見してから丸2日寝ていたのです……あまり急に動くとは体に障りますよ」

「そ、そんなに……。ツ……連合帝国とは……!」

「スパルタクス殿と呂布奉先殿と合流するまで、進軍を一時停止してあります。一先ずは身体を休めてください。私は陛下に伝えてまいりますので、これにて」

兵士に一礼をして退室するのを見届けた後、僕は全身の魔術回路に魔力を走らせて体の異常を探っていく。

幸いにして魔術回路事態に損傷はなく、魔力不足による全身の倦怠感くらいしか異常らしい異常は感じられなかった。

身体のうちらこちらに湿布が張られて包帯が巻かれているところを見るに、打撲ないし火傷で済んだのだろう……それらは魔術の治療魔術で何とでもできるので、鬨に支障が出る事も無い筈だ。

「東雲さん!!」

「お、おはよう……?」

バタバタとした足音がしたかと思えば、テントの出入り口に下がっている垂れ幕が思い切り捲られて立香さんとマシユの2人が中へと

入ってくる。

今の今まで寝ていたために分からなかったけど、どうも今は真夜中な様で2人とも可愛らしいパジャマ姿でいる。

「あーん、旦那様ますたあ！お目覚めになられたのですね!!」

「き、清姫……!」

立香さんとマシユが僕へと駆け足で近付いてくると、まるで2人をけん制するかのように僕の背後で清姫が実体化して背中から抱き着いてくる。

僕が慌てて清姫を引き剥がそうとすると、立香さんとマシユが汚物を見るかのような目で僕を見つめながらヒソヒソと何やら話している。

「幼女…ベッド…連れ込み…」

「ふ、不潔です…!」

「喧嘩売ってるのかな?」

僕はこめかみを痙攣させながらニコやかに穏やかに2人に声をかけると、2人とも体をビクツとさせて乾いた笑い声を上げながら首を横に振る。

「…それで、アレキサンダーとロード・エルメロイ二世は?」

「ライダー・アレキサンダーは皇帝ネロが、ロード・エルメロイ二世は先輩が撃破しました。部隊の損害もそう大きくはないそうです」

「…だろうね。彼らは僕の足止めが目的だったみたいだし、殺す気は無かったんでしょ」

殺す気だったのならば、石兵八陣で拘束したときに僕の首を刎ねていた筈。

だと言うにも関わらず、彼らはそれをしなかった。

ネロがアレキサンダーを撃破した…と言う事はネロに接触する事自体が目的だったのだろうな…。

良い噛ませ犬だ。

「東雲さんが無事で安心しました。見つけた時は重傷を負っていて、応急処置が間に合わなければどうなっていたか…」

「お師匠達が霊体化してなかったらもつと危なかったな…はあ…」

制御できていないバーサーカーは一体何をしでかすのか想像がつかない…と言う事を肝に銘じておこう。

スパルタクスに対して文句を言っても仕方がないし、そこは自身の失敗として教訓にでもするしかない。

「この清姫…ますたあをお守りするどころか、お助けする事すらできず…！」

「あの状況じゃ仕方ないし、これからの戦いで仕事してもらおう事になるから…」

「必ず！必ずますたあのお役に…!!」

清姫はバーサーカーの筋力を以て、思い切り僕の事を抱きしめてくる。

僕は必死に身体強化を維持しながら清姫のベアーハグに耐えながら、立香さんへと目を向ける。

「ところで…随分久々だね、こうしてマトモに話すのは」

「そ、そう…ですね…あはは…」

「いやまあ、蟠りが無くなったって言うなら良いんだけどね…」

立香さんは僕の言葉に罰が悪そうに視線を彷徨わせている。

マシユは立香さんが僕に何か言われてしまうのではないかと、おろおろとした雰囲気と立香さんを交互に見つめている。

「…これだけはハッキリ言っておくけどね。僕は、僕の行ったことを間違いだとは絶対に思わない」

「…東雲さんは、どうしてそんな風に言い切れるんですか？」

直接行ったのは英霊とは言え、あの虐殺を行ったのは僕自身に他ならない。

「ただ、それは僕が味方を傷つけたくなって行った偽善そのものだ。だからこそ後悔はしないし、それを間違いだったと認める気はさら

さらない。

戦場に立つ戦士であろうとするならば猶更に。

「10年…僕はあの人の下で戦い方を、生き残り方を、何より心構えと言うものを叩き込まれてきたんだ。ある意味狂人ではあるだろうけ

ど…僕はあの人が誇れるような戦士で居たい」

「だからって…!」

「だから戦うんだ。死ぬ気なんてさらさら無いけど、無様に死ぬことだけは絶対にしない」

本当に…狂人そのものだと思う。

けれども、僕は戦士であることを選ぶ。

お師匠に…スカサハに手を伸ばすために。

「私は…私は怖いです…人と人が憎しみ合いながら戦って死んでいつてしまうのが怖い。けれども、私は逃げちゃ駄目なんです」

「先輩…」

立香さんは、声を震わせながら静かに僕を見据えてくる。

僕はそれを真摯に受けとめ、この特異点で一体何を感じ取ったのかを聞いてみたくなった。

きつと…その考え方は…。

「私はあの時、死にそうになっていたマシユの手を掴みました。あの時、掴めたのはマシユの手だけ…人理焼却とか訳が分からない中で、きつと皆助けを求めていた筈なの。でも、私が…私たちが頑張ればその人たちを助けられる。あの日、マシユの手を取った時の様に皆を安心させることができる。そうですね?」

「きつとね…僕達は積み上げてきたものを救うために戦っている。だからそれを救えれば、きつと」

僕は立香さんの言葉に静かに頷き、その考えに肯定する。

特異点を解決することで、そこで死んだことが無かった事になると言うのであれば、人理焼却で消えていった人たちも何事もなく戻ってくるという事なのだろう。

だからこそ、戦える人は戦うべきだ…抗う事が出来なかった人々の為にも。

「だから、私は逃げません。足が竦んでも英霊が…マシユが傍に居てくれるから!」

「…先輩…。先輩は、このマシユ・キリエライトが必ず守りますから!」

立香さんはマシユと手を繋ぎ、まるで太陽の様な笑顔を浮かべる。それは迷いが晴れたかのような明るさで、そうそう曇る心配もなさそうだった。

マシユは、そんな立香さんを見つめて胸を張ってドンツと自分の胸を叩く。

僕は2人のそんな様子にホツと胸を撫で下ろし、蟠りが無くなって良かったと安堵した。

連合ローマ帝国首都：僕達は皇帝ネロと立香さんの居る部隊とは別に単独行動で首都を別方向から攻略している。

敵方の目的は皇帝ネロを殺害することで、人理修復を失敗させることだ。

もしそうなのだとしたら、現状最高武力を誇るお師匠達を別行動させるのは愚の骨頂とも言える。

しかし、過信でも何でもなく立香さんと契約している英霊は守護に長けた英霊が居る。

盾の英霊と融合しているシールド・マシユ・キリエライト。

あらゆる武器を投影、複製してその鷹の目を以て戦場を俯瞰するアーチャー・エミヤ。

そして強大な国家から自国を守り抜いた護国の鬼将バーサーカー・ヴラド三世。

この3騎の護りがあれば、並大抵の敵でもなければ突破してネロを傷つける事はできないだろう。

故に僕達は単独別行動で遊撃に出ている。

劣勢あればその戦場へと赴いて殲滅し、更に次の戦場へと駆け巡る。

最高武力を自負するからこそ、そしてその武力を今まで目立つように振るい続けてきたからこそ、相手は決して無視することが出来ない。

いつその武力が自身の喉元に突きつけられるのか、分からないからだ。

「戦いは得意ではないのですが…」

「その割にや一番張り切ってるじゃねえか、蛇の嬢ちゃん！」

清姫の嘆くようなボヤきに対して、快活な笑みを浮かべてクー・フリーンが手に持つ朱槍で清姫に迫る敵兵を吹き飛ばす。

その動きは一切の無駄がなく、一種の芸術の様にも感じられる。

「旦那様との明るい未来の為、暖かい家庭を築く為、仕方なく、です！」

「軽口叩いていられるなら、まだ余裕かなあ…」

清姫は頬を膨らませると口元を手に持つ扇子で隠して、僕の方へとチラチラと熱の籠った視線を向けてくる。

一応緊張感のある戦場なのだろうけど、僕はその視線にがつくりと肩を落として呟く。

連合ローマ帝国は戦力の殆どを人間に依存している。

士気の高さは狂気に近い高さがあるため、ネロ率いる軍団よりも高いと言わざるを得ないものの、士気が高いと言うだけで個々の質はそこまで高いものではない。

ましてや、もう首都にまで攻め入っている都合上、展開できる部隊にも限りがある状態だ。

故に――

「『二』全ては連合ローマ帝国の為に!!」

戦場に幼過ぎる声が響き渡る。

戦場に老いた声が響き渡る。

包丁を、工具を、農具を…自分たちが持てる武器を持って、首都に住まう人々が僕達に対して牙を剥く。

そこには老いも若いも存在せず、自分たちの住む国を守るための必死の抵抗が窺える。

これが戦場の狂気なのだろう。

これが守ろうと言う狂気なのだろう。

この場には畜生しか存在しない…少しばかり、立香さんとマシユが心配だ。

「くっ…これが為政者のやる事なのか!!」

襲い掛かってくる子供を、老人に躊躇する兵士が悲鳴のような声を上げる。

彼にもきつと故郷で同じような子供が、妻が、両親が帰りを待つているのだろう。

だから、敵を打ち倒すと言うその刃は曇覚悟ってしまふ…鈍ってしまふ。

そんな光景を傍目に、僕は淡々と朱槍を振るう。

薙ぎ払って首を落とす、眉間を貫き、心臓を穿つ。

「死にたくなければ、僕の邪魔をするな…!!!」

腹の底から声を出し、威圧する。

兎に角、圧倒し続ける…敵を、味方を。

敵であればその姿に躊躇し、味方であればその姿に光明を見出す。

僕達は今、負けられない戦いをしているのだ。

故に、敵が何であろうと僕は決して躊躇をしない。

後悔を…しない!!

視界の端を黒い靄の様なものが掠めると同時に、鈍く光る矢が僕の眉間に吸い込まれるように放たれる。

「やれやれ、影の国でもないと言うのに、此処には血気盛んな獣しかお

らんない?」

「お師匠!」

放たれた矢は真つ直ぐに僕へと突き進んでくるも、当たる直前で横から伸びた腕が矢を掴みそのままへし折る。

戦場に合つてその美しさに翳りを見せる事も無く、威風堂々とした出で立ちはネロとは違つた輝きを放つ。

女王スカサハ…ケルト、アルスター伝説に於いて最強の戦士。

お師匠が助けてくれなくとも、その矢は僕に届くことは無い。

備えあれば憂いなし…ルーン魔術による矢避けの加護を施しているからだ。

こうして、お師匠が僕の前に出張ってきたのは、ひとえに僕の頭を冷やす為だろう。

「取るに足らん獲物ではあるが、あの英霊擬きは私が請け負う。お主達は合流地点へと急ぐが良い」

「分かりました。兄さん、清姫!」

「おう!」

「はい、ますたあ」

お師匠が弓兵の英霊擬きの元まで移動を開始すると同時に、民兵たちには混ざって俗に言うゴブリンと呼ばれる下級のモンスターとキメラの部隊が僕達の前へと躍り出てくる。

僕はすかさず腰のポーチから石を2つ程取り出して、ゴブリンたちの一団へと向けて放り投げる。

『ソウエイル』！『ユル』！

16番目のルーン文字、ソウエイルは太陽を意味するルーン文字。

13番目のルーン文字、ユルは根本的な変化を意味する他に180度の方向転換の意味を持つ。

僕が刻み込んで作ったルーン文字は、通常のルーン魔術に比べて魔力を使用しなくて良い分、単純にしか力を発揮することが出来ない。

だけど、シンプルな力しか必要が無い場面においては、これほど扱いやすいものはない。

僕が文字の起動の為に名を叫んだ瞬間、僕ら側では突如目を抑えて叫び転げまわるモンスターと人々の姿しか見えない。

しかし、実際にはソウエイルによって強烈な閃光があの一団の中で起きている。

では、何故僕らには閃光が届かなかったのか？

言うまでも無く、ソウエイルの魔石の手前で発動したユルの魔石によって、魔力による光の進行方向が捻じ曲げられた為だ。

「逃しません…ハッ!!」

清姫が手に持つ扇子に魔力を込めて振り払うと、高密度の火炎弾が高速で発射され、ゴブリンたちの肉体に当たると同時に炸裂していく。

着弾と同時に小規模の爆発を起こす為、ゴブリンの肉体から飛び散った破片が周囲に居る存在全てに牙を剥き、効率的に敵を排除し続ける。

「イっちまいなあー!」

クー・フリーンはそんな清姫の爆撃に巻き込まれないように、朱槍を用いて棒高跳びの要領でゴブリン達の頭上を軽々と乗り越えてキメラの背に降り立てば手早く蛇の尾を突き穿ち、朱槍を振り払いながら蛇の尾を引きちぎる。

痛みに暴れ狂うキメラの身体から跳躍して離れると、素早い踏み込みでヤギの頭を一撃で蹴り潰し、流れる様に体を回転させて獅子の頭

の眉間に朱槍を突き立てて生命活動を停止させる。

「突破します!!」

僕は後方に控えていた部隊に指示を送り、一気に王宮の前まで雪崩れ込もうとする。

こんな、戦いは…早急に終わらせなくてはならないだろう。

このまま首都に住まう人々を相手にし続けては、こちらの軍勢の士気が下がりに続けてしまい、やがて劣勢に追い込まれてしまう。

その為にも迅速に王宮へと向かい、連合帝国の首魁を打倒する必要がある。

「まだ、出てくるのか…!」

「チツ…: 宝具を開帳しねえとは言え、下手に戦えばマスターがもたねえ」

「ここはわたくしめが、焼き払ってしましましょうか…?」

まるでB級ゾンビ映画の様に、民家から路地から人々が手に武器を持って…あるいは石を投げつけて撃退しようとしてくる。

僕は手段を選ばない…後々の戦いを考えれば、ここで宝具…それもバーサーカーの物を開帳するのは躊躇われるけど、時間が無い。

僕がゆつくりと頷こうとした瞬間、僕達の背後から鼓舞するような咆哮の様な叫びと共にローマ帝国兵士の部隊が飛び出していく。

「東雲殿は我らに構わず王宮へ!我らがネロ・クラウディウス皇帝陛下と共に僭称皇帝を!!」

「二!我らがローマ帝国に勝利を!!」

兵士達は手に持つ巨大な板状の盾タワーシールドを手に持って民兵達へと突撃し、無理矢理こじ開けて道を作る様に盾で押し広げていく。

それと同時に黒い靄の残骸と共にお師匠が上空より舞い降りてくる。

「思ったよりも手古摺ったな…行くぞ、良太」

「は…?」

感慨深げにお師匠が呟いたと思った瞬間、お師匠は僕の身体をいつかのお米様抱っこの様に肩に担ぎ上げて兵士達が作り上げた道を風

の如く駆け抜けていく。

クー・フリーンと清姫もお師匠の後を追う形で走り始める。

「お、お待ちなさいスカサハさん！わたくしの旦那様ますたあなのですよ!!」

「お〜お〜、戦場のど真ん中でお熱いこって」

「走れますって、お師匠!」

僕は必死に体を振って降りようとするものの、お師匠は僕の身体をがっちりホールドしてしまっていて離す気配がまるでない。

後から追いかけてくる清姫は執念なのかなんなのか、ランサーでも屈指の速度を誇るクー・フリーンよりも速く走ってお師匠と（主に）僕を追いかけてくる。

…安珍って人は健脚だったんだなあ…なんて思っていると、お師匠の進行方向から聞きなれた鈍い打撃音が響いてくる。

どうやら王宮前へと到着したようだ。

此方に気付いたネロは、慌てたように此方へと駆け寄ってくる。

「東雲 良太!我らの兵はどうした!」

「民兵がこちらに重点的に配置されていて、道を作るために今も戦い続けています」

「そ、そうか…ところで、どうしてスカサハに抱えられているのだ?まさか怪我でも」

「ハハッ、私の弟子だぞ。生半可な事では怪我はしないさ」

抱えられたまま答えた僕は、ネロに怪我でもされたのではないかと心配されてしまうが、すぐさまお師匠が乱暴に放り投げて無事であることを伝えてくる。

お師匠が放り投げると同時に、清姫が此方へと駆け寄って背中から思い切り抱きしめてくる。

もういつそ清々しいまでに空気を読んでくれない清姫の事を取り敢えず無視して、僕は話を進める事にする。

ネロの背後にいる立香さんとマシユが、軽蔑の眼差しで見つめてくるし…。

「へぐっ…雑過ぎません…?」

「そんなことは無いぞ?そんなことはな」

「無事で何よりだ…こちらも藤丸 立香の助力もあつて無事に切り抜ける事が出来た。後は、あの方を…神祖ロムルスを打倒するのみ！」
ネロは、アエストゥス エストゥス原初の火と名付けられた剣を王宮へと勇ましく突き付ける。

…神祖ロムルス。

このローマ帝国を建国した偉大なる祖。

ネロは自身の国の原点に立ち向かわなくてはならない。
けれどもその歩みに迷いはない。

僕はその在り方をとても美しいものなのだ…この畜生溢れる戦場で場違いな事を思ってしまった。

「とは言え…このまま王宮へ乗り込むのは如何せん罨に自ら飛び込むようなものだ。どうしたものか…」

ネロは突き付けた剣の切先を下げ、困ったように首を傾げる。

言ってしまうえば、この王宮は魔術師の作る工房と同じ役割を果たしている筈だ。

なんせ、聖杯が安置されている可能性があるからだ。

魔術師の工房は十重二十重の罨を仕掛けている…自身の成果を盗み出される可能性を少しでも減らすために。

と、すればその罨を上手く突破していく必要があるわけで…。

「考えても罨が明かない…皇帝ネロ、こうは思わんか？罨なんぞ踏み潰してしまえば良いと」

「お師匠、そんなんだからバーサーカーだって言われるんですよ？」

「ほう…？」

お師匠は人差し指をピンと立ててしたり顔で提案するも、僕はその案を即座に却下する。

この人の事だから、こんな非常時においても修行のノリで罨を突破させる気なのだろうけど、そうは行かない。

そもそもそんな事をしている暇は無いのだ。

「エミヤさんのあい あむ ぎ ぼーん おぶ まい そーどでぶつちぎるのはっ。」

「唐突にやる気が無くなったのだがね…マスター？」

立香さんが思いついたと言わんばかりに手を挙げて案を出すものの、エミヤは頭痛がするかの様に眉間を揉み解しながらため息を深く吐き出す。

立香さんの言うソレは、おそらくエミヤの持つ投影品であるカラドボルグII偽・螺旋剣の事だろう。

魔力を込める量を調整すれば、更地にならない程度に爆破することも可能だろうか？

下手に爆破して聖杯が回収できなくなると、厄介極まりなくなってしまう。

皆で顔を突き合わせて知恵を絞ろうとすると、王宮の巨大な門が重々しい音を響かせてゆつくりと開いていく。

「先輩、門が…！」

「ハッ、どうやらお招きしてくれるそうだぜ…行くかい皇帝陛下、マスター？」

ゆつくりと門が開かれると、戦場の熱気を忘れてしまうかのような冷たい風が吹きつけてくる。

僕達は互いに顔を見合わせて静かに頷き、王宮への一步を踏み出した。

王宮の中には人の気配が一切無く、あるのは濃密な魔力…そしてピリピリとした殺気だけだ。

その殺気は目の前の謁見の間から放たれており、どこか苛立ちの色合いが非常に強く感じられる。

謁見の間まで歩いてきた所、やはり首都と同じくこの王宮もネロの王宮と同じ構造をしている事が分かる。

そうなれば、此処に至るまでそう迷うことなく、僕達は謁見の間まで辿り着くことができた。

王宮全体を包むような怒りを含んだ殺気…しかし、その割には一切の妨害が無い所が不気味さを助長している気がする。

「皇帝ネロ、準備はいい？」

「フフ、ここまで来て準備も何も無かろう？…行きずりの客将だったと言うのに、よくぞここまで余を支えてくれた。連合ローマ帝国に勝利した暁にそなたらに与える褒美は、かつてないものになりそうだな」
「褒美だなんて…私たちは私たちの目的があつて協力していただけなんです。だから…」

「はい。陛下…ですからその褒美はこのローマ帝国の復興の為に」

ネロに声をかけると華の様な笑みを浮かべて胸を張る。

僕達はこの異常を解決すれば特異点から退去することになる。

行ったことは無かつた事になり、決して誰の記憶にも残らない…。
だけど、それでいい…僕達は、全てを救う旅を続けなくてはいけないのだから。

「無欲な客将よな…。東雲 良太、頼む」

ゆっくりと扉を開けると、玉座に浅黒く筋骨隆々の威風堂々とした体躯の人物が腰掛けている。

その人物は僕達の姿を確認して満足げに微笑むと、ゆっくりと立ち上がりその両腕を広げる。

「…来たか、愛し子」

「うむ、余は来たぞ！誉れ高くも建国成し遂げた王、神祖ロムルスよ！」

ネロは僕達よりも前へ一歩出て、その自信に満ち溢れた笑みを向ける。

もはや誰にも屈しない、ローマ帝国第五代皇帝としての矜持を感じさせるその出で立ちは、少女であることを忘れさせてしまうほどだ。

「——良い輝きだ。ならば、今一度呼びかける必要はあるか、皇帝よ」
ネロは神祖ロムルスの言葉に首を横に振り、原初の火の切先を神祖ロムルスへと差し向ける。

「余は第五代皇帝だ！故に…故に、神祖ロムルスよ！余は余の剣たる強者たちでそなたに相對する！」

ネロが高らかに宣言すると同時に立香さんの両脇にエミヤとヴラド三世が出現し、その前を盾を構えたマシユが緊張した面持ちで立つ。

それと同時に僕の両脇にお師匠とクー・フリーンが朱槍を手に持つて構え、僕の前には優雅に扇子で口元を隠した清姫が立つ。

「ハハハハ!!許すぞ、ネロ・クラウディウス。私の愛、^{ローマ}お前の愛で見事蹂躪してみせよ」

高らかにロムルスは笑い、一步前へとでると僕達に向けて右手を翳す。

その瞬間濃密な魔力の高まりを感じ取り、立香さんは何かに気付いたかのようにマシユに櫛を飛ばす。

「マシユ！宝具開帳！急いで!!」

「了解、真名…偽装登録！いつでも行けます、先輩！」

マシユはネロの前へと出ると力強くその手に持つラウンド・シールドを突き立て、守護結界を展開する。

その領域はラウンド・シールドを基点に部屋の両端にまで届き、神祖ロムルスと僕達を分け隔てる。

「見るが良い…我が槍、すなわち——」

その守護結界を見た神祖ロムルスは不敵な笑みを浮かべると、自身の背後から真紅の樹木を創生しはじめる。

恐らくアレが神祖ロムルスの持つ宝具…僕達は何時でも離脱できる準備をして、ロムルスを迎え撃とうする。

「——^{ローマ}私が此処に在ることを！」

高らかな宣言。

その瞬間…視界は真紅で塗りつぶされた。

「すべては我が槍に通ずる!!!」

宝具名の開帳と共に爆発的に増殖する樹木が、この玉座の間に居る全員を圧倒し圧潰させ、押し流そうと迫りくる。

それは正に質量兵器：過去に芽吹いた芽がやがて育ち、苦難の現代を乗り越え栄えある未来へと成長を続けるが如く、その質量を爆発的に増やしていく。

「うあああああ!!!」

マシユは裂帛の気合と共に宝具を展開し続けるものの、その質量による圧力にやがて耐えきれなくなり、徐々にだが後方へと押し出され始める。

騎士王の聖剣による一撃を受け切った盾が、押し切られてしまうと言うのか…!?

「エミヤさん!!」

「わかつている! マシユ、もう少し耐えてくれ!!」

すかさず立香さんはエミヤに号令を送り、エミヤはマシユの後方へと立ってその手に黒弓を手を持つ。

「I am the bone of my sword.」

莫大な魔力を込めた詠唱に何時か見た螺旋剣を投影したエミヤは、その剣を矢へと変貌させて弓に番えて大きく弦を引き絞る。

並の魔力量では足りないかと判断したのか、その尋常ではない魔力量はエミヤの足元の床を砕き始め、浮き上がった瓦礫が矢を中心にして渦を巻く様にして塵と化していく。

「退け、マシユ!!」

「はい!!」

マシユが宝具展開を止めてその場から離脱すると同時に、エミヤはその狙いを未だ玉座に居るであろうロムルスへと定め、その宝具の真名解放を行う。

「貫け! 偽・螺旋剣!!!」

大きく引き絞られた弓から放たれるその一撃は、放たれた瞬間にソ

ニツクブームを発生させて僕達の身体を玉座の間の隅へと吹き飛ばす。

迫りくるロムルスの宝具へと赤熱化しながら突き進むその矢は、ロムルスの宝具と衝突した瞬間、玉座の間目いっぱい広がっていた樹木を巻き込み、振じり切る様に粉碎しながら目標であるロムルスに向かって突き進んでいく。

それでも、足りない…圧倒的質量は恐らく聖杯のバックアップを受けての物。

圧倒的魔力で放たれた宝具は、今も尚増殖を続けているのだ。

やがて勢いが衰え、その力を失い始めた時…その樹木の中で一際大きな閃光が放たれ、内側から大爆発を起こす。

フロックン・ラァンタズム
『壊れた幻想』による魔力の大爆発だ。

偽・螺旋剣に込められた神秘を解放することで起きたその爆発が原因なのか、それとも宝具の展開が終了したのか…王宮はすでにその面影を失くし、真紅の塔の如き巨樹が僕達の目の前に聳え立っていた。

「神祖ロムルスは…上か！」

巨樹の遥かな高みから、ロムルスの放つ神性の如き威圧感が僕達に押し掛かる。

その存在に気付いた瞬間に気合を入れ直したネロが、大樹から伸びる足場の様な枝葉に飛び移り素早く上へと登っていく。

「立香さん、僕が先に行くから体勢を整えたら上がって来て！」

「わ、分かった！」

「彼女を頼むぞ、東雲！」

「…では、余は雑兵を狩り出す事としよう」

僕は立香さんに失った魔力の補充を促すのと同時に、ネロに倣って足場となっている大樹の枝へとお師匠達と共に跳躍して登っていく。

僕達が昇り登り始めるのと同時に、玉座の間だった場所に黒い靄…黒化英霊を中心にしたゴーストの群が現れる。

恐らくどこかに潜んでいるレフ・ライノールの差し金だろう。

しかし、まだ彼女の英霊は健在で、外にはアサシンとバーサーカーの英霊が控えている状態だ。

レフ・ライノールが出張つて来る事が無ければ、そうそう彼女たちが追い詰められることは無いだろう。

「こっちはこっちで湧くか!」

「まるで、おるれあんの時の様です…ハッ!!」

大樹の中腹まで登つてくると、まるでロムルスとネロの戦いに横槍は入れさせないと言わんばかりに、無数のワイバーンが上空に召喚されて僕達目掛けて急襲を仕掛けてくる。

幸いにして巨樹の枝は足場に困らない程に広く、戦いやすい環境が整っている。

清姫は先手必勝と言わんばかりにその手の扇子を振るい、火炎弾を連続で放つ事で急襲を仕掛けてくるワイバーンに対する牽制を行っていく。

「数ばかり居たって俺たちの相手にやらねえんだよ!!」

清姫の弾幕に呼応するかのよう、クー・フリーンは足を止めずに広いとは言え少ない足場を縦横無尽に駆け巡り空いた左手を思い切り横に薙ぎ払って複数のルーン文字を一斉に起動していく。

「我が師スカサハ直伝のルーン魔術…ありったけを喰らっていきなあいアンサズ!!!」

神速とも言える速度で放たれるそのルーン魔術は、ダブルクラスと言う特殊スキルの発現によってキャスタークラスと同等の威力をもって放たれる。

ランサーの身体能力、キャスターの魔術行使…その2つを併せ持つクー・フリーンは生前に近い能力を有していると言えるのかもしれない。

「ますたあ…わたくしの愛しい君…どうか、先へ。ここはこの清姫と光の御子が受け持ちましょう」

「こいつら片付ける頃にや立香の嬢ちゃんも登つて来てる筈だ。すぐに手伝いに行つてやるからよ!」

清姫はいつになく真剣な表情でワイバーンを撃ち落とし、クー・フリーンは飛来するワイバーンの背に乗ってその首を切り落とし、かの牛若丸の八艘飛びの様に次々に他のワイバーンへと乗り移ってい

く。

僕はお師匠の顔を見て頷いた後、2人が作ってくれた間隙を縫って巨樹の上層を目指す。

中腹から聞こえる炸裂音が小さくなってきたころ、巨樹の枝葉を揺らすような衝撃と剣戟音が聞こえてくる。

「たあっ!!」

「ロムルス!!」

裂帛の気合と共に放たれる真紅の一撃。

それは同じく真紅の棍棒が如き巨大な槍によって阻まれ、そのまま振るわれる。

ネロの身体はロムルスの膂力に押し切られて木っ端の様に吹き飛ばされ、巨樹の幹に叩きつけられる瞬間に軽業師の様に体勢を整えて幹に着地して剣を突き立てる。

「これこそが私^{ロム}、この威容こそが愛^{ロマ}の在るべき姿!」

「否!断じて否だ、敬愛すべき神祖ロムルス!この国に例え愛があるうと、そこに暮らす人々が笑顔を浮かべることが出来なければ、その愛は偽りに過ぎぬ!!」

ネロは突き刺した剣を引き抜くと、素早く幹を蹴り飛ばして弾丸の如くロムルスに向かって剣を振りかぶる。

ロムルスは全身の筋肉を撓ませてネロの一撃を受け止めようと、大きく足を開いて槍を構える。

ネロとロムルスが衝突する直前、ネロの手にする原初の火から魔力を伴った爆炎が噴き出し、その速度を爆発的に高める。

「花散る天幕!!」

「ぬうっ!!」

突如として起きたその加速に、さしもの神祖もその速度についてこられなかったのか、すれ違い様に放たれた一撃を肩口から受け、紅の薔薇が如き血の花を咲かせる。

ネロは足場の大樹の枝を勢いを殺すために着地と同時に回転をしながら滑り、剣を突き刺す事で急停止する。

ロムルスは受けた傷を素早く治癒魔術を用いたのか肉体を修復し、

急停止したネロの隙を逃すまいとその大質量の槍を渾身の力を込めて突き放とうとする。

「スカサハアツ!!」

「ヌツ:!!」

「流石は神祖:聖杯でその霊基を強化されているとは言え、凄まじい力量だ」

僕とお師匠はネロとロムルスの戦う枝へと跳躍した瞬間、ロムルスの一撃が今のままでは間に合わない事を確認。

僕は手に持つ朱槍をバッドの様に持って構えると、お師匠がそれに呼応する形で僕の朱槍を足場とする。

全身に強化魔術を施した僕は、渾身の力を込めてフルスイングを行いお師匠をロムルスに向かって撃ち出す。

お師匠は僕の期待通りにネロとの間に割って入り、ロムルスの剛撃を涼しい顔で朱槍で受け流せば至近距離でにらみ合い、その手に持つ朱槍でロムルスの肉体を軽々と弾き飛ばす。

「貴様は:ローマ、なのか:!?」

「私は影の国を統べる者。亡霊を閉じ込め、冥界と化した我が国の門を守る者——」

——誰も私と並び立つことは、ない——

孤高にして孤独なるもの。

世界に取り残されたもの。

死に忘却されたもの。

そして:死を渴望する者。

その言葉はあまりにも冷ややかで、そして諦観が混じっている。

並び立つ者が居ないと言う事は、自身を殺せる存在が居ないと言う事。

自身が望んで止まない死を叶えるものが居ないと言う事だ。

だから——僕は——

思考を切り替え、落下していく体を繋ぎ止めるために腰のポーチから13番のルーン文字『ユル』が刻まれた魔石を握り込み砕く。

落下しているならば、その運動エネルギーを反転させれば良い。

僕が目論見通り急激に運動エネルギーの方向が切り替わり、肉体に凄まじい負荷がかかり思い切り歯を食い縛る。

そのまま凄まじい勢いで上昇した僕はロムルスと対峙している枝を大きく飛び越えて上空へと躍り出る。

その瞬間、高らかに声が響き渡る。

「いいや、今この晴れ舞台に並び立つ者は此処に居るぞ！」

晴れやかな声。

薔薇の帝都において気高く咲く大輪の薔薇の如きその輝きが、お師匠の隣に立ち胸を張る。

ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストゥス・ゲルマニクス。

薔薇の皇帝。

当代のローマ皇帝。

彼女こそがロムルスの言う愛^{ローマ}なのだ。

お師匠達の居る枝に五点着地で上手く衝撃を逃がして無事に着地すると同時に、下方から5つの影が飛び出してくる。

「おっと、皇帝陛下…俺たちを忘れて貰っちゃ困るぜ？」

「お待たせしました！」

僕の目の前に降り立つ5つの影…クー・フリーンを始めとした英霊達と立香さんだ。

僕はゆつくりと立ち上がり、お師匠の下へと歩み寄る。

「いずれ、僕が並び立ちます…必ず」

「フン…弟子の分際で良く言うな」

お師匠は軽く肩を竦め、口元に微笑を浮かべる。

緊迫した戦いの中にあつてこの余裕は、ざわつく僕の心を静めさせてくれる。

お師匠と並び立って槍を構えようとすると、少しだけ頬を煤けた清姫が僕の身体に抱き着いて頬擦りをし始める。

「ますたあ、この清姫心配で心配で…胸が張り裂けそうでした！よくぞ…無事で…！」

「清姫、ステイ！まだ戦闘中!!」

「まったくこっちは緊張感がねえなあ…立香の嬢ちゃん所をちったあ見

習った方がいいぜ?」

クー・フリーンがそんな清姫の様子を諷めながら、親指で後方に居る立香さん達を指し示す。

そこには少しばかり青い顔をした立香さんと、両手に夫婦剣である干将莫邪を持ったエミヤ、手に持つ槍を威風堂々とした王の如く持つヴラドが立ち、マシユが立香さんの背中を優しく撫でて介抱している。

「マシユ、エミヤさん、ヴラド公…此処が正念場です。私の事は構わず、全力でお願いします」

「了解した、マスター」

「良からう、この異変を企てし者共に呪わしき我が名を吠え立てようぞ」

「せ、先輩は必ず、このマシユ・キリエライトが!」

ネロは更に一步前に出て、ロムルスに対して真正面から鋭く睨み付ければ原初の火の切先を突き付ける。

「よもや言葉を違えはしますまいな、神祖ロムルス!余は言った!強者達と共に貴方を討つと!!」

「フッフ…フハハ…フハハハハ!!」

「何がおかしい!?!」

ロムルスは、まるで我が子の成長を間近で見届ける事が出来た喜びを感じている様に高らかに笑う。

その姿をこそ見たかったのだと。

まるで美しい物を見たと言わんばかりに、心底愛おしそうに笑う。

「そうだ、それこそが愛!それが愛!それが世界!!愛し子ネロよ、お前は存分に人々を愛せ!その内なる獣ですら、世界は愛するであろう!!」

「余はいつでも愛している!ローマと言う国を!その国に住まう人々を!!行くぞ建国の神祖ロムルス!我が才を見よ!!!」

ネロが原初の火を高らかに掲げ、そのまま足場へと突き刺すと凄まじい魔力反応が巻き起こり、大気に紫電が迸る。

それと同時にこの巨樹全てを包み込むかのように魔法陣がネロの足元から広がっていき、何処からともなく薔薇の花びらの吹雪が起こ

る。

「万雷の喝采を聞け！しかして称えるが良い——」

——黄金の劇場を!!!

視界の確保が困難になるほどの花吹雪が巻き起こりネロの足元に広がった魔法陣を中心に金色の装丁が施された巨大な舞台が築き上げられる。

荘厳にして流麗、ありとあらゆる贅を尽くして築き上げられたその場所は、まさに黄金劇場！

「これこそが我が才、我が愛の結晶！『招き賜う黄金劇場』!!」

アエストゥス・ドムス・アウレア

「固有…境界…!?!」

「いや、彼女の物は私の物と違い、似て非なる物だ。彼女は世界を書き換えるのではなく、世界の上に建設している！」

立香さんの驚きの声に対し、エミヤは驚いてはいるものの冷静にこの場の解析を行う。

…そもそも、彼女は魔術師でも無ければ、英霊でもないただの人間の筈だ。

そのネロがどうして、英霊である存在と渡り合う事ができたのだろうか…?」

「これよりは余達の独壇場…薔薇の如く散れ、神祖ロムルス!!」

「良いぞ愛し子ネロ！ならば、私も全力で答えよう!!!」

ロムルスは満足気に頷くと同時にその棍棒の如き真紅の槍を構え、待ち構える。

先手を打って出たのは、意外なことに清姫だ。

「それでは、先にご照覧あれ！『転身火生三昧』!!」

良いところを見せようと言う魂胆なのか、それとも単純に高火力で一気に押し切ってしまうおうと言う魂胆なのかは分からないけども、清姫は最速で炎纏う龍の姿へと身を変じさせ、その口から灼熱の炎をロムルスに向かって吐き出す。

その炎は離れていても皮膚が火傷してしまうのではないかと錯覚するほどの熱量で、まともに受けてしまえば大けがでは済まされない筈だ。

『すべては我が愛に通ずる』！』

ロムルスの新たな宝具の開帳：その瞬間清姫とロムルスとを別つ様に城壁が瞬時にせり上がり、灼熱の炎を遮断してしまう。

幻想種のもつドラゴンブレスを弾くほどの強度を見せるその宝具は、所謂結界宝具と呼ばれるものに違いない。

清姫はその城壁を打ち崩そうと至近距離でドラゴンブレスを叩き込もうとするも、城壁を足場に飛び降りてきたロムルスが隙を突いたと言わんばかりに槍を叩き込もうとする。

「させるか！赤原を往け、緋の獵犬!!」

「ぬうっ!!」

清姫に痛恨の一撃が届こうとするその直前、エミヤは『赤原獵犬』フルンディングを最速で投影して弓に番えてロムルスに向かって放つ。

その一矢は朱の軌道を描いてロムルスへと真つ直ぐに駆け抜け、そしてロムルスの持つ真紅の槍で打ち払われる。

その衝撃はすさまじく、空中で踏ん張る事の出来なかつたロムルスは衝撃で自身の結界宝具に叩きつけられて一度バウンドする。

「生贄の時間である、血の晩餐である。建国の祖よ、闇に沈むが良い！」

すんでのところで助けられた清姫は時間切れとなって人の身に戻ってしまい、咄嗟の追撃が出来なくなる。

その追撃の役目は影から影へと通じて密かに移動してきたヴラド公が担う。

ヴラド公はロムルスの真下に現れたかと思うと、自身を無数の蝙蝠へと変じさせて一斉にロムルスの肉体目掛けて襲い掛かる。

その一撃はひ弱でも数が数：振り払う事は最早困難であり、その包囲網はまるでロムルスを束縛しているようにすら思える。

其処へ弾かれた赤原獵犬がミサイルの如き勢いで、ロムルス目掛けて襲い掛かる！

咄嗟にその一撃に気付く事のできたロムルスは左腕を赤原獵犬へと差し向け、左腕を犠牲にすることでその一撃を受け止める事に成功する。

「ローマ！ロムス！！セプテム!!!」

「ぐうっ!!」

赤原猟犬がヒットしたと同時に実体に戻ったヴラド公をロムルスが目視すると、右腕だけとは言えその真紅の槍を高速で連続で振り払いヴラド公を圧倒し続ける。

その勢いは暴威の嵐。

受け続ければ、いずれ此方が力尽きてしまうのではないかと言わんばかりの轟音が、この黄金劇場に響き渡る。

しかし、それを止める2色の影がロムルスへと襲い掛かる。

ケルトが誇る最強の戦士、スカサハとクー・フリーンだ。

「そうら、皇帝陛下！トドメはあんただぜ!!」

「フツ、私とて多少は空気を読むものだ!!」

黒と蒼の閃光は朱の軌跡を伴ってロムルスで交錯し、両脇腹をその手に持つ朱槍で深く刺し貫き、タイミングを合わせて上空へと放り投げられる。

「神祖、覚悟!!」ラウス・セント・クラウディウス『童女謳う華の帝政』!!!」

「ヌウウウツ!!!」

ロムルスに向かつて原初の火の切先を向けたネロは、ロムルスに向かつて華麗な跳躍を魅せる。

その姿は正に劇場の主役に相応しき姿。

大きく振りかぶって放たれる十文字切りは情熱の炎を伴ってロムルスを彩り、万雷の喝采の下に黄金劇場は閃光に包まれた。

「よくぞ…よくぞ私の愛を乗り越えた…ローマ帝国第五代皇帝、ネロ・クラウディウス・カエサル・アウグストウス・ゲルマニクス…薔薇の皇帝よ」

「し、神祖ロムルス…余は…」

「我が愛し子よ…苦難があろうとも忘れる事は無い…いつでも私が…私の愛が見守っていると」

閃光が収まると、元の巨樹の枝の上に戻っていた。

神祖ロムルスは心底安心したように…期待していた通りに難事を乗り越えたと言わんばかりに穏やかな笑みを浮かべている。

…思えば、この国を造り上げた者が…親とも言える存在が子の死を望むとは思えない。

そうであるならば…彼は…。

ロムルスは我が子を慈しむ様にネロの頬を優しく撫でると、僕達へとその視線を向ける。

「遠い未来から来たカルデア^{ローマ}の子らよ。まだ、これで終わりではない。どうか最期まで愛し子ネロを…ぐうつ…！」

「神祖！神祖ロムルス！！」

「ネロさん！危ないです！！」

ロムルスは痛みに呻くと後ずさり、背中から地上へと落下していく。

そのロムルスの手を掴もうとネロは身を乗り出して手を伸ばすも、その手はロムルスを掴むことなく立香さんとマシユがネロの身体を抑える事で阻止されてしまう。

いつの間にか西の空は夕焼けに暮れなずみ、空は天幕が落ちるかのように夜の帳が落ち始める。

——— 本当に ———

——— 本当に、貴様らは腹立たしいな、人間！！！！ ———

戦いは、まだ終わらない。

憤怒、殺気、憐憫…負の感情を孕んだその声は僕と立香さん、マシユに対して向けられる。

その魔術師は特異点X^Fの時と同様に緑を基調とした衣服に身に纏い、此方を見下す様に高みから此方を見下ろしてくる。

『レフ…』

絞り出すような悲しみの音色を伴った声色で、カルデアの所長であるオルガマリー・アニムスフィアは緑衣の魔術師レフ・ライノールの名を呼ぶ。

心の底から信頼していた友人だった男は、僅かばかり目を見開いて口元に凶悪な笑みを浮かべる。

最早、人としての形を残さず、消えてしまっていたかと思っていたからだろう。

「これはこれは、オルガマリー・アニムスフィア！どうやって生き延びた？人の肉体を持たずして魂だけの身で!!」

レフは大仰に両腕を広げ、まるで舞台演劇の様にわざとらしい振舞いを見せる。

まるで、無駄な足掻きを嘲笑うかのように…。

その自信は、恐らくその手に持つ黄金の杯…聖杯を持っているからなのだろう。

『何故、私たちを裏切ったと言うの!?何が貴方をそうさせたと言うの、レフ!!』

「裏切った…?ハハ、ハハハハ！裏切ったも何も、《元々こうなる運命だった》と言うだけの事だ、口やかましいゴミ屑め！」

所長の叫びは空しくこの巨樹の上に響き渡り、レフはその言葉を唾棄すべきものだとして捨て捨てる。

恐らく、それがこのレフ・ライノールと言う人物の本性とも言える素の姿なのだろう。

レフの言葉に所長は言葉に詰まり、静かな嗚咽を漏らす。

『すっかり悪役が板についてきたじゃないか、レフ教授?と言うより

も、それが素なのかな？・カルデアに居た頃より活き活きとしているよ、君』

所長に変わってDr. ロマンが通信に出れば、皮肉の様に話しかける。

ロマンとレフは、僕がカルデアに来た頃から親し気にしていたのをよく見かけていた。

印象としては真逆の様な気がしていたけど、友情とはそもそもそう言った性質を無視して成り立つことがあるもの。

だからこそ、なのだろうか…きつとロマンはレフの在り方に微かな引っかけりを覚えていたのかもしれない。

「聖杯を渡して、レフ・ライノール！」

「ほう。いっぱいしの口を聞くようになったな、少女。聞けばフランスではその男と組んで大活躍だったとか。まったく——おかげで私は大目玉さー！」

立香さんは一歩前へ出て、レフに対して最終通告だと言わんばかりに口を開く。

それに対してレフは余裕をもった笑みを浮かべた後に、ふつつつと湧き上がる激情を抑える様に絞り出すような低い声で此方を睨み付けてくる。

フランスでは彼の姿は無かった。

実際にフランスをかき乱していたのは、聖杯を与えられたジル・ド・レエだった。

恐らく、レフの仕事は負の感情を持つ者、身に余る欲深い存在に対して聖杯を与えて暴走させるのが仕事なのだろう。

得てしてそういった欲望は、歴史を変えうる大きな力となる…聖杯ならば、それを無理なく余すことなく叶えてしまう。

事実として、ジル・ド・レエの願望…人としての復讐心をもった聖女ジャンヌ・ダルクをでっち上げると言う無茶をやったのけているのだから。

「本来ならとつくに神殿に帰還していると言うのに、子供の使いさえできないのかと追いつ返された！結果、こんな神秘の薄い時代で後始末

だ。聖杯を与えて狂っていくその顛末を見物する愉しみも台無しだよ」

『フランスに姿を現さなかったのは、手ずから狂わせる必要がなかったから。でも、今回は…』

「はい、私たちが見た限り神祖ロムルスは人類の滅びを望んではいなかった。だから、レフ教授は干渉するためにこの場に留まる必要があった…：そう言う事ですね？」

ロマンの言葉に続けるように、マシユは表情を曇らせながらカルデアに居た時とは比べ物にならない程に暗い感情を露にしているレフを見つめる。

ロマンと同様にマシユもレフとは長い付き合いだったようだ。

レフが訓練後のマシユを気遣っているようにしているのを、僕も幾度か見かけている。

『皮肉だなレフ教授。この時代、君の様な人類の裏切者は1人も居なかったって訳だ』

「ほざけカス共。人間になんぞ初めから期待していない。君たちもだよ、藤丸 立香、東雲 良太」

明確な殺意を受けて立香さんは少しだけ体を竦ませて、僕はそれを涼しい顔で受け流してゆつくりと前へと歩いていく。

ああ…吐き気がする…。

「凡百の英霊をかき集めた程度で、このレフ・ライノールを阻めるとでも？」

「馬鹿にしないで！あの時の私たちとは違う！」

「ああ…確かに変わったな。特に魔術師でもない君は立派に成長をしたとも」

レフは心無い賛辞と共に乾いた音のする拍手を立香さんへと送り、ゆつくりと頷く。

続く言葉は、やはり見下したものでしかなかったけれども。

「無駄に足掻けば無駄に苦しむと分からない。その愚かさが実に無様に成長したとも！」

レフは大仰に両腕を広げ、僕達の成そうとしていることは無意味な

のだと言わんばかりに狂ったような笑い声をあげる。

聞きたいことは聞いた。

これ以上喋るとも思わない。

で、あるならば…。

「人間のなりそこないめ！貴様は成長せんな！ああ、本当に忌々しい…!!」

「黙ろう、な？お前はやっぱり死んでなくちやさあつ!!!」

僕は足に限界寸前まで強化を施し、その一瞬だけでもクー・フリーンに近い速度での踏み込みからの朱槍の一撃を叩き込もうとするも、それは目の前に差し出された聖杯による障壁によって防がれてしまう。

だけど、僕の朱槍は呪いの朱槍。

相手に突き立つと言う因果逆転を保持する対人宝具。

『穿ち散らす死華の槍』!!」

「無駄と言っているだろう！」

僕の朱槍は真名解放と共に穂先が捻じれて華の蕾の様になり、咲き誇る様に開くと無数に増えた槍の穂先の全てがレフの心臓目掛けて瞬く間に襲い掛かる。

必ず殺す…そういう覚悟をもって放たれた必殺の一撃は、尚も聖杯によって防がれて僕諸共に弾き返す。

反発する一撃により凄まじい速度で弾き出されてしまった僕は、すんでの所で跳躍したクー・フリーンが受け止めてくれたおかげで、巨樹の枝から放り出されると言う最悪の事態から逃れることが出来た。

「馬鹿野郎！テメエが先走ってどうすんだ！」

「あ、あはは…体が勝手に動いてしまって…」

抱きとめた瞬間に咎める様に怒鳴られた僕は、ハツとなって我に返り気まずくて頬を搔いて誤魔化す。

お師匠にあれだけ扱かれたって言うのに、どうにも癖は抜け切らないようだ。

…あんな奴を放っておけるほど僕は器が大きい訳では無いけど。

「本当に腹立たしい男だな…東雲 良太…!!」

「腹立たしいのは余のほうだ、魔術師！よくも栄えあるローマ帝国の皇帝達を…神祖ロムルスを傀儡としてくれたな！その罪、万死に値するぞ!!」

ネロの激情を顕すかのように原初の火は赤く燃え盛り、今にも全てを飲み込んでしまいそうだ。

ネロにとって敬愛すべきかつてのローマ皇帝達…その祖である神祖までもを道具の様に扱えば、彼女の心情を推し量ることもできるだろう。

しかし、レフはその激情を見ても何の感想を持つことも無く鼻で笑う。

「所詮英霊は英霊…マスターに扱われる道具に過ぎん！それが人間を続べた者であろうと無かろうと崩せぬ絶対の理！ああ…ロムルスと相対したお前のあの表情は中々心地よいものではあったな」

「貴様あつ!!」

「ハハハ、そして貴様たちカルデアはとんだ思い違いをしている！」

あくまでも自分がこの場にいる誰よりも上位に立つ者なのだ…と言わんばかりにネロの激情に歯牙にもかけず、真っ直ぐに僕達を睨み付ける。

よもや話は此処まで…あとは貴様らを排除するのみと言わんばかりに。

「聖杯を回収し、特異点を修復し、人類を…人理を守るう？馬鹿め、貴様たちでは既にどうにもならない。結末は確定し、抵抗した所で何の意味も成さない！貴様たちは無意味、無能！」

レフは堪えきれない笑いを零しながら、その手に持つ聖杯を高く掲げる。

勝利の美酒はこの杯に注がれているのだと言わんばかりに。

…ならば、その酒はレフの血をもつて穢すでしょう。

散々こちらを嘲り、嗤い、愚弄してきたのだ…報いの刃こそがレフに相応しく思える。

「哀れにも消え逝く貴様たちに！今!!私が!!!我らが王の寵愛を見せてやろう!!!」

「…!!」

聖杯が眩いばかりの輝きを放ち僕達の視界を奪った瞬間、巨樹が碎ける音が響き渡り何かが這いずる音が響く。

それは、天を衝く柱の様に巨樹を飲み込みながら拡大していき、醜悪な外見を有している。

体色は黒く染まり、稲妻の様に走る赤い裂け目には無数の目がびつしりと並べられ、そのいずれもが此方を睨み付けて背筋に悪寒が奔る。

それは事実、僕が見てきたあらゆる怪物よりも醜悪な見た目をした悍ましい何か、だ。

恐らくマシユのラウンド・シールドに隠れていたのであろうフオウも、異様な気配に飛び出して、威嚇するように可愛らしい咆哮をあげる。

「なんだあの怪物は！醜い！この世のどんな怪物よりも醜いぞ！」

『ハハ！ハハハハ！ソレハその通り！ソノ醜さこそが貴様ヲを滅ぼスのだ！』

まるで複数の同じ声をもつ人々が一齐に走り出したかのような不協和音。

そんな音声が辺りに響き渡り、巨樹に根を下ろそうと言うのか今も尚侵食するかの如く巨樹を砕き、そして支えている。

『この反応…この魔力！英霊でも幻想種でもない！伝説上の…本物の悪魔だともいうのか!?!』

ロマンの声の裏で、矢継ぎ早に支持を送る声が彼方此方から響いてくるのが聞こえてくる。

恐らく目の前の怪物の存在が、レイシフト中の僕達の存在をかき乱している為なのだろう。

僕達は、あくまでもこの時代にとっては存在する筈のない未来の存在だ。

だからこそ、存在立証が崩されることはこの世界からの存在の抹消…ひいては死に繋がる。

此処こそが…カルデアの総力を賭けた正念場だろう。

「改めテ。自己紹介シヨウ。私は、レフ・ライノール・フラウロス！七十二柱の魔神が一柱！魔神フラウロス…コレが、王の寵愛そのもの！！」

「天に突き立つ、巨大な、肉の柱…？それに、ここまでの魔力は…所長、ドクター…！！」

『フラウロス…それがレフ…？それなら…本当に彼は…』

所長は狼狽えながらも声を絞り出し、大きくため息を吐く。

もう、所長も夢を見ている場合では無い…彼女の慕う男は、最初から此方を貶める為に近付いてきたのだと。

悪意を隠して善意の仮面を被っていた、本物の悪魔なのだったと。

『マリー、感傷は後にするんだ！僕は情報収集に全力を尽くす！だから君も…』

『わ、わかつています！藤丸 立香、東雲 良太、この特異点最後のオーダーです！目の前の魔神フラウロスをおこの場で完全に撃滅しなさい！！』

「了解！！」

所長は震える声で、しかし誰よりも通る声で僕達に指令を下し、そして僕達はその指令を受け取った。

それと同時にフラウロスの肉体から、無数の触手が槍の穂先の様うねりながら伸びてその切先を僕達マスターに向けて一斉に向ける。端から英霊を無視して僕達マスターを狙う…つまり、あらゆる無駄を省いてここですべてを終わらせようと言う魂胆なのだろう。

しかし…フラウロスが此処に来て、文字通り彼女の逆鱗に触れてしまった。

「ああ…こんなにも嘘を吐いて…その果てにこのような醜悪な姿を晒してしまふなんて…！！」

「き、清姫さん…？」

ふらふらと前に出たのは、見目麗しい少女である清姫。

その様子に立香さんは少しばかり怖い雰囲気を感じたのか一歩後ずさる。

レフ相手に退かなかったのに、清姫には未恐ろしものを感じてし

まっているのか…？

『目障りだ』

「ああ、どうして嘘を…この清姫に嘘を…ああ…やはり嘘はこの世に
いらぬ全てなのですね…！」

フラウロスの肉柱にびっしりと並んでいる眼…その1つ1つが一
斉に清姫へと向けられ、妖しい輝きを放つ。

その輝きは純粋な魔力の爆発…立香さんとネロ達はマシユの盾に
よる防御で難を逃れ、僕とクー・フリーン、お師匠はその場から跳躍
することで爆発の衝撃から逃れる。

それと時を同じくして僕の体内から魔力が目減りしていくのが分
かる…これは、少し不味い。

清姫は何よりも嘘を嫌うと言う話を聞いた…恐らくそれは安珍が
嘘を吐いて清姫から逃げ出したことに起因しているのだろう。

本人は嘘を吐かれたとき、自分でも何をしでかすのか分からないと
言っていた。

その言葉が意味するところはバーサーカー特有の狂乱状態。

対象を破壊するまで止まらない暴走状態だ。

「ああ、どうかご照覧あれ…これより目の前の大嘘吐きを退治しま
す！『転身火生三昧』!!」

狂乱したバーサーカー…その怒りは正に天を衝き、空気がビリビリ
と震える程の雷鳴が如き咆哮をあげて爆炎の中より巨大な燃え盛る
龍が空を駆け巡る。

その長大な蛇の如き肉体でフラウロスの肉体に巻き付き、鋼鉄すら
粉碎するであろう膂力で締め上げながら至近距離でドラゴンブレス
を浴びせていく。

「立香さん！一気呵成に攻め立てて！」

「マシユ、皆！一気に決めるよ!!」

「はい、マスター！」

「その眼、余に向けるのは不敬であろう…ならば、その眼必要あるまい
！『血濡れ王鬼』!!」

立香さんに大声で追撃を頼むと、ヴラド公は手加減無用とばかりに

宝具を開帳し、全身から無数の杭を射出してフラウロスの瞳を次々に貫いていく。

しかし、その距離はあくまでも立香さんの周囲に存在する瞳に絞られていて、フラウロス全体の瞳を潰すにはあまりにも足りない。

トレース・オン
「投影開始…!!」

エミヤはその手に夫婦剣干将莫邪を作り出し、高く跳躍すれば限界まで夫婦剣を強化し、まるで白と黒の翼の様に変じた巨大な曲刀へと作り替える。

それと同時にエミヤの周囲に同様の大きさの干将莫邪を二対、投影によって作り上げると同時にミサイルの様に一斉に射出する。

しんぎ、むけつにしてばんじやく
「鶴翼、欠落ヲ不ラズ」

飛翔する干将莫邪は、フラウロスの本体をすれ違い様に斬り裂き、そしてまるでブーメランの様にフラウロスの周囲を飛び回り次々に伸びる触手を斬り裂いていく。

ちかから
「心技 泰山ニ至リ」

エミヤは飛翔する干将莫邪にフラウロスの気が逸れた瞬間に、本体の肉体にその手に持つ干将莫邪を深々と突き刺し落下。

その傷を次々に広げていく。

つるぎ
「心技 黄河ヲ渡ル」

フラウロスの周囲を飛び回っていた干将莫邪は、突如として正確にフラウロスの傷口へとその切先を向けて一斉に突撃。

フラウロスの肉体の内部にまで、深々と抉り込む。

せいめい
「唯名 別天ニ納メ」

フラウロスも清姫に焼かれ、ヴラドに串刺しにされ、エミヤに切り刻まれても堪えないのか、エミヤの足元に魔力を集中させて大爆発を起す。

われらともにてんをいだかず
「両雄、共二命ヲ別ツ」

その爆炎と煙で視界を塞がれるも二振りがフラウロス目掛けて投擲され、それぞれがフラウロスの巨大な瞳へと突き刺さり、体内に潜り込んだ干将莫邪と共に大爆発…壊れた幻想を引き起こす。

内側から爆発する痛みは、さしもの巨体にも応えたのか、巨樹に根

の様に張り巡らされた触手がのた打ち回る。

エミヤは爆炎の中から花卉の様な魔力の塊を身に纏って現れて、無傷でどうにかやりすごした事が確認できる。

「やれやれ…影の国の王城の支柱としてはそう悪くはない、が…」

「ああ？歳食って趣味がねじ曲がったんじゃねえか？」

「ハツハツ、まさかな。こんなねじくれた物はいらぬよ。精々がサンドバッグが関の山と言ったところだろうよ」

「お2人とも…良いですね？」

マシユが守り、ヴラド公が穿ち、エミヤが斬り裂き、清姫が焼き尽くす。

自身が良い様に蹂躪され、それでも尚健在の魔神フラウロスは聖杯の魔力を用いていると言う事もあるのだろうけど、その傷を全力で癒し、修復しながら此方へと苛烈なまでに攻撃を仕掛けてくる。

長期戦は圧倒的に不利…ならば、ケルト最高の師弟による全力を受けてもらうとしよう。

「令呪^{セツ}をもって告げる。スカサハよ、令呪の魔力を以て宝具を解放し、魔神フラウロスを撃滅しろ」

「良いだろう、見せてやるぞ」

手の甲に焼けるような痛みが走ると同時に令呪が一画消費され、お師匠の魔力として還元されていく。

僕は正常に起動したのを確認して更に令呪をもう一画消費する。

「^{セツ}続けて命^トじる。クー・フリーンよ、令呪の魔力を以て宝具を解放し、魔神フラウロスを撃滅しろ」

「おう、アルスターの流儀ってやつを見せてやるよ…！」

再び手の甲から感じる焼けるような痛み…令呪は無事に起動し、お師匠とクー・フリーンの肉体の隅々にまで行き渡った様だ。

お師匠は指先を宙に舞う様に走らせ、神代のルーン…原初のルーン文字を起動させる。

「では、我らの必滅の槍、受けてもらおうか」

『無駄な動きヲするな!!!』

こちらが何をしようとしているのかを悟ったフラウロスは、自身の

肉体をも巻き込むほどの大爆発を起こさせ、清姫の拘束を無理矢理外す。

長時間炎を纏ってフラウロスを焼き尽くそうとしていた清姫も限界だったようで、その爆発の衝撃で変身が解けてしまい、頭からフラウロスの根元に向かって落下していくのが見える。

大爆発の瞬間、僕はお師匠達と同時に駆け出す。

クー・フリーンは光の御子の名に相応しき速度で一気にフラウロスの肉体を駆け上がり、その身体を蹴ってフラウロスよりも高い位置へと跳躍する。

お師匠は同時に駆け始めた僕の首根っこを掴まえて落下する清姫へと投げ飛ばすのと同時にさらに加速、クー・フリーンと挟み込むような形でフラウロスの背面へと移動する。

「っ…!!清姫…!!」

お師匠に投げ飛ばされ、無事に清姫を空中で抱きかかえる事に成功した僕は、フラウロスの肉体を蹴って跳躍することで迅速にその場から離れ、巻き込まれないように必死に逃げる。

清姫の暴走、自身の身体強化、そして令呪を使っただけで更に吸い取られていく魔力の所為で、僕自身ほぼ気合で立っているような状態だ。

今巻き込まれたら流石に死んでしまうのは想像に難くない。

「全呪解放、加減は無しだ…喰らいな! 『突き穿つ死翔の槍』!!!」

クー・フリーンは自身の前方にお師匠がつかうルーン魔術と同様の物を展開。

一斉にルーン文字を起動させることで、バレルの役割を与えてフラウロスに対して朱槍を全力投擲する。

バレルを通った朱槍は一瞬だけその動きを止めるものの、瞬きする間も無く急加速。

赤黒い雷を放ちながら真っ直ぐにフラウロス目掛けて突き進んでいく。

その様は正に雷光が如くと言い切れる。

「所詮は小姓。武芸の一端目に焼き付けて逝け! 『貫き穿つ死翔の槍』」

!!!

お師匠の真名解放…その全力投擲は正に轟く雷鳴の如く鳴り響き、大気を振るわせていく。

投擲直後に天と地からフラウロスの肉体内を互いのゲイボルクが真っ直ぐに貫いていき、フラウロスの肉体の中心で衝突。

圧倒的魔力量をもった物質が衝突した時、フラウロスの肉体が内側からまるで水風船の様に膨らみ、辺りを白い閃光が覆いつくした。

「不明の敵性生物、撃破です！」

「やった！」

「油断は禁物だよ！」

肉体の内側からの爆発。

その一撃は柱の様な肉体を容易く分断し、そして崩壊させた。

クー・フリーンはお師匠であるスカサハより賜ったルーン文字、その全呪解放で強化した朱槍を投擲し、そしてお師匠は数々の神殺しを行ってきた武芸者。

その一撃は正に神さえ屠る一撃だったのだろう。

おかげで僕も魔力はすっからかんなのだけれど…一先ずは勝利と言えるだろう。

目の前の虫の息のレフから目を逸らすのならば、だけど。

「…馬鹿な…たかが英霊如きに…我らの御柱が退けられると言うのか？…いや、計算違いだ。そうだ。そうだろうとも…」

「現実を直視できんモノ程見るに堪えん物は無いな？」

「チツ、仕損じたかよ」

レフはうわ言の様に呟きながら、ギョロリと僕の方を睨み付けてくる。

貴様さえいなければ…と言わんばかりのその瞳は、生々しい人の憎悪に等しい。

僕の方こそ、貴様さえいなければこんな事にはならなかったのに、と言う思いのだけれど。

お師匠は呆れたように溜息を吐き、クー・フリーンは苛立たし気に舌打ちをする。

後への禍根を断つためにも、此処で始末することが得策と言えるだろう。

僕は、2人にトドメをお願いしようとして…思いとどまる。

レフの肉体を中心として、冬木の地で所長が描いてくれた魔法陣に酷似したものが拡大していくのが見えたからだ。

「神殿から離れて久しいこの身は、壊死が始まっていたのだから、貴様ら人間が万が一にも勝ると言う事はあるだろう…だが…」

レフは、ふらふらとした足取りで後退すると、その手に持つ聖杯を天高く掲げる。

その瞬間聖杯が光り輝き、大気中のマナの濃度が極端に上がっていくのを感じ取る。

それは神代に匹敵するかもしれない程の魔力量とも言えるかもしれない。

『東雲、藤丸！早く彼にトドメを！英霊を召喚しようとしているわ!!』
「もう遅い！これより起こるのは途方もない破壊！喜ぶが良い、ネロ・クラウディウス！これこそ、真にローマの終焉に相応しい存在だ！」
「ローマは世界だ。そして、決して世界は終焉などせぬ！」

レフの言葉に、ネロは憤りを隠すことも無く原初の火の切先をレフへと突き付ける。

それはロムルスとの誓いを胸に、繁栄のために突き進むと覚悟したからこそ…ネロは強くあり続ける。

「誇りも、方向を誤れば愚直の極みでしかないか…ならばこそ見るが良い、貴様たちの世界の終焉を！さあ、人類せかいの底を抜いてやろう！7つの定礎、その1つを完全に破壊してやろう！我が王の、尊き御言葉のままに！」

聖杯からあふれ出す魔力が弾けると同時に、レフの前に1人の女性が降り立つ。

…その姿は、魔神が呼び出したとは思えないほどに白く、神々しい。呼び出された女性はゆっくりと顔を上げ、どこかボンヤリとした表

情で此方を見つめている。

まるで…今この場に居る事に実感が持てていないかのよう。

「ハハ…これこそが貴様たちローマに終焉を齎すもの！大英雄アツティラ！貴様たちが神の鞭と呼ぶ存在だ!!ハハハ！終わつたぞロマニ・アーキマン、オルガマリィ・アニムスファイア!!人理継続など夢のまた夢!!アツティラは英霊ではあるが、その力は——」

レフが自慢げに鼻息荒く矢継ぎ早に話すも、その言葉は唐突に途切れることになる。

3色の一閃によつて——

「黙れ——」

その場に合った巨樹の枝をアツティラが拾つた瞬間に、機械的な3色の結晶を張り合わせたかの様な長剣へと変貌し、レフを一閃。

その肉体を真つ二つに切つて捨てる。

『ちよつと、レフの反応が消えているわ!』

「か、彼は…彼は召喚した英霊に両断されました！真名はアツティラ、恐らくはセイバーです!!」

生命として絶命したレフの肉体は召喚したアツティラによつて打ち捨てられ、聖杯が彼女の手に渡る。

その瞬間その聖杯は彼女の霊基と一体となる様に吸収され、魔力放出量がけた違いに跳ね上がる。

「何か嫌な感じがするぞ…！マシュ、何かが来る！余にも分かるぞ!!」
『魔力反応の増大を確認！対城クラスの宝具が来る!!急いでその巨樹から飛び降りるんだ!!』

ネロはアツティラが構えた剣がドリルの様に回転し始めたのを見て、顔を引き攣らせる。

彼女の剣を中心に魔力を含んだ大気が渦を巻いて旋回し始め、その様相はさながらドリルそのものに見えてしまう。

「私は…アルテラ…フンヌの戦士である。そして、大王である。この西方世界を滅ぼす、破壊の大王——」

「全員退避して…この巨樹から飛び降りるんだ!!」

「着地は私に任せよ!」

更なる魔力の増大は宝具を放っていないにも関わらず、巨樹の幹を破壊し始める。

その威力は今までの戦いで原型を遺していた巨樹の頑丈さを以てしても耐える事は出来ず、まるでこの世界の崩壊を暗示する様に徐々に崩れ去っていく。

「お前たちは言う——」

——私は、神の懲罰なのだ。

——神の鞭、なのだ——

——ああ、何故です？

——私はただ…貴方様をお慕いしていただけだと言うのに

——どうして、貴方様はわたくしに嘘をお吐きになられたのですか？

——ああ、お待ちください、お待ちください…

——行かれてしまうなら…せめて私に一言だけでも

少女は走る。

家の出も、自身の身なりも、素足に負った怪我さえも無視をして。

ただただ一目見た瞬間に惚れ込んだ男の後を追う。

たった一つの一途な感情は、やがてその裏側に潜む感情に塗り替えられる。

そうして行き着く先は悲劇の終わり。

たった一つの一途な感情は、黒く暗く染められましたとき。

ごうごうと燃え盛る鐘の悪夢から目が覚め、僕は身体を跳ね起こして辺りを見渡す。

どうやらここは連合帝国の王宮…その跡地の様だ。

気怠い体をどうにか立ち上がらせようとすると、背後から僕の身体を抑え込む様にか細い腕が僕の身体に抱き着いてくる。

「ああ！旦那様！^{ますたあ}お目覚めになられたのですね!!」

「清姫…無事だったか…他の皆は…？」

僕は夜の帳が落ちた瓦礫だらけの王宮跡地を見渡し、立香さんとマシユの姿を探す。

夜で暗い…と言っても僕達の近くに焚火があったので、闇に紛れて見えないと言う事は無く、残された王宮の壁に背中を預けて、毛布にくるまって2人とも眠りこけているのを発見することができた。

「起きたか、東雲 良太」

「エミヤ…あれから何が…？」

焚火の番をしていたエミヤが此方に振り返り、スープパンで温めていたコーンポタージュをマグカップに注いで此方へと差し出している。

僕はそのマグカップを受け取って、息を吹きかけて少し冷ませばゆっくりと飲んで身体を温めていく。

夜ともなれば身体はどうしたって冷えてしまう…こういった温かい飲み物は優しく身体に染み渡っていく。

僕が一息つくのと同時に、エミヤは僕の方へと向き直り真っ直ぐに此方を見つめてくる。

「英霊アツティラ…いや、本人はアルテラと名乗っていたか。彼女はロムルスの作り出した巨樹を宝具で粉碎してこの地に降り立った時、偶然この場に居合わせたスパルタクス、呂布、荊軻と遭遇。これを容易く撃破して徒歩で単身ローマへと歩き出したそうだ。今現在、軍に進路を阻まないように皇帝ネロが伝令を各地に送っている最中だ」

「なら、早く追って仕留めないと…」

「ますたあ、此処は身体を休めてください…連戦に次ぐ連戦で魔力も心許無いのですよ?…」

僕は清姫の腕をやんわりと押しつけて立ち上がるものの、立ち眩みで身体をふらつかせて倒れそうになり、しかし清姫とは別の人物に抱き留められる。

「血気盛んは多いに結構だがな、休息もまた戦士の戦いだ。戦場に出ていざ倒られては私たちが困ると言う事を忘れるでない」

「お師匠…」

「スカサハさんの仰る通りです。幸いあの白い女性は人と変わらない速度で移動していますので、休息を取った後であれば容易く追いつける筈です」

アルテラ…白衣に身を包んだ褐色の少女は、自らを神の鞭と言っていた。

この事が何を意味するものなのかは分からない。

ただそんな渾名が付けられると言う事は、人々に畏怖され崇拜され

た対象だと言う事。

しかも彼女は聖杯を取り込んで、自らの霊基にブーストがかかっている。

その実力は最初の特異点で出会った黒い騎士王に匹敵する…いや、それ以上の可能性も…。

「光の御子には周囲の警戒に出てもらっている。すぐに戻って来るだろう」

「気絶するなんて情けない…」

エミヤがクー・フリーンの所在を口にする。僕は深く溜息を吐いてがっくりと肩を落とし、焚火の元まで行つてゆっくりと腰を下ろす。

昼間の騒々しさは鳴りを潜め、連合帝国の首都は静寂に包まれている。

王宮の崩壊、僭称皇帝の崩御、アルテラの登場…これらの事件が首都に住まう人々の心根をへし折つたのだろう。

連合帝国との戦争は終結した…後は…。

『英霊アルテラ…アツティラとして名を残している存在ね。彼女は5世紀に西アジアからロシア、東欧、ガリアにまで及ぶ広大な版図を制した大英雄。西ローマ帝国が滅んだ原因とも言われ、西欧諸国からは『神の鞭』と呼ばれ恐れられたの。5世紀以降の特異点でなくて助かったわ…もしそうだったとしたら圧倒的な知名度補正でより手が付けられなくなったでしょうから』

『問題は、彼女の霊基反応が普通の英霊よりも高かった事だ。聖杯の力を手に入れる前でアレだ。きつと何かしら理由があるんだとは思うけど…』

神の鞭…仰々しいその渾名に恥じない圧倒的武力をもって、征服の版図を広げていたに違いない。

所長の解説と共に、D r. ロマンが現在のアルテラの霊基について補足を入れてくれる。

セイバー…剣の英霊…常に最優の英雄が選ばれ、それ相応に高いステックを誇るクラス。

聖杯戦争においては、正しく最強の1騎として重宝される存在なのだろう。

…魔術師と言う生き物と折り合いが付けられるのかは別として。

「立香さん達の準備が整い次第、出発しましょう。進路を阻まない限り危害を加えないと言うのであれば、被害は少なく済みそうですが…もし他の街に行き着いてしまったら事ですし…」

『東雲君のバイタルはとても万全とは言えない…医師としてすぐに動くと言う判断は、見過ごせない。君はもつと充分な休息をとって…』
「立香さん1人でやれって言ってますか、アンタは！」

魔力が枯渇していることによる倦怠感、日付が変わったとは言え、残量2画の令呪…お師匠、クー・フリーリン、清姫の3騎を動かすには万全とは言い難く、そして相手は最優クラスのセイバー…苦戦は必至だろう。

恐らく、これだけの消耗は一晚の休息で取れるようなものではない。

僕の発言にロマンは僕に言い聞かせる様に窘める。

もちろん、ロマンは立香さんとマシユに任せるとは言っていない事は分かっている、僕を気遣っていると言う事も分かっている。

だけど、僕達には制限時間がある…2017年にカルデアが至ってしまえば人理は救えない。

それまでに僕達は聖杯探索を終えなくてはならない。

まだ先の事。

それでも忍び寄ってくる死神の鎌に等しいそれは、着実に僕達全員を苦しめることになる。

『そうは言っていない、僕はただ君に…』

「僕は良い！僕は戦士だ！燃え尽き落ちる流星の様に激しく戦ってみせる！だけど彼女はただの人だ。何処にでもいるただの女の子だ！マシユだって！」

「落ち着け、東雲 良太…まだ時間的な猶予は充分にある。彼女は人と変わらない徒歩での移動をしていると言っただろう？故に、私達が全力で移動すればすぐに追いつける」

エミヤは僕の肩を強く掴み座らせ、真っ直ぐに睨み付ける。

その中には、自身のマスターを侮られた事に対する怒りも含まれている様に思える。

僕はその冷たい鋼の様な視線に熱くなった心が僅かばかり冷えていく。

「…ごめん、なさい」

「君と言う男は何となく掴んでいたつもりだったがね。存外に無鉄砲で、好戦的だ。これでは影の国の女王達の苦勞が偲ばれると言うものだ」

「ますたあを悪く言わないでくださいまし、エミヤさん」

「素直な感想と言うものだよ、清姫嬢。彼は人間としては欠陥品だ。生物としての恐れは知っていても、人としての恐れは知らない。機械に等しいとすら言える冷徹さすらも兼ね備えている。そう言った意味合いでは、守護者向きではあるがね」

エミヤは鼻で笑う様にして肩を竦めると、焚火に薪を追加して炎を絶やさないう様にする。

皮肉めいたその言葉は多分…きつとその全てが僕に当てはまっている評価なのだろう。

僕はただそれを在るがままに受け入れるだけだ。

他人が何と言つて後ろ指を指そうが、僕自身には関係のない事だから。

僕は…ただ…。

『エミヤ、君も言い過ぎだ。僕は気にしていない…東雲君が優しい心を持つていることを知っているからね』

「どうだかね…それも仮面ベルツナなのかもしれないぞ？君と同じよう——」

「そこまでだ錬鉄の英霊。我が弟子への謗りは私を侮辱しているのと同じと心得てもらおうか」

「これは失礼した、影の国の女王」

僕の傍らにお師匠が歩み寄れば鋭い視線をエミヤにぶつけるものの、エミヤは柳の様にその視線を避けて悪びれる様子もなく肩を竦める。

「私としてはお主の固有結界…非常に興味があるのだがな」

「一の究極を持つ者に、凡百の剣を並べて立ち向かったところで精々が足止め程度だ。私では、貴方に勝つ事は難しいだろう。無論、マスターと共に立ち向かうのであれば、万に一つの勝機でさえ掴んで見せるがね」

『いい加減喧嘩は止めなさい！いがみ合ってる場合じゃないのは分かっているでしょう!』

一喝するようなどこかヒステリックな所長の声が響き渡り、エミヤとお師匠は口を噤む。

僕は小さくため息を吐いて、声を荒げてしまったことを深く反省する。

きつと、疲労から来るイライラで声を荒げてしまったのだと、自分に言い聞かせる様に。

そんな僕を清姫が慰める様に頭を抱きしめて優しく撫でてくる。

…絵面が凄いなあ…年下に慰められている青年の絵面って…。

「清姫、ステイ」

「いいえ、ますたあは疲れているのですから、ここは私が癒してさしあげようと…」

「帰ってから…そう言うのは帰ってから!」

清姫は周囲の目を気にすることなく、イチチャついている姿をお師匠達に見せつけようとする。

そんな清姫を止めようと必死に抵抗していると、お師匠は揶揄い甲斐のある玩具を見つけたと言わんばかりにニヤニヤとした笑みを浮かべ、僕の事を見下ろしてくる。

「ほう…お主、漸く一皮剥けたか…」

「ああもうややこしく…!!」

「ん…何の話を…」

お師匠の言葉にどうしようかと頭を悩ましていると、立香さんが目を擦りながらもぞもぞと動き出し、ぱちくりと瞬きをする。

エミヤは立香さんの元まで歩み寄るとその場に跪き、毛布を立て香さんにかけて直すと優しい声音で話しかける。

「なに、単なる与太話と言うやつだよ、マスター。君が気にするほどでは無い。明け方までは時間があるからまだ休んでいなさい」

「ん…あんまり、東雲さん…ぐう…」

立香さんは毛布をかけ直されると、睡魔には勝てなかったのか何事かを呟いて深い眠りに就いてしまう。

「静かにしましょう…うん」

「お主は少々焦り過ぎだ。仕方ない事とは言え、もう少し腰を落ち着けて冷静になることを覚えよ」

「はい…」

僕は消え入る様な声で頷いて焚火へと目を向ける。

…それでも…それでも彼女は普通の、何処にでもいる女の子なのは変わりない。

僕にできる事と言えば、悪目立ちして汚名を被る事くらいだろう。

きっと、この人理修復を成し遂げた暁には、立香さんには更なる困難が襲い掛かるのだろうか。

広大な平原…その東の果ての水平線に、太陽が徐々に昇り始めるのを確認する。

遙か前方を歩いているであろうアルテラの姿を求め、僕達はこの時代の戦車に騎乗して平原を駆け続ける。

僕はブーデイカと同乗し、立香さんはマシユが操る戦車に、ネロは単身戦車を巧みに操っている。

「ハハッ！余は楽しい！」

ネロはこれから死地に赴くと言うにも関わらず、快活な笑みを浮かべて高らかに声を上げる。

そこには決して悲壮感なんてものは微塵にも感じさせない輝きがあったし、事実として陽だまりの中

踊る童女の様子に可憐だった。

「余は今こそ確信している。運命と神々は、余に味方していると！東雲 良太と藤丸 立香に味方していると！如何に相手が神の鞭を憚

称するような蛮族であろうと、必ずや打ち倒し、ローマは救われる！」
「ネロ公、あんた何を確信してそんな事言ってるんだい!？」

「ハハハ、そんなもの、余の勘に決まっておろう!」

ブーデイカは頬を膨らませながらネロの言葉に胡乱気な声を上げ、そしてネロも不確かなものに従って突き進んでいると告げる。

「だけど、そんなものはきつと僕達は日常的にやっている事だろう。それは先の分からない明日を生きる、と言う事にほかならないのだから。」

「余の民と、余のローマは、後世に残る。絶対だ!世界が永遠に続くものならば、すなわちローマは永遠だと言う事だ!たとえ、その名がいつか忘れ去られたとしても、ローマが植えた多くの芽は、形さえ変えて続くのだろう。あの神祖が作り出した巨樹の様に!」

「ローマって言うのは気に入くない!けどね、私たちが守った子供たちが後世に続いていくって言うのは嬉しいことだって言うのは、私にだって分かるさ!」

まるでどちらが早くアルテラの元に辿り着くのか…激しいレースをするかのように戦車を走らせ、ネロとブーデイカはまるで気の合う悪友の様に語り合う。

そこには国家を背負うものとしてではなく、純粋な個人同士の語り合いの様な穏やかささえ感じさせる。

「きつと続きます!続くから、今こうして私たちが一緒にいるんです!!」

「だからこそ、僕達は負けられない!戦って、勝って!明日を繋げるんだ!!」

アルテラの体内にある聖杯に引き寄せられたのであろう魔獣達を戦車で轢殺し、あるいは魔術によって撃ち落としながら突き進む蒼天に日が昇り、やがて傾き始める頃…上空に巨大な影が現れる。

「なっ…!ドラゴンだ!?!」

『まさか、聖杯が暴走をして手当たり次第に召喚でもしているのか!?!』
「流石に一戦交えないとこれは…!」

ドラゴンは僕達を背後から飛び越して空中で旋回、僕達の進路を阻む様に大地へと降り立つ。

その巨躯は小さな山の様にも見え、例え迂回したとしてもこのまま連合ローマ帝国首都に向かわれでもしたら、駐留している軍隊諸共に全滅する可能性が見えてくる。

「良太、あんたネロ公の戦車に移りな！此処は私が受け持つ!!」
「でもー!」

「そうだぞ、誇り高き余の好敵手、ブリタニアの女王よ!」

僕の残存魔力量を逆算して、仮にクー・フリーンの宝具を開帳して心臓を抉ったとしても、あの巨躯では力尽きるまで暴れ続けるだろう。

幻想種と言う存在は兎に角規格外であることが多い。

フランスでのファヴニール然り。

影の国の波濤の獣、クリード然り、だ。

故に倒すならば確実に一撃で仕留めきることが求められる。

だけど、今僕達にはそんな余力はない…どうするべきか…と思案すると、立香さんの走らせる戦車から漆黒の服に身を包んだ1人の男が実体化して飛び降りる。

「では、余がこの場にて栄えあるブリタニアの女王と共に受け持とう」

「ヴラド公、無理は決して…!」

「ハハハ、マスターよ。余の同盟者よ。ドラクレア小竜公の名が伊達ではない事を、あの竜を生贄にすることで示して見せようぞ」

ヴラド公は衣服の一部を蝙蝠の翼の様に変態させ、ブーディカの走る戦車と並走する。

僕はその瞬間にネロの走らせる戦車へと飛び移り、ブーディカとヴラド公を見つめる。

「行きな!行つてあんたの世界つてやつ、救つてくるんだよ!!」
「分かった!!必ず、必ず救ってみせるぞブーディカアツ!!」

ネロの操る戦車とマシユの操る戦車は二手に分かれて、最小限の軌道を描いてドラゴンを迂回する形を取り、ブーディカの戦車はそのまま真っ直ぐにドラゴンへと突き進む。

「我が名はブーディカ！ブリタニアを守護する女王！例え約束されざる勝利と言われ様とも!!この世界を守ってみせる!!!」

その宣言は高らかに、僕達の背後で小竜公と勝利の女王による、御伽噺の様なドラゴン退治の幕が切って落とされた。

「アルテラアッ!!」

ブーデイカ達と別れて、戦車を走らせること更に半刻。

夕日に暮れなずむ平野を歩く、白い少女を前方に確認する。

フン族の戦士：破壊の大王：神の鞭：西方世界を恐怖に陥れたアルテラ、その人だ。

ネロはアルテラの名を叫ぶと同時に僕が抱きかかえる形で戦車を真っ直ぐに走らせ、アルテラに対して突撃させる。

アルテラは名を呼ばれたことに気付いて振り返り、あの3色の剣を一閃してけん引していた馬ごと両断して難を逃れる。

その身に返り血は一切なく、その純白が穢れる事は無い。

「…行く手を阻むのか、私の…」

何処か機械的な冷たい反応を示すアルテラは、何処かぼうっとした様な雰囲気で此方を見つめてくる。

あくまでも事務的に、自身の役割を全うするためにその様に動いていると言う様にも受け取れる。

僕が優しくネロの身体を降ろすと、その隣に立香さんとマシユが走って此方へとやって来る。

「貴女を先に行かせる訳にはいかないの!」

「そう、阻むぞ。余は貴様を阻もう。藤丸 立香の言う様に、絶対にその先に行かせる訳にはいかぬのでな」

ネロはその手に持つ原初の火を抜き放ちながらも切先を向けると言うようなことはせず、アルテラと対話をしようとしても言うのか何処か優しい声色で語り掛ける。

僕と立香さんは視線だけを交わして頷き、ネロの様子を見守ることにする。

もし、アルテラが凶行に出る様であれば、僕達はそれを全力で鎮圧しなければならぬ。

「貴様は言った。世界を滅ぼす、とな。だが余には分からぬ。何故、世界を滅ぼすなどと口にするのだ?」

ネロは首を傾げて眉根を寄せながら、ゆつくりとアルテラの方へと歩み寄っていく。

その距離は英霊であれば、一息に飛んで首を刎ねる事さえ容易い距離だ。

僕は自身の心を落ち着かせて、その手に持つ朱槍を強く強く握りしめる。

まだ…ネロは対話を求めている。

その胸の内にある愛ゆえに…。

「世界は美しいもので溢れている。花も良い。歌も良い。黄金も良い。愛も良い。そうとも、何よりも。この世界は余の愛に満ちている！それなのに貴様は滅ぼすのか？勿体無いとは思わぬのか、アルテラとやら」

一瞬…一瞬だけ…アルテラの瞳の奥に僅かばかりの動揺が走ったように見える。

しかしその体幹は一切の身動きをせず、その手に持つ不可思議な剣を此方に突きつけてくる。

「私は…フンヌの戦士である。そして、大王である。この西方世界を滅ぼす、破壊の大王」

しかし返って来たのは無機質に放たれる出会い頭に聞いた言葉。

あの少女にはそれしか残されていない…否、それしか存在しないと
言わんばかりに。

「またそれか…哀しいな、アルテラよ。余はしかし、貴様のその哀しささえ美しく思おう。どうも貴様は放っておけぬ。その在り方に大いなる矛盾と痛みを感じるのだ。貴様はあるの首都に降り立った時、敵対した余の客将を討ち取るだけで事を済まし、あの地に住まう民や、余の兵達には手を出さなかつたのだから…」

世界を滅ぼす…と言うからには、驚異的な暴力装置であることを求められている筈だ。

にもかかわらず、彼女は呂布達を倒しただけで僕達にトドメを刺すことはせずに、歩き出した。

まるで、この世界を見て回ろうとするかのように。

「だが、この世界を滅ぼすと言うのならば止めねばならぬ。力では余に勝るのだろう。悔しいがそれは認める。しかし、愛では、貴様は余に敵わぬと知れ」

「…美しきなど。愛など…私は、知らない…」

アルテラは手に持つ剣の切先を下げ、西に沈み行く夕日を眺める様に天を仰ぐ。

それと同時にアルテラの肉体から莫大な魔力放出が確認され、今も尚増大していく。

「ドクター、先ほどとは異なる言葉です。自動的な…機械的な対応を行うばかりではないようです」

『この反応は…そうか！取り込んだ聖杯の魔力を御しきれていないから暴走状態にあるんだ！だとすると、もう対話なんかじゃ止まらない！』

Dr. ロマンはアルテラの魔力反応を精査検証し、彼女の霊基がどのような状態にあるのかを把握し始める。

その調査結果が確かならば、言葉を交わすことは最早意味を成さず、互いに刃を交えて制する他無い。

此処が正真正銘の正念場と言うやつだろう。

『これがこの地での本当の最後の指令よ！フンヌの大王、アルテラを撃破しなさい!!』

所長の宣言が終わると同時に先に動いたのはアルテラ…彼女はその場から剣をネロに向けると3色のエネルギー弾を剣から放出し、その一撃で仕留めようとする。

しかし、そんな見え透いた飛び道具は此方の弓兵が見逃すはずがない。

アーチャー・エミヤは黒弓を投影して素早く矢を放ち、正確にそのエネルギー弾と撃ち落とす。

「そら、お主は私を楽しませてくれるのだろうか？」

「こっちも必死なんでな！往生しろや!!」

エネルギー弾がエミヤの放つ矢によって阻まれ、爆炎があがる。

その中を突き破ってアルテラに肉薄するのは、ケルト最速の英霊

クー・フリーンとその師スカサハ。

クーフリーンは素早く手に持つ朱槍を必殺の角度で突き放ち、逃げ場を塞ぐ様にお師匠の持つ2本の朱槍がアルテラの首と足を薙ぎ払おうとする。

だがアルテラは顔色一つ変えずに手に持つ剣の刀身を鞭のようにしならせ、蛇の様に自身の身体に巻き付かせることで都合3撃放たれた朱槍を巧みに弾く。

弾かれた瞬間に加速の乗っている方向に飛び出した2人は、お師匠がクー・フリーンの腕を掴み取ってジャイアントスイングの要領で投げ飛ばし、再びアルテラに肉薄させる。

「猟犬はそう簡単に得物から離れねえもんさー！」

「ふっ！」

蛇の様にうねる刀身を元の剣へと戻したアルテラは、クー・フリーンこの獣の如き突きを華麗な剣捌きでいなし、しかし徐々に加速していくクー・フリーンの速度に対応しきれないのか防戦に追い込まれていく。

朱と蒼の彩る残影は激しい応酬を生み出し、やがて赤い華を咲かせる。

「慣れて、きたな」

「いいねえ！アンタみたいな強い奴は大歓迎だ！惜しむらくは…!!」

浅いとは言え、アルテラとクー・フリーンの頬に僅かではあるが切り傷が生まれる。

それはアルテラの剣戟結界の隙を突いたと言う証拠でもあるし、クー・フリーンの神速の踏み込みにアルテラが追い付いたと言う事の証拠でもある。

其処に真紅の薔薇が凄まじい速度で突撃し、必殺の一撃を叩き込むべく大きく踏み込む

「花散る天幕!!」

「チツ…!!」

アルテラはその場から跳躍してネロの渾身の一撃をひらりと躲し、身体から魔力放出を行う。

その爆炎の様に噴き出す魔力放出は、空中で隙を晒したアルテラに飛来する無数の矢を弾き飛ばし、その爆発を推進力の代わりとしてお師匠に向かって一気に突き進む。

「お前が…一番強いな…」

「本気は出さん。ああ…きつと、な」

流星の如き渾身の一突き、その一撃をお師匠は横に軽く身体を逸らせることで避け、手に持つ朱槍を手放して無防備をさらけ出すアルテラの腹部に掌底を叩き込んで軽く身体を浮かせる。

そのまま流れる様にアルテラの脇腹に回し蹴りを叩き込めば、地に落ちる瞬間の朱槍を更に蹴り込んで弾き飛ばされたアルテラに向かって叩き込む。

多くの勇士を驚嘆せしめた絶技蹴り穿つ死翔の槍。ダイ・ボルク・オルタナティブ

しかしその一撃は絶えずアルテラの肉体から高密度で噴出している魔力放出によって阻まれ、その軌道は逸らされていく。

「これは中々の難敵。久々に運動のし甲斐がある!!」

「矢は放つだけ無駄だな…マシユ嬢、マスターを頼むぞ」

「はい!!」

お師匠、クー・フリーリン、エミヤ、ネロ…3騎と1人がアルテラへと躍りかかり、だが徐々にその身体に手傷を負っていく。

清姫も出したところだけど、恐らく彼女を出すと今現在拮抗しているバランスを崩しかねない。

張り切りすぎると僕の魔力を大量に食ってしまうので、お師匠とクー・フリーリンに魔力を回すだけの余裕が無くなってしまう。

決して侮っている訳ではない…純粹に僕の魔術師としての力量、マスターとしての資質が足りていないが故だ。

「ははっ！英霊の身であることが惜しいくらいだ！これ程の相手、全力でなければ面白くない！」

「戦闘狂も大概にしたまえよ！此方も後が無い状況なのだからな！」

「余はちつとも楽しくないぞ！ええい！アルテラ！大人しく止まらんか!!」

「言って止まる様な奴かよ、皇帝陛下下！」

お師匠は相手の強さに歓喜を覚え、そんなお師匠にエミヤは辟易としつつも正確な斬撃をアルテラに浴びせ、ネロは不満げに声を荒げながらも原初の火を煌々と燃え滾らせ、クー・フリーンはネロの不満に釘を刺す。

これだけ手を並べているのに、アルテラは僅かな手傷を負うだけで大きなダメージを受ける事無く、難なくやり過ごしていく。

残り2画：令呪を切るべきタイミングを見計らおうとすると、アルテラを中心に緑光の大爆発が起こり、3騎と1人が僕達の元まで押し返される。

「聖杯による…遊星の紋章…復刻…完了」

『不味い…不味いぞ！あの宝具の時よりも魔力放出量が増大！一刻も早くこの場から退避してくれ!!』

ロマンの警告が耳に届くや否や、いつの間にか夜の帳が落ちていた空に巨大な魔法陣が浮かび上がる。

背中に走るその悪寒…それは死を前にした恐れ…あのクリードを目前に見上げた時の恐怖に匹敵するもの。

僕は全力で令呪を起動させる。

「令呪を以て告げる!!」
「火神現象。マルスとの接続開始」

手に持つ剣を逆手に持って天へと掲げれば、柄頭よりポインターの様な光が魔法陣へと伸び、魔法陣の中心で莫大な魔力が渦巻き始める。

「発射まで、2秒。軍神よ我を呪え。宙穿つは涙の星…」

「スカサハ、令呪二画を以て宝具を全力解放！アルテラを討て!!!」

燃え尽きてしまうのではないかと言うほどの痛みが令呪より発せられ、お師匠…スカサハは特に愛用する朱槍を手に持つとワープしたと言わんばかりの速度でアルテラの目の前へと出現。

まるで矢を引き絞る様に力強く槍を構える。

「貫き穿つ死棘の槍!!!」
「涙の星、軍神の剣!!!」

宝具の発動はほぼ同時…スカサハの朱槍は確かにアルテラの心臓

を穿ち抜き、そしてアルテラの宝具は僕達の頭上から確かな熱量を以て涙の如く降り注ぐ。

死を前にすると、その直前がゆっくりとした時間になる。

それは脳が必死に現状を打破するための対策案を練ろうとしている為だとか、今までの人生を走馬燈として名残惜しむ様に見える為だとか言われている。

ああ…ごめんなさい…父さん、母さん…お師匠…

——世界は愛で満ちている——

——故に我ら歴代の皇帝が——

——未来ある子供達を守ろう——

最早、後は灼かれるだけ…血が滲むほどに朱槍を握り込んで、それでも下を向くまいと天を見上げてみると、足元から凄まじい勢いで真紅の樹木が急成長を始めてアルテラの宝具とぶつかり合う。

——過去・現在・未来…大河の如く流れる奔流が如く後の世まで続き、拡大変容を続ける我らが世界!!!——

「これぞ、我ら皇帝の愛!!」『すべては我らが世界に通ずる!!!』

ネロを守る様に現れる朧げなゴースト達…その中には僕達が出会った僭称皇帝を名乗る英霊の姿もあり、何よりも雄々しく決して崩れることの無い礎…神祖ロムルス^{ローマ}の姿がそこにあった!

「見るがいい!是こそが後の世まで続き、名を忘れられ、形を変えられ、語り継がれることが無くなるうとも!!人に!その精神にくすぶり続ける世界の愛!!!お前の裡に在る愛と同じものだ!!!」

神祖達を中心にして成長を続ける巨樹は、見事アルテラの一撃に打ち勝ちその雄大な姿を見せる。

過去から現在へ…そして未来へと繋がる想い…それが形となった宝具『すべては我らが世界に通ずる』。

きっとこの巨樹は美しいものなのだ…命が助かったことも忘れて呆ける様に僕は見上げていた。

「ああ…そう、か…私の剣でも、破壊されないものが…在る、のか…」
「…白き巨人…よもやな」

お師匠は何事か呟くと、深々と突き刺さる朱槍を引き抜き、その身

が地で汚れる事も厭わずにアルテラの身体を抱きかかええる。

アルテラは天高く聳え立つ真紅の巨樹に手を翳して、少しだけ少女の様な微笑みを浮かべる。

「ああ…軍神マルスの剣、でも…そうか…それは…嬉しい、な…」

アルテラは心の底から嬉しそうに微笑み、霊基は聖杯へと還って行く。

その姿が消えてしまえば、3色の光を放つ剣…軍神マルスの剣も元の在るべき姿…すなわち王宮にて成長した真紅の巨樹の細枝へと姿を戻していく。

「ああ…終わったんだなあ…」

僕の中でプツリと緊張の糸が切れて、世界が徐々に暗転していく。

最後に見たのは光り輝く聖杯を、何処か冷たい眼差しで見るお師匠の姿だった。

それから。

僕が気が付いたのは第2特異点修復から2日後のことだ。

医務室で点滴に繋がれる形で僕はベッドに横たわっていて、何故か清姫が長襦袢姿で同衾していた。

勿論、問答無用で令呪を使って自室謹慎させた。

駄目です、女の子が簡単に同衾しちゃ。

…うん…清姫…なんだかい香りだったな…。

「落ち着いたところで…ご苦労様、無事に第2特異点は修復された。これで初期から見つけていた特異点は残り2つ…隠されている残り3つについても集めた聖杯を元に割り出してみせるよ」

「あ、あのDr. ロマン」

あの夜…僕はらしくもなくロマンの事を糾弾してしまった。

僕が思う様な事を言った訳でもないロマンを、だ…。

このまま何もアクションをしないままでは、今後のカルデアでの生活で軋轢を生みかねない。

ロマンだけでなく、他のスタッフだった命を削る想いで僕達をサ

ポートしているのだろうか。

「気にしないでくれ、東雲君。君は君の信念に従って案じてくれたんだ。僕達は君と立香ちゃんに頼るしかない…けれど、僕達は僕達のできる事を見えないところでやっていると言う事は知っておいてほしい」

「分かってはいたんです…けれど、あの時は激情に駆られて…本当にごめんなさい」

「だから、気にしないでくれれば…とところで、これから軽いテイータイムでも洒落込もうと思うんだけど、1人だけでは寂しくってね。付き合ってくれるかい？」

ロマンは屈託のない笑みを浮かべると、医務室の奥にある給湯室へと向かう。

…僕は、何であの時ロマンが何か悪い事を考えているのではないかと思ってしまうのだろうか？

短い付き合いとは言えそれなりにロマンとは会話を交わしているし、今みたいにお茶に付き合ったりもしている。

だと言うのに…。

僕は心がどうかしてしまったのだろうか？

僕はそんな不安を心の奥底に取り敢えず置いておいて、深く溜息を吐いたのだった。

幕間の物語くカルデア夢想編く

#42

- 気に入くわない。
- 気に入くわない。
- 気に入くわない。
- 未だに生きてしまっている貴様が気に入くわない。
- その身を埋めよ。
- その心を砕け。
- その魂、業火へと放つが良い。
- 檻亡きモノよ。

「…ふわあ…んんっ…!!」

固いベッドから状態を起こし、盛大に欠伸をしながら背筋を伸ばして強張る肉体を解していく。

第1特異点、第2特異点…共に誰1人欠ける事無く無事に完遂する事が出来た僕達は、人理を焼却された中に合つて一先ずの平穩を謳歌することにした。

なんせ、特異点修正中は全職員がローテーションを組んで僕達の存在実証や資料集め、更には物資の管理をしていて気が休まる時間が無い。

そんな状態が長く続いてしまえば、早晚にこのカルデアは崩壊してしまう事は目に見えている…と言う所長の鶴の一声があつて、次の第3特異点の観測作業以外の業務を休止してしまっている。

その観測作業も立香さんが新たに呼び出した英霊達の手を借りた上で、所長が行っている。

所長も疑似的に英霊となつているので、睡眠や食事等の生理現象に悩まされることが無くなつていると言う点が大きい。

とは言え、精神を安定させるためには英霊と言えど人並みの営みは

あつた方が良いそうなので、キリが良いところで所長には休んでもらう必要があるだろう。

僕はもう一度欠伸をしてからベッドから立ち上がり、カルデアに来た時に支給された標準的な制服へと身を包む。

現在、愛用している戦闘服は、データ取りと改良を兼ねてダヴィンチちゃんが預かっている状態だ。

なんでもルーン魔術との親和性を高めて、僕の負担を減らすことが目的なのだとか。

「おはようございます、兄さん」

「おう、おはようさん」

マイルームから出ると、偶然僕の部屋の前を通りがかったクー・フリーンに出会い、一緒に食堂へと向かう事とする。

現在カルデアの精鋭20余名：そこに英霊が20騎以上の英霊が加わっているの、最初の頃に比べてかなり賑やかになっている。

カルデアは国籍、魔術回路の有無を問わずに様々な国の人々が所属している。

そんな事もあり、自国の英雄と直に触れ合ってしまうこの環境と言うのはかなりの刺激になっているようで…。

「せーの！」

「「ヴィヴ・ラ・フラックス！」」

「余はな、この施設にテルマエを造るべきだと思っただが！」

「皇帝陛下、物資が…」

「明日の我が身は今日まで鍛えてきた筋肉から！走り込みますぞ!!」

「〜!!」

とまあ、こんな具合に大きな衝突も無く平穏無事に過ごしている訳である。

ヴラド三世はヴラド三世で裁縫教室とかやってるし…いや、本当に何なんだろう？

在り方が悪しきものとされる反英霊の立場の者であっても、分を弁えてくれているのが本当に凄い気がする…。

今の所、特異点で関わった英霊を中心に立香さんが召喚している。

縁、と言うものは本当に強固だ…時を超え、隔離された特異点で結ばれたものであってもこうして繋ぐ事ができるのだから。

「しっかしまあ、古今東西の英傑勢ぞろいで、人理修復したら此処…やばいんじゃないかねえか？」

「その辺は所長任せにするしかないでしょう。陰謀に巻き込まれるとか勘弁ですけどね！」

英霊、と言う存在は普通人間が勝てるような存在では無い。

そんな英霊が何人もカルデアの為に存在していたら、魔術世界…ひいてはこの世界の権力者たちは気が気では無いだろう。

いつその矛先が暴走するのかがわからないのだから。

「まあ、それは後の事で、今は目の前の問題だけ考えましょう」

「へえ…具体的には何だ？」

「それはもう、死活問題ですからね…この問題は」

僕の言葉にクー・フリーンは片眉を上げてニヤリと笑って聞き返してくる。

そう、この問題は今日の予定を考えれば、早急に解決しなければならぬ死活問題だ。

今日は新たに1騎僕が召喚をする予定で、それが済み次第カルデアの施設の案内…その後に戦闘シミュレーターを用いてお師匠とクー・フリーン、清姫を交えての親睦会だ。

この親睦会がかなり長引くことになると思うので、乗り切るために必要な事を片付けなければならない。

カルデア内の通路を歩いて行くと、徐々に食欲をそそられる良い香りがしてくる。

その香りに連動するかのようグウ、と僕のお腹から空腹を訴える音が通路に響く。

「なるほど、そりゃ死活問題だわな」

「そうですね。腹が減ってはなんとやら…にしても、あの3騎のお陰でカルデアの食事情ってかなり改善されたんですよねえ…」

カルデアのスタッフの殆どが利用していた食堂…数百人規模の利用者が居たこの食堂は今のカルデアでは非常に閑散としているもの

の、出される料理はまるで三ツ星レストランのシェフ顔負けの料理が提供される場となっている。

アーチャー、無銘の英霊エミヤ。

ライダー、勝利の名を戴く女王ブーデイカ。

そしてバーサーカー、謎の正妻メイド英霊タマモキヤット。

この3騎が揃うまではエミヤだけに負担を強いる訳には行かないと言う事で、冷凍食品やレトルトをエミヤ監修の元スタッフが分担して食事を用意していたのだけど…立香さんがグルグル目で召喚を乱発して英霊が爆発的に増えたために、料理出来ちゃう系英霊に頼る事となった。

なんでもエミヤは世界中に高級レストランやホテルに従事しているシェフ友が居る程だったとかで、その腕は言わずもがな。

ブーデイカは特異点での食事で自ら振舞っていた事もあって、その味は僕達の記憶に新しい。

で…問題のタマモキヤットなのだけど…。

「ほう、我がご主人の生涯の友。強敵と書いて友の方の剥き出しマスターよ。今朝もこのタマモキヤットのオムライスを食べるのだな？」
「うん、僕としては敵になるつもりはないんだけどね？あと朝からオムライスは重いです…」

「何を言うか朝の活力これすなわちニンジン。ニンジンなくしてオムライスは出来ずオムライスは天地の理なのだな」

なんでこんなにオムライスを推すのだろうか…バーサーカー故なのか兎に角会話らしい会話が成り立たない。

オムライスを頼んでもオムライスが出てきた試しが無かったりするし…そもそも本物の狐耳と尻尾はまだ良いとして、両手が完全に犬的な手で物が持てない筈なのに何故かキッチンとした料理を作ってくる点が謎だ…。

「む…東雲 良太か」

「今日はモーニングセットAで」

POPに書かれていたメニューの内容を見て、僕はAセットを選択する。

Aセットはご飯、葱と豆腐のお味噌汁、焼き鮭、ほうれん草のお浸し、切り干し大根、冷ややっこの和食セット

因みにBセットは洋風、Cセットはタマモキヤット激推しのオムライスだったりする。

お盆に料理が次々と乗せられていき、一言礼を言ってから僕は適当な席に座る。

「鮭ねえ…」

「ケルトで言うフィン・マツクルの智慧の鮭でしたっけ？あの親指に鮭の油が跳ねたとか何とかの？」

「ん？ああ、そうなんだが…どつかで鮭の料理振舞ってもらった記録があるんだよなあ。はつきりとは分からねえんだが」

クー・フリーンは食事はしないものの、食堂に来たからには何かしら腹に入れようとも思ったのか、コーヒーだけを注文して僕の真向かいに座って首を傾げている。

召喚された英霊が、過去に召喚されたときの記憶を色濃く覚えていることは稀だそう。

基本的には付与されるその時代に合った知識の波に流されてしまい、頭の中に残らない事が殆ど。

逆に言えば、強烈な経験程頭に残ると言う事だ。

クー・フリーンがエミヤとの鬪いを覚えていたのも、それだけ印象に残っていたからと言う事だろう。

ずずっとお味噌汁を啜って、その豊かな出汁とお味噌の風味によるハーモニーに感嘆の溜息を吐く。

「どんな料理だったんです？」

「あー…あれ…アルミホイルだったか？あれで包んで蒸し焼きにするやつだ」

ホイル焼き…なんとも洒落な感じがするなあ…レストランか何かにでも入ったのだろうか？

当時の聖杯戦争の時のマスターとかに連れられて。

「あー…いやどうなんだ…？美味え！つてのは覚えてるんだけどなあ」

「鮭のホイール焼きか：作れんことも無いが、試してみるか？」

ひと段落したのか、僕達の会話が気になったのかエミヤが此方までやって来てクー・フリーンへと視線を送る。

いつもの赤い外套姿ではなく、白いエプロンに三角巾を身に着けたその出で立ちには、給食のおばちゃんとかそう言った雰囲気すら感じさせる。

「東雲 良太：何を懐かしむような顔をしている？」

「そんな顔してました？」

「していたとも。それで、どうするのだ？」

「あく、パスパス。晩飯に出せよ。それで一杯やるからよ」

クー・フリーンはひらひらと手を振ってエミヤの提案を断る。

エミヤもそれ以上食い下がる様な事はなく、そうかと一言だけ言つて厨房の方へと引つ込んでいく。

恐らく昼と夜の下ごしらえを始めるのだろう。

「英霊って、基本的に酔いませんよね？」

「酔わねえな：それでも味や刺激つてのは理解できるから、飲めるんなら飲んだって良いだろ？」

「羽目外さなきや僕としてはオツケーですよ」

英霊が酔っぱらって酒乱と化すとか考えたくも無いなあ：令呪使つて止めるにしたつて精々3騎までだし：酒造りに特化してたり、お酒が宝具の英霊が来たら気を付けないと駄目かもしれない。

酒でガチの喧嘩に発展するとか本当に考えたくもないしね：カルデアが地獄になつてしまう。

「ん：？良太、お主まだ食事を摂っていたのか？」

「お師匠、おはようございます」

「弟子に小言もらしに来たのか？」

「お主のその減らず口をこの場で縫い合わせても良いのだがな？」

エミヤ達の料理に舌鼓を打っていると、お師匠が霊体化を解除しながら此方へと歩いてくる。

クー・フリーンはニヤニヤとお師匠を茶化す様に肩を竦めるが、お師匠は槍の如き鋭い視線でクー・フリーンを射抜く。

「おお、怖…じゃ、マスター…お邪魔みてえだから俺は退散するぜ。馬どころか心臓に槍を貫つたら敵わねえからな」

「その軽口やめれば良いだけだと思っただけですけどねえ…」

クー・フリーンはさささつと自身の肉体を霊体化して姿を消すと、お師匠は小さく溜息を漏らして頭を軽く振る。

柳の様に自然体で殺気を流されてしまえば、興が削がれる…と言ったところなのだろうか？

頼むから殺し合いは人理を救った後にして欲しいのだけれど…。

一先ず充分に美味しい朝食を堪能し終えると、お師匠は漸く僕に対して口を開く。

「随分と美味しそうに食事をするのだな？」

「いやだって、自炊じゃこんな美味しいご飯とか無理だし、レストランで食べると思ったら貧乏学生の僕じゃとても…」

「いやお主、学生は中退扱いだったではないか…」

「ヤメテー、僕は本当なら学生だったんです…」

いや、自業自得なんだけど。

涙目でお師匠に抗議すると、バツサリとその部分は聞き流されてしまふ。

「そんなことよりも、ダヴィンチがお主の事を探していたぞ？そろそろ召喚する時間だろう」

「やっば…ごちそうさまでした！」

「うむ、食器はタマキヤが片付ける故、あの青い槍兵の如く犬の如く走れば良いワン！」

僕は慌てて椅子から立ち上がると、察したようにタマモキヤットがさささつと食器を片付けて持って行ってくれる。

この辺りの気配りはあれだろうか…メイド的な？

ともあれ、目指すは召喚ルーム…果たしてどんな英霊が僕の声に応えてくれるのだろうか？

「我が名はアルテラ。フンヌの未たる軍神の戦士だ。…お前が、私の

マスターだな？」

アルテラ：アツティラと呼ばれた五世紀の大英雄。

西アジアから広大な版図を広げ、西ローマ帝国滅亡の原因にまでなった大王。

そして、第2特異点で最後に死闘を繰り広げた相手でもある。

あの時の彼女は聖杯によって暴走状態に陥っていたと言う話だ。

故に、今回もそうなるとは限らないけれど…。

召喚ルームの中心に顕れた白を思わせる空虚さと同時に何か秘める熱の様な雰囲気を纏ったアルテラは、いつまでも応えない僕をジイツとその赤い瞳で見つめて返答を待つ。

僕は大きく深呼吸をして、漸くアルテラの言葉に頷く。

「東雲 良太。僕が君のマスターだ。事情は…分かってもらえていると思う」

「ああ、理解している。私は闘う者。殺戮する者。粉碎者。お前が、私を上手く使え」

機械的な対応は、どこか少女の面影を幻の様にしてしまっているように感じてしまう。

彼女の薄い褐色の肌に走る白い文様へと視線が引き込まれる。

あの死闘の時も思ったけれど、フンヌの戦士はああいった化粧をしているのだろうか？

「何だ？私の肌に刻まれたこれが珍しいか？」

「入れ墨かなにか…って言うには何か…違和感があつて。ごめん、ジロジロ見過ぎた」

僕の視線に気づいたのか、アルテラは自身の身体に走る入れ墨を自身の手でなぞっていく。

その姿はどこか艶やかで、女性的な魅力を感じてしまう。

「これは、この世に生まれ落ちた時から、我が体に刻まれていたものだ」

「羨みたいなものかな？うん…僕は綺麗だと思う」

そう…その模様は綺麗なものだと思った。

自然に出来た者とは思えないその模様に、僕は何処か惹かれるもの

を感じたのだ。

とは言え、いつまでも呆けては居られないので、僕はアルテラへと歩み寄って手を差し出す。

その瞬間、足と脇腹に痛みが走った。

「ま・す・た・あ…？師であるスカサハさんは、良いとして…：伴侶であるわたくしを差し置いて口説くとはどういうことなのでしょう？」
「まって清姫、まって…：バーサーカーパワーで脇腹掴まれたら肉取れちやうううう！」

一体いつから…いや、多分おはようのベッドからなんだろうけど、清姫は霊体化を解除して僕の脇腹を思い切り抓ってくる。

バーサーカーと言うクラス特性上その力は見た目のステータスよりも加算される形になるので、まるで強力な万力で肉が押し潰されているような感覚に陥る。

「まったく、私が管理せねば、早晚セタンタ同様に早死にかもしれんなあ？ん？」

「鉄のヒールはいけませんお師匠！ああ！困りますお師匠それ以上は骨がイっちゃううう!!」

お師匠はお師匠で何が気に入くわなかったのか、僕をつま先を靴のヒール部分で思い切りグリグリと抉る様に僕の足の甲を踏みつけてくる。

言うまでも無くお師匠の靴は鎧の一部なので、ヒール部分が金属でできている為に最悪足に刺さってしまう。

絶妙な力加減のお陰なのか、幸いにして激痛が走る程度に済んでいくけど。

アルテラはアルテラで僕の発言に、頬を幾ばくか朱に染めた後キリっとした無表情になりながらその手に三条の光を凝固させたかのような剣を持ってお師匠と清姫にその切先を突き付ける。

「やめろ、マスターに危害を加えるな」

「危害ではない。これは躰妻と言うのだぞ、フンヌの大王よ」

「これはさあばんととして当たり前妻の反応です。新参者は引っ込んでいなさい」

『おんやあ。ラブコメと言うやつではないかな？東雲クン？』

一触即発と言わんばかりの剣呑な雰囲気の中、まるで空気が読めていないかのようなトーンでダヴィンチちゃんが僕を茶化す様な声色でスピーカー越しに話しかけてくる。

自分自身に火の粉が降りかからないので、この状況を精一杯楽しむ気なのだろうか？

「僕はラブコメなんてえ…求めてないんです…」

「いい加減、マスターから離れろ」

「いいえ、わたくしは離れません」

「離れる理由は無い…とは言え、此処で暴れる訳にはいかない。そうだな、良太？」

「僕に話振らないでくれませんかねえ…？」

お師匠はニヤニヤとした意地悪な笑みを浮かべながら僕の足から足を退かし、今度は僕の襟首を掴んで清姫ごとズルズルと引きずり始める。

清姫は清姫で無抵抗の僕を良い事に腰に抱き着いて、その柔らかい体を余すことなく僕に押し付けてくる。

…本当にクー・フリーンみたいに女が原因で死にそうなんです…？

「ついてこい、フンヌの大王よ。此処では迷惑がかかるからな」

「いいだろう」

「ぐえ…」

元より、アルテラで無くともシミュレーターで訓練をする予定だったのだけれど、このままでは僕はさながら囚われの御姫様とかそういう扱いでシミュレーターの中に放り込まれることになるのだろう。

完全にペースがお師匠に握り込まれていて、アルテラとしても素直に従わざるを得ない状態だ。

下手に剣を振れば僕も巻き込まれるし、そもそもカルデアで暴れるなんてご法度だしね！

『ロマニに伝えてシミュレーターの準備をさせておくよ。では、東雲クン頑張りましたまえ』

「地獄に落ちろダヴィンチちゃん!!」

朗らかな声で話しかけてくるダヴィンチちゃんに対して、僕は呪詛たつぷりの恨み言を叫んでお師匠に召喚ルームから引きずり出される。

この後、精根尽き果てるまでシミュレーター内に閉じ込められたのは言うまでも無い。

カルデアの戦闘シミュレーターと言うのは、非常に摩訶不思議な存在だ。

シミュレーションである以上、それは仮想現実とも言うべき存在なので現実には影響を及ぼさない筈なのに、何故か英霊の霊基強化に必要な霊基再臨素材や種火と呼ばれる高密度の魔力集積体が実体化して手元に残る。

勿論、そう言った素材集めにもカルデアの余剰分の魔力が使われていくので、1日中引き籠っていられると言う訳ではない。

カルデアの設備である以上、科学的な技術の他にも魔術が使われているのは明白なのだけれど、再臨素材にせよ種火にせよとんでもない価値で取引されるものだ。

シミュレーターで作られたエネミーが確実に落とすわけではない——種火は落とすのだけれど——のだけれど、それでもこんなに簡単に手に入ってしまうと現在の流通価格に大打撃を与えてしまうと言うか、魔術的な発展が促される気がしないでもない…。

種火に関しては英霊の補強に使う外にも、ダヴィンチちゃんに提供することによってあのメロンゼリーっぽい謎物体であるマナプリズムへと変換ができる。

そしてこのマナプリズム…ごく少量ではあるけども、シミュレーターを使用した日の初回起動時に限ってだけでも勝手に生成される。

魔術と科学の融合と言うのは、もしかしたら魔法に近い事象を引き起こしているのかもしれない。

「ぼうつとしてんなー！」

「そこまで呆けてませんよー！」

とまあ、ぐだぐだと摩訶不思議な事に思いを馳せてはいたのだけれど、僕は今その戦闘シミュレーター…セイバークラス用の再臨素材とバーサーカークラス用の再臨素材を得るために兄弟子であるクー・フリーン、ストーカー清姫、そして新たに加わったセイバー・アルテラを伴ってシミュレーター内で大立ち回りを演じている。

理由は、アルテラと清姫の霊基強度の補強の為だ。

あの醜い肉の柱：魔神柱と名付けられたその存在は非常に強力だ。もし：もし本当にアレがソロモン72柱の魔神になぞらえて作られたものなのであれば、後71柱を相手にしなければならぬ。

その71柱が徒党を組んで一斉に襲い掛かってきたら、まず間違はなく僕達は全滅するだろう。

だから、そうならない為にもこうして僕達は少しでもできる事を熟していかなくてはならない。

屈強な女性：所謂アマゾネスと呼ばれる女戦士の剣戟を、僕は手に持つ朱槍で手早く弾いて下半身の身体強化を行って強烈な回し蹴りを叩き込む。

たまらず身体を弾き飛ばされたアマゾネスを、清姫が扇子を振るう事で造り上げた業火で消し炭に変えていく。

「兄さん、アルテラと連携してアイアンゴーレムの群を押し留めてください！僕は清姫と一緒にアマゾネスの処理を行います！」

「はっ！温い仕事だぜ！」

「別に、粉碎しても良いのだろうか？」

クー・フリーリンは僕の指示を聞くや否や、手に持つ朱槍の描く赤い筋を残しながら鋼鉄を主原料に生成された魔術兵器『アイアンゴーレム』部隊へと突撃し、無数の火花を散らしていく。

アルテラはクー・フリーリンから一步遅れてアイアンゴーレムの先頭集団の前に立ち、軍神の剣をさながら鞭のように伸ばして切りつけ、まるで豆腐か何かの様にアイアンゴーレムの四肢を切り飛ばしていく。

「ますたあ、お下がりにくださいー！」

「お師匠が張り切ってエネミー追加してるから、そうも言ってもらえないでしょ！『ガンド』!!」

清姫は僕の身を案じて此方へと視線を送りながら前へと出るが、注意散漫になってしまったせいで横合いから来るアマゾネスに対する反応が1歩遅れてしまう。

僕はすかさず来ているカルデア戦闘服の魔術スキルであるガンド

を起動してアマゾネスに撃ち込み、アマゾネスの動きを停止させる。続けて槍を横に振り払ってルーン文字を起動、火炎弾を一斉に7発起動させて後続のアマゾネス部隊へと叩き込んでいく。

火炎弾は着弾した瞬間に大爆発を引き起こし、地面にクレーターを作りながらアマゾネスの部隊を粉々に爆砕していく。

清姫はアマゾネスの凶刃にかかることなく、僕の傍らにまで後退しながら口から吐き出す火焰で硬直しているアマゾネスを消し飛ばす。

清姫を軽くサポートするだけで、アマゾネス達は簡単に撃退することができただけで、如何せん数が多い。

シミュレーター起動から既に1時間：討ち倒したアマゾネスは100を数え、ゴーレムに至っては強化された状態の物が30体以上だ。

お陰様でセイバークラスとバーサーカークラスの素材はモリモリ手に入っているのだけれど、3騎を同時にフルパワーで運用し続けなければならぬのが非常に辛い。

魔術回路が最初の頃に比べて増えて、尚且つお師匠が参戦していない状態とは言え…。

弱音ばかり、吐いても居られないけれど。

アルテラを中心に魔力の高まりを感じると、強烈な緑光の爆発が起きる。

恐らく魔力放出を利用した破壊の嵐を引き起こしたのだろう…加減抜きで。

お陰ですさまじい重量を誇るアイアンゴーレム数体が、まるで木っ端か何かの様に宙に舞い上がる。

「大英雄は伊達じゃねえってか!？」

「そういうお前も、的確にゴーレムのコアを穿ち抜いている。アルスター・サイクルにて名高いだけのことはある」

クー・フリーンは宙に舞い上がったアイアンゴーレムへと飛び掛かって、その手に持つ朱槍でゴーレムを起動させているコアを貫き、軽業師の様に次々にゴーレムへと飛び乗って同じようにコアを穿つ。

大雑把とも思えるその性格からは想像できない程の正確さは、戦闘

マシンンと言っても過言ではない。

宙に舞い上がったアイアンゴーレム全てを片付ければ更に跳躍して、先行したアルテラの背後より現れた魔獣キマイラへと真名解放せずに投擲。

不意を打たれたキマイラは、胴体を朱槍で地面に縫い付けられた激痛に悲鳴の様な雄たけびをあげる。

「碎け散れ」

その雄たけびに不快感を露にしたアルテラは、しかめっ面の様にも見える表情で軍神の剣を振るってキマイラの身体を一瞬で粉々に切り刻み、軍神の剣の刀身がクー・フリーンの朱槍へと絡みつく。

徒手空拳となったクー・フリーンはニイツと笑みを浮かべて襲い掛かってくる新たなキマイラ2頭に対して、ルーン魔術による火炎弾或いは砲弾の様な電で翻弄するように牽制を放ち続ける。

だが、このキマイラ：どうもステータスが跳ね上げられているのかダメージを物ともせずには暴れ続ける。

「受け取れ、光の御子」

「来い!!」

アルテラがすかさず剣を振るうと朱槍は放物線を描く様に上空高く舞い上がり、クー・フリーンが声を上げるとその動きは直線的になり、クー・フリーンへと襲い掛かろうとしたキマイラの蛇の尾を穿ち飛ばしながらその手元まで戻ってくる。

「その心臓、貫い受ける——」

その朱槍をまるで遊ぶように回転させながら魔力を送り込み、その真価を露にさせる。

即ち——『一刺一殺』。

『刺し穿つ死棘の槍』——!」

至近距離に居たキマイラは、真名解放と共に風船が破裂するように肉体が爆発する。

本気で放たれたゲイ・ボルクは濃密な魔力の塊を纏う。

それでも、他の宝具に比べても非常に燃費が良いのだけれど、まともを受ければ心臓どころか体ごと失せる事になる。

そして、真名解放状態が収束する前に神速で放たれる次撃もまた、キマイラの肉体を爆砕させる。

まさに一瞬：瞬きする間も無く放たれた2度の突きは、まるで1度しか突いていない様にしか見えない。

「ますたあ……！」

「終わりが……見えてきたかな……!?!」

清姫が僕を庇う様に前へと出ると、前方に禍々しい黒い魔力を纏った鎧姿の少女が現れる。

その少女は静かに……しかし凄まじい殺気を放ちながら此方を睨み付けている。

僕は……彼女とは最初の特異点で相対している。

カルデア内に登録されたその霊基の名は……。

「アルトリア・ペンドラゴン……!!」

「へっ、冬木の再現のつもりかねえ……あの女……！」

「ますたあはこの清姫が必ず……！」

「……あの……剣は……なんだ……?」

頬を冷や汗が伝う……アルトリア・ペンドラゴンは古きブリテンの守護者だ。

誰しもが耳にするアーサー王伝説……そのアーサー・ペンドラゴンこそが目の前にいる黒い少女だ。

彼女と冬木の特異点で出会った時、僕達にはあの聖剣の輝きを防ぎきるだけの盾が傍にいた。

しかし、今此処に居るのは僕と僕が契約した英霊3騎だけだ。

防ぐ手立てはない……!

アルテラは何処か遠くを見る様に黒く染まり始める聖剣を見つめ、手に持つ軍神の剣の切先を向ける。

「マスター、宝具の解放許可を」

アルテラは黒いアルトリアに強烈な殺気を叩きつけながら、しかし何処か優しい声音で僕に許可を求める。

アルテラの宝具『フォトン・レイ軍神の剣』は強力な対軍宝具だ。

現在の霊基強度では第2特異点で見せつけられた、あの衛星砲のよ

うな宝具の解放は出来ないとの事だけれど、それでもかの聖剣に匹敵するほどの威力は叩き出せる筈。

あとは僕の…気合次第。

「令呪を以て告げるーアルテラ、令呪の魔力を以て宝具を解放して、アルトリア・ペンドドラゴンを討ち果たせ!!」

「了解。目標、破壊する」

アルテラの宝具解放に巻き込まれないようにクー・フリーンが一足飛びで僕の傍らまで下がると、軍神の剣が徐々に輝きを増して刀身がまるでドリルの様に回転を始める。

それに呼応するかのように騎士王もまた聖剣から漆黒の魔力を噴出させながら刀身を下げて後方へと切先を向ける。

恐らく、振り上げて大地ごと此方を巻き上げる算段なのだろう。

「卑王鉄槌。極光は反転する…光を呑め——」

「命は壊さない…その文明を粉碎する——」

聖剣から放たれる漆黒はやがてアルトリア自身からも柱の様に立ち上り、彼女の周囲の大地が隆起して粉碎されていく。

対するアルテラは刀身を中心に風を、マナを巻き込んで旋回し続けて、光の暴風を造り上げる。

『約束された勝利の剣』!!!」

先手を打ったのはアルトリア…下段から上段へと聖剣を振り切り、暴走しているかのような魔力の奔流が大地を斬り裂きながら僕達へと襲い掛かる。

その一撃は捲り上げた大地もが礫の様に僕達に襲い掛かるが届かない。

礫は全て臨界寸前の軍神の剣が粉碎していくためだ。

アルテラは刀身を若干引いた後、大地を粉碎しながら『約束された勝利の剣』に…アルトリアに対して突撃していく。

『軍神の剣』!!!」

襲い来る漆黒を斬り裂く様に進むその姿は、三条の光が混じり合っ
て輝きを更に増していく。

その一撃はまるで世界そのものでさえ粉碎して突き進むような圧

倒的な力を感じ取り、僕はアルテラを全力でサポートする為に更に令呪を切る。

「令呪を以て告げる！アルテラ！一気にアルトリアを貫け！！」

「はああああ！！」

令呪が焼けるような痛みと共に一画消費され、未だ聖剣と拮抗し続けるアルテラの魔力として加算される。

軍神の剣はやがて輝きを増し、徐々に聖剣の魔力を貫いて行く。

「兄さん！！清姫！！」

「おうよ！我が師スカサハ直伝のルーン魔術を見せてやる！嬢ちゃん
は俺に合わせな！」

「はい！！」

クー・フリーンはアルテラの周囲に複数のルーン魔術を展開させ、その場に清姫の業火を放たせる。

クー・フリーンは好んで火系統のルーン魔術を使用する。

つまり、こと火系統の魔力反応に対して柔軟な対応が出来ると言う事だ。

清姫が放つ業火はルーン魔術によるフィルターを通して変質、増強され、アルテラが前へと進むための活力へと生まれ変わる。

火は：人の文明を押し進めた重要なファクターだ。

その意味を与えてやることで、前へと進むための力へと変わっていく。

令呪二画、クー・フリーンと清姫によるアシスト…それらが噛み合い、アルテラは更にアルトリアへと踏み込む。

遂にその切先はアルトリアの肉体を捉え、粉碎していく。

漆黒が光に蹂躪され、極光の爆発へと変じる。

「！！」

あまりもの光に僕は両腕で目を庇い、息を呑む。

アルテラは遂に聖剣の担い手を討ち倒したのだ。

「私は破壊する。勝利する。これまでも…これからも」

赤熱する軍神の剣を地に突き立て此方を見るアルテラは、何処か誇らしげに笑みを浮かべていた。

「シヨツチョー、これ今日の戦闘シミュレーターの報告書でくす」

「アンタ本当に私に気安くなったわね…」

シミュレーターによる素材集めを終えた僕は、魔力枯渇による全身の倦怠感と戦いながらレポートを作成してカルデアの中央ブロックに存在する所長室を訪れていた。

タブレット端末で作成するので、本来ならばデータを送信するだけで事足りるのだけれど、最近の所長は不眠不休で働いている。

少しばかり僕はオルガマリー所長が心配になって、こうして直接訪れてしまったのだ。

「また随分と暴れたと言う報告が上がって来ていたわよ。シミュレーターとは言え、あまり強力な攻撃はシステムがパンクするのだから控えなさい」

「いや、本当にその件に関しては、お師匠に言っていただけと…」
今回の大暴れは、お師匠が通常よりも強力なエネミー設定を施したことに起因している。

スタッフが言うには鼻歌交じりで勝手に設定してロックまでかけていたという。

魔境の智慧の無駄遣いと言うか何と言うか…なんで現代の文明の利器を使いこなせ…ああ、聖杯…。

「貴方のメインサーヴァントなんだから、貴方が手綱を握らなきゃダメでしょう…」

しどろもどろと僕が反論をすると、所長はジト目で僕の事を諫めてくる。

まったくもって反論できないので、僕はがっくりと肩を落として盛大な溜息を吐くしかない。

「とりあえず、今回のデータ取りで帳消しにして欲しい、かなあ…つて」

「稀代のルーン魔術を専攻している魔術師よりも間近で見られるのは、カルデアにとってもプラスであると言う事は理解していますが、

それはそれ、これはこれよ。何度も言うけれども、今の私たちには余裕が無い…資源的にも人員的にも」

所長は椅子の背もたれに深く背を預けて、小さな溜息を零す。英霊に肉体的な疲労や生理現象は無い。

それでも精神的な疲労と言うのは感じ取ってしまいうし、それを解消する術を持っていなくてはならない。

ましてや、最近までただの魔術師であったのなら余計に。

「藤丸と東雲…確かにどちらかが居れば特異点の攻略は出来るでしょう。けれども難易度は段違いに変わって来るし、負担だって大きくなります。貴方はもつと自分を大切にしなさい。戦士だからと言う理由は認めないわ」

「…はい。けれどもそれは所長だって同じですよ?」

所長はまるで叱りつける姉の様な優しい声色で口を開く。

レフの一件で少しばかり精神的に吹っ切れたのか、自棄になってしまったのかは分からないけれど、彼女は初めて会った時に比べて大分丸くなっているような気がする。

ある意味で、今が素に近い状態…なのだろうか?

「私は…別に良いのよ。こんな体だし」

「英霊でも寝る者は寝るし、食べる者は食べてますよ。もつと人らしくしたってバチは当たらないですって。皆所長を中心に頑張ってるのに、所長が壊れたらそれこそ大変ですって」

そう、なんだかんだ言ったって、皆所長をリーダーとして一丸になつて頑張っているのだ。

その所長が己を省みずに仕事を続ければ、大丈夫なのかもしれないけれど心配にだつてなる。

「所長はいつも気を張って頑張っていたんでしよう? 魔術協会でも権力闘争だつてあったんでしようけど、肝心の魔術協会は今ありませんし少しだけ気を抜いたってバチは当たりませんって」

「これはアニムスファイア家としての矜持よ。人理を守る…それこそがアニムスファイア家の在り方。でも…そうね、貴方の心配も尤もかもしれないわ」

そう言つて所長は大きく深呼吸をして、椅子を回転させて僕に背中を向ける。

「マスター適正が無い。ただそれだけで、私の魔術師としての価値は低いものになった。先頭切つて戦うはずが戦えない魔術師なんて笑い種よ。だから必死に努力して認められようと頑張つて：レフやロマニに出会つて：：なのになに：」

「僕は魔術世界の事は分かりませんが：：それでも所長は頑張つてきたのは分かりますよ。僕を見つけたのだから戦力として数える為なのは分かっていますけど、魔術協会の横槍でそれが出来なくなる事態を避けるために自らが出てきたんでしようし」

本当であれば、スタッフを派遣してスカウトすれば良いだけの話だ。

けれども、事を水面下で推し進めて円滑にカルデアへと参加できるようにしたのは、僕と言う存在を他の魔術師に横取りされない為だろう。

ホルマリン漬け：：まで行かなくとも人間的な一生から遠ざけられるのは、強ち嘘と言う訳でもなさそうだし：。

「慰めはいらないわ：：私はまだ結果を出していない。この異常事態を解決していかないもの。だから、東雲 良太：：貴方は私の為に戦いなさい」

「精々そうしますよ：：その代わりに、終わったらやる事やつてもらいますけどね！」

「ガメついわね：：報酬だつて出てるんだから：」

所長は呆れたように溜息を吐き出して、手を払って出ていくように促す。

僕はその背に一礼だけして、部屋を後にする。

——そう、やつてもらおう事があるのだから此処で倒れられたら困る。

その為には僕もまだまだ踏ん張らなくてはならない。

グランド・オーダー
聖杯探索は、まだ始まったばかりなのだから。

暗く、冷たく、静寂が支配する影の国。

この国は死霊や亡者、悪しき者を封じ込め続ける監獄の様な国だ。だけど、この国は知る者ならば必ず目指したいと言うほどに、注目を集める国でもある。

武を極め、神すら殺したケルト最高の戦士であるスカサハが君臨し、支配している国だからだ。

武を極める為だけに決死の覚悟で影の国の門を叩き、女王に認められた者のみが師事を受ける事ができる。

僕はそんな影の国に迷い出て、あまつさえ偶々近くに居た女王スカサハをおばさん呼ばわりしてしまった。

子供心にとっても綺麗で、どこか冷たくなっているような印象を受け、しかしながらとても老成しているように見えてしまったからだ。

その瞬間のスカサハの変貌ぶりと言うのは…その、思い出したくない、かな…。

ナマハゲだってあんな怖い顔していないし、投げつけられる短刀を必死に避けながら逃げ惑う羽目になってしまったくらいだ。

ともあれ、僕としては出会い方は最悪だったし、できれば2度と来たくないと思っていた。

思っていたのだけれど…どうしても僕はこの場所に迷い出てしまう。

最初の頃は、スカサハも僕の事を無視して居ないものとして扱っていたのだけれど、1週間も連続して現れるものだから観念したのか僕へと話しかける様になっていった。

『神代の法則が消え失せた時代にあつて、こんな出鱈目は2度とお目にかかれないだろうからな』

そう言つてクスリと笑つたスカサハの顔は、とても美しくて…そして、寂しそうだったんだ。

よくよく考えればそれもそうだろう。

だってもうこの国を目指そうなんてする戦士はこの世に居ないし、

ましてや死霊の類だつて来やしない。

存在だけは知っているけど、誰も彼もがこの国を訪れない。訪れたくても訪れる事ができない…が、正しいのかもしれないけれど。

でも、僕は来ている…僕は確かにこの場所に居て、孤独な女王と対峙している。

対峙しているんだけど…。

「なんでっ槍っ振ってるんでしょっか！重いつんですけど！」

「暇つぶしには丁度いいからな。それにこの私自らが師事してやるのだ。時代が時代ならば、皆（あまりの厳しさに）泣いて喜ぶところなのだがな？」

「もう腕がプルプルいつてる感じがあ！」

影の国に行き着く様になって早1ヶ月…僕は何故かスカサハの門下生と言う扱いになり、子供の細腕で大人が持つような長さの槍を持って構え、突き、構え、突き…をエンドレスでやらされている。

なんでも、この単純な繰り返しがあらゆる状況で役に立つとか何とかで、僕としても何故かあの笑顔で槍を差し出されたときに断ることが出来ずにこうして振ってしまっている。

…子供心に美人だと思うし、お母さんより美人だし…その、ませているわけではないと思うけど…。

「ふむ…魂のみだと言うに影響が出るか…まったく——」

「これ、いつまで、やれば、いいんです…!?!」

かれこれ槍を振り続けて2時間…当の昔に腕の感覚は消え去り、それでも機械的に止めることが出来ない。

止める事はできるかもしれないけれど、それでスカサハをガツカリさせたくないと言う思いが僕の胸の中にある。

この気持ちは…なんなのだろう？

「そうさな…お主が目覚めるまではやってもらうとするか」

「僕の腕をどうしたいんですかあ!?!」

ひとまず…僕のお師匠は無茶ぶりが好きなようです——。

「むにゃ…んん…っ」

とても懐かしい夢を見た。

まだ僕が小さくて、何も知らなくて、お師匠と出会ったばかりの頃の夢。

出会いこそは最悪だったけれども、僕に戦う術を暇つぶしとは言え教えてくれたあの頃の夢。

起きたら腕が普通に動いたことに、軽く感動したのを覚えている。なんだか感慨深いなあ…なんて思いながらも、目覚ましがまだ鳴っていない所を察するに起床時間には程遠いようだ。

僕は二度寝を決め込んでしまおうと、目を開ける事もせず身体を少しだけモゾモゾと動かして体勢を変え…ようとして腕が何かの下敷きになっていることに気付く。

おそらく清姫が布団の中に潜り込んで、僕の腕を枕代わりにして寝ているのだろう。

最近では僕としても慣れてしまったもので、同衾だとか裸を見られた程度では最早動じなくなってしまった。

ああ…でも立香さんとマシユには見られたくないなあ…うん。

でも、全部見られちゃったんだよなあ…。

と、少しばかり気落ちしてしまったところで、僕は何か違う様な違和感を感じる。

具体的には呼吸がしづらいとか、なんか足も動かさにくいどころか絡まっていると言うか…。

「…なんだ、もう目が覚めたのか？休息とて戦士の仕事だ、まだ寝ていろ」

「……………」

聞き覚えのある声がしたと思えば、何故か体が柔らかくて温かくて良い匂いのする方へと思い切り押し付けられ、まるで金縛りにあったかのように動かなくなる。

動かなくなる…と言うか、動けなくなる…が正しいかもしれない。

一瞬で顔が耳まで真っ赤になるのを感じるし、頭の中はどうするべ

きなのか混乱の極みにある。

清姫、と思っていた相手は僕のお師匠で、お師匠が何故か僕と一緒に寝ていてあまつさえ抱き枕にしていた…!?

「良いから、寝ろ」

「ふあ…ふあ…」

僕の身体は丁度お師匠と向き合って抱きしめ合う形になっていて、必然的に頭が胸に埋められる形になっている。

その柔らかい感触や暖かさは僕の混乱を一層際立たせ、お師匠からの命令も生返事で返してしまう形になってしまう。

いや、どうしてこんなことに…?

次の第3特異点攻略までにお月見で一悶着あったり、第六天魔王と幕末の天才剣士が女の子だったとか判明したりした事件があったりはしたけども…。

これらの事件は立香さんが主体となって解決していったから、僕としては特に何もしていない。

寧ろ僕は何もするなど所長とお師匠に言われて、頭を抱えてしまつたくらいなだけ…。

「人間らしい事くらい、私とてするものさ。そんな気分させたのが人理焼却だと言うのだから、少し癪ではあるがな」

「……」

お師匠は普段よりも幾分か優しい声色で僕に語り掛ける。
感傷的になっている…と言う事なのだろうか？

「いや…人間らしい、と言う感情を思い起こさせたのはお主もだったな。フツ…あの様な物言いはセタンタくらいな物だと思っていたがな」

お師匠は僕の頭を優しく撫でながら、まるで思い出話の様にぽつりぽつりと語っていく。

母、と言うよりは姉の様な距離感。

僕個人の感情としては、家族以上の近い距離感。

僕は無意識の内にお師匠に抱き着く力を強めていく。

抱き締めてくれているのだから、きつとこうするのが正しいのだと

思う。

「脅かせば来ないだろうと思えば毎日訪れ、無視をすれば良いと言うのに…私を殺せるような者でも無いと言うのに…いやはや、私も耄碌したものだ。今ではお主を弟子として鍛え、マスターとサーヴァントと言う粹にさえ嵌つてしまっている。今こうしている事は、人理を正せば私が見た夢の様な出来事となるのだろうか」

人理が焼却され、星が焼き払われた事で表裏一体となっていた影の国もまた焼き尽くされお師匠と共に消滅した。

だから、お師匠はこうして英霊と言う形でこの場に現界して、僕と共に居てくれている。

でも、人理修復を成し遂げれば…その時は…。

「ああ、そんな事もあったのだろうか、一笑に付して終わる様な夢だ。しかしな、良太…今成そうとすること、成した事全てが無駄となるわけではない。そんな事と言うのは簡単だが、起きたという事実は変わらずに残り続ける。ああ…きつとな」

少しだけ、ホツとした自分が居る。

英霊は、本体から記録を引き継いで活動する分身みたいなもので、本人ではあるし本人では無いとも言える。

だから、お師匠と別れる事になってしまった時、あの影の国で再会を果たしたときに今こうして過ごして過ごしてきたことを覚えていないのではないかと…そんな不安を少しばかり感じてはいた。

だけど…覚えていてくれると言うのであれば…僕は…。

「はあ…いかなん、うむ…いかん。これではまるで私が少女の様ではないか。まったく、幾分感覚が若くなっている自覚はあったが…」

「…？」

「お主は顔を埋めていれば良い！」

「ん〜！ん〜！」

ぶつぶつとお師匠がボヤいているので、何事かと気になって顔を胸元から離して上げようようすると、お師匠は僕の頭を抱え込む様にして腕を回し、僕の自由を奪うどころか思い切り密着してくる。

必然、僕は呼吸する事が出来なくなり、必死に離れようともがくも

の、そこは筋力B…人間程度の力で引き剥がせることが出来る訳が無く、徐々に僕の意識が薄らいでいく。

「今晚の出来事なんぞ夢泡沫だ。良いな、夢として処理をするのだぞ？」

「ん…ん…ん…」

何かお師匠が言っているような気がするものの、僕はそのままゆっくりと意識を手放していく。

…ああ、僕の死に場所は此処だったかあ…。

「と言う夢を見た気がするんです。はい」

「なんじやなんじや、正座師匠とキャツキヤウフフした夢ってだけではないのか？」

「いやいや、マスターも男の子…欲求不満が溜まってるんじゃないですかね？」

ぼんやりとした頭で目覚ましを止め、僕がゆっくりとベッドから起き上がると同時に、先日契約を果たした輝く木瓜紋をあしらった軍帽を被った軍服の(美)少女と桜色の袴姿のアルトリアっぽい顔の(美)少女が入ってくる。

軍服の方はかの第六天魔王『織田 信長』。

そしてハイカラな和装の方が新鮮組の天才剣士『沖田 総司』。

どう言う訳か史実とは異なる性別なのだけれど、当時の事情を考えれば是非も無し…と言うやつなのだろうか？

ほら、昔は女性優位ってわけではなかったし…。

因みにこの2人の所為で起きた事件があったのだけれど、それはものの見事に立香さんが無事に解決してくれた訳なのだけれど、いざ召喚となった時に何故か立香さんは大量のマナプリズムとより高純度の魔力の塊であるレアプリズムを量産してしまうと言う事故に合い、僕が召喚チャレンジしてみようかと偶々手に入れていた2枚の呼符を使用した所、無事召喚となった。

これは、『縁だけでなくマスターとの相性にも左右されるのではないか?』と所長とダヴィンチちゃんが仮説を立てていたのだけれど：僕は単純に運なんじゃないかとも思う。

「うん…いや、君たちがあまり気にしないの分かってるんだけどさ：とりあえずシャワー浴びたいから出てってくれるかな?」

「えー、ワシマスターの部屋でゴロゴロしてポテチ食べる予定じゃったんじゃが…?」

「沖田さんはマスターが持っているという、ジ〇ジ〇読みに来たんですけどー」

「あんたら今日レイシフトするって知ってつか…?」

僕はガラス張りのシャワールームをそつと指差して2人に出ていくように促すものの、既に信長は僕のベッドに寝そべってポテチの袋を開け、沖田はベッドの下にある本棚代わりの段ボールを引っ張り出して中身を物色しはじめる。

やだ…こいつら現世エンジョイしすぎでは…?

「かっかつか! そんなもん勿論わかっておるわ〜! こうして普段通りにエンジョイしてリラククスした姿を皆に見せる事によって、不安を拭い去ろうとしているのが分からんか!？」

「もうやだこの尾張のうつけ…」

「沖田さんは常在戦場ですからね。いついかなる時でもマスターである貴方の元にワープして駆けつけますとも!」

「肺結核そのまんまの癖に無理、すんなよ…?」

「是非も無いよネ!」

僕は諦めて2人の目の前で衣服を脱いで、のそのそとシャワールームへと入っていく。

「いやー、それにしても鍛えてますよねえ」

「実は平成は戦国じゃった…?」

「えー、そこは幕末にしましょうよ。土方さんが見たら嬉々としてスカウトしそうですねえ」

「人斬りサークルなんぞつまらんし、ここはやはりワシと天下布武! 日本と言わず世界を手中に入れるとこじやろー」

「はいはい本能寺本能寺」

「おのれ光秀！」

非常に気安く、また容姿の年齢が近いと言う事もあって、マスターと英霊と言うよりも、同じ高校の同級生くらいの距離感を感じずにいられない：なんかこの2人に裸を見られても何とも思わない辺り、僕も相当キているような気がするけど。

きやいきやいと2人が会話を楽しんでいる横で、僕は素早く新調されたカルデア戦闘服へと身を包み、感触を確かめる。

素材自体は変わらないのだけれど、幾分か魔術スキルを起動させやすくなっている気が：する。

まあ、戦いに支障が出なければ僕としては何でもいいので、気にしないようにしておこう。

「ほら、2人とも行くよ〜」

「「いってらっしやく〜い」」

「令呪使われないのかな？」

僕はゆらりと体を動かして、ベッドの上で動かない沖田と信長の首根っこを掴んで身体強化のルーン魔術をかけて持ち上げる。

幾分魔力消費が抑えられたお陰なのか、大した疲労感も無く魔術を行使することができている。

流星はカルデアの技術スタッフと言ったところか…。

2人とも一般的な同年代の女性と同じくらいの体重しか無い様で、楽々と持ち上げる事ができた僕は、2人を持ち上げたまま部屋から出て管制室へと向かっていく。

「今度のレイシフト先は海だつて言うから、おつきとノツブには期待してるんですからね？」

そう、今度の舞台は海。

小島が点在しているだけで、特異点対象区域のその殆どが海となっているそうだ。

となると移動手段は必然的に船と言う事になるのだけれど、こうなると僕の手持ちの英霊であるアルテラと清姫は使用を控えなければならぬ。

なんせ2人とも吹き飛ばしたり燃やしたりが得意だから、船を用意できてもしもいざ戦闘と言うタイミングで自爆しかねない。

「いや、セイバーは最優のクラスですからねえ」

「病弱持ちの最優とか是非もないんじゃない？」

「やります？ノッブとは相性最高なの理解できてます？」

「ワープとか卑怯にも程があるんじゃない？」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ沖田と信長を脇に抱える様にして持ち直しながら管制室へと入り、ロマンや立香さん、マッシュ達と会話をし、簡単なミーティングをしていく。

その中で話題に上がったのはやはり72柱魔神の事だ。

ロマンや所長が言うには、魔神＝悪魔と言うイメージは、魔術王とまで呼ばれるソロモンよりも後の時代にイメージが付けられたものだそうで、仮にソロモンが宝具として使う場合、もっとシンプルな形になるらしい。

：ロマンが熱弁しているのを聞いていると、なんだかとても詳しい様な気がしてくるけども、そこは置いておく。

一先ず留意すべきは今後の聖杯探索でも充分魔神柱が出てくる可能性はあるし、投入される数も不明。

いつも以上に気を引き締めてかかる必要がある、と言う事だけ肝に銘じておけば良いのだから。

ミーティングを終えた後、それぞれのコフインの前に立って中に入ろうとすると、アルテラが実体化して僕の肩を掴む。

「マスター」

「ん…？」

僕はコフインからアルテラへと向き直り、首を傾げる。

戦いや実生活を通して、少ない日数ながらもコミュニケーションはそれなりにこなしてきた。

アルテラはあまり自分から能動的に動くような感じでは無かったので、こうして現れた事に何か違和感を感じる。

「マスター、必要であればすぐに声をかけろ。私はお前の敵を破壊する剣。お前に立ちふさがる壁を粉碎する剣だ」

「分かってるよ、アルテラ。今回は場所が場所ってだけだし、僕も馬鹿じゃない…：いつだって頼りにしているよ」

「ああ、ではマスター…：お前の呼び声を待っている」

僕はニツと笑みを浮かべて親指を立ててアルテラの言葉に頷くと、そのままコフィンの中に入ってハッチを閉める。

アルテラはその無表情さとは裏腹に、何か予感を感じているのか不安な様子だ。

戦士の勘、と言うやつだろうか？

アルテラの場合、つて凄そうだし…：なんせ渾名が戦闘王だ。

ともあれ、今回の特異点へのレイシフトは、スタツフが…：とりわけ所長が念入りに検証して安全にレイシフトできると実証している。

この点に関しては不安を覚える必要は無いと僕は思っている。

『準備は良いかしら？』

「僕はOKです」

『藤丸 立香、準備おっけーです！』

『マシユ・キリエライト、いつでも行けます！』

所長が管制室から通信を入れてくる。

その声はやはり、どこか緊張しているように思える。

長時間かけて検証して結果を導き出したのだから、もう少し自信を持って良い気がするんだけどなあ…。

けど、それだけレイシフトと言うのは、常に危険が孕んでいると言う事でもあるのだろう。

何か数値に異常が起きれば、そこから綻びが生じてしまつて自分を認識できなくなつて消滅してしまう。

…：普段キツいけど、良い人なんだろうなあ、所長。

『ではA. D. 1573、大西洋エリアにある第3特異点へのレイシフト実証開始します！3人とも…：バックアップは私たちに任せて、きちんと生きて帰ってきなさい！』

所長の宣言と同時にレイシフト開始のアナウンスが入り、一瞬の浮遊感と同時に何処かへと引き込まれる感覚が僕の身体を襲う。

その感覚は今までのレイシフトでは感じなかった微小な違和感…

だけど、僕の頭の中で凄まじい爆音で警鐘が鳴り響く。

しかし、レイシフトが始まってしまった以上最早逃れる術はなく、僕はそのまま嗅いだ事のある匂いの場所へと降り立つ。

「…海ってなんだっけ？」

「何言ってるんだ、お前？」

そこは僕の良く知る現代日本のコンクリートジャングル。

螺旋の塔を背景に、目にも鮮やかな赤い革ジャンを羽織った女性が、僕の事を訝しげに睨んでいた。

境界特異点 空の境界／the Garden of
f Order

#45

ふわり、とした浮遊感。

それと同時に起きる凄まじい倦怠感。

まるで眠りに落ちるかの様な感覚が僕の身体全体に襲い掛かり、僕は思わずその感覚に身を委ね…そして夢を見る。

此処までなら、いつも僕がレイシフトを行う際の感覚に似ている。

だけど、今回はどうにも勝手が違うようだ。

僕が見る夢なんて、それこそあの影の国での思い出と——だけだ。

それなのに、僕の目の前にはとても鮮やかな着物を着た麗人が、目の前で微笑みながら立っている。

いつもと違う趣向に目をパチクリとさせていると、目の前の麗人はクスリと手で口元を隠しながら笑い、穏やかな声色で此方に話しかけてくる。

「あら。ここにお客様が来るなんて、どんな間違いかしら。夢を見ているのなら、元の場所にお帰りなさい」

「…此処に来たくて来たわけじゃないんです…僕はやることです…」

そう、成すべきことがある。

人類が未来へと生き延びるために、どうしたって成し遂げなければならぬ事がある。

人理焼却…この事実を消し去るために僕は闘わなければならない。

「此処は境界のない場所…アナタはギリギリで踏み止まれる人なのだろうけど…ふふ、ごめんなさい。こちらが縁を結んでしまったせいね。今の内に謝っておくわ、東雲 良太君」

「貴女は…何者…?」

僕は、再び身体が凄まじい倦怠感に襲われるのを感じ取り、足元に広がる花畑に膝を折って倒れ込む。

何か：何かこのままだといけない気がする：けれども、この安らぐような倦怠感には抗いようのない揺り籠の様な魅力で満たされている。

さあ、と言う音共に、僕の背を優しく刃が撫でていく。

それと同時に身体は直に死を感じたかのように緊張感に包まれ、呼吸は荒くなり、全身から冷や汗が滝の様に流れていく。

「っ…!!!」

「私は眠っているから外のコトは分からないけれど、何が起きたのかは予想できる」

麗人はいつの間にか手に持っていた刀を1度振ってから鞘に納刀し、此方にしやがみ込んで両手で僕の頬に触れていく。

その瞳は淡い輝きを放ち：そう、まるで宝石の様な輝きを放つ。

「貴方を此処に引き寄せてしまった事は謝るわ。けれど、同時に貴方は貴方を憎む人に掴まっている。だから――」

それと同時に視界が暗転する。

死への恐怖感で身体の緊張は極限へと達し、まるで水中に落とされたかのように呼吸が出来なくなる。

僕は、一体誰と話しているんだ…!?

「――会う時があれば私の名前を呼んでね、命知らずのマスターさん」
得体の知れない麗人の一言と共に、僕は一気に身体が奈落の底へと落ちていく感覚に支配される。

何処までも何処までも続く深淵のその先：唐突に出口が出来上がったかのように落下している先に光が広がり、僕はあまりの眩しさに目を閉じてそのまま落下していく。

強い光が収まると、いきなり舗装された道路が目下に広がって受け身も儘ならないままに激突するように着地した。

「いっ…!!!」

着地した瞬間にすぐさま全身の肉体から力を弛緩させて五点着地の要領で道路を転がり、痛む身体に思わず身悶える。

覚悟も何もあったものではない唐突な仕打ちに、僕は思わず泣いてしまいそうになるのだけれど其処は我慢。

悪態の1つや2つ吐きたいけれど、そもそもレイシフトはまだ安定して行えると言う保証が無いので、スタツフにそんな悪態吐いているところを見せる訳にはいかない…と考えた所で、僕は自身が置かれている状況に気付く。

潮風が、ない。

「んな…んこは…!？」

遠くに見える高層ビル群、周囲も近代的な家屋が並び、見慣れたコンビニエンスストアやガソリンスタンド…なんだったら自動販売機だつて置いてある。

そして、なによりも塔の如く高く聳えるマンションの様な建物が、近代日本であることを悠然と物語っていた。

「…海つてなんだっけ？」

「何言ってるんだ、お前？」

予定していた大航海時代的特異点とは打って変わって、非常に近代的と言うか僕の良く知る街並みに呆然として眩くと、音どころか気配すら漂わせずに背後からどこかぶつきらぼうな印象を受ける若い女性の声がかけられる。

レイシフト直後で感覚が鈍っている…等とは言えないだろう。

これが敵なら僕は虜囚か最悪死体送りだ。

「何黙ってるんだ？お前もそこら辺に居るゾンビだとか幽霊だとかそういう類じゃないんだろ？」

「えくと…お姉さん…そのチクチクするような殺気を抑えていただけるとですぬ…？」

僕が無反応でいるものだから、後ろにいるお姉さんは僕の背中…と言うか首筋辺りに明確な殺意を向け始めながらゆつくりと近づいてくる。

僕は袖口に仕込んでいたルーン文字を刻んだ魔石に魔力を注ぎ込みつつ、ゆつくりと両手を上げて後ろへと振り返る。

そのお姉さんは、兎に角特徴的な…と言うか大分個性的な出で立ちをしていた。

目につくのは真っ赤に染められた革ジャン。

気温は肌寒いくらいなので、女性が革ジャンを着ている程度では個性的とは言えないだろうと思う。

別にロツクな着こなしを…しているね、うん。

問題なのは革ジャンの下に着ている衣服。

何故か彼女は革ジャンの下に着物を着ているのだ。

どう考えても袖周りがとんでもないことになっている筈なのだけれど、彼女は今のファッションスタイルを貫いているのか、表情には煩わしさと言うものを感じさせない。

感じさせないのだけれど…。

「お姉さん、さつき会いませんでした…？」

「なんだ？最近はコスプレでもしてナンパするのが流行っているのか？」

「いえ、ナンパとかじゃなくてですね…」

似ている。さきほど、境界のない場所とかいう所で出会った女性と顔立ちが似ているのだ。

とは言え髪の長さがかなり短くなっているし、身に纏う雰囲気も真逆に感じる。

僕はキチンとレイシフトしていたのだろうか…いや、予定した場所に居ない時点で、このレイシフトは確実に失敗していると言えるのだけれど…。

どうしたものかと腕を組んで首を傾げた瞬間、僕の頬を掠める様にしていきなりナイフが投擲されるのと同時に、目の前のお姉さんの背後に髑髏の面構えをしたゴーストが両手の爪を振りかぶって襲い掛かろうとしているのを見る。

「お姉さん伏せて！」

「チツ…！」

お姉さんに伏せる様に言いながら、僕は袖の裏に隠していた魔石をゴースト目掛けて投擲。

小石がゴーストに触れた瞬間砕け散り、ルーン文字が内包していた魔力が解放されて爆炎が上がる。

お姉さんは伏せると同時に、しなやかな猫の様な身のこなしで僕の脇を通り抜けて投擲されたナイフを手に取り、何処からか現れたスーツに身を包んだゾンビの胴体を文字通り一閃し、まるで鋭利な剣で切り払ったかのように肉体をバラバラにしていく。

ただのナイフで、だ。

そこに疑問は感じるのだけれど、僕は意識を目の前の戦闘へと集中させていく。

自身に格納された概念礼装であるゲイ・ボルクを取り出して、素早く構える。

「はっ！」

鋭く息を吐き出しつつ一歩踏み込んでの渾身の突きを、僕の前に飛び出してきたゾンビの心臓目掛けて放つ。

吸い込まれるように心臓に突き立てられた朱槍を素早く引き抜いてから後ろ向きに回し蹴りを叩き込んでゾンビの身体を蹴り飛ばし、寄ってこようとしたゴーストへとぶつけ…るはずだったのだけれど、そのまま素通りしていく。

：ゴーストなどに代表されるエーテル体は、魔術などで補強した攻撃でなければ物理的な干渉を行う事ができない。

いつも自然な状態で穿ったりしていたので、うっかりそのことを忘れてしまっていた。

「やっすい夢だな…ゾンビとかしゃれこうべの幽霊だとか今日日流行らないだろ」

「夢じゃないんだよなあ…」

僕が少々心細い思いで必死に槍を振るっていると、再び背筋に強烈な殺気を感じ取り、思わず状態を思い切り倒す。上体を思い切り倒す。

それと同時に、明確な死の気配が横に一閃される。

「ちよーなんで!?!」

「お前が現れてから幽霊だのゾンビだのが出てきたんだ。お前が元凶って事で良いんだろ?」

「よかねーです!」

どうも革ジャンのお姉さんは、あまり深く考える事をしないようだ。

僕と幽霊たちの因果関係を勝手に結んで、僕が元凶なのだと思いつけてしまっている。

「どつちにしろ、これは夢だ。此処で死ねばベッドで跳ね起きて『ああ、悪夢だった』って言って終わりだ。オレが目を醒まさせてやるよー。」

「なんだかヤバイ!!」

直感…とでも言うのだろうか？

何故か分からないけれど、お姉さんの攻撃は決して受け止めてはならない気がしてならない。

予感だけれど…分厚い鋼鉄ですら紙の様にスパスパと斬り裂いてしまう気がする。

「チツ、すばしっこいー!」

「これでも、鍛えてるんで!」

足運び、腕の動き、呼吸、視線…それらの動きから死の一閃が何処からやって来るのかを予測して紙一重で避けていく。

互いの視線が交差するとき、お姉さんの両目がまるで虹の様な光を宿している事に気付く。

吸い込まれそうな程に綺麗な光を放つ両目は…まさに死と言うものを放っているように見える。

何にせよ、このお姉さんの攻撃は受け止めてはならない…理屈云々は抜きにして、ゾンビを両断する程の絶技なんて受けたいはずがない。

僕は両足に身体強化のルーン魔術を施して、一足飛びでお姉さんから距離を開ける。

しかし相手も距離を開けたがっているのは分かっていたのか、僕と同じタイミングと距離を跳躍して追いかけてくる。

「サーヴァント!?!」

「オレは使い魔なんかじゃない!ほんと、すばしっこいなお前!」
絶対に受けてはならない。

説得しようにも聞く耳持たないスタンス。

このままでは埒が明かないのは自明の理…ともなれば、反撃に転ずるほか無い。

怪我をさせない程度に痛い目を見てもらうしかないと悟り、僕は腰にあるポーチから魔石を3個程取り出してそれを地面へと投げつける。

「目くらまし!?!」

「その目が問題なんだから、目つぶしくらいするでしょ!!」

投げつけた魔石が地面に当たった瞬間、強烈な閃光を発して視界を白に染め上げる。

虹の光を放つ目…ゴルゴーン等が持つ魔眼の類ならば、視界を封じてしまえば妙にキツイ死の気配を遠ざけられるはず。

事実として未だ死の気配は感じるのだけれど、先ほどよりも幾分かはマシになっている。

閃光が収束する前にお姉さんから距離を取り、一呼吸つく。

「僕はゾンビだのゴーストだのとは無関係ですって…多分」

「多分じゃ困るんだよ。あんなのうろついてたら近所迷惑も甚だしいだろ」

「でも、僕だつて襲われてたでしょ…?」

僕はお姉さんと敵対するような理由は無いので、一先ず距離を開けるだけに留めて穏便に話をしようとする。

お姉さんはお姉さんで目くらましが効いているのか、その場から動かずに苛立たし気に唇を尖らせる。

「とりあえず、今の状況は夢ではないんで…」

「こんなことが現実だつて言うんなら、B級ホラー映画じみてるぜ? まったく…」

埒が明かないと思っていたのはお姉さんの方も同じだったようで、手に持っていたナイフを懐に仕舞い込み深いため息を吐き出す。

そんな様子に僕は漸く一息ついて、手に持つ朱槍を体内へと格納してゆつくりと近づく。

「僕は、人理保証機関カルデアから派遣された魔術師です。いや、本当

はこの時代のこの場所に派遣された訳じゃないんですけど…」

「カルデア…？聞いたことないな。なんだそれ？」

「国連の機関なんだけどなあ…」

漸く視界が元に戻ったのか、お姉さんは胡散臭いペテン師を見るような目で僕を見る。

先ほどまで虹の光を放っていた目はそこになく、日本人特有の黒瞳がそこにある。

僕はお姉さんに搔い摘んで現在の状況を伝えると、軽く鼻で笑われってしまった。

「それこそ笑えないな。寝ている間に人類は終わりましたなんて、与太話にだってなりはしない」

「まだ、終わってないから、こうして僕がいるんですけどね…。ともあれ、人の気配が無かったので途方に暮れていたんですけど、お姉さんが居てくれて助かりました」

「なあ、さつきからオレの事をお姉さんって言うの止めてくれないか？オレには両儀 式って名前がある」

「それじゃ、両義さんで。僕は東雲 良太。さつきも言った通り魔術師です」

簡単な自己紹介を終え、僕とお姉さん…いや、両義さんは目の前で聳え立つ巨大な塔：オガワマンションと表記された建物を見る。

それはまさに異界の様な雰囲気醸し出して、今の状況の中心地なのだと誇示しているかのようにも見える。

「まあ、アンタが派遣されたって言うんなら手伝ってもらおうか。魔術師って言うには腕つぶしも良いみたいだしな」

「カルデアと通信繋がらないですし、僕は構わないですけど…何をするんです？」

確実に異変が起きている。

その調査が必須なのは間違いないのだけれど、今はお師匠とはぐれてしまっている。

相手に英霊が出てきてしまった場合、両義さんと僕とではかなりの苦戦を強いられてしまう気がする。

しかし、両義さんはそんな僕の心中を知ってか知らずか、事も無げに僕にこう言い放った。

「なにとって…決まってるだろう？このマンションの解体だよ」

マンションの解体…と、両儀さんは事も無げに言い放つ。

実際に解体するとなると爆破やら何やらで吹き飛ばすのが定石なのだろうけど、今は異常事態が起こっている。

具体的に言うと、このマンションは物理的な手段…更には魔術的な手段でも破壊できないようになってる。

1度自分でも魔術的手段で外壁を破壊してみようと魔石を何度か放り込んでみたのだけど、破壊された瞬間にまるで時間が巻き戻されるかのように破壊された箇所が修復されてしまった。

両儀さん曰くこのマンションには人ならざる存在…アンデッドが徘徊していて、各階に英霊達が住み着いている状態なのだと言う。

このマンションに居る英霊を追い出さない事には破壊することができず、ご丁寧な事に各部屋には特別な封印が施されている。

この封印自体は特定の条件を突破すれば破壊することができると言う事までは分かったんだけど、如何せん魔術に関してはルーン魔術以外は門外漢。

具体的な条件まではハッキリとは分からないままで。

「1度取り壊したつてのに、幽霊屋敷となつて夢に出てくるとはね…」
「両儀さんは詳しいんで…?」

異空間と化しているマンション…そのエントランスから1階に巣食うアンデッドを2人で処理をしていると、両儀さんは深いため息とともにぼやく様に呟く。

「まあな。魔術師、荒耶 宗蓮が作り上げた場所がここだ」

「魔術師…つて言う事は、此処つて工房!？」

「それならまだ可愛げがあるんだけどな。ここはきちんと市に届け出を出して、まっとうな建設業者が働いて、普通に住人募集をしていたんだぜ?もつとも、住人以外は寄り付かない場所になつちまったんだけど」

魔術工房として住宅地のど真ん中にこんな目立つ建物を建てて、何も知らない人々が住んで暮らしていた…?

異常にも程があるのでは無いだろうか？

魔術や神秘は秘匿されて然るべき、と言うのが魔術世界における基本……らしい。

僕にはそんな意識がてんで無かったからお守り作ってたりしてばら撒いていたのだけれど、普通の魔術師としては絶対に考えられない行動だろう。

しかもこのマンション……造りを見る限りでは完全に一般向けの住宅と言った感じで、魔術的な独特な雰囲気と言った感じがまるでしない。

ぶつちやけて言えば、住めるならこんな高層マンションに住んでみたいなって言うのが本音だ。

普通なのに此処は異常をきたしている。

ここを造り上げた魔術師は、一体どんな心境でいたのだろうか？

「もしかして、……この住人全員……？」

「……ここは死を蒐集した展覧会だ。寿命。病死。事故死。暴力死。そういった死に方を集めて飾って観察してたのさ。此処に住んでたやつらは1日生きて、死んでを繰り返してる」

「……」

訳が分からない。

生きては死んで死んでは生き返って……そしてまた死ぬ。

生きているものはいずれ死ぬ……それは今日かもしれないし明日かもしれない。

いずれと言う事が分かるだけで確実にサイクルとして生死を繰り返していく意味が分からない……こればかりは首謀者に話を聞いてみないと分からない所だろうけど、今回はそんな必要もないだろう。

なんせ、異常を起こしているのは英霊……付け加えるならば英霊を呼び寄せた張本人が元凶だ。

恐らくこのマンションのどこかに居るだろうし、その時にこの場を造り上げた意図を問い質せば良い。

緩慢なゾンビ、脆いスケルトン、霞の様なゴースト……これらのアンデッドは僕と両儀さんが世間話でもしながら片手間に掃討していく。

これらのアンデッドに共通しているのは、現代日本で良く見られる
フアッションに身を包んでいる事だろう。

スーツのゾンビとか現代社会の風刺っぽくて、直視しづらかったな
…。

「廊下に徘徊してるゾンビはアレだぜ。以前から、この建物の住人だ」
「はあ…」

「もう何年も前に死んでるって言うのに、持って生まれた運命の果て
…その死因は絶対に変わらないってことを証明する為だけに集めら
れたからな。ループなんてのは生易しい。ここはリトライする場所
だ。お前が来る前からこの住人は死に続けている」

…でも…リトライだと言うのであれば…そして、此処が1度取り壊
されていると言うのであれば…きつとどこかで綻びが生じたのだろ
う。

その魔術師が証明しようとした運命の果てと言うものは、否定され
たと言う事なのだろうか？

もつとも当人はこの場に居ないし、それを確かめようとは思わない
けれど。

「粗方掃除は終わったが…これでダメだったらどうしたもんかな…
？」

「開いたら開いたで不安はありませんけどね…」

両儀さんが104号室の扉を開けようと手を伸ばす前に、ガチャと
言う音と共に内側から扉がゆっくりと開かれる。

どうやら、僕達がしてきたことは無駄とはならなかった様だ。

両儀さんと一緒に顔を見合わせてこちら側から扉を開き、一気に中
へと踏み込む。

果たして、この部屋に待ち受ける者は――

「む…随分と遅い到着だな、良太？」

「…お師匠？」

「師匠…？」

其処にはこの特異点に流れ着いてから逸れてしまっていた僕の師
匠…スカサハが何ともリラックスした様な体勢でソファ―に座って

両手でマグカップを持っていた。

色々と突っ込みたいところをグツと抑え込んで、ただそれだけならば良かったのだけれど、問題はその服装。

お師匠と言うといつもは黒いピッチリとしたスーツ、肩と足に申し訳程度の金属鎧、そして気品のあるヴェールを頭に被っているのだけれど、今回ばかりは違う。

白のニットワンピースに素足…普段黒づくめの戦装束でいるので、こういった姿はとても新鮮に映る。

「…何やってるんです？」

「お前たちが此処に辿り着くまで、少しばかり息抜きをな。そう怖い顔をするでない」

「なあ、東雲…この女知り合いか？」

「僕の魔術と槍の師匠です…」

お師匠は非常にリラックスした様子で、両手で持ったマグカップの中身をちびちびと飲んでいく。

両儀さんはそんな呑気な様子にガツカリと言うか毒気を抜かれたという様な雰囲気でお師匠を眺め、僕はホツとしたものか怒った方がいいのか分からない心持ちで深いため息を吐き出す。

「このマンシヨンを作り上げた魔術師は随分と優秀だったようだな。暗く冷たい影の国の様な陰気が溜まっていれば、ワシとてリラックスすると言うものだろう？」

「だからって武装解除して呑気に温かい飲み物飲んでるってのもどうなんですかね…？」

「まあまあ、堅い事を言うな。5階までの入居者は粗方片付けておいたのだ。もつとも、それですべてと言う訳ではないがな」

お師匠は呑気に背伸びをして立ち上がると、未だ目を丸くしている両儀さんの元まで歩み寄る。

流星に警戒したのか両儀さんは意識を切り替えていつでもナイフを構えられるように身構えるけど、お師匠は顔を近づけて目を覗き込むだけに留めている。

「なるほど、副次的な物とは言え、随分と高位の魔眼を備えているな

「？」

「なんだよ？」

「いいや、なんでも」

惜しむような視線を僅かばかり見せた後に、お師匠は此方へと向く。

両儀さんなら、もしかしたらお師匠を殺せてしまうのかもしれない。

その目で見えた物に刃が届くのであれば、だけど。

両儀さんは両儀さんでお師匠の様子に怪訝な顔になり、お師匠と同じように此方を見つめてくる。

「東雲、コイツ味方か？」

「そこだけは保証します。無茶振りはしてきますけどね」

「良太、ワシは出来る事しかお主に課してはいないのだがな？」

「できるかできないかギリギリのラインじゃないですかやだー」

僕はその場で頭を抱えて蹲り、今日に至るまでの修行の日々が脳裏に走馬燈の様に駆け巡っていく。

スケルトン、ワイバーン、クリード：ウツアタマガツ！

両儀さんは僕を同情するかのように見つめ、お師匠は蹲る僕の背中に腰掛ける。

「話を戻すが、5階までに住み着いていた英霊達の大半は退去してもらっているが、腹立たしい事に私だけでは対処に手間取る部分があつてな」

「お師匠で手間取るって相当じゃないですか…」

「なに、時間がかかると言うだけでな。セタンタ達が予定通りレイシフトしてしまっている以上、ワシ達でどうにかする必要はある」

お師匠の保有するスキルの中に、神殺しと呼ばれるものがある。

このスキルは文字通り生前神を殺した事があったために付与されたものであり、神性を持つ者の他に死霊特性を備えた物にも高いダメージを与えることが出来る。

そう言った特性を持つ者にとつては天敵とも言えるスキルであり、オガワハイムに集うエネミーの大半がアンデッドであることを考え

ると、お師匠が手古摺ると言うほどの相手とは一体…。

まさか魔神柱と言う事も無いだろうけど…取り巻く状況が状況なので、アレが関与しているとは思えない。

「本来であればワシもレイシフトするところだったのだろうが、マスターである良太とワシの結びつきはセタンタ達の比ではない。故にワシも此処に放り込まれる形になったのだろうな」

「兄さん達が居ないと言うのは手数的に頼りないですけど、お師匠が居るだけまだ気が楽な方ですね…」

レイシフトを完遂している…と言う事は皆立香さん達と行動をしていると考えて大丈夫だろう。

兄さん達はお師匠と違って、現界に必要な魔力をカルデアからの電力供給によつて賄うことが出来る。

宝具を使う事はできなくても、普通に戦闘する分には何とかかなるはず。

彼女たちのミッションが無事に進んでいる事を祈りつつ、此方は此方で事態を打開する方法を模索しなくちゃ。

「で、事情通みたいなお師匠は、どの程度把握しているんだ？」
お師匠に腰掛けられる僕の存在を取り敢えず無視することにした
両儀さんは、お師匠を何処か怪しむ様な雰囲気で問い質す。

知らない人間からすれば、お師匠こそが今回の元凶なのではないかと勘ぐってしまうのだろう。

しかし、お師匠はスキルによつて千里眼を得ることが出来る。

兄さんの死期すら言い当てたその千里眼を以てすれば、状況を概ね把握することも可能なのだろう。

「この聳え立つ監獄の外と内の2つの地点に染みの様な楔が打ち込まれている。まずはこの染みを取り除いてやる必要がある」

「お前、魔術師なんだろ？そう言うのを突破するような術を持ってないのか？」

「正確に言えば今の私は魔術師では無く槍兵だ。魔術も修めているが即効性のあるルーン魔術があれば戦闘に有利になると思っただから修めたと言うだけでな」

「涼しい顔でこんな事言ってますけど、そこら辺の魔術師が泣いて逃げ出すくらいには凄いで…」

お師匠は基本的に凝り性の部類だ。

とくに武術に関連する事であれば貪欲に物事を理解し、習得し、自身の業とする。

先にも行った戦闘に有利になるからと言う理由だけでルーン魔術を使えるようにしたと言うだけでなく、それを弟子にまで教え込むほどに至っている。

かく言う僕もルーン魔術だけではあるけれど、お師匠から魔術行使のしかたを教え込まれている。

よもやこれが大元の原因で僕がカルデアに行く切欠になるとは思いませんでしたけれど。

時として、善意って思いもよらぬ方向に行くこと、あるよね…？

「片付けるならば、まずは外からが良いだろう。内を破壊した所から楔を補填されてしまうのでな」

「それで、その楔つてのがお前の言う手間取る部分って事で良いのか？」

「ああ、お主もその目で見れば手間取ると言う意味も良く分かるはずだ」

お師匠は漸く僕の背中から立ち上がると、目の前で着ていた衣服を脱ぎ去ると同時に全身をいつもの戦闘衣装へと早着替えを行う。

どうやらあのニットワンピースは、この部屋にあった家人の私物らしい。

躊躇なく勝手に着る辺り豪胆と言うか何と言うか…。

「あの格好も中々悪くは無かったな。ダ・ヴィンチに衣服を用意させてみるか」

「お師匠はスタイル良いですから…」

僕としては非常に色々な所に悪いので控えてもらいたいと思うのだけれど、そこまで僕に絶対的な命令権がある訳でもないし、したところで地獄が展開されるのは目に見えている。

なのでこの想いはそつと胸の内にとめておいて、適当に頷いてお

く。

「ところで東雲のお師匠：いつもそんな全身タイトミみたいな服なのか？」

「そうだが：何か問題でもあるか？これでも伝統的なケルトの戦装束だが」

お師匠の戦装束は動きやすさを最優先にしているのか、金属鎧に相当する部分は肩と足首から先くらいなものだ。

あとは本当に皮をナメしたものと布を用いた全身スーツと言った趣のもの。

これは兄弟子であるクー・フリーンも同様なので、お師匠の言うとおりケルトの伝統的戦装束なのだろう。

ボデイラインがくつきりはつきり出る物なので、人によつては羞恥を感じてしまうかもしれないのだけど、お師匠は気に留める所かむしろ強調してくるくらいなので最初の頃は何かとドギマギした事を思い出す。

「いや、なんかすごいなお前の師匠は…」

「ははは、僕はもう慣れましたけどね…」

お師匠同様にカルデアには凄い格好の英霊がわりかし居るので、両儀さんに見せてみたい様な気がするな：こういう反応されると。

僕は自身の頬を両手で軽く叩いて気を取り直し、先に外へと出たお師匠の後を追う。

先ずは今の異常を解決することを考えよう：カルデアと連絡を取る方法もきつとその先にあるのだと信じて。

「まずはこのマンションの近くにある雑木林へと向かう。英霊の殆どが退去した状態とは言え、この場は特異点だ。このマンションは常に怪異を呼び寄せ続けてしまう以上、そこに至るまでに戦闘は避けられないものと思え」

「いや、避けないだけですよね？」

オガワマンションのエントランスホールまで来た僕とお師匠、両儀さんは、エントランスホールに大きく掲げられているマンション周辺の地図を前にこれから進む場所を確認する。

お師匠はその手に持つ朱槍を指差し棒代わりに使用して、槍の穂先を今いる現在地から駐車場の先にある雑木林へと指し示す。

指し示された場所は若干開けた場所であり、焼却炉と書かれている。

この特異点を支える楔は、どうやらその焼却炉と言う場所にあるようだ。

「なあに、駐車場を徘徊するゴーストは憑りついたところで空を飛びたくなる程度だ」

「空…？ああ、あのビルのやつも居るのか」

両儀さんはお師匠の言葉に何か思い出したのか、駐車場のゴーストに検討がついたようで適当に相槌を打つ。

この特異点は、どうも両儀さんと関わり深い存在が多数集まっているのかもしれない。

対処に困る様な事態があれば、両儀さんの知恵を借りるのが最善かな…？

「何人か一纏めで行動してるはずだ。お前の師匠を相手するよりかはまだマシンなんじゃないか？」

「お師匠はちよつと基準にできないと思いまーす」

「お前の師匠は化け物かなにかか？」

「ノーコメントでお願いしまー…いでっ！」

両儀さんは、この場に居る英霊であるお師匠を基準に話そうとする

けども、各階にいた英霊を僕からの魔力供給が出来ていたのか不確かな状態で退出させていたことを考えると、お師匠を天秤に載せるのは如何なものかと思ひ反論すると、お師匠から脳天に拳骨を優しく叩き込まれる。

「ワシとて傷つく事くらいはあるのだがな…?」

「もうちよい優しいとありがたいんですが…」

「…仲のよろしい事で」

両儀さんは呆れたように肩を落とすと右手にナイフを逆手に持ちながらエントランスから出て行ってしまう。

僕は慌てて両儀さんの後を追ひ、駐車場へと向かう。

両儀さんはまるで散歩するかのような足取りで駐車場の敷地内を歩いて行き、有象無象に近いゴーストをナイフの一閃で掻き消していく。

「あの娘の眼はな、物事の結末・終焉と言ったものをなぞることが出来る。故にその線にも似た終焉をなぞる事で、ああも容易く存在を消滅させることができる。有機物は言わずもがな、無機物から果ては概念存在に至るまでな」

「…あの眼で見て、対象を斬る必要があると言う事は、当たらなければどうと言う事は無いって事ですよ…ねっ!?!」

駐車場を渦巻く様に現れる死霊の群…そのただ中であつて、両儀さんは赤い革ジャンを翻しながらまるで羽虫を手で払う様に無造作に一撃で斬り伏せていく。

…有機無機問わずに殺す事ができる能力。

一体、あの眼にはこの世界がどのように映っているのだろうか？

僕は概念礼装である朱槍をこの手に持って、襲い来る白いドレスを着込んだ少女のゴーストの胸元に槍を突き立て、瞬時に真名開放を行う。

『『穿ち散らす死華の槍』!』

内側から無数の槍の穂先が花の様に少女のゴーストの内側から突き出し、そのエーテル体を霧散させ消滅させていく。

その一撃を皮切りに無数のゴーストが襲い掛かって来るのだけ

ど、僕は朱槍に魔力を込めながらそれらを一蹴するように穿ち貫いていく。

有象無象……どころではなく、此処に居るゴーストは脆い。

本来であれば何かしらの未練に強く縛られるが故にその存在を確立するのに、無理矢理呼び出されているからだろうか……？

槍を振り払って纏わりつく崩壊しかけのエーテルを落とすと同時に、お師匠が1歩前進して頭上から降ってくるルーン魔術による火炎弾を弾き飛ばす。

「マスターを殺りやあ終わりと思つてたんだがな……アンタが居る以上それを許す訳もねえわな」

聞きなれた声が頭上よりかけられる。

その男は、駐車場に設置されている大型の照明装置の上にしやがみ込む様にして此方を見下ろしている。

見覚えのあるドルイドの衣装にフードを目深く被った男の表情は伺い知れないけれど、間違いなく獣の様な笑みを浮かべている。

こちらを見下ろす男は肩に担ぐ様にして持っていた櫂の杖を僕に差し向け、複数のルーン文字を展開させていく。

「冬木じゃあ手を組んだが、俺も雇い主にや逆らえないんでな……此処で死んでもらうぜ、良太」

「クー・フリーン!!」

生暖かく湿った風が僕達の頬を撫で、櫂の杖を持った男……クー・フリーンのフードが外れてその素顔を露にさせる。

その顔はまるで呪いに侵されたかのようにひび割れ、黒い魔力を溢れ出させている。

まるであの冬木で出会ったアーチャー・エミヤの様だ。

「……!!」

真紅の軌跡が照明装置を支える木の幹の様な柱を斬り飛ばす。

言うまでも無くそれはお師匠の手によるもの。

斜めに斬り飛ばされた柱はゆっくりとズレ落ちていき、バチバチと言う火花が散る音と共に駐車場の敷地に倒れ込んでいく。

鈍く重い金属音が敷地内に響き渡ると同時に、クー・フリーンが上

から軽い身のこなしで降り立つ。

「随分とご執心じゃねえか、スカサハ？」

「この身は英霊…であれば、弟子であろうとマスターは守るもの。セタンタ、久しぶりに本気で稽古をつけてやる…ついてこれなければ死ぬしかないぞ？」

お師匠の身体から吹き付けるような殺気が放たれ、大気が渦巻く。朱槍をくるりと回し、お師匠は此方に視線を僅かに送った後に僕の視界から消え去る。

同時にクー・フリーンも姿を消し、駐車場の敷地内に甲高い金属音が短い間隔で響き渡り続ける。

キヤスターと言えども身体能力をルーン魔術で補強すれば十二分に前線で殴り合いを行えるクー・フリーンは、恐らくあの様子ではこの特異点を仕切っている存在からのバックアップを受けている筈。

英霊の身となって全力ではないお師匠に対して、何かしらのサポートをするべきなのかもしれないけれど、僕は駐車場で繰り広げられる死闘から背を向けて雑木林の先にある焼却炉へと向かう。

両儀さんは既に先行して焼却炉に向かっていて、1人でお師匠の言う手古摺る問題に対処しなくてはならない筈。

あの特殊な魔眼を以てしても攻撃が当たらなければ実質無害だと言う事を考えれば、僕がサポートに入った方がまだ勝算があるはず。駐車場の敷地から雑木林までルーン魔術による身体強化を行って、一歩踏み出し動き始める。

駆ける——僕の両脇に停められた車が大きく歪み、爆発…爆炎が衝撃波で吹き飛ばされ路面に亀裂が走る。

駆ける——上空から跳ね上げられた車が降って来て、僕を押し潰そうとするけどあと数センチと言う所で僕の前方へと弾き飛ばされていく。

駆ける——前方へと弾き飛ばされた車体の表面に猟犬の如き形相のクー・フリーンが僕に向かって檜の杖を差し向ける。

駆ける——僕が1歩踏み出した瞬間、足元から槍の様に鋭い杖が僕の心臓目掛けてアスファルトの下から突き上げてくるも、僕は瞬時に

身を振りながら手に持つ朱槍で枝を斬り払いながら棒高跳びの要領で大きく跳躍する。

跳ぶ——跳躍した先に、行く手を阻む様に車が地上より弾き飛ばされる。

跳ぶ——手に持つ朱槍に魔力を込めて紅蓮を迸らせて迫りくる車体に向けて全力の突きを放つと、切っ先が触れた所から車体がまるでプリンのように柔らかく貫かれていき爆発を引き起こす。

跳ぶ——爆炎に身を晒されながらもカルデアスタッフお手製の魔術礼装の保護能力のお陰か礼装の表面が僅かに焦げる程度で被害が済み、爆発の衝撃を利用して一気に雑木林まで突き進む。

跳ぶ——だが、足りない……僅かばかりに勢いが足りなかったために戦場である駐車場の敷地内に着地せざるを得なくなるも目の前に現れたお師匠が涼しい顔で僕の二の腕を掴むと無造作に上へと投げ飛ばされる。

「し……ぬうううっ?!?!」

ここまで30秒足らず……呼吸する暇も無いほどの全力疾走の果ての跳躍と投げ飛ばしで、空中を無様に回転しながら駐車場の敷地を俯瞰する。

駐車場の敷地は2騎の英霊による蹂躪で見る影も無く荒れ果て、宙を漂うゴースト達も余波に巻き込まれてその総数を大きく減らしてしまっている。

敷地中央に2騎が制止した状態で立っているのが見える。

お師匠は若干戦装束に煤が付いた程度で、あくまでも涼しい顔で体に着いた埃を払っている。

対照的に、クー・フリーンは致命傷こそないものの全身に切り傷があり、大きく呼吸を乱していた。

圧倒的、と言うのかもしれない。

「随分と腕を落としたものだな、セタンタ?」

「こっちはゲイ・ボルク取り上げられてるって言うのに、アンタが二槍流なんてやったら俺の立場ないよなあ!」

クー・フリーンは大きく深呼吸をした後、全身から魔力放出を行い

櫂の杖を天高く掲げる。

地面に難なく着地できた僕の背後にある雑木林から同時にまるで暴風でも起きたかのように無数の枝がクー・フリーンの元へと集まっていく。

この宝具を…僕は見ている！

「お師匠!!」

「行け！ワシもすぐにカタを付ける！」

「させねえぞ！燃え上がれ木々の巨人！炎となりて!!」

『灼^{ウイッ}き^{カー}尽くす炎の檻^ン!!』

櫂の杖を振り下ろすと、集まった木の枝が自然と組み上がっていき、巨大な人型へと変貌。

木々の擦れる音が咆哮の様に響き渡り、その胴体の内側から激しい炎が溢れ出す。

ウイツカーマンの肩へと飛び移ったクー・フリーンは、手始めにお師匠を踏み潰さんとウイツカーマンを操り思い切り踏み砕こうとする。

鈍重な動きのウイツカーマンの攻撃が当たる筈も無く、お師匠は大きく後退することで踏み付けを避け…しかし、踏み付けた先から迸る爆炎がお師匠の身体を包み込もうと蛇の様に伸びていく。

逃げ切れない…のであれば身代わりを用意するまでと言わんばかりに、お師匠は地面にルーン魔術を叩き込むことで巨大な氷の柱をいくつも作り上げて壁代わりにして難を逃れる。

「そおおらっ!!!」

「良太!!」

「やば…!?!」

ウイツカーマンは踏み付けと同時に敷地内に転がっていた照明装置を拾い上げ、鈍重とは言え流れるような動作で槍投げの要領で僕目掛けて投げつけてくる。

ゲイ・ボルクは槍の名称として用いられてはいるのだけれど、その本質は槍術に由来する…なんて話がある。

つまるところ呪いの朱槍など無くとも正しいフォームで槍を扱う

事ができれば、それはゲイ・ボルクと言えない訳でもないと言う事になる。

槍に見立てられて投擲される照明施設は、瞬時に空気の壁を突き破って爆音と共に赤熱化しながら僕の元へと突き進んでくる。

大した抵抗にはならないかもしれない…それでも僕は何もせずに倒れる訳には行かない。

秒と言う感覚でしか猶予が無いその瞬間、手に持つ朱槍にありったけの魔力を注ぎ込んで大きく構える。

早く、早く、早く…自身の身体を急かしたて、最短動作でゲイ・ボルクを投擲しようとし…視界に花卉が舞い散る。

「落とすわ」

静かに、凜とした声が響く。

両儀さんと同じ声…だけど声色は柔らかく、透き通っている。

視界に舞い散る花卉が渦を巻いてつむじ風になると、その中から鞘に納められた日本刀を一振り持った白い着物の麗人が現れる。

「上手く行くといいのだけれど…」

ちよつと不安になりそうな呟きと共に、女性は鯉口を切り抜刀と同時撫でるような一閃を放つ。

その動作一つ一つに余裕が見て取れ、優雅さを感じずにはいられない。

果たして、迫りくる鉄塊は女性が放った一閃を前に豆腐の様に斬り裂かれ、運動能力すら失ってしまったのかそのまま路面に真っ直ぐ落ちて動かなくなる。

「斬り捨て、ごめんなさい？」

血糊を振り払うように日本刀を振って静かに納めると、女性は此方へと振り返って微笑みかけてくる。

突如現れた第三者の存在に、クー・フリーンはウィツカーマンの体勢を整えて僅かに後退させ、お師匠は一足飛びで僕の傍らまで移動してくる。

「あんまり名前を呼んでくれないものだから、あちらを片付けて来てしまったわ、マスター？」

「は、はい……？両儀……さん？」

両儀 式……と名乗っていた女性は、先ほどとは打って変わって何処か儂げな印象を覚える雰囲気身を纏って目の前に立つ。

その雰囲気は、レイシフト直後に見た夢の中であつた女性にとても近いように思える。

「お主……いや、問うまい。マスターを救つたのだから無粋と言うものか」

「影の国の女王様は苛烈だと思つていただけけれど、話が早くて助かるわね」

「デメエ……繋がってやがるな!？」

クー・フリーンは何処か肝を冷やしたかのようにウィツカーマンの肩の上から声を荒げ、複数のルーン魔術を起動してウィツカーマンの能力を底上げして此方へと突き進んでくる。

「馬鹿弟子は私が仕留める。良いな？」

「なら、私が女王様の露払いね。ふふ、なんだかとても楽しい気分だわ」

1歩踏みしめるごとに爆炎が迸る。

撫でただけで人を消し炭にするなど造作もないであろうその業火を、両儀さんは今一度抜き放つた日本刀を振り払うだけで斬り裂き、意味のないものへと消し去っていく。

「チツ！スカサハだけでなく、あの嬢ちゃんも居ると厄介だなあおい!!」

「よそ見をするな!」

ウィツカーマンが大きく腕を振りかぶつて此方を掴みかかろうとすると、赤雷の様な軌跡を伴ってお師匠がその腕に2本の朱槍を突き立てて取り付き、肩に居るクー・フリーンへと鋭い眼差しを送る。

「チイツ!!」

クー・フリーンは大きい舌打ちと共に複数のルーン魔術を起動させて、腕にしがみつく形になっているスカサハを撃ち落とそうとするも、その構築されたルーン魔術が一瞬にして斬り捨てられる。

「無粋だったかしら、キャスターさん？」

「まったくだぜ、お嬢ちゃん!!」

雲耀の如き一閃と共に、跳躍した両儀さんがその魔眼を以てクー・フリーンのルーン魔術を掻き消したのが為だ。

クー・フリーンは何処か安堵したかのような笑みを浮かべて檜の杖を掲げ、両儀さんの影から飛び出してきたお師匠を迎え撃とうとする。

しかし、クー・フリーンは一切の反撃をせず、そのままスカサハによる紅蓮の一突きによって霊核を穿ち貫かれる。

「キャスターのクラスではこの程度だろう。…次はくれてやった槍を持って私の前に現れる事だな、セタンタ?」

「まったく…いい加減、ガキ扱いはやめてほしいぜ…」

霊核を穿たれたクー・フリーンは現界を保てなくなり、お師匠から離れてウィツカーマンの肩から落下しながらその存在を霧散させていく。

同時に制御を離れたウィツカーマンも膝から崩れ落ちる様に倒れ込み、その存在を炎と木々の枝へと戻していく。

お師匠は僕の傍らに降り立つと、呆れたように肩を竦める。

「やれやれ、戻ったらセタンタを鍛え直さねばならんな」

「今契約してるクー・フリーンとは別の存在なんですし、此処は穩便に…」

「今でも弱くなったかと思ってるくらいなのだから、鍛えるのは当然だろう?」

「アツハイ」

これ以上の問答は最早無駄だなど思った僕は、お師匠との会話を切り上げて目の前にいる白い着物へと着替えた両儀さんへと目を向ける。

両儀さんは、僕とお師匠の問答を興味深そうに観察していたようだった。

「2人とも、そろそろ楔の元へと向かいましょうか。女王様が手古摺るなんて言っていたものは斬り捨てたし、後は魔術師のマスターに任せる事にするわ」

「…さつきまでと雰囲気違いますよね?」

「ふふ、野暮なことは言いつこなしよ。さ、行きましょう?」

そう言うや否や、両儀さんは僕の背中をぐいぐいと押して雑木林の方へと連れて行くこうとする。

やはり両儀さんも英霊なのか常人ではありえない程の力で押すものだから、僕は一切の抵抗ができずにそのまま押されながら歩くしかない。

そんな様子を見たお師匠は、ただただ呆れたように溜息をつくだけだった。